

佐賀県文化財調査報告書 第224集
九州新幹線西九州ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(2)

竹ノ下遺跡・梶原遺跡

令和2(2020)年3月

佐賀県

令和2(2020)年3月

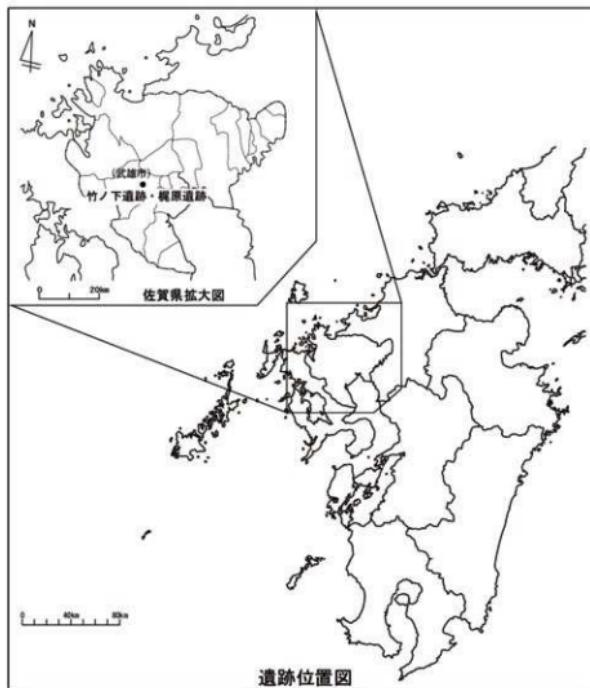
佐賀県

九州新幹線西九州ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(2)

竹ノ下遺跡・梶原遺跡

九州新幹線西九州ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（2）

竹ノ下遺跡・梶原遺跡



令和 2 (2020) 年 3 月

佐賀県

序

この報告書は佐賀県が独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて、九州新幹線西九州ルート建設に伴い平成26・28・29年度に実施した武雄市武雄町に所在する竹ノ下遺跡、梶原遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告です。

竹ノ下遺跡は弥生時代及び古墳時代の集落跡で、発掘調査では弥生時代中期から後期の掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑、古墳時代中期から後期の竪穴住居跡・古墳の周溝と思われる溝跡などが確認されました。また竹ノ下遺跡と隣接する梶原遺跡では、弥生時代及び中世の集落に伴う遺構・遺物が発見されました。

中でも竹ノ下遺跡の調査では、大きさ8m四方の規模を持つ、弥生時代中期の大型掘立柱建物跡が発見され、集落の中心的建物と考えられます。

また、出土遺物では、弥生土器・土師器・須恵器の他、弥生時代の黒曜石製・サヌカイト製の石器や、石器を製作する際の石核・剥片が豊富に出土し、弥生時代の石器製作の実態を考える上で重要な成果が得られました。

竹ノ下遺跡・梶原遺跡の発掘調査は、これまで発掘調査例が少なかった武雄盆地北部の弥生・古墳時代の歴史を知るにあたっての貴重な調査となりました。

本書が今後の学術・文化向上に少しでも役立てば幸いに存じます。発刊にあたり多大なご協力をいただきました地元の皆様及び埋蔵文化財の保護にご理解を頂きました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局に対し、心より厚くお礼申し上げます。

令和2年（2020年）3月2日

佐賀県地域交流部

文化スポーツ交流局

局長 田中 裕之

例　　言

1. 本書は九州新幹線西九州ルート建設事業に伴い発掘調査を実施した、武雄市武雄町大字富岡所在の「竹ノ下遺跡」(平成28・29年度)、同大字昭和所在の「梶原遺跡」(平成26年度)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・資料整理・報告書作成は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 九州新幹線建設局の委託を受け、佐賀県教育委員会(平成26・29～30年度)、佐賀県(令和元年度)が主体となって実施した。
3. 発掘調査について、梶原遺跡は佐賀県教育委員会直営、竹ノ下遺跡は発掘調査支援委託業務により実施し、(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
4. 発掘調査・資料整理・報告書作成に係る担当者は下記のとおりである。
発掘調査 調査員・監督員…梶原遺跡 (小松 謙・梶山裕史)、竹ノ下遺跡 (平成28年度: 加藤裕一、平成30年度: 市川浩文・嘉村俊也・築城昇平)
発掘調査 現場管理者・調査補助員…竹ノ下遺跡 平成28年度調査: 大坪芳典(現場管理者) [(株)埋蔵文化財サポートシステム]、平成29年度調査: 立石和也・小石龍信(現場管理者)、磯村康行・松尾直子(調査補助員) [(株)埋蔵文化財サポートシステム]
遺物復元整理… (株)埋蔵文化財サポートシステム
遺物実測・製図… (株)埋蔵文化財サポートシステム・(株)大信技術開発・竹川 満・築城昇平・大蔵聖子・小出信子・坂村千影・村里育子・山浦美香
遺構図製図・図版作成… (株)埋蔵文化財サポートシステム・(株)とっぺん・越知曉和・加藤裕一・市川浩文・嘉村 俊也
遺物写真撮影… (株)大信技術開発・(株)埋蔵文化財サポートシステム・市川 浩文
調査記録類整理… 奥千恵子・山浦美香
放射性炭素年代測定… (株)加速器分析研究所
石器産地同定分析…角縁 進(佐賀大学教育学部)
5. 本書の執筆分担は目次に記す。
6. 発掘調査・遺物整理に際して下記の方々から指導・助言・協力を得た。
角縁 進(佐賀大学教育学部)、重藤輝行(佐賀大学教育学部)、樋渡拓也・松瀬京子(武雄市文化課)、加藤裕一・渡部芳久・宮崎博司(佐賀県文化財保護室) (順不同・教称略)
7. 本書の編集は越知・市川が行った。

凡　　例

1. 遺跡の略号は下記のとおりである。
竹ノ下遺跡 (T S T)・梶原遺跡 (K J W)
2. 遺構の呼称及び種別番号は次のとおりである。
 - S B : 掘立柱建物跡、S H : 壓穴住居跡、S K : 土坑、S J : (甕棺墓)、S D : 溝状遺構、S X : 不明遺構、P : 小穴 とした。
3. 各遺構番号は、発掘調査時はS-番号で連番とした。その後、資料整理段階で遺構の種別に伴い、上記の遺構種別記号-番号(連番)に振り替えた。
4. 本書に掲載した遺物番号は遺跡毎に連番として、本文中では挿図番号-遺物番号で表記した。写真図版の遺物も同様である。
5. 本書に用いた方位はすべて平面直角座標系第II系の座標北である。
6. 遺物及び実測図の検索・照合のため、実測遺物全てに県遺物登録番号を付け表に付記した。
7. 遺構・遺物写真、遺構・遺物実測図は佐賀県文化財調査研究資料室に保管する。

本文目次

I. 調査の経過（嘉村・市川）	1
1. 調査に至る経過	1
(1) 新幹線事業と文化財保護調整の経過	1
(2) 確認調査と本調査対象地	1
(3) 資料整理と報告書作成	8
(4) 事業計画とその推移	8
2. 調査組織	10
3. 調査の方法と経過	12
(1) 調査の方法	12
(2) 調査の経過	13
II. 遺跡の位置と環境	18
1. 地理的環境（嘉村）	18
2. 歴史的環境（市川）	21
III. 竹ノ下遺跡（越知）	35
1. 発掘調査の概要	35
(1) 調査の概要	35
(2) 確認調査の概要	38
(3) 調査区の基本土層	55
2. 繩文時代の遺物	55
3. 弥生時代の遺構	57
(1) 挖立柱建物	57
(2) 壺穴建物	58
(3) 土坑	68
(4) 構造遺構	77
(5) その他の遺構	80
4. 弥生時代の遺物	83
5. 古墳時代の遺構	133
(1) 壺穴建物	133
(2) 土坑	134
(3) 構（古墳の周溝）	134
6. 古墳時代の遺物	141
7. その他の時代の遺構と遺物	153
IV. 梶原遺跡（小松）	173
1. 発掘調査の概要	173
(1) 調査の概要	173
(2) 確認調査の概要	173
(3) 調査区の基本土層	173
2. 遺構	176
(1) 土坑	176
(2) 小穴	179
(3) その他の遺構	179
3. 遺物	181
(1) 土器	181

(2) 土製品	181
(3) 石器	181
4. 遺物観察表	182
V. 自然科学分析について	183
1. 竹ノ下遺跡における炭化物の年代測定について ((株) 加速器分析研究所)	183
2. 竹ノ下遺跡における石材産地同定について (角縁 進)	186
VI. 総括	191
1. 竹ノ下遺跡 (越知)	191
(1) 弥生時代から古墳時代の集落変遷について	191
(2) 竹ノ下遺跡における石器生産について	196
2. 梶原遺跡 (小松)	204
写真図版	205 ~ 262
報告書抄録	263

挿図目次

図 1 竹ノ下遺跡・梶原遺跡位置図	2	図 41 SK873 土坑 (1/40)	76
図 2 新幹線路線計画図 1	3	図 42 SK952・1055・1091・1184 土坑 (1/40)	77
図 3 新幹線路線計画図 2	4	図 43 SK1303・1316 土坑 (1/40)	78
図 4 新幹線路線計画図 3	5	図 44 SD026・270・540・625 溝 (1/60)	79
図 5 佐賀県地質図	19	図 45 SD800・1035 溝 (1/60・1/40)	80
図 6 武雄周辺遺跡位置図 1	22	図 46 SJ035・365 墓棺・SE367 井戸 (1/20・1/40)	
図 7 武雄周辺遺跡位置図 2	23		81
図 8-1 調査区周辺地形図 1 (1/5,000)	36	図 47 SA1485 標列 (1/60)	82
図 8-2 調査区周辺地形図 2 (1/5,000)	37	図 48 SX120 不明遺構 (1/60)	83
図 9 遺跡剖付図 (1/800)	38	図 49 SX900 不明遺構 (1/40)	84
図 10 竹ノ下遺跡調査区位置図 (路線測量図: 1/1,000)	39	図 50 SB650・1480・1482 出土遺物	85
図 11 遺構配置図 (1/350)	41	図 51 SB1484・1486・1487・SH090 出土遺物	86
図 12 遺構配置図 (オルソ画像)	43	図 52 SK260 出土遺物	87
図 13 遺構配置詳細図① (1/100)	45	図 53 SH375 出土遺物	88
図 14 遺構配置詳細図② (1/100)	46	図 54 SH380 出土遺物 (1)	89
図 15 遺構配置詳細図③ (1/100)	47	図 55 SH380 出土遺物 (2)	90
図 16 遺構配置詳細図④ (1/100)	48	図 56 SK781・1464 (SH380 に伴う土坑) 出土遺物	92
図 17 遺構配置詳細図⑤ (1/100)	49	図 57 SH880・1050・SK1089 (SH1050 を切る土坑)・SH1200・S1379 (SH1200 に伴うピット) 出土遺物	93
図 18 遺構配置詳細図⑥ (1/100)	50	図 58 SK003・010・011・028 出土遺物	94
図 19 遺構配置詳細図⑦ (1/100)	51	図 59 SK045・054・073 出土遺物	95
図 20 遺構配置詳細図⑧ (1/100)	52	図 60 SK100・242・259 出土遺物	96
図 21 遺構配置詳細図⑨ (1/100)	53	図 61 SK267 出土遺物 (1)	97
図 22 遺構配置詳細図⑩ (1/100)	54	図 62 SK267 出土遺物 (2)	98
図 23 遺構配置詳細図⑪ (1/100)	55	図 63 SK267 出土遺物 (3)	99
図 24 調査区壁土層断面図 (1/60)	56	図 64 SK317・327・358・455・636 出土遺物	100
図 25 繩文時代の出土遺物	57	図 65 SK639・640・741・838 出土遺物	102
図 26 SB650 捜立柱建物 (1/60)	59	図 66 SK873 出土遺物 (1)	103
図 27 SB1480 捜立柱建物 (1/60)	61	図 67 SK873 出土遺物 (2)	104
図 28 SB1482・1484 捜立柱建物 (1/60)	62	図 68 SK873 (3)・952 出土遺物	105
図 29 SB1486・1487 捜立柱建物 (1/60)	63	図 69 SK1055 出土遺物 (1)	106
図 30 SH090 堅穴建物 (1/60)・SK260 中央土坑 (1/20)	64	図 70 SK1055 (2)・1091・1184 出土遺物	107
図 31 SH375 堅穴建物 (1/60)	65	図 71 SK1303・1316・SD026・270 出土遺物	108
図 32 SH380 堅穴建物 (1/60)	66	図 72 SD540・625・800・1035 出土遺物	110
図 33 SH880・1050 堅穴建物 (1/60)	67	図 73 SJ035 出土遺物	112
図 34 SH1200 堅穴建物 (1/60)	68	図 74 SJ365 出土遺物	113
図 35 SK003・010・011・028 土坑 (1/40)	69	図 75 SE367・SA1485・SX120 出土遺物	114
図 36 SK045・054・073 土坑 (1/40)	70	図 76 SX170・175・328・900 出土遺物	115
図 37 SK100・242・259 土坑 (1/40)	71	図 77 SX1250・1310・その他 (1) 出土遺物	116
図 38 SK267・317 土坑 (1/40)	72	図 78 その他の出土遺物 (2)	118
図 39 SK327・358 土坑 (1/40)	73	図 79 その他の出土遺物 (3)	120
図 40 SK455・636・639・640・741・838 土坑 (1/40)	74	図 80 その他の出土遺物 (4)	122
		図 81 その他の出土遺物 (5)	124

図 82	その他の出土遺物（6）	125
図 83	その他の出土遺物（7）	127
図 84	その他の出土遺物（8）	128
図 85	その他の出土遺物（9）	130
図 86	その他の出土遺物（10）	131
図 87	その他の出土遺物（11）	132
図 88	SH329 壺穴建物（1/60）	133
図 89	SH350 壺穴建物（1/50）	135
図 90	SH1000 壺穴建物・SK1350 土坑（1/60・1/20）	
		137
図 91	SK195・686・687・1090 土坑（1/40）	138
図 92	SD370 周溝 平面図（1/80）	139
図 93	SD370 周溝 土層断面図（1/40）	140
図 94	SH329・350（1）出土遺物	142
図 95	SH350 出土遺物（2）	143
図 96	SH350 出土遺物（3）	144
図 97	SH350 出土遺物（4）	145
図 98	SH1000・SK1350（1）出土遺物	147
図 99	SK1350（2）・195・686・687 出土遺物	148
図 100	SK1090 出土遺物	149
図 101	SD370 出土遺物	150
図 102	その他の出土遺物	151
図 103	SD160 溝（1/60）	153
図 104	SD160・その他の出土遺物	154
図 105	梶原遺跡調査区位置図1（1/2,000）	174
図 106	梶原遺跡調査区位置図2（1/1,500）	175
図 107	梶原遺跡遺構配置図（1/150・1/80）	177
図 108	SK01・02 土坑（1/20）	178
図 109	SK04 土坑（1/20）	179
図 110	出土遺物（1/3・1/4）	180
図 111	放射性炭素年代測定結果	185
図 112	黒曜石のRb-Sr-Zr図	187
図 113	サヌカイトのCaO-（Na ₂ O+K ₂ O）図	189
図 114	竹ノ下遺跡出土弥生土器の編年図1	192
図 115	竹ノ下遺跡出土弥生土器の編年図2	193
図 116	時代別遺構配置図	195
図 117	グリッド別出土数量（全体）	197
図 118	グリッド別出土数量（黒曜石・安山岩）	198
図 119	弥生時代中期の剥片石器類1	199
図 120	弥生時代中期の剥片石器類2	200
図 121	弥生時代中期の剥片石器類3	201

写 真 図 版 目 次

写真 1 竹ノ下遺跡・梶原遺跡 調査対象地区全景 1	写真 36 SK045・054・073・100・242・259・267
.....	出土遺物
写真 2 竹ノ下遺跡・梶原遺跡 調査対象地区全景 2	写真 37 SK267 出土遺物
..... 242
写真 3 竹ノ下遺跡・梶原遺跡 調査対象地区全景 3	写真 38 SK267・317・327・358 出土遺物
..... 243
写真 4 調査着手前状況	写真 39 SK455・636・639・640・741・838・873
.....	出土遺物
写真 5 平成 28 年度調査区全景	写真 40 SK873 出土遺物
..... 245
写真 6 C-3 区 遺構集中箇所全景、SK003・011, SD026	写真 41 SK873・952・1055 出土遺物
..... 246
写真 7 調査区西側完掘状況 1	写真 42 SK1091・1184・1303・1316・SD026・270・
.....	540・625・800 出土遺物
写真 8 調査区西側完掘状況 2	写真 43 SD1035・SJ035・365・SE367・SA1485・SX120
.....	出土遺物
写真 9 調査区東半部完掘状況	写真 44 SX120・170・175・328・900・1250・1310
.....	出土遺物
写真 10 調査区壁面土層、SB650、SH350	写真 45 その他の出土遺物 (1・2・3)
..... 250
写真 11 SB650・SH350 全景、SB650 柱穴	写真 46 その他の出土遺物 (3・4・5・6)
..... 251
写真 12 SB650 柱穴	写真 47 その他の出土遺物 (6・7・8・9・11)
..... 252
写真 13 SB650 柱穴、SB1482	写真 48 その他の出土遺物 (9・10)・石器集合写真
..... 253
写真 14 SB1480・1484・1487
..... 254
写真 15 SB1486、SH090、SK260	写真 49 SH329・350 出土遺物
..... 255
写真 16 SH375	写真 50 SH350 出土遺物
..... 256
写真 17 SH380	写真 51 SH1000・SK1350 出土遺物
..... 257
写真 18 SH880・1050、SK045・054	写真 52 SK195・686・687・1090・SD370 出土遺物
..... 258
写真 19 SH1200、SK073・100・242・267	写真 53 その他の出土遺物 (古墳時代～)
..... 259
写真 20 SK358・636・639・640・873・1055	写真 54 梶原遺跡発掘調査状況 1
..... 260
写真 21 SK1303、SD270・540・800、SE367、S1063	写真 55 梶原遺跡発掘調査状況 2
..... 261
写真 22 SJ035・365	写真 56 梶原遺跡出土遺物
..... 262
写真 23 SA1485、SX120・900	
.....	
写真 24 SH329・350	
.....	
写真 25 SH350	
.....	
写真 26 SH1000、SK686・687・1350	
.....	
写真 27 SD370	
.....	
写真 28 SD370・160	
.....	
写真 29 縄文時代の遺物・SB650 出土遺物 (弥生時代)	
.....	
.....	
.....	
.....	
写真 30 SB1480・1482・1484・1486・1487・SH090	
出土遺物 236
写真 31 SH090・SK260・SH375 出土遺物	
..... 237
写真 32 SH375・SH380 出土遺物	
..... 238
写真 33 SH380・SK781・1464 出土遺物	
..... 239
写真 34 SH880・1050・SK1089・SH1200・S1379・	
SK003・SK010 出土遺物 240
写真 35 SK011・028・045 出土遺物 241

表 目 次

表 1	九州新幹線西九州ルートに係る埋蔵文化財の取り扱い	6
表 2	遺構観察表（掘立柱建物）	155
表 3	遺構観察表（堅穴建物）	155
表 4	遺構観察表（溝状遺構）	155
表 5	遺構観察表（土坑）	156
表 6	遺構観察表（甕棺）	157
表 7	遺構観察表（井戸）	157
表 8	遺構観察表（柵列）	157
表 9	遺構観察表（不明遺構）	157
表 10	遺物観察表（土器 1）	158
表 11	遺物観察表（土器 2）	159
表 12	遺物観察表（土器 3）	160
表 13	遺物観察表（土器 4）	161
表 14	遺物観察表（土器 5）	162
表 15	遺物観察表（土器 6）	163
表 16	遺物観察表（土器 7）	164
表 17	遺物観察表（土器 8）	165
表 18	遺物観察表（土器 9）	166
表 19	遺物観察表（土器 10）	167
表 20	遺物観察表（石器 1）	168
表 21	遺物観察表（石器 2）	169
表 22	遺物観察表（石器 3）	170
表 23	遺物観察表（石器 4）	171
表 24	遺物観察表（石器 5）	172
表 25	遺物観察表（ガラス）	172
表 26	遺物観察表（その他）	172
表 27	梶原遺跡遺構一覧表	176
表 28	出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品	182
表 29	出土遺物観察表 石器	182
表 30	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	185
表 31	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值、歴年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)	185
表 32	竹ノ下遺跡出土石器の化学分析結果 1	188
表 33	竹ノ下遺跡出土石器の化学分析結果 2	188
表 34	竹ノ下遺跡出土石器の化学分析結果 3	189
表 35	竹ノ下遺跡出土石器の化学分析結果 4	189
表 36	各遺構の時期別表	194
表 37	石器種類と石材別組成表	197

I. 調査の経過

1. 調査に至る経過

(1) 新幹線事業と文化財保護調整の経過

九州新幹線西九州ルートは、福岡県福岡市を起点として、佐賀県鳥栖市、佐賀市、武雄市などを経由して長崎県長崎市へと至る路線であり、鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局（以下、鉄道・運輸機構）の事業である。この路線は当初、佐賀県武雄市から長崎県佐世保市（早岐）を経由して長崎市へと至る総延長約 166km の路線として整備計画の決定がなされたが、のちに JR 九州の「早岐経由では全額公費負担で整備しても收支改善効果は現れない」との表明を受け、ルートの見直しが図られた。平成 10 年 2 月には、佐賀県武雄市から嬉野市を経由し長崎県大村市へとつながる短絡ルートの概要が示され、これにより、武雄温泉駅から長崎駅へと至る総延長約 66km が工事実施計画の認可申請区间となった。

佐賀県教育委員会文化課（平成 21 年度～平成 23 年度：社会教育・文化財課、平成 24 年度～：文化財課）は、平成 20 年 4 月の第 1 回九州新幹線西九州ルート事業連絡調整会議の場において、「新幹線区間には、佐賀県の特徴的な文化遺産である古窯跡も含め 13 の遺跡が存在するため、十分な調整が必要」との旨を申し入れた。平成 21 年 7 月には、鉄道・運輸機構より、武雄温泉～諫早区間の 2500 分の 1 線路平面図が提示され、併せて当該区間の埋蔵文化財包蔵地の照会依頼がなされた。それを受け、平成 22 年 2 月 15 日から 18 日にかけて埋蔵文化財の現地踏査を実施し、当該区間における確認調査必要箇所が未周知も含め 18 箇所である点を回答した。その後、工事着工に伴う具体的な踏査・確認調査を平成 24 年 4 月より随時実施した。各地点の取り扱いについては表 1 中 No 1～18 のとおりである。

なお、平成 29 年 11 月には、佐世保線複線化事業区间（大町～高橋駅間）について埋蔵文化財包蔵地の照会依頼がなされた。それについて、当該区間において確認調査が 3 箇所で必要である点を回答し、翌月、確認調査を実施した。各地点の取り扱いについては表 1 中 No 19～21 のとおりである。

(2) 確認調査と本調査対象地

確認調査の結果、遺構・遺物の発見に伴い本調査実施に至った遺跡としては、梶原遺跡（武雄市武雄町大字昭和）、甕屋窯跡（武雄市東川登町大字甕野）、甕野城山城跡（甕野城跡）（同）、竹ノ下遺跡（武雄市武雄町大字富岡）がある。

平成 25 年 9 月 17 日、梶原遺跡の確認調査を実施した。その際、当初対象範囲には遺構・遺物はなかったものの、隣接する未周知地区における、遺跡の有無に係る試掘調査により遺構が発見された。そのため未周知地区を梶原遺跡の範囲拡大として取扱い、周知化した。

平成 26 年 10 月 31 日、梶原遺跡について埋蔵文化財発掘の通知がなされ、翌月 6 日より本発掘調査を実施した。その結果、土坑 4 基のほか小穴を検出した。遺物としては、弥生土器片、中世の磁器片、近世の陶磁器片などが出土した。調査区東側の土坑 SK 01 は平面長楕円形で、埋土から弥生時代中期の器台片などが見つかった。また、調査区西側の土坑 SK 04 では、埋土中から壺の口縁部や胴部など弥生時代中期の土器片が集中して出土した。これらの成果に加え、近隣地に弥生時代前期の小楠遺跡があることから、弥生時代中期に本遺跡まで集落が拡散していたことが明らかとなった。

平成 27 年 5 月 19 日、文化財課と鉄道・運輸機構とのあいだで新幹線区間の状況確認に係る協議が行われ、そこで甕屋窯跡、甕野城山城跡について埋蔵文化財の確認が必要であるとして、5 月 22 日に現

I. 調査の経過

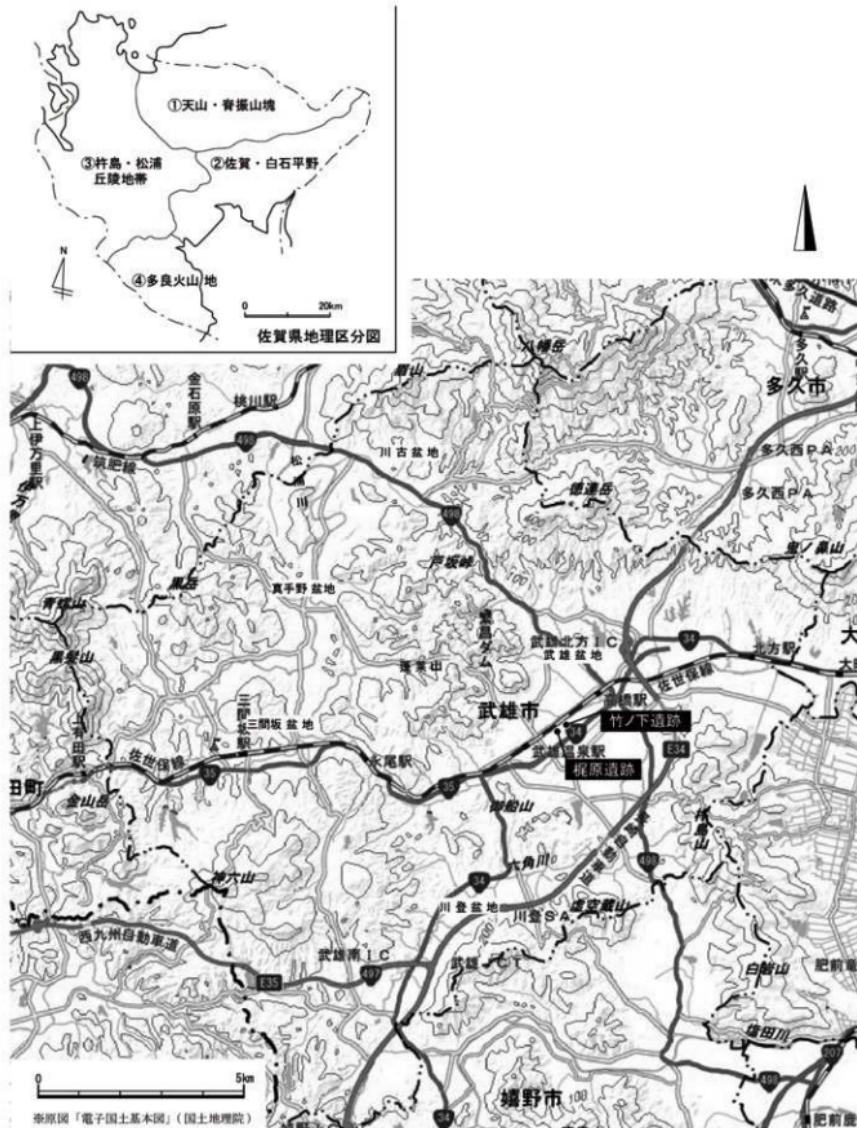


図1 竹ノ下遺跡・梶原遺跡位置図

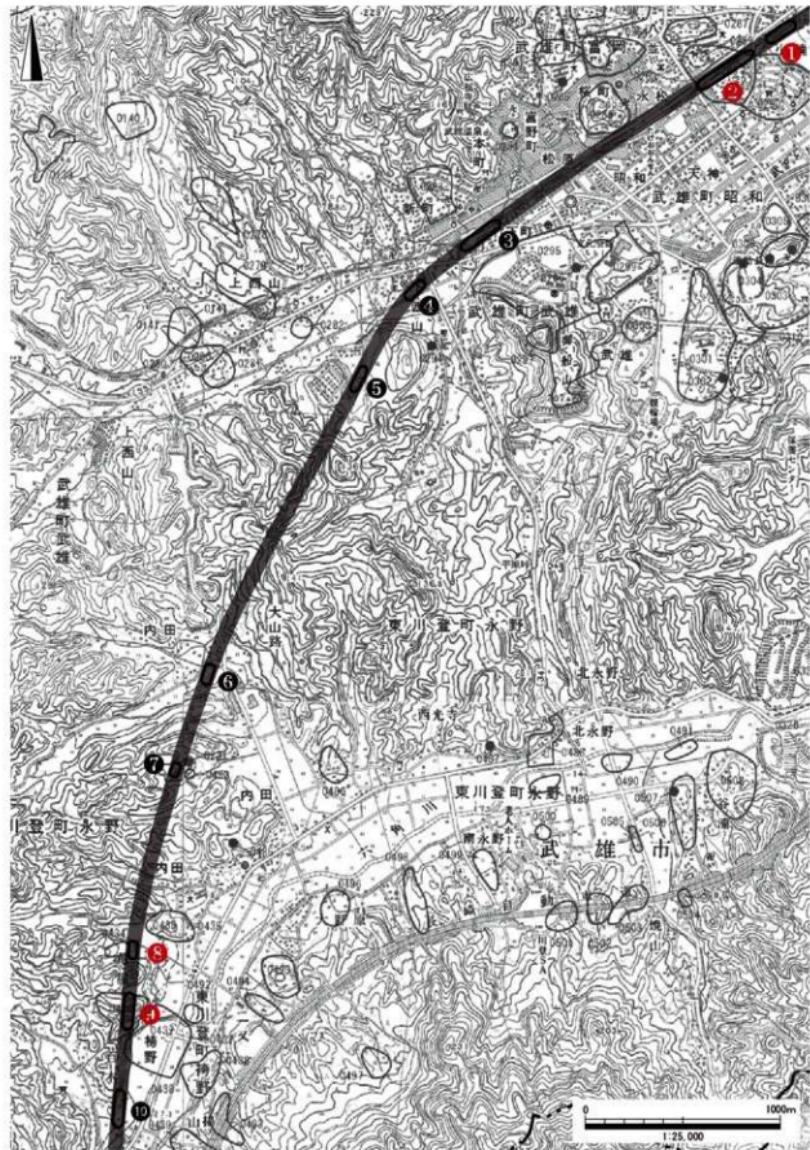


図2 新幹線路線計画図1

I. 調査の経過

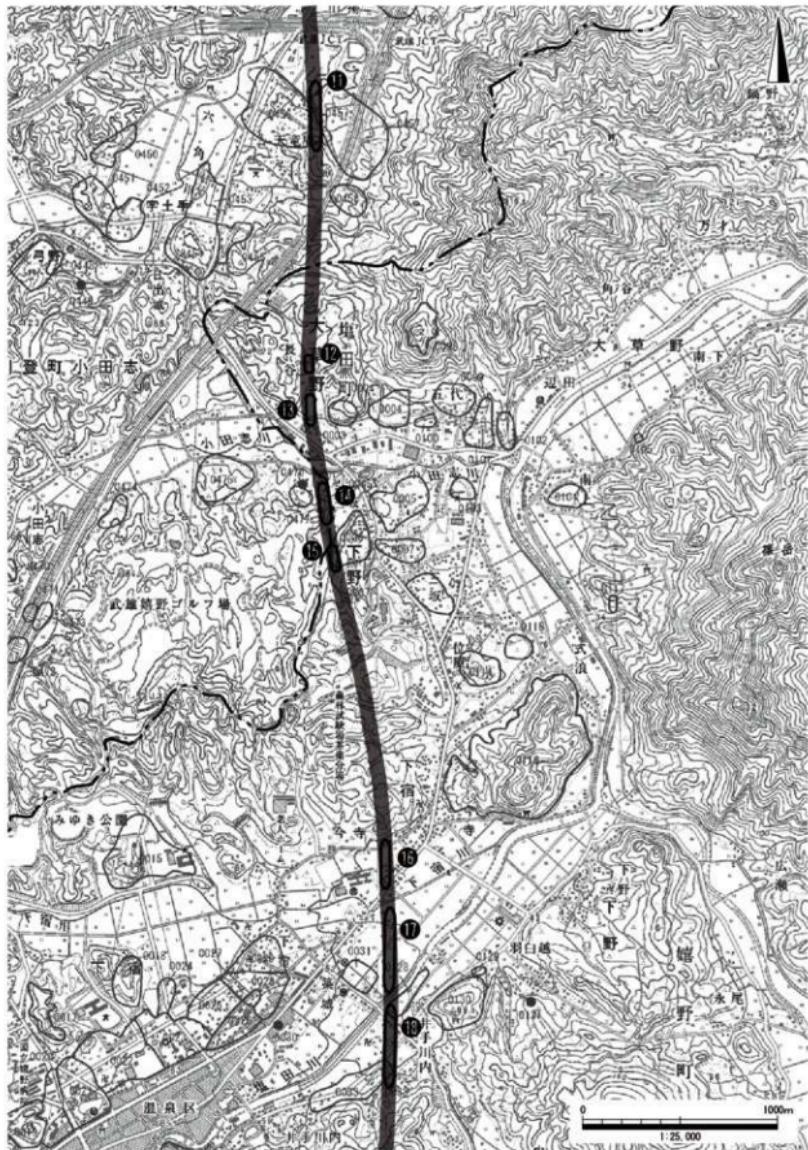


図3 新幹線路線計画図2

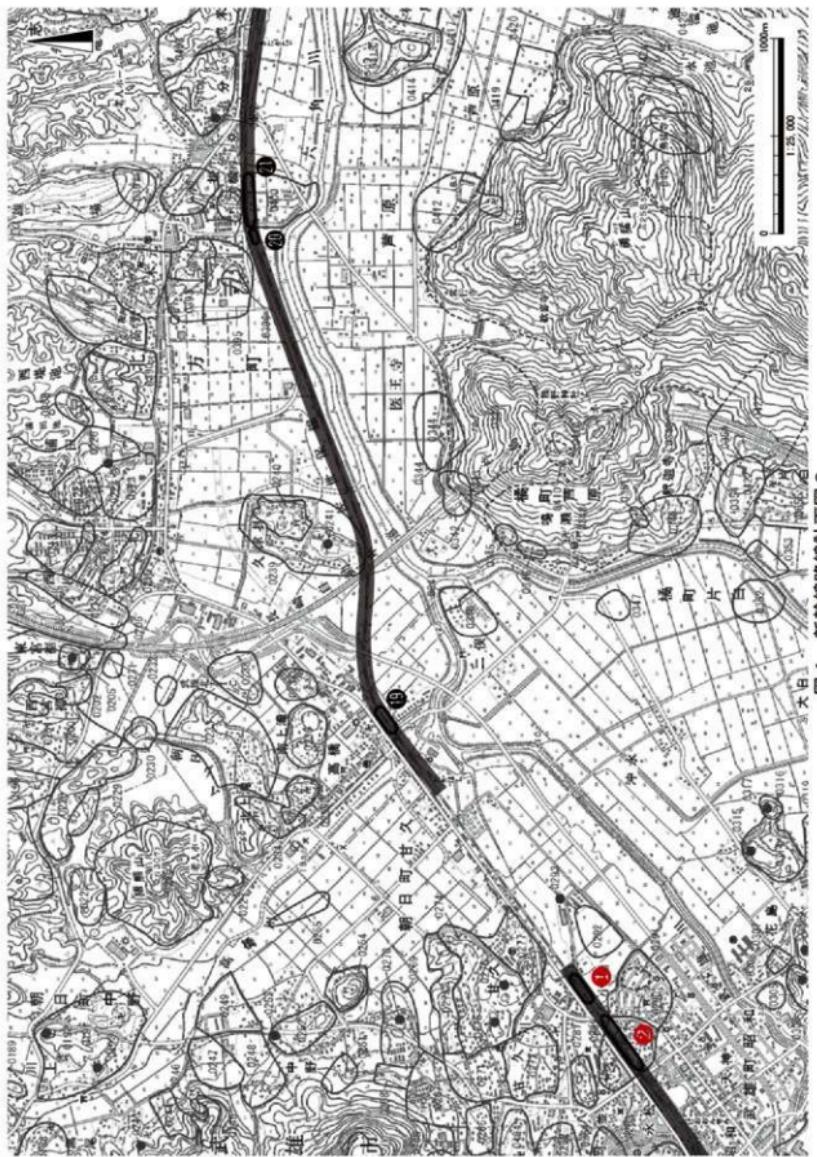


図4 新幹線路線図

I. 調査の経過

No	遺跡の名称等	地区	調査年月	取り扱い	備考
1	未周知	武雄市	平成28年7月	確認調査の結果 本調査必要	平成29年1月～本調査 (竹ノ下遺跡)
2	梶原遺跡 (縄文～中世、集落跡・墳墓)	武雄市	平成25年8月	確認調査の結果 本調査必要	平成26年11月～本調査 (梶原遺跡の範囲を拡張)
3	未周知 (近世、武雄城下武家屋敷跡)	武雄市	平成26年3月	確認調査の結果 支障なし	
4	未周知	武雄市	平成27年2月	踏査の結果 支障なし	
5	未周知 (遺物散布)	武雄市	平成27年2月	踏査の結果 支障なし	
6	未周知 (工場駐車場)	武雄市	平成27年9月	確認調査の結果 支障なし	
7	未周知 (溜池近接・遺物散布)	武雄市	平成27年7月	確認調査の結果 支障なし	
8	豪屋窯跡 (近世、陶磁器窯跡)	武雄市	平成27年10月	確認調査の結果 本調査必要	平成28年5月～本調査
9	持野城山城跡 (中世、城館跡)	武雄市	平成27年10月	確認調査の結果 本調査必要	平成28年9月～本調査
10	未周知	武雄市	平成24年6月	踏査の結果 支障なし	
11	天竜庵遺跡 (縄文、散布地)	武雄市	平成25年3月	確認調査の結果 支障なし	
12	未周知	嬉野市	平成26年9月	確認調査の結果 支障なし	
13	未周知	嬉野市	平成26年5月	確認調査の結果 支障なし	
14	未周知 (近世、長崎街道跡)	武雄市	平成25年3月	確認調査の結果 支障なし	
15	三坂遺跡 (縄文、散布地)	嬉野市	平成24年6月	確認調査の結果 支障なし	
16	未周知	嬉野市	平成27年11月	確認調査の結果 支障なし	
17	未周知	嬉野市	平成24年11月	確認調査の結果 支障なし	
18	井手川内三本椎遺跡 (中世、散布地)	嬉野市	平成27年3月	確認調査の結果 支障なし	
	井手川内二本椎遺跡 (中世、散布地)		平成24年4月	踏査の結果 支障なし	
19	未周知	武雄市	平成29年12月	確認調査の結果 支障なし	
20	未周知	武雄市	平成29年12月	確認調査の結果	
21	長三構跡	武雄市	平成29年12月	確認調査の結果 支障なし	

※ Noは図 2～4 の地点Noに対応

表 1 九州新幹線西九州ルートに係る埋蔵文化財の取り扱い

地踏査が実施された。踏査の結果、いずれも本調査の可能性が高い遺跡であるとして、9月15日に両遺跡について発掘実施の通知がなされた。

甕屋窯跡の確認調査については、平成27年10月5日～9日に実施した。21箇所の試掘坑を設定し調査を行ったところ、窯本体が2～3基、製作途中の失敗品や窯改修時に壊した壁体片などを廃棄した「物原」が2ヶ所で検出された。確認調査時に北区とした調査区内北側では、窯の床面と壁の一部が検出され、窯壁片・焼土とともに多量の近世甕破片が出土した。同じく南～中央区とした部分では物原が広範囲に広がっている様子が確認され、甕の破片を主体として、瓶や擂鉢、窯道具など多量の遺物の堆積厚は2.5mを超えるとみられた。出土した遺物は主に17世紀中～後半のものと考えられ、物原頂部トレンチの状況から、数期にわたる操業期間が想定された。

袴野城山城跡の確認調査は平成27年10月19日～23日に実施した。踏査により作成された縄張り図と現地形を考慮したうえで、遺構が存在する可能性の大きい範囲に12箇所の試掘坑を設定した。その結果、堀切や切岸など、中世山城の遺構が良好な状態で残っていることが明らかとなった。南斜面中腹の平坦面では、表土下より炭化物集中部が検出され、帶曲輪である可能性が高いと目され、また、遺物については、窯道具と考えられる土製品が1点出土した。

上記の確認調査結果により、甕屋窯跡・袴野城山城跡（袴野城跡）ともに、工事影響範囲内に遺跡が存在することが明らかとなり、本調査を実施する必要が生じた。そのため、平成27年10月28日、鉄道・運輸機構と本調査に関する協議を行い、それを踏まえて、甕屋窯跡の調査対象面積を1,584.00m²、袴野城山城跡（袴野城跡）の調査対象面積を4,360m²とし、平成28年度から本調査に着手することが決定された。その際、特に甕屋窯跡側の工期が迫っている点を鑑み、本調査を平成28年4月より着手出来るよう準備を進めていくことを確認した。以上の経緯を踏まえ、発掘調査は、甕屋窯跡が平成28年4月から8月まで、袴野城山城跡が平成28年9月から12月までの日程で実施されることになった。

竹ノ下遺跡の確認調査は平成28年7月4日～5日に実施した（当時は未周知地区）。対象地に6箇所の試掘坑を設定し調査を行ったところ、約40～50cm掘り下げた面で弥生時代の遺構が発見され、住居跡を2基、土坑・ピットを8基確認した他、遺物についても弥生土器や石器を中心に出土した。以上の結果を踏まえ、7月14日に当該地を佐賀県遺跡台帳に登載し、竹ノ下遺跡として周知化した。その後、同年9月13日～15日にかけて、7月の調査の範囲周辺で11箇所の試掘坑を設定し、再度確認調査を実施した。その結果、試掘坑8地点において遺構が確認された。遺構としては、3軒の住居跡のほか溝や土坑・ピット等を検出し、遺物は弥生土器を中心に須恵器や石器片が出土した。遺構が検出された試掘坑はいずれも北西方向から延びる丘陵上に位置することから、丘陵上に集落が展開している可能性が考えられた。

上記の確認調査結果により、竹ノ下遺跡では工事影響範囲内に遺跡が存在することが明らかとなり、本調査を実施する必要が生じた。そのため、平成28年9月30日、鉄道・運輸機構と本調査に関する協議を行い、それを踏まえて、竹ノ下遺跡の調査対象面積を2,100m²とし、平成29年度から本調査に着手することとして工程表を提出した。その後、提出した工程表では鉄道・運輸機構側の工事に影響が出るとの旨の回答を受けたため、10月18日の再協議の結果、平成29年1月より工事工程で優先される180m²分を、また同年4月より残り1,920m²の調査を実施することとなった。

I. 調査の経過

(3) 資料整理と報告書作成

本発掘調査を実施した、梶原遺跡、甕屋窯跡、袴野城山城跡、竹ノ下遺跡の4遺跡についての資料整理及び報告書作成作業については、平成29年度から令和元年度の3カ年で行った。報告書刊行計画としては、遺跡が隣接する甕屋窯跡、袴野城山城跡（いずれも武雄市東川登町）を合冊として平成30年度に、同じく隣接する梶原遺跡、竹ノ下遺跡（いずれも武雄市武雄町）を合冊として令和元年度に刊行することとし、前者については『九州新幹線西九州ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（1）甕屋窯跡・袴野城跡』として、平成31年3月20日付けで刊行している。

本報告書は『九州新幹線西九州ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（2）』として、梶原遺跡（平成26年度調査）、竹ノ下遺跡（平成28・29年度）の発掘調査概要を所収するものであり、資料整理作業は平成30年度及び令和元年度に実施、令和元年度の刊行、発掘調査記録類及び出土遺物の整理・収蔵をもって本事業に係る全ての業務を完了した。

(4) 事業計画とその推移

【平成26年度】

○事業内容	発掘調査　　梶原遺跡（弥生時代、中世集落跡：武雄市武雄町大字昭和）
○調査面積	100 m ²
○業務期間	平成26年9月16日～平成27年3月31日
○委託契約金額	1,178,000円
○調査組織	佐賀県教育委員会（教育庁文化財課）

【平成28年度】

○事業内容	発掘調査　　甕屋窯跡（近世陶器窯跡：武雄市東川登町大字袴野） 袴野城跡（中世山城跡：武雄市東川登町大字袴野） 竹ノ下遺跡（弥生時代、古墳時代集落跡：武雄市武雄町大字富岡）
○調査面積	甕屋窯跡　1,580 m ² （調査期間：平成28年4月27日～平成28年8月31日） 袴野城跡　4,360 m ² （調査期間：平成28年9月1日～平成28年12月28日） 竹ノ下遺跡　180 m ² （調査期間：平成29年1月16日～平成29年2月日17）
○業務期間	平成28年4月1日～平成29年3月31日
○委託契約金額	84,532,000円
○調査組織	佐賀県教育委員会（教育庁文化財課）

【平成29年度】

○事業内容	発掘調査　　竹ノ下遺跡（弥生時代、古墳時代集落跡：武雄市武雄町大字富岡） 資料整理　　甕屋窯跡（近世陶器窯跡：武雄市東川登町大字袴野） 袴野城跡（中世山城跡：武雄市東川登町大字袴野）
○調査面積	竹ノ下遺跡　1,920 m ² （調査期間：平成29年5月1日～平成29年9月15日）
○業務期間	平成28年4月3日～平成30年3月31日
○委託契約金額	66,970,000円

○調査組織 佐賀県教育委員会

【平成 30 年度】

○事業内容	資料整理 竹ノ下遺跡（弥生時代、古墳時代集落跡：武雄市武雄町大字富岡） 報告書作成 麟屋窯跡（近世陶器窯跡：武雄市東川登町大字袴野） 袴野城跡（中世山城跡：武雄市東川登町大字袴野）
○調査面積	—
○業務期間	平成 30 年 4 月 2 日～平成 31 年 3 月 31 日
○委託契約金額	14,830,000 円
○調査組織	佐賀県教育委員会

【令和元年度】

○事業内容	資料整理・報告書作成 竹ノ下遺跡（弥生時代、古墳時代集落跡：武雄市武雄町大字富岡） 梶原遺跡（弥生時代、中世集落跡：武雄市武雄町大字昭和）
○調査面積	—
○業務期間	平成 31 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
○委託契約金額	5,120,000 円（当初額）
○調査組織	佐賀県（地域交流部文化・スポーツ交流局 文化課文化財保護室）

I. 調査の経過

2. 調査組織

調査主体 佐賀県教育委員会

発掘調査（平成26年度・28年度・29年度）

整理作業・報告書作成（平成29年度・30年度・令和元年度）

平成26年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	池田 英雄
	佐賀県教育委員会	文化財課長	松本 啓嗣
	佐賀県教育委員会	文化財課参事	森田 孝志
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	石井 和裕
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	徳富 則久
調査総括	佐賀県教育委員会	文化財課主幹	小松 譲
調査員	佐賀県教育委員会	文化財課主査	梶山 裕史
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化財課主幹	黒川 誠
	佐賀県教育委員会	文化財課副主査	黒田 康裕
	佐賀県教育委員会	文化財課主事	中野真一郎

平成28年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	古谷 宏
	佐賀県教育委員会	文化財課長	西原 幸一
	佐賀県教育委員会	文化財課参事	徳富 則久
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	山田 隆宏
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	桶口 秀信
調査総括	佐賀県教育委員会	文化財課係長	市川 浩文
調査員	佐賀県教育委員会	文化財課主事	嘉村 俊也
	佐賀県教育委員会	文化財課嘱託	築城 昇平
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化財課主幹	黒川 誠
	佐賀県教育委員会	文化財課主査	畠瀬明日香
	佐賀県教育委員会	文化財課主事	白浜 渚

平成29年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	白水 敏光
	佐賀県教育委員会	文化財課長	江島 秀臣
	佐賀県教育委員会	文化財課参事	徳富 則久
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	山田 隆宏
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	桶口 秀信
調査総括	佐賀県教育委員会	文化財課係長	市川 浩文
調査員	佐賀県教育委員会	文化財課主事	嘉村 俊也

庶務会計	佐賀県教育委員会	文化財課非常勤職員	築城 昇平
	佐賀県教育委員会	文化財課主幹	今泉 和孝
	佐賀県教育委員会	文化財課主査	畠瀬明日香
	佐賀県教育委員会	文化財課副主査	白浜 淳

平成30年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	白水 敏光
	佐賀県教育委員会	文化財課長	江島 秀臣
	佐賀県教育委員会	文化財課参事	徳富 則久
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	山田 隆宏
	佐賀県教育委員会	文化財課副課長	白木原 宜
調査総括	佐賀県教育委員会	文化財課係長	市川 浩文
調査員	佐賀県教育委員会	文化財課主査	加藤 裕一
	佐賀県教育委員会	文化財課副主査	嘉村 俊也
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化財課主幹	今泉 和孝
	佐賀県教育委員会	文化財課主査	松井 美徳
	佐賀県教育委員会	文化財課主事	松尾さつき

令和元年度

総括	文化・スポーツ交流局	局長	田中 裕之
	文化・スポーツ交流局	文化課長	橋口 泰史
	文化・スポーツ交流局	文化財保護室長	川内野 修
	文化・スポーツ交流局	文化財保護室参事	白木原 宜
	文化・スポーツ交流局	文化財保護室副室長	山川 史
	文化・スポーツ交流局	文化財保護室副室長	古川 直樹
調査総括	文化・スポーツ交流局	文化財保護室係長	市川 浩文
調査員	文化・スポーツ交流局	文化財保護室主査	竹川 満
	文化・スポーツ交流局	文化財保護室副主査	越知 瞳和
庶務会計	文化・スポーツ交流局	文化財保護室主幹	今泉 和孝
	文化・スポーツ交流局	文化財保護室主査	松井 美徳
	文化・スポーツ交流局	文化財保護室主事	松尾さつき

I. 調査の経過

3. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

九州新幹線西九州ルート建設に伴い、路線上に位置する梶原遺跡・竹ノ下遺跡について、記録保存による発掘調査を実施した。なお発掘調査は、発掘調査に係る諸業務を委託する発掘調査支援委託業務にて行うと共に、県文化財課職員が現地に常駐することで監理・監督を実施した。

対象地である梶原遺跡は、当初の調査対象範囲には遺構・遺物はなかったものの、隣接する末周知地区における、遺跡の有無に係る試掘調査により遺構が発見された。そこで今回の発掘調査では、路線工事に係わる範囲における遺構の分布状況について調査を行った。

竹ノ下遺跡は未周知地区でありこれまで発掘調査は行われていなかったが、確認調査において約40～50cm掘り下げた面で弥生時代の遺構が発見され、新たに佐賀県遺跡台帳に登載された。今回の発掘調査では、路線工事に係わる範囲における遺構の分布や集落の年代や構造について調査を行った。

遺跡名は佐賀県遺跡台帳に記載されている「梶原遺跡」(佐賀県遺跡地図番号0288)、「竹ノ下遺跡」(佐賀県遺跡地図番号0519)を使用した。遺跡名は遺跡略号を使用し梶原遺跡を「K J W」、竹ノ下遺跡を「T S T」と表記し、出土資料や各種作成資料の登録及び表示はすべてこの略号によって行っている。

発掘調査にあたり、グリッドは平面直角座標第II系を基準にすべての本調査対象地全域を包括した形で設定し、発掘調査における遺構配置図や遺構図の作成、所属不明な遺構検出面で出土した遺物や表面採集遺物などの取り上げ、報告文中における遺構説明など、すべて今回設定したグリッドに基づいて行った。

遺構名については「発掘調査のてびき」(文化庁編集 2010)に基づき次のような表示を採用した。遺構番号はその頭に分類種別略号を付加し、001から始まる3桁の連続番号(1000以降は4桁)を用い最終的な遺構番号とした。この遺構分類種別略号には、S A：柵列遺構、S B：掘立柱建物、S D：溝状遺構、S E：井戸、S H：竪穴建物、S J：甕棺、S K：土坑、S X：その他の遺構・不明遺構、S：ピット等がある。

調査はバックホウによる表土除去作業から開始し、その後人力による遺構検出を行い、検出遺構は事前に設定したグリッドを使用し縮尺1/100で遺構配置図にすべて記載した。遺構実測は受託者実測員と実測補助員及び県文化財課監督員によって、平面遺構実測図(1/10・1/20)、個別遺構実測図(1/10・1/20)、土層断面図(1/10・1/20)の作成を行った。遺構写真は白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルム(プロニード・35mm)、一眼レフデジタルカメラ(2,000万画素以上)を使用し現場管理者が随時撮影を行った。調査区全体はカラーリバーサルフィルムと一眼レフデジタルカメラを用いて撮影を行った。

また調査区全体写真撮影については、J R佐世保線に近接することからラジコンヘリコプター、マルチコプター等の使用が制限されるため、通常の発掘調査と同様の空中撮影が困難な部分があった。よって調査区全体撮影については、梶原遺跡では高所作業者、竹ノ下遺跡(平成29年度調査分)においては、調査区全体のオルソ画像作成及びローリングタワー設営による全景撮影に代えて実施した。

なお、出土資料及び調査において作成されたすべての記録資料は、佐賀県地域交流部文化・スポーツ交流局文化課文化財保護室において保管している。

(2) 調査の経過

【発掘調査】

平成26年度

<梶原遺跡K JW>

- 1 1月 6日 重機による表土掘削開始
 1 1月 7日 表土掘削終了、発掘機材搬入
 1 1月 10日 作業員雇用開始 遺構検出、掘削開始
 1 1月 11日 遺構配置図作成
 1 1月 13日 遺跡全景写真撮影のための清掃作業
 1 1月 14日 遺跡全景写真撮影実施
 1 1月 18日 遺構実測のための杭打ち、遺構実測開始
 1 1月 19日 発掘機材の撤収
 1 1月 21日 仮設トイレの撤収
 1 1月 26日 重機による調査区の埋め戻し

平成28年度

<竹ノ下遺跡T S T>

- 1 2月 20日 (株)埋蔵文化財サポートシステムと支援業務委託契約締結
 1月 16日 事務所用プレハブ設置、重機投入、表土剥ぎ作業開始、基準点測量・水準測量実施
 1月 18日 作業員雇用開始、安全教育
 1月 20日 遺物包含層掘削、遺構検出作業開始
 1月 23日 雪のため現場作業中止
 1月 25日 調査区壁面土層実測
 1月 27日 遺構検出完了写真撮影
 1月 31日 遺構掘削作業開始
 2月 3日 平面遺構実測、完掘写真撮影開始
 2月 10日 調査区内オルソ画像撮影
 2月 15日 空撮に向けた清掃作業、空撮
 2月 17日 資材等搬出、現場引き渡し

平成29年度

<竹ノ下遺跡T S T>

- 5月 1日 (株)埋蔵文化財サポートシステムと支援業務委託契約締結
 5月 8日 重機搬入、表土剥ぎ作業開始、基準点基準点測量・水準測量実施
 5月 10日 ダンプによる排土搬出開始
 5月 12日 事務所用プレハブ設置
 5月 15日 作業員雇用開始、安全教育
 5月 16日 表土掘削深度の計測、写真撮影

- 5月 17日 遺構検出作業開始、平板測量開始
 5月 18日 C-1にてSJ035甕棺検出
 5月 22日 調査区壁面整形、土層写真撮影
 5月 23日 H-8 検出面よりガラス玉出土
 5月 30日 E-7にてSH375・SH380堅穴住居検出、弥生期の住居跡が良好に遺存することを確認
 6月 2日 E-3検出面より滑石混入土器(縄文中期土器)検出
 6月 9日 重機搬入、調査区南西側一部拡張
 6月 12日 調査区西側より遺構掘削作業開始
 6月 26日 大雨により調査区全体が冠水、緊急に排水作業を行う
 7月 3日 作業員追加雇用、安全講話、台風接近に備え耐風養生
 7月 10日 ローリングタワーの設置、SH350堅穴住居検出状況等全体写真撮影実施
 7月 14日 武雄市教育委員会来訪、不整地運搬車の搬入、排土運搬・整形
 7月 19日 調査区西半部完掘状況写真撮影
 7月 24日 SB650 大型の掘立柱建物検出
 7月 27日 SD370 古墳の周溝検出、写真撮影
 7月 28日 SH380 円形住居遺構掘削、床面検出
 8月 1日 調査区西側一部引渡し
 8月 4日 調査区西半部オルソ画像撮影
 8月 10日 S1091 より土器片(刻目突帯文)出土
 8月 29日 SH380 より石剣破片出土
 8月 31日 佐賀大学重藤教授来訪
 9月 4日 調査区内清掃、調査完了写真撮影
 9月 6日 調査区東半部オルソ画像撮影
 9月 8日 遺構掘削作業完了、作業員雇用終了
 9月 15日 資材等搬出、用地引き渡し

II. 遺跡の位置と環境



① 重機表土除去作業状況



② 遺構検出作業状況



③ 遺構掘削作業状況



④ 遺構掘削作業状況



⑤ 調査区全景



⑥ 高所作業車による遺構撮影作業状況



⑦ 出土遺物洗浄作業状況



⑧ 埋め戻し作業完了状況

発掘調査の経過 1 梶原遺跡



① 重機表土除去作業状況



② 重機表土除去作業完了状況



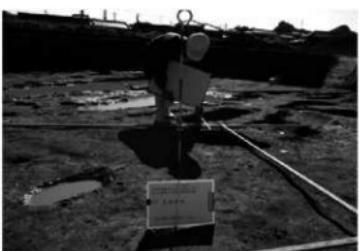
③ 遺物包含層掘削作業状況



④ 遺構検出作業状況



⑤ メッシュ杭設置作業状況



⑥ 遺構実測作業状況



⑦ 調査区清掃作業状況



⑧ 空中写真撮影実施状況

発掘調査の経過 2 竹ノ下遺跡（平成28年度調査）

I. 調査の経過



① 調査着手前現状（右手は J R 佐世保線高架）



② 重機表土除去作業状況



③ 重機表土除去作業状況



④ 排土積込・搬出作業状況



⑤ 造構検出作業状況



⑥ 造構掘削作業状況



⑦ 造構掘削作業状況（SH380堅穴住居跡）



⑧ 発掘作業状況（調査区南西部）

発掘調査の経過 3 竹ノ下遺跡（平成29年度調査 1）



① SB650掘立柱建物跡及びSH350竪穴住居跡検出状況



② 遺構写真撮影作業状況



③ 遺構実測作業状況（1/20全体図）



④ 遺構実測作業状況（詳細図）



⑤ 平面オルソ画像作製（撮影）作業状況



⑥ 大雨時調査区冠水状況（H29年6月26日）



⑦ 遺構掘削土量検測作業状況



⑧ 発掘調査完了検査状況（H29年9月13日）

発掘調査の経過 4 竹ノ下遺跡（平成29年度調査 2）

II. 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

今回報告を行う竹ノ下遺跡・梶原遺跡は佐賀県西部の武雄市に位置する。武雄市は、平成18年3月に隣接する杵島郡北方町・山内町と合併し、現在の市域を形成している（図1）。北緯 $33^{\circ} 11'$ 、東経 $130^{\circ} 01'$ （武雄市役所）に位置し、東西19.4km、南北18.4km、面積195.45km²を測る。北は伊万里市・唐津市、東は杵島郡大町町・白石町、南は嬉野市、西は西松浦郡有田町・長崎県東彼杵郡波佐見町とそれぞれ接している。平成27年国勢調査において、人口は49,108人、世帯数16,932世帯とされている。

武雄市は交通の要衝としての性格を有し、国道34号が佐賀市方面から市内中心部を通り長崎市方面へと向かっている。また、市西部から国道35号が佐世保市方面へと延び、市東部からは国道498号により伊万里市方面とつながる。高速道路については、佐賀市方面から長崎市へ向かう長崎自動車道と佐世保市へ向かう西九州自動車道とが市南部で分岐している。鉄道網は、JR佐世保線が国道34号・35号と並行するようにして市内中心部を貫いている。市内の中心駅としての機能は特急列車が停車する武雄温泉駅が担っており、一日の平均乗車人数は1,702人と県内で5番目の規模を誇る。当駅は、今後九州新幹線西九州ルートが開業することで、新幹線と在来線とをつなぐターミナル駅となる。

次に、遺跡を取り巻く地形・地質についてみていく（図1・図5）。佐賀県内の地形・地質は①天山・脊振山塊、②杵島・松浦丘陵地帯、③多良岳火山地域、④佐賀・白石平野の4地域に大別され¹⁾、武雄市は市域の大部分が②に含まれる。杵島・松浦丘陵地帯は、JR唐津線より西側の地域でみられ、かつて唐津・佐世保炭田を構成した第三紀層と、これを貫いて噴出した玄武岩・安山岩・流紋岩などの火山岩類から構成されている。第三紀層は、海進または沈降による堆積層であり、県内でみられるものは、堆積の時期により相知層群、杵島層群、佐世保層群に分けられる。そのうち、武雄市をはじめ県内に広く分布する杵島層群は、石炭層を含まない海成層で、古第三紀漸新世の芦屋海進のもとで堆積が進んだものである。層厚は1,000m近くに及び、各所で多種多様の海棲貝化石を産出している²⁾。

丘陵地帯に位置する武雄市の最高峰は、市北端に位置する八幡岳(764m)であり、西部の青螺山(618m)・黒髪山(516m)がそれに続く。市内には一級河川の松浦川と六角川が流れおり、両河川の分水嶺にあたる赤穂山系（蓬萊山：329mなど）によって市域は大きく南北に分けられる。また、縦横に走る断層の影響もあって市内には多くの地塊が形成されており、それらの間を縫うように大小の盆地がみられる。そのため武雄市においては、北部の真手野盆地と川古盆地、中央部の武雄盆地、南部の川登盆地、西部の山内地区（三間坂盆地など）、東部の北方地区（白石平野西端）というように、市内各地域が盆地（平野）を主体として区分される。

梶原遺跡・竹ノ下遺跡は、ともに武雄市中央部の武雄盆地内に所在する。武雄盆地は、六角川やその支流である武雄川・高橋川・甘久川などの流れに沿って広がっており、周囲を杵島山・蓬萊山・御船山などの小規模な山々に囲まれている。武雄盆地内は、東側と西側とでやや異なる地形的特徴を有する。盆地東側は、縄文時代前期の推定海進城にあたる³⁾ため、その影響を受けて地形分類上は大部分が三角州や海岸平野と位置づけられている⁴⁾。地質の面でも沖積世以降堆積した泥土が主に分布しており⁵⁾、現在でも水田としての土地利用が卓越している。また近年では、平坦な地形を生かし大型小売店舗等への転用も進んでいる。一方、盆地西側は、縄文海進の推定海岸線よりさらに内陸側に位置するため、平野部は谷底平野や扇状地等で構成され、丘陵地や砂礫台地がその合間に伸びる。地質面では、沖積世以

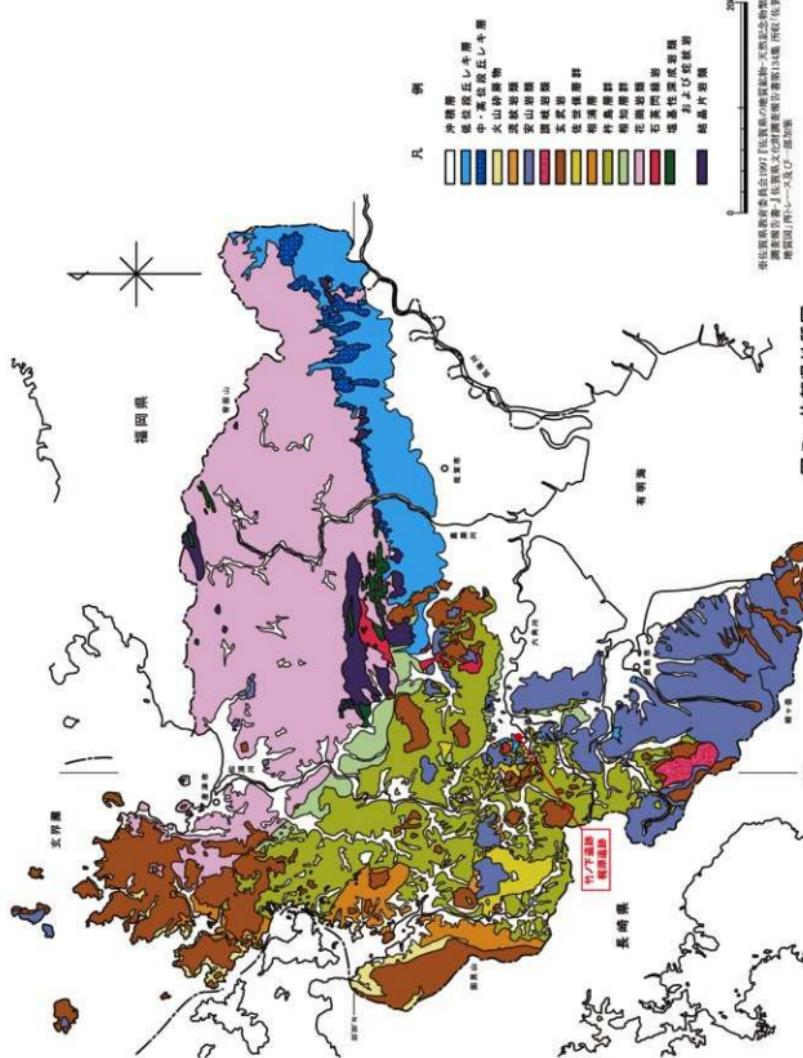


圖 5 佐賀縣地質圖

II. 遺跡の位置と環境

降に海進が進んだ砂礫層が広くみられるが、丘陵地や盆地縁辺の山地などでは、洪積世の安山岩や流紋岩、古第三紀層の砂岩や砂岩泥岩互層などが分布している。

両遺跡は、武雄盆地西部の丘陵地に近接して立地しているが、遺跡の立地環境は少し異なる。梶原遺跡は武雄盆地の西に位置する蓬莱山から伸びる丘陵末端部にあたり、洪積世に堆積が進んだ砂礫台地と位置付けられている。一方、竹ノ下遺跡は、梶原遺跡と同様に丘陵末端部に位置するが、地形分類上は扇状地に位置付けられている。この扇状地は、蓬莱山と柏岳の合間を流れる甘久川の堆積作用により、沖積世以降に海岸平野との境界域に形成されたものである。両遺跡周辺は、堆積の時期は異なるもののいずれも砂礫層が卓越しており、また周囲との比高差も存在する。そのため水はけがよく、洪水等の浸水被害も受け難いと考えられ、集落の立地に適した環境であるといえる。

【註】

- 1) 塩田町史編纂委員会 1983『塩田町史 上巻』6-8p
- 2) 岩橋徹 1970『佐賀県武雄市付近の地質構造と火成岩との関係』静岡大学地学研究報告：地学しづはた 2(1) 57p
- 3) 下山正一・西田巖 1999『北部九州における過去10,000年間の環境変遷：とくに海岸の移動について』国立歴史民俗博物館研究報告 81, 249-266p
- 4) 国土庁土地局国土調査課 1973『地形分類図 武雄』土地分類基本調査 武雄
- 5) 4) と同じ

【参考文献】

- ・岩橋徹 1970『佐賀県武雄市付近の地質構造と火成岩との関係』静岡大学地学研究報告：地学しづはた 2(1), 55-63p
- ・国土庁土地局国土調査課 1973『地形分類図 武雄』土地分類基本調査 武雄
- ・国土庁土地局国土調査課 1973『土壤図 武雄』土地分類基本調査 武雄
- ・国土庁土地局国土調査課 1973『表層地質図 武雄』土地分類基本調査 武雄
- ・佐賀県教育委員会 1978『佐賀県植生図』・佐賀県教育委員会 1997『佐賀県の地質鉱物 天然記念物緊急調査報告書』佐賀県文化財調査報告書第134集
- ・佐賀県高等学校教育研究会理科教科会地学部編 1995『佐賀の自然をたずねて』築地書館
- ・佐賀県史編纂委員会 1968『佐賀県史 上巻』
- ・塩田町史編纂委員会 1983『塩田町史 上巻』
- ・下山正一 1994『北部九州における縄文海進以降の海岸線と地殻変動傾向』第四紀研究 33(5), 351-360p
- ・武雄市史編纂委員会 1972『武雄市史 上巻』

2. 歴史的環境（図6・7）

*【番号】は図6・7中の番号を示す。

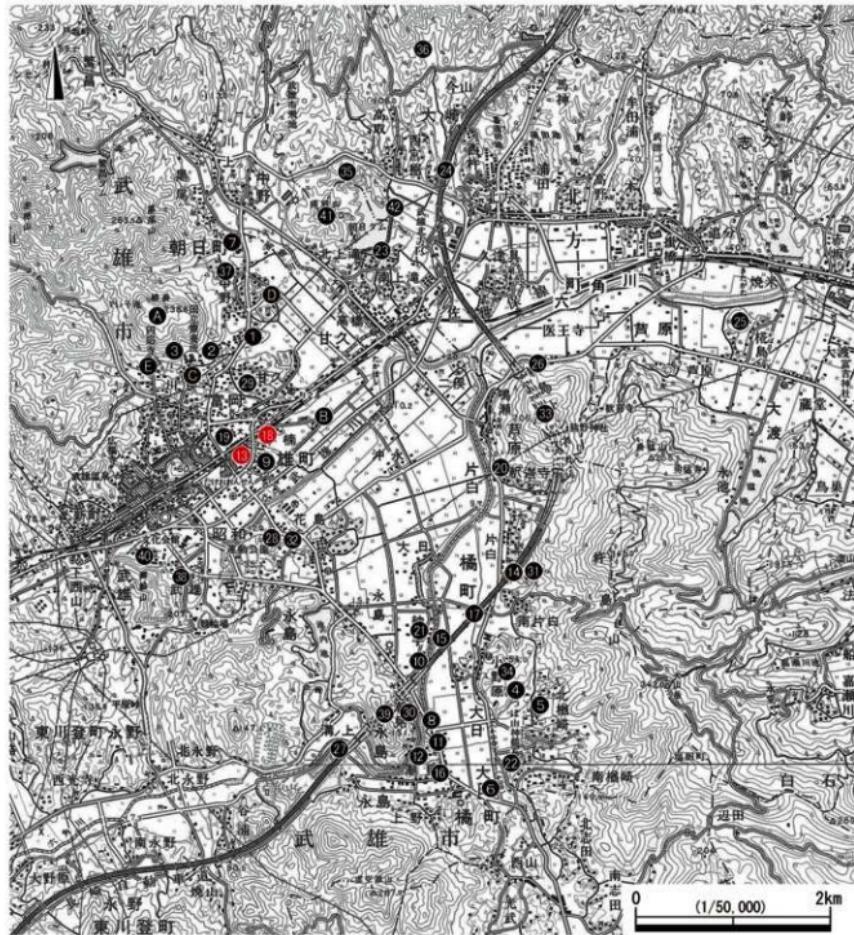
竹ノ下遺跡・梶原遺跡を取り巻く歴史的環境を考えるにあたり、ここでは対象地域を市町合併後の現在の武雄市域とする。平成18年（2006）合併前の旧自治体としては、武雄市のほか杵島郡北方町・同郡山内町までが含まれる。地理的には伊万里湾に向かって北西に流れる松浦川流域と、東側の有明海に注ぐ六角川流域に大きく分けられ、古来よりそれぞれの流域に沿って小平野・盆地からなる生活域が営まれてきている。このうち松浦川流域では、真手野盆地（武内町）、川古盆地（若木町）、宮野盆地（山内町）、三間坂盆地（山内町）、鳥海盆地（山内町）があり、六角川地域では今回報告を行う竹ノ下・梶原遺跡の所在する武雄盆地（武雄町・朝日町・橋町）と川登盆地（東川登町・西川登町）が位置している。現在までに明らかとなっている埋蔵文化財包蔵地は、これらの小平野・盆地内の平地部やその周囲の低丘陵部で多く知られており、佐賀県遺跡地図¹⁾上に記載されている包蔵地は計519箇所（平成29年度現在）を数える。複合遺跡の重複も含め概数をまとめると、旧石器時代11箇所、縄文時代203箇所、弥生時代103箇所、古墳時代146箇所、奈良・平安時代81箇所、中世145箇所、近世111箇所、そして近代15箇所となる。このうち縄文時代の包蔵地数が特に多いが、実際にはほとんどが散布地であり、数量的には概ねまんべんなく各時代に生活が営まれていたといえる。の中でも近世陶磁器窯跡の数は約90箇所に上り、近代15箇所とした包蔵地も全て陶磁器窯であるなど、江戸期から近代にかけての当地域における活発な陶磁器生産を物語っている。以下、時代別に歴史的様相について述べる。

【旧石器時代】 旧石器時代については前述のとおり10箇所余りの包蔵地が知られているが発掘調査例はない。『武雄市史』²⁾では12遺跡について採集石器が列挙されており、若木町北方遺跡（大形尖頭器・大形剥片挿器・ナイフ形石器・台形石器）、若木町大平遺跡（石刃・挿器・台形石器）、朝日町淀姫神社東南丘陵遺跡（大形尖頭器）、朝日町笠尾山（東麓丘陵）遺跡〔1〕（細石刃・台形石器・石刃・石刃石核・ナイフ形石器・挿器・彫器）、武雄町水谷遺跡〔2〕（石刃・ナイフ形石器・挿器・小型尖頭器）、武雄町柏原川良側中腹（赤坂遺跡〔3〕）（大形尖頭器）、武内町多々良東北方丘陵遺跡（石刃・挿器・細石刃）、東川登町袴野北東丘陵遺跡（細石刃）、橋町おつぼ山八郎社東方遺跡（ナイフ形石器・有舌尖頭器）、橋町おつぼ山神籠石第一水門北方遺跡〔4〕（石刃・ナイフ形石器・挿器）、橋町草場遺跡〔5〕（握槌・石刃・ナイフ形石器・挿器・彫器・錐器・尖頭器・台形石器）、橋町玉島古墳〔6〕封土（礪器・石刃・挿器）の各遺跡が紹介されている。これらの遺跡の立地は「河川や泉の近くの、見晴らしのよい丘陵の上」³⁾と推定されており、続く縄文時代の散布地とも重なる箇所が多い。

【縄文時代】 縄文時代については、馬ノ谷遺跡〔7〕（朝日町中野）で曾畠式土器、おつぼ山丘陵（橋町大日）で阿高式土器、郷ノ木遺跡〔8〕（橋町大日）で晚期浅鉢が発掘調査により出土している。また阿捨利遺跡（山内町三間坂）⁴⁾では集石状遺構と遺物包含層が検出され、黒曜石・安山岩製の打製石器を含む400点以上の石器が出土している。これらはいずれも平野部を望む丘陵上及びその先端部であり、確認された遺跡数は少ないながら、縄文時代前期から晩期に至るまで武雄市域の各所に生活域が点在していた様子が窺える。

【弥生時代】 弥生時代になると発掘調査例が大きく増加する。まず縄文時代終末から続く刻目突帯文土器期から弥生時代前期の遺跡としては、武雄盆地北方丘陵部の小楠遺跡〔9〕（武雄町武雄）⁵⁾、また武雄盆地南方、潮見山裾部の北東から東側一帯では、みやこ遺跡⁶⁾〔10〕（橋町郷ノ木）をはじめとした数遺跡が分布している。このうち武雄盆地北方の小楠遺跡は、柏岳の南側裾部から続く丘陵上に立地する弥生時代の拠点遺跡であり、刻目突帯文土器期から前期中葉までの遺物を包含するV字溝が延長45mにわたって検出されている。その全体規模は長径約170m、短径約140mに復元され、弥生時代

II. 遺跡の位置と環境



1 笹尾山遺跡	8 嬢ノ木遺跡	16 下貝原遺跡	24 東宮裾遺跡	32 上の山古墳	40 壇崎城
2 水谷遺跡	9 小楠遺跡	17 小野原遺跡	25 花鳥山遺跡	33 鳴瀬山山頂古墳群	41 猪隈城跡
3 赤坂遺跡	10 やまと遺跡	18 竹ノ下遺跡	26 貝良木遺跡	34 おつぼ山神籠石	42 向野山城跡
4 おつぼ山神籠石 第一水門遺跡	11 潮見遺跡	19 紙團山遺跡	27 玉江遺跡	35 向野須恵器窯跡	A 柏岳(山頂部)
5 草場遺跡	12 市場遺跡	20 託迦寺遺跡	28 矢ノ浦古墳	36 牧古窯跡	B 三本松古墳
6 玉島古墳	13 梶原遺跡	21 納手遺跡	29 多蛇古古墳群	37 牛ノ谷経塚	C 川良館跡
7 馬ノ谷遺跡	14 東福寺遺跡	22 南檜崎遺跡	30 潮見古墳	38 武雄神社	D 篠井城跡
		23 北上滝遺跡	31 東福寺古墳群	39 潮見城跡	E 円応寺

図6 武雄周辺遺跡位置図1

(原図：平成6年国土地理院発行図)

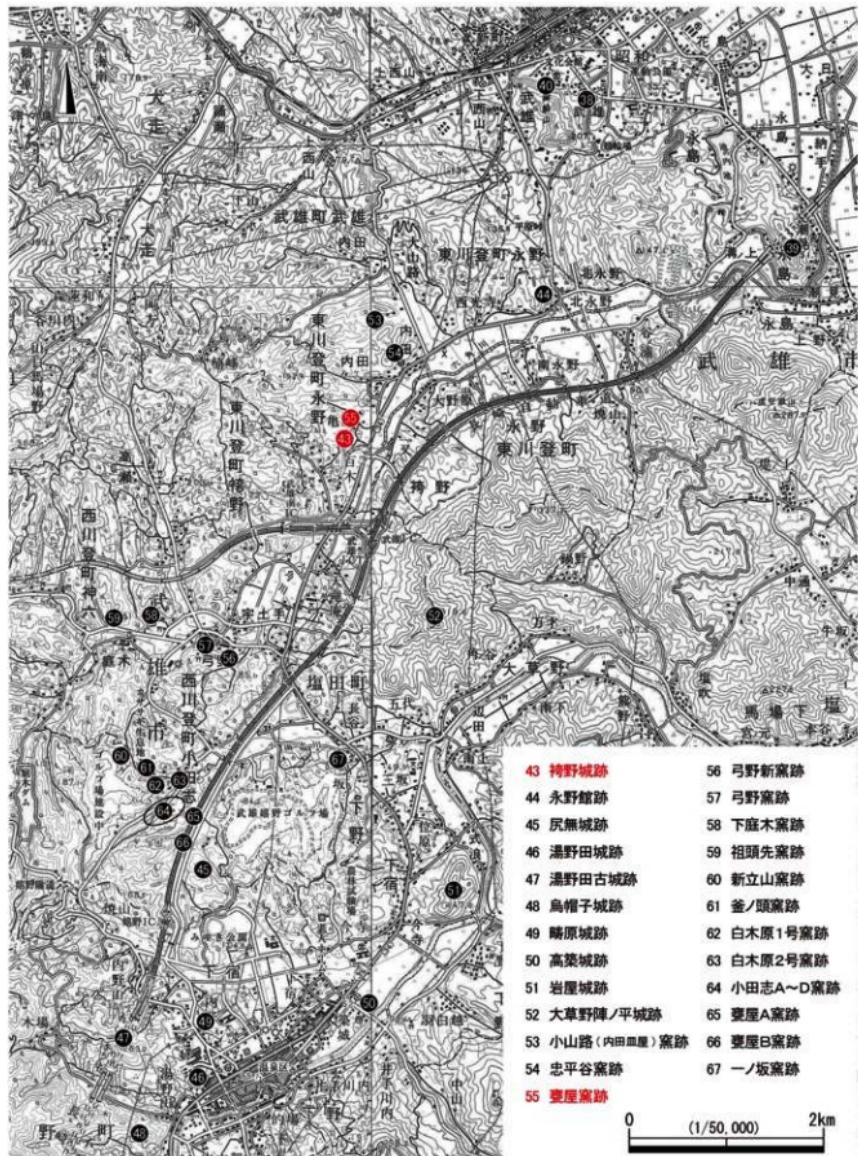


図7 武雄周辺遺跡位置図2

(原図: 平成6年国土地理院発行図)

II. 遺跡の位置と環境

に前期から拠点的な集落を形成していたものと推測される。一方、武雄盆地南側における当該期の遺跡として、潮見遺跡（橘町永島）・みやこ遺跡（橘町郷ノ木）・市場遺跡（橘町永島）・郷ノ木遺跡が挙げられる。細かく見れば、このうち潮見遺跡⁷⁾〔11〕では板付II式～城ノ越式、みやこ遺跡では夜白式、板付I・II式、城ノ越式の各時期、市場遺跡⁸⁾〔12〕では夜白式から板付II式、郷ノ木遺跡⁹⁾（橘町大日）では板付II式の時期の土器がみられ、その多くが性格不明の土壙や溝跡からの出土である。これらの各遺跡は約1.5kmの範囲内に立地しており、弥生時代初頭から当該地に居住域が広がっていた様子が窺える。

弥生時代中期では、集落として梶原遺跡〔13〕（武雄町武雄）、小楠遺跡、東福寺遺跡〔14〕（橘町片白）、茂手遺跡〔15〕（橘町片白）、下貝原遺跡〔16〕（橘町永島）、小野原遺跡〔17〕（橘町大日）が確認されている。このうち梶原遺跡・小楠遺跡では2～3棟の円形住居が、また東福寺遺跡¹⁰⁾では円形住居6棟が検出されている。今回、報告を行なう竹ノ下遺跡は、この武雄市教育委員会調査の梶原遺跡・小楠遺跡の東方、小谷を挟んだ低丘陵上にあたり、平成28・29年度に実施した発掘調査において弥生時代中期前半の集落が確認されている。中でも8m四方の規模を持つ掘立柱建物は卓越した規模を持ち、梶原遺跡・小楠遺跡と合わせ、当該地が弥生時代中期における武雄盆地北部の中心的集落であったことを裏付けるものといえよう。

なお、今回の竹ノ下遺跡の発掘調査で特筆すべき点のひとつとして、サヌカイトの石核・剥片が多量に出土しており、製品自体は少ないものの、原石からの石器製作を盛んに行っていた様子が明らかとなっている。当初は從来から知られていた多久市茶園原、あるいは鬼の鼻山（多久市・大町町）¹¹⁾などを原石の産地と推定していたが、遺跡の北西約1.5kmに位置する柏岳においてもサヌカイト原石が採集される点を確認した（P 28 ①・②）。サヌカイト原石は柏岳〔A〕の頂上部から南側斜面の広い範囲で採集できるようであり、遺跡に最も近接する産地として有力である。

墓地は、小楠遺跡、梶原遺跡、祇園山遺跡〔19〕（武雄市富岡）、釈迦寺遺跡〔20〕（橘町芦原・片白）、みやこ遺跡・郷ノ木遺跡、茂手遺跡（橘町片白）、納手遺跡〔21〕（橘町永島）、小野原遺跡、南檜崎遺跡〔22〕（橘町大日）、おつぼ山遺跡、北上滝遺跡〔23〕（朝日町甘久）、東宮裾遺跡〔24〕（北方町大崎）、桟島山遺跡〔25〕（北方町芦原）等、盆地周縁部で確認されている。これらは甕棺墓あるいは石棺墓・土坑墓からなる墓地であり、武雄盆地北部では小楠遺跡の最も高所にあたる113街区Bにおいて弥生中期前半の甕棺墓が集中してみられ、36基が調査されている。またこの小楠遺跡の西方約300mに所在する小丘陵上（標高30m）の素鷺神社祇園社境内（祇園山遺跡、（P 28 ③））では、昭和33年に工事中の不時発見により多くの弥生中期甕棺墓が発見されている。小楠遺跡・梶原遺跡・祇園山遺跡はいずれも柏岳南麓から南東方向に伸びる同一段丘上であり、当該地が弥生中期の拠点集落域であったことが想像される。

一方、武雄盆地南部では、低平地上のみやこ遺跡、東部では杵島山系鳴瀬山西麓の釈迦寺遺跡¹²⁾で一定数の中期甕棺墓が確認されている。これら墳墓群の中では青銅副葬品を伴うものが出現し始め、釈迦寺遺跡では、弥生時代中期初頭の甕棺墓S J 246から細形銅戈1点、S J 279より細形銅劍1点及び鉈1点が出土している。

弥生時代後期になると、茂手遺跡、小野原遺跡など六角川の氾濫原に面した低平地（標高約7m）において掘立柱建物を中心とした集落が形成される。茂手遺跡¹³⁾は弥生時代後期から古墳時代初頭の集落で、組合横木や礎板を伴う、方形の柱掘方で構成される掘立柱建物跡が確認されている。このうち全体が分かるS B 702建物跡は、二間×一間の規模で、柱掘方は約1m×1.2mと大きく、いずれの掘方底面で礎板が検出されている。茂手遺跡ではその他、多くの弥生後期土器を出土する、廐棄穴と推定され

る不定形土坑が 10 基程、発見されている。一方、武雄盆地北部では、六角川を望む標高約 14 m の段丘上に形成された小楠遺跡 111 街区 Aにおいて、平面長方形のものを含む住居跡が 14 棟検出されており、出土土器より弥生後期から古墳時代初頭と位置付けられる。

墓地は、武雄盆地南部のみやこ遺跡で後期前半の甕棺墓 14 基、これに後出すると思われる石棺墓 14 基・石蓋土坑墓 5 基・土墳墓 15 基が確認されており、中でも鏡、玉（S P 305）、鉄刀（S P 101）が副葬される、有力層の石棺墓も造営されている。また、みやこ遺跡の北方に隣接する茂手遺跡においても後期の甕棺墓 3 基（うち成人棺は 1 基）・石棺墓 3 基・土墳墓 3 基が発見されている。武雄盆地北部では小楠遺跡 113 街区 A・Bにおいて 30 基以上の甕棺墓が検出されているが、このうち後期成人棺は 2 基のみである一方、石棺墓・石蓋土坑墓・土坑墓が計 15 基確認されている。小楠遺跡の墓地部分の発掘調査範囲は限定的であり、弥生中期だけでなく後期においても、段丘上に墓地が広く展開しているものと想像される。

この他、弥生後期の墓地として特筆すべきものとして、六角川のほとりの独立丘陵上に所在する樋島山遺跡〔25〕¹⁰（P 28 ④）が挙げられる。ここでは昭和 38 年（1963）及び 41 年（1966）の調査において、2 基の箱式石棺墓より合わせて漢鏡 2 面、素環頭刀子 1 本、硬玉製勾玉 3 個、碧玉製管玉 36 個が出土しており、後期前半の所産と推定される。当時は入江に浮かぶ島状の地形であったと考えられ、武雄盆地の入口にあたる立地からも、地域を統括する首長層の墓地とも想像される。その他、樋島山遺跡の西方、鳴瀬山北麓の貝良木遺跡〔26〕¹¹（北方町芦原）では、一見、遺跡の存在を想定し難い傾斜 25 ~ 30 度の斜面上に、弥生時代末～古墳時代にかけての石蓋土坑墓 1 基、箱式石棺墓 12 基からなる墓地が形成されており、樋島山遺跡と同じく、生活域である武雄盆地、つまりは六角川の低平地を眼下に望む意識が表出されている。

なお、後期には青銅器出土遺跡が増加し、玉江遺跡¹²〔27〕（橋町永島）出土中広形銅鋌、茂手遺跡出土有鉤劍形銅製品、東宮遺跡¹³〔28〕甕棺墓出土巴型銅器、また前述の樋島山 1 号石棺墓の内行花文明光鏡、2 号石棺墓の方格規矩四神鏡などは佐賀県重要文化財となっている。

【古墳時代】古墳時代の武雄地域における首長墓級の古墳は、矢ノ浦古墳〔28〕（武雄町大字永島：5 世紀初頭～前半）、多蛇古墳群 1 号墳〔29〕（朝日町大字甘久：5 世紀中頃か）、玉島古墳（橋町大字日：5 世紀末～6 世紀初頭）、潮見古墳〔30〕（橋町大字永島：6 世紀中頃）と続き、6 世紀後半の群集墳、東福寺古墳群中では前方後円墳 2 基（全長約 20 m）が築造される。古墳は古墳時代全般を通じて武雄盆地を取り巻く丘陵部に築造され、特に杵島山系の西麓に群集墳が分布する。一方、その他の盆地では分布が極めて希薄であり、甕屋窯跡・袴野城山城跡が所在する川登盆地（東川登町・西川登町）ではほとんど知られていない。おそらくは六角川に開けた武雄盆地が、弥生時代以来、中心的な生活域として選ばれた状況は変わらなかつたようである。

時期別に概観すると、古墳時代前期に遡るものとしては、杵島山西麓の東福寺古墳群¹⁴〔31〕において、4 世紀代に遡る、箱式石棺（S0016）（P 28 ⑤）・竪穴式石室（ST017・018）・粘土櫛及び箱型木棺（ST015）が発見されている。このうち ST015 は一辺 14 m の方墳と考えられ、粘土櫛では棺床より鉄劍・鉄鎌・鉄鎚が出土している。武雄町大字永島の独立丘陵（白岩山）の東側尾根では、大型の板石を組み合わせた箱式石棺が露出した状態で発見され（上の山古墳¹⁵〔32〕）、封土を失った前期古墳と考えられている。5 世紀代に入ると、この上の山古墳と同一丘陵上の西方に全長 37 m の前方後円墳、矢ノ浦古墳¹⁶（佐賀県史跡、P 28 ⑥）が築造される。内部主体は後円頂部に粘土床 2 基、後円部西南斜面に石蓋盤棺墓 1 基であり、1 基の粘土床より変形獸帶鏡 1 面が出土している。5 世紀初頭から前半に位置付けられる。

II. 遺跡の位置と環境

同じく5世紀代のものとして、朝日町大字甘久の多蛇古墳群²⁰では、前方後円墳1基（佐賀県史跡）、円墳1基が確認され、前方後円墳（1号）（P 28 ⑦）については前方部の大半を失っているものの、復元全長は約40mと推定される。円墳（2号）は径21mで、内部主体は粘土郭または粘土床と考えられ、1号・2号とも5世紀中頃と推定される。これに続くものとしては、武雄盆地南端の小段丘上に築かれた、径48mの大型円墳、玉島古墳²¹（佐賀県史跡）（P 28 ⑧）が5世紀末から6世紀初頭に位置付けられる。内部主体は竪穴系横口式石室で、石室内より仿製鏡（変形文鏡）・碧玉製管玉・鉄刀・鉄鉢・短甲等が出土している。玉島古墳は県下有数の大型円墳であり、武雄盆地全体を北に臨む地域首長墓といえる。玉島古墳の所在する武雄盆地南部（橋町南部）の優位性は6世紀代も変わらず、東方の鳴瀬山・杵島山の西麓、及び西方では潮見山東・南麓に群集墳が形成される。中でも6世紀中頃に築造された潮見古墳²²（佐賀県史跡）は、横穴式石室を伴う径25mの円墳で、細帯式金銅製冠や五鈐付杏葉・馬鐸を始めとした豊富な装飾馬具が副葬されており、これらは一括して佐賀県重要文化財に指定されている。潮見古墳の後、6世紀後半以降は大型墳の築造はみられず群集墳の形成が中心となるが、中でも前述の東福寺古墳群は支群中に2基の前方後円墳を伴っており、潮見古墳に続く首長層の墓域と想定されるよう。なお後期における杵島山系での活発な群集墳形成は武雄盆地に面した山麓のみならず、六角川を望む北麓、広大な白石平野・佐賀平野を望む東麓でも爆発的に進み、中には鳴瀬山頂古墳群²³〔33〕（北方町大字谷内平）など標高200mを超える尾根頂部にまで進出する。

一方、集落跡の検出例は多くはないが、納手遺跡²⁴（橋町大字大日）では布留式段階の土師器多数が、小野原遺跡²⁵では5世紀代の土師器、茂手遺跡では6世紀前半代の土師器が出土しており、これらはいずれも武雄盆地内の微高地上に立地する、おそらくは掘立柱建物を中心とした集落遺跡と想像される。またこれらの南方にあたる、潮見山南麓の市場遺跡²⁶では竪穴住居跡2棟（5世紀後半代及び7世紀中頃各1棟）、潮見山西側の低丘陵部にあたる玉江遺跡（橋町大字永島）では5世紀代の竪穴住居跡9棟、6世紀中頃～後半の竪穴住居跡2棟が検出されている。これらも同じく武雄盆地南部であるが、そもそも武雄地域における古墳時代集落の発見例自体が少なく、当該期の集落の状況は不明な部分が多い。その中でも、今回、調査を実施した武雄町富岡の竹ノ下遺跡の調査では、6世紀前半代の大型竪穴住居跡（一辺約8mの方形住居）や、6世紀初頭から後半までの須恵器が出土しており、古墳時代のある程度まとまった集落跡としては武雄盆地北部における初例といえる。

なお、竹ノ下遺跡に近接する古墳として、南東約500mに三本松古墳〔B〕（P 29 ⑨・⑩）が存在する。古墳は竹ノ下遺跡が立地する、細い丘陵状に開析された扇状地上に位置しており、ほぼその末端部に築造されている。現状では径15～20m、周囲の道路、水田部からの比高差1m程の高まりとなっており、高まりの内部では安山岩の平らな大石（大きさ約1.5～2m）が3石みられる。これらは石室の壁体石材と推測され、その大きさから古墳時代後期の所産と考えられる。竹ノ下遺跡の集落がその造営主体であった可能性も考えられよう。竹ノ下遺跡北西の素鷺神社（紙園社）境内でも竪穴系横口式と推定される横穴式石室が開口しており（P 29 ⑪）、周辺の広範囲に古墳が点在していた状況が窺える。

この他、武雄地域の7世紀代を考える上で重要な遺構として、おつぼ山神籠石（国史跡）²⁷〔34〕が橋町大日に所在する。おつぼ山神籠石（国史跡）（P 29 ⑫）は全国16遺跡を数える、神籠石（神籠石系山城）の一つであり、県内には他に帶隈山神籠石（佐賀市所在、国史跡）がある。神籠石は杵島山の西麓にあたる、標高66mの小丘陵上にあり、丘陵中腹を切石の列石線が全長1.8kmに渡って回繞し、途中に門跡2ヶ所、水門2ヶ所（第一・第二水門）が設けられている。昭和38年（1963）に神籠石としては初めて発掘調査が実施され、列石が土壙基礎であることが確かめられたほか、柵列の存在も明ら

かとなり、明治以来の「神籠石論争」を決着付けたものとして学史的に著名である。

【奈良・平安時代】 8世紀前半に編纂されたとされる『肥前国風土記』では、肥前国の郡は11ヶ所を数え、武雄地域は「杵嶋郡」として郷四所・里十三所・駅一所がみられる。また『和名抄』には、「杵島郡多駄、杵島（喜之萬）、能伊、島見（志萬美）凡四郷」として郡と郷名が挙げられており、それぞれ多駄=白石町多田、杵島=北方町・大町町一帯、能伊=野井一帯（山内町・武内町）、島見郷=橘町潮見と比定されている。杵島郡衙の推定地としては、駅に関連するかと思われる北方町の「御手水」、「馬洗」などの地名などから、郡衙についても北方町北方・高野一帯を想定する説がある一方、おつぼ山神籠石の存在や軍団の推定地の一つとして挙げられていることより、杵島山系西麓の橘町付近を想定する説もみられる³⁰。なお武雄地域では、水田部のほとんどで条里制が施行されており、条里制に由来すると思われる地名としては、低平地の橘・武雄・朝日・北方の平野部を中心に、「林里」・「都里」・「平倉里」といった里名、「六ノ坪」・「五ノ角」・「二十」などの坪名が残る³⁰。

その他、『肥前国風土記』縁の武雄地域の地名としては、「…西に湯泉の出る巖有り。岸輻しくして人跡まれにいたる也」として武雄温泉の存在が知られるほか、杵島山は『日本書紀』では信仰の山として、『肥前国風土記逸文』・『万葉集』では「歌垣」の場として、筑波山と並んで知られる。

奈良時代の遺跡の確認例は断片的であり、潮見山南麓の市場遺跡において8～9世紀代の堅穴住居・土壤が検出されているほか、玉江遺跡で掘立柱建物跡が確認されている。それ以外では小野原遺跡、潮見遺跡、みやこ遺跡、茂手遺跡などで8世紀代の土壤が発見されているが、概して当該期の遺跡の調査例は少ない。

奈良～平安時代前期の遺跡として特筆すべきは、北方町大崎の向野須恵器窯跡³¹〔35〕が挙げられる。窯跡は無段式の半地下式穴窯と推定され3基が確認されており、製品として壺蓋・壺身・長頸壺及び土馬などが出土している。この北東約1.4km余りの地点では牧古窯跡³²〔36〕が知られており、昭和49年に発見され、同51年発掘調査が実施されている。遺構の遺存状況は良好ではなかったが、数基の登窯跡と物原から構成され、須恵器の壺・皿・碗・鉢・壺・甕等を生産していた模様である。

平安時代後期には末法思想の流行に伴い、武雄地域においても経塚の造営がみられ、矢ノ浦古墳の墳丘上に築かれた矢ノ浦経塚（武雄市武雄町）³³〔28〕、おつぼ山経塚（武雄市橘町）³⁴、牛ノ谷経塚（武雄市牛ノ谷）³⁵〔37〕で経塚・經筒が発見されている。

武雄地域において特筆すべきものとして、武雄神社〔38〕（武雄市武雄町、P 29 ⑩）が挙げられる。武雄神社は旧郷社であり、武雄神社文書（国重要文化財）中には社域の検分書である天暦五年（951）二月二日付の四至実検状が現存しており、県内最古の文書とされている。この四至実検状では「長島大路」の文言がみられるが、これは平安時代後期に成立する荘園「長島庄」の関連するものとされ、地理的には杵島山の西方から北方にあたる、現在の武雄市中心部に相当する。長島庄は肥前地域において神崎庄の次に広い一五一七町の面積を持っており、武雄市城では長島庄のほか、杵島庄の存在が知られるが、その位置・範囲については不詳である。

【鎌倉時代～室町時代～安土桃山時代】 中世武雄に係る考古学的遺構は山城・館など城郭関連遺構を除くと少なく、ここでは『武雄市史』等を参考に、史料から窺える時代背景について述べたい。

中世の武雄地域を考える上で重要な点は、長島庄、塚崎庄の二つの荘園の存在である。長島庄については文永三年（1266）八月二十六日付けの鎌倉幕府裁許状案の中に「蓮華王院領肥前國長島庄」の文言がみられ、この頃、長島庄が京都蓮華王院を領家とする全国約三十箇所の荘園の一つであったことが窺える³⁶。正安三年（1301）七月十二日付け鎌倉幕府の下知状中などを基に推定される長島庄の範囲は「武

II. 遺跡の位置と環境



① 柏岳（多蛇古古墳群 1号墳より望む）



② 柏岳山頂部のサヌカイト原石



③ 紙園山遺跡（素戔神社）の現状（西より）



④ 蛇行する六角川と柏島山（西より）



⑤ 東福寺古墳群 S C016石棺墓（西より）



⑥ 矢ノ浦古墳現況（西より）



⑦ 多蛇古古墳群 1号墳（南東より）



⑧ 玉島古墳（東より）

竹ノ下遺跡・梶原遺跡周辺の文化財 1



⑨ 三本松古墳現状（西より）



⑩ 三本松古墳現状（南より）



⑪ 素戔神社（紙園社）境内の横穴式石室



⑫ おつぼ山神籠石（国史跡）の東門



⑬ 武雄神社（東より、後方は御船山）



⑭ 潮見城跡主郭の状況（北より）



⑮ 猪隈城跡遠景（東より）



⑯ 円応寺のアーチ型石門【文化14年(1817)建造】

竹ノ下遺跡・梶原遺跡周辺の文化財 2

II. 遺跡の位置と環境

雄盆地からさらに東に伸びる平野部を中心として北は皮（川）古中山の山間地域から西は今山内町に及び、西南は宇土手から高瀬・矢管・内田などの山地帯までを含む広い地域³⁷⁾と考えられ、肥前においては神埼庄に次ぐ広さを持っていたものと推測されている。

長島庄は鎌倉時代後半より南北朝まで長く橘氏が収めることとなるが、その始まりは、嘉祐2年（1236）、四国伊予からの鎌倉御家人、橘薩摩守公業が総地頭としてこの地に命ぜられたことによる。『渋江由来記』によれば橘公業は潮見城〔39〕に居城したとされ、塩見神社の社史では城の東麓にあたる塩見神社中宮周辺に公業の館跡が推定されている³⁸⁾。

中世武雄の莊園として、もう一つ塚崎庄が挙げられるが、史料中の初出は応長元年（1311）年十二月の「藤原氏女田地売券」『武雄神社文書』とされ、元は長島庄の一部であったと推定される³⁹⁾。庄域は明確に史料からは迫れないものの、概ね塚崎城（武雄城）〔40〕を含む武雄盆地西方、廿久以西、（上下）西山以北の範囲と考えられている。なお後述する後藤氏は本来長島庄の一部である「墓崎（つかざき）」の地頭職であったが、16世紀前半には橘氏嫡家渋江氏を討つて長島庄全体を支配するに至る。

建徳二年（1371）、今川了俊の九州探題就任と合わせて、弟今川仲秋は肥前松浦呼子に上陸して松浦党・龍造寺氏に迎えられ、さらに武雄の長島・塚崎に入ったが、これは長島庄惣地頭として勢力を保っていた橘氏一族に協力を求めた動きと解されている。この今川了俊が応永二年（1395）失脚して京に戻った後、渋川満頼が九州探題に赴任（応永三年〔1396〕）したが、その統制力は大きなものではなく、その後応仁の乱（1467～1477）を経て、九州北部は探題渋川氏・大内氏と守護大名少弐氏との対立の図式へとなっていく。肥前においては、元寇の際、下総の国から土着した肥前千葉氏が有力であり、小城・佐賀方面の諸氏を從えて少弐氏を支援している。なお、文明十年（1478）、大内政弘は九州に攻め入って少弐政資を討つて筑前・豊前を抑えるが、少弐氏を支援する千葉氏も地盤とする小城・佐賀を取り巻く各勢力と対峙しており、藤津以南の大村氏、高来郡の有馬氏がこの頃影響力を及ぼしてきている。

後の武雄鍋島氏を称する後藤氏は、渋江橘氏の本領である長島庄の一部を領する、武雄地域を基盤とする国人であったが、後藤職明の頃、渋江公勢の子純明を養子としたとされる。純明は実家渋江家の家督争いに乗じて長島庄全域を手中とし、事实上武雄地域を領有することとなったが、享禄三年（1530）、有馬晴純が塚崎に攻め込むなど、南方からの有馬氏の圧迫を受けていた。また東方に対しては、少弐氏の被官であった龍造寺氏が、同年田手曇の戦いで大内氏を破って台頭してきており、後藤氏は周囲から圧力を受けることとなったが、後藤純明が有馬晴純と婚籍関係を結ぶことにより、両者は和して龍造寺方に對することとなった。

天文十四年（1545）、主君少弐資元を救援しなかったとして少弐氏臣馬場頼周らが龍造寺家兼（剛忠）の佐賀居城を攻める際、有馬晴純はこれに応応して兵を挙げ、後藤氏もこれに従った。家兼は筑後の蓮池艦盛を頼って敗走したが、跡目を継いだ龍造寺隆信（隆信）は天文十九年（1550）、周防の大内義隆と手を結び、これを後ろ盾として佐賀へ帰還した。しかし天文二十年（1551）、大内義隆が家臣陶隆房に討たれると龍造寺隆信は再び筑後に逃れ、二年後の天文二十二年（1553）7月、蓮池氏助力の元、ようやく佐賀郡の奪還を果たすこととなった。

天正二年（1574）、後藤貴明（純明の養子、肥前大村 大村純前実子）は、養子惟明（肥前平戸 松浦鎮信実子）の謀反を鎮圧するため龍造寺隆信の援助を求め、これをきっかけとして後藤氏は龍造寺氏に服属することとなる。『藤山考略』によれば天正五年（1577）5月、龍造寺隆信三男家信が貴明の養子となり、天正六年頃には家信に家督を譲ったとみられている⁴⁰⁾。この年、龍造寺隆信は島原の有馬氏を討つて肥前国全域をほぼ平定し、いわゆる「五州の太守」（『歴代鎮西要略』）と称する勢いを誇る中、

後藤家信も各地に出陣する。家信は「沖田畷の戦い」(天正十二年 [1584])で龍造寺隆信が敗死した後は、代って台頭した重臣鍋島直茂に従うが、豊臣秀吉の九州平定(天正十五年 [1587])に伴う鍋島家の豊臣政権服属を経て、朝鮮出兵(文禄・慶長の役 [1592 ~ 1598])にも参陣することとなる。なお根拠不明ながら、後藤氏は純明の先代の16代職明から柏岳南麓の川良に拠点を移したとされており、竹ノ下遺跡の北西800mに「川良館」跡((P 22 C)が比定されている¹⁰)。

上記のとおり当該地域における軍事的緊迫は、龍造寺氏対有馬氏、これを支援する薩摩島津氏との攻防として天正十五年(1587)の秀吉九州平定まで続くが、この間、龍造寺方による潮見城跡(P 29 ⑩)、竹ノ下遺跡北東約2kmに位置する猪隈城跡[41] (P 29 ⑪)など旧城の改修の可能性が指摘されており¹¹、さらに昨年度報告を行った符野城跡においても、戦国末期における大規模な改修が確認されている¹²。

なお竹ノ下遺跡・梶原遺跡周辺における中世城館としては、西方約1kmに富岡城跡(図8-2)が所在する。標高60mの独立丘陵で、頂部には平面円形の主郭、その南岸下には帶曲輪が存在したことが『富岡村天神山』図(武雄市歴史資料館蔵)で判読できるが、公園化により微地形は不詳である。(富岡)後藤氏との関連が推測されるが史料的裏付けは乏しいとされる。武雄城下への入口を押える、地理的重要性が指摘されている¹³。また北西0.8kmの柏岳南麓の斜面上に位置する川良館跡[C]は、後藤純明の館との伝承がある方形居館で、現存する土塁は60m程度であるが、地籍図・空中写真等により南北120m、東西100~120mの規模が復元されている。後藤氏は住吉城または塚崎城(武雄城)を本拠としていたが、史料不詳ながら一説には16代職明より川良に居館を置いたとされ、『河良村御館跡之図』(武雄市歴史資料館蔵)では「御館」の記載がみられる¹⁴。その他、北方1kmの柏岳東麓の独立丘陵上には磐井城跡[D]が位置する。標高44mの頂部主郭と北西側に展開する数段の腰郭で構成され、切岸高も最大10mに及ぶなど、旧地形を大規模に改変して築城されている点が特筆される。『藤山考略』では、鎌倉期後藤氏7代当主直明が次男定明に中野村に分知し「磐井ノ砦」に住まわせとされ、以後、同地が中野後藤家の本拠となつたとされており、本城がこれに該当するかと推測される。なお頂部の磐井八幡宮は、龍造寺家信が武雄入部の際に佐賀の龍造寺八幡を分祀したものと伝えられている¹⁵。

【江戸時代】 関ヶ原合戦後、肥前佐嘉の地は龍造寺家に安堵されるが、慶長十二年(1607)、隆信の子政家・高房が相次いで亡くなり、名実ともに鍋島氏による領国支配が確立された。後藤氏の動向では、慶長三年(1598)頃、家信から家督を継いだとされる嫡子茂綱が、その翌年塚崎城(武雄城)を修築して居城し、鍋島家中の武将として柳川の立花氏攻め、大坂冬・夏の陣等に参加した。茂綱は、後藤氏から、龍造寺氏→武雄氏→鍋島氏と、慶長期から寛永期にかけて改姓したが、以後10代茂昌(1832~1910)まで武雄鍋島氏を名乗り、鍋島家親類同格(龍造寺四家、他に諫早・多久・須古)として幕末まで存続することとなる。

武雄は多久と並んで8,640石の物成高となり、佐賀本藩と別に財政的にも領内経営ができる「大配分」に位置付けられたが、佐賀城内に屋敷を構え、本藩の行政運営にも関わっていた。特に大坂夏の陣後の徳川大坂城公儀普請の際には、元和六年(1620)の第1期工事、寛永五年(1628)の第3期工事で武雄茂綱が普請奉行の家老として中心的な役割を担うなど、藩政の中で大きな責任を負わされていた。なお、竹ノ下遺跡の北西1.5km、柏岳の南麓には武雄鍋島家代々の墓所が営まれる圓応寺(P 29 ⑯)が所在する。

江戸期の武雄地方を考える上で特筆すべきは陶磁器生産である。『肥前古陶磁跡基礎調査・基本方針策定報告書』¹⁶によれば、武雄市域(合併前)における古窯跡は78箇所が挙げられており、地区的には若木地区・武内地区・朝日地区・橋地区・東川登地区・西川登地区に分かれる。これらは大きく武雄

II. 遺跡の位置と環境

北部系（若木・武内など）、武雄南部系（東川登・西川登など）の二つのまとまりで論じられることが多い。九州新幹線西九州ルート建設に伴い平成28年度に発掘調査を実施した甕屋窯跡は東川登地区にあたり、階段状連房式登窯の窯跡2基の一部（焼成室7室分）及び物原が確認されている。当窯跡で生産されていたのは褐色釉を掛ける陶器であり、大小の甕を中心に、擂鉢・鉢・壺が主体となる。2基の窯は17世紀後半に相次いで操業が始まり、18世紀後半のおそらくは第3四半期に操業が停止したものと推定され。特に大甕についての器形の変遷が把握できる資料は重要である。17世紀から18世紀代にかけて器高60cmを超える陶器大甕を生産した窯跡としては、昭和62年度に九州横断自動車道建設に伴い発掘調査が行われた甕屋窯跡（西川登甕屋窯跡）以来の調査例として、貴重な多くの知見が得られている^①。

次に調査地区周辺の歴史性を語るものとして、「長崎街道」についてふれたい。佐賀県内における近世長崎街道の宿場は、東より田代宿・森木宿（鳥栖市）、中原宿（みやき町）、神崎宿・境原宿（神埼市）、佐賀宿（佐賀市）、牛津宿（小城市）・小田宿（江北町）と続くが、小田宿で南方に太良往還（鹿島・太良・諫早方面）を分岐する。本街道はその西方に北方宿（武雄市北方町）を経て武雄盆地へと入るが、18世紀前半まではここから杵島山西裾に沿って、鳴瀬宿（武雄市橋町）、塩田宿（嬉野市）へと通じていたが（鳴瀬通）、塩田川の氾濫により度々不通となることから、享保年間（1716～1736）に塚崎通が新たに開通した。塚崎通は北方宿から荷揚げ津でもある高橋宿に至り、ここから一度北上した後、柏岳の南麓に沿って西側に伸び、現武雄市中心地である武雄温泉地に塚崎宿が置かれた。塚崎宿からは西山を経て国道34号線に沿って西に向かい、さらに御船山西方の峠を越えて潮見川沿いの平野に至る。街道はそこから甕屋窯跡・袴野城山城跡の前面を通って潮見川沿いを南方に進み、嬉野宿（嬉野市）に至つて旧道と合流している。竹ノ下遺跡西約1.5kmの武雄温泉地街周辺は、江戸期に「湯町」と呼ばれて多くの旅行者で賑わい、また本陣や郡代役所が置かれるなど、江戸中期以降、武雄地域の中心地となった。

【註】

- 1) 佐賀県教育委員会 2010『佐賀県遺跡地図』
- 2) 武雄市史編纂委員会 1972『武雄市史 上巻』
- 3) 註2) 153 p 17 行目
- 4) 山内町教育委員会 2005『阿捨利遺跡—一県道梅野有田線扯幅にともなう発掘調査報告書一』
- 5) 武雄市教育委員会 1991『小楠遺跡—武雄市土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書一』武雄市文化財調査報告書第26集
- 6) 武雄市教育委員会 1986『みやこ遺跡—六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』武雄市文化財調査報告書第15集
- 7～9) 註6) 所収
- 10) 佐賀県教育委員会 1994『東福寺遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(17) 佐賀県文化財調査報告書第121集
- 11) 東側の聖岳と合わせ、鬼の鼻山山系をなす。鬼の鼻山山頂から聖岳に通ずる尾根上から南斜面にかけて、尖頭器等の石器を含む剥片群が分布する。石材は当山系に産するサヌカイトである。
- 12) 武雄市教育委員会 1990『积迦寺遺跡—県道改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書一』武雄市文化財調査報告書第24集
- 13) 武雄市教育委員会 1986『茂手遺跡—六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』武雄市文化

- 財調査報告書第15集
- 14) 佐賀県立博物館 1977 『梶島山遺跡調査報告書』
 - 15) 北方町教育委員会 2004 『貝良木遺跡』北方町文化財調査報告書第5集
 - 16) 武雄市教育委員会 1987 『玉江遺跡一六角川小規模河川改修工事に伴う発掘調査報告書一』武雄市文化財調査報告書第16集
 - 17) 佐賀県文化館 1970a 『北方町東宮据弥生遺跡』『新郷土』第256号 新郷土刊行会
佐賀県文化館 1970b 『北方町東宮据弥生遺跡発掘調査報告(その二)』『新郷土』第257号 新郷土刊行会
 - 18) 佐賀県教育委員会 1994 『東福寺遺跡一九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(17)』
武雄市教育委員会 2001 『武雄市内遺跡発掘調査報告書(平成3年度~11年度)付、東福寺古墳群』
 - 19) 武雄市史編纂委員会 1972 『武雄市史 上巻』239 p ~ 241 p
 - 20) 武雄市教育委員会 1980 『矢ノ浦遺跡—白岩運動公園遊歩道建設に伴う発掘調査報告書一』武雄市文化財調査報告書第8集
 - 21) 武雄市教育委員会 1993 『多蛇古古墳群—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』武雄市文化財調査報告書第32集
 - 22) 武雄市教育委員会 1973 『玉島古墳』
 - 23) 武雄市教育委員会 1975 『武雄市潮見古墳』
 - 24) 北方町教育委員会 1987 『鳴瀬山頂古墳群』北方町文化財調査報告書第3集
 - 25) 武雄市教育委員会 1986 『納手遺跡—六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(下巻)』武雄市文化財調査報告書第15集
 - 26) 佐賀県教育委員会 1994 「小野原遺跡A区」『東福寺遺跡-九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(17)』
 - 27) 武雄市教育委員会 1986 「市場遺跡」『みやこ遺跡一六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』武雄市文化財調査報告書第15集、武雄市教育委員会 1990 「市場遺跡」「天神裏遺跡—農業基盤整備事業に伴う発掘調査報告書一』武雄市文化財調査報告書第23集
 - 28) 武雄市教育委員会 2011 『史跡おとぼ山神龍石保存管理計画書』武雄市文化財調査報告書第50集
 - 29) 註2) 278 p 16-17行目
 - 30) 武雄歴史研究会 2007 『新・ふるさとの歴史散歩 武雄』22 p 上段 9行目 武雄市文化会議
 - 31) 北方町史編纂委員会 1985 『北方町史 上巻』464 p ~471 p
 - 32) 北方町教育委員会 1976 『牧古窯跡』
 - 33) 註20) 文献
 - 34) 佐賀県教育委員会 1970 『佐賀県の経簡』21・22 p
 - 35) 佐賀県教育委員会 1970 『佐賀県の経簡』23・24 p
 - 36) 註2) 文献313 p 5 ~ 8行目
 - 37) 註2) 文献317 p 3 ~ 5行目
 - 38) 佐賀県教育委員会 2014 『佐賀県の中近世城館 第3集 各説編2 (小城・杵島・藤津地区)』佐賀県文化財調査報告書第204集 235 p ~ 245 p
 - 39) 註2) 文献383 p 4 ~ 16行目
 - 40) 註2) 文献477 p 5 ~ 8行目
 - 41) 註38) 226 p ~ 227 p (川良館跡)
 - 42) 註38) 220 p ~ 223 p (猪隈城跡)、文献235 p ~ 241 p (潮見城跡)

II. 遺跡の位置と環境

- 43) 佐賀県教育委員会 2019 『九州新幹線西九州ルート建設に伴う文化財調査報告書（1）堀屋窯跡・狩野城跡』
佐賀県文化財調査報告書第221集
- 44) 註 38) 233 p ~ 234 p
- 45) 註 38) 226 p ~ 227 p
- 46) 註 38) 225 p ~ 226 p
- 47) 佐賀県肥前古陶磁窯跡保存対策連絡会 1999 『肥前古陶磁窯跡基礎調査・基本方針策定報告書 第2分冊』
- 48) 註 43) 同じ

III. 竹ノ下遺跡

1. 発掘調査の概要

(1) 調査の概要

調査区は武雄温泉駅の東方約 750 m、JR 佐世保線と並行する新幹線計画路線建設部分にあたり、調査区の規模は幅約 23 m、長さ約 105 m で東西に細長く、対象面積は 2100 m² である。工事の都合上、平成 28 年度に南西隅の 180 m² を先行して調査し、平成 29 年度に残りの 1920 m² の発掘調査を行った。発掘調査は、作業員の雇用、表土掘削、測量、遺構実測、写真撮影等の調査の部分的な業務を調査支援委託業務としてを行い、現場での指揮や指示は佐賀県教育委員会文化財課（当時）の職員がおこなった。本遺跡は未周知地区であったが、平成 28 年 7 月に確認調査を実施した結果、遺構が発見されたため、未周知地区を竹ノ下遺跡として新規登録し、周知化したものである。

調査に至る経過は、第 I 章に、地理的環境、歴史的環境は第 II 章に記されているので参照されたい。本遺跡は武雄盆地を流れる六角川の支流である武雄川の左岸に位置する。柏岳（標高 238.8 m）の南麓裾部で、微高地の縁辺部に立地する。現況は水田と JR 佐世保線と並行する市道である。

本遺跡の南西約 100 m には次章で述べる梶原遺跡が、東約 500 m には三本松古墳が立地する。また、JR 佐世保線を挟んだ北側約 500 m にも多蛇古墳や坂ノ上古墳が、西側約 500 m にも祇園山古墳群が存在する（図 8）。梶原遺跡は弥生時代中期から後期の集落と墓地、中世の集落が確認されており、その南側に隣接する小楠遺跡は弥生時代早期から前期の環濠集落である可能性があり、本遺跡周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多く見受けられる。

本遺跡は、前述の通り新規登録した遺跡であるため、既調査履歴はない。

調査の結果、約 1500 基にも及ぶ遺構が確認され、調査面積に対してかなりの遺構密度を有する遺跡であることが分かった。また、全体的に遺構密度が高いと言えるが、その中でも特に E・F・G-6・7・8 グリッドと C・D-2・3・4 グリッドが集中しており、遺跡の中央と両端の南側はやや遺構が少ない状況にあった。C-3 グリッドの南側では遺物包含層が途中でなくなり、表土を剥ぐとすぐ地山が現れ、遺構もほとんどなくなる。このような状況と周辺の地形を加味したとき、遺跡の広がりとしては南側にはあまり伸びず、遺跡は丘陵の端部に位置していたと考えられる。

主な遺構は以下の通りである。弥生時代中期を中心とした遺構が、掘立柱建物 7 棟、堅穴建物 7 軒、土坑 59 基、溝状遺構 27 条、甕棺 2 基、井戸 1 基、柵列 2 条、不明遺構 18 基、ピット 1276 基である。また、古墳時代中期～後期を中心とした遺構が堅穴建物 3 軒、土坑 4 基、溝状遺構 1 条、古墳周溝 1 条、不明遺構 2 基、ピット 50 基である。その他、古代の溝 1 条と中世のピットが 5 基確認されている。

表土下には厚さ約 20 ~ 40 cm の水田土床が堆積しており、その下に遺物包含層が約 20 cm 堆積している。遺物包含層の上層からは陶磁器や石鍋の破片など中・近世の遺物が混じっており、下層へ行くにつれて弥生時代～古墳時代の遺物が出土した。遺物包含層から出土した遺物の約 7 割以上が弥生時代の土器と石器であり、特に石器については 5000 点以上出土しており、中には原石や大型の石核も存在することから、大規模な石器製作場遺跡ともいえる。石材は黒曜石が約 3400 点、安山岩が約 1400 点、その他の石材が約 200 点であり、黒曜石が量的には多いものの、重量的には安山岩が多いと思われる。詳細は後述するが、須久式の土器が主体であることから、弥生時代中期における石器製作技術を解明できる遺跡としても注目される。その他、古墳時代の須恵器・土師器は 5 ~ 6 世紀を主体としており、この時期の大型堅穴建物が検出されていることは特記すべき事項である。

上記のように各時期の遺構や遺物とその特徴を述べたが、調査時は後世の水田造成時に上部が削平・擾乱を受け、さらに粘性の強い土質と湧水から遺構の識別が大変困難であった。

III. 竹ノ下遺跡

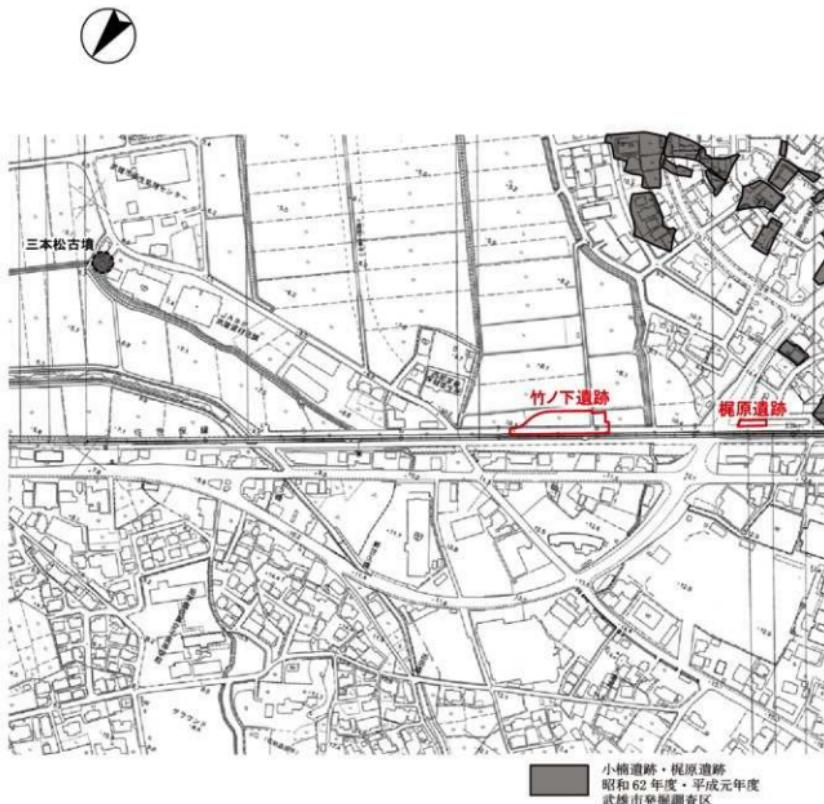


図 8-1 調査区周辺地形図 1 (1/5,000)



図 8-2 調査区周辺地形図 2 (1/5,000)

(2) 確認調査の概要

竹ノ下遺跡の確認調査は平成 28 年 7 月 4 日～5 日に実施した（当時は未周知地区）。対象地に 6 箇所の試掘坑を設定し調査を行ったところ、地表面から約 40 ～ 50cm 挖り下げた面で弥生時代の遺構がみつかり、住居跡を 2 基、土坑・ピットを 8 基確認した（図 10 の 1 Tr ～ 6 Tr）。遺物についても弥生土器や石器を中心に出土した。以上の結果を踏まえ、7 月 14 日に当該地を佐賀県遺跡台帳に登載し、竹ノ下遺跡として周知化した。その後、同年 9 月 13 日～15 日にかけて、7 月の調査の範囲周辺で 11 箇所の試掘坑を設定し、再度確認調査を実施した（図 10 の A ～ K）。その結果、試掘坑 8 地点において遺構が確認された。遺構としては、3 軒の住居跡のほか溝や土坑・ピット等を検出し、遺物は弥生土器を中心とした石器や須恵器片が出土した。遺構が検出された試掘坑はいずれも北西方向から延びる丘陵上に位置することから、丘陵上に集落が展開している可能性が考えられた。

上記の確認調査結果により、竹ノ下遺跡では工事影響範囲内に遺跡が存在することが明らかとなり、本調査を実施する必要が生じた。そのため、平成 28 年 9 月 30 日、鉄道・運輸機構と本調査に関する協議を行い、それを踏まえて、竹ノ下遺跡の調査対象面積を 2,100 m² とし、平成 29 年度から本調査に着手することとして工程表を提出した。その後、提出した工程表では鉄道・運輸機構側の工事に影響が出るとの旨の回答を受けたため、10 月 18 日の再協議の結果、平成 29 年 1 月より工事工程で優先される 180 m² 分を、また同年 4 月より残り 1,920 m² の調査を実施することとなつた。

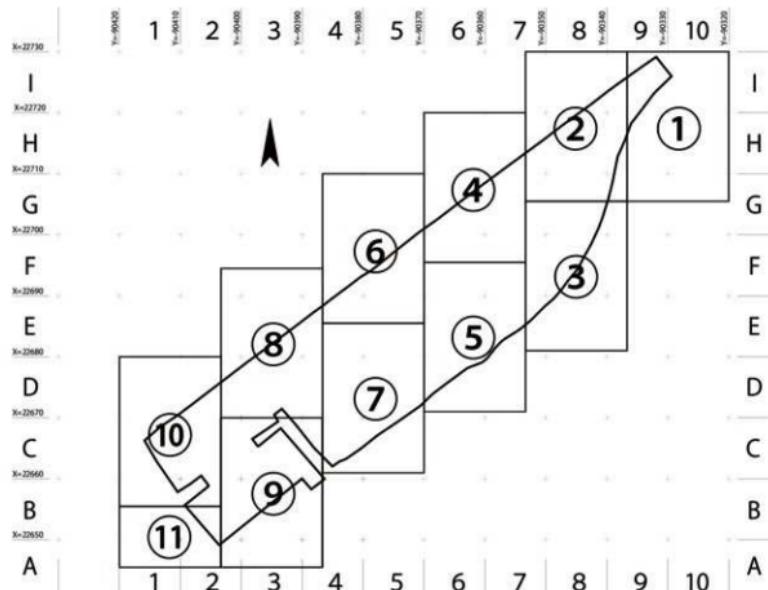


図 9 遺跡割付図 (1/800)

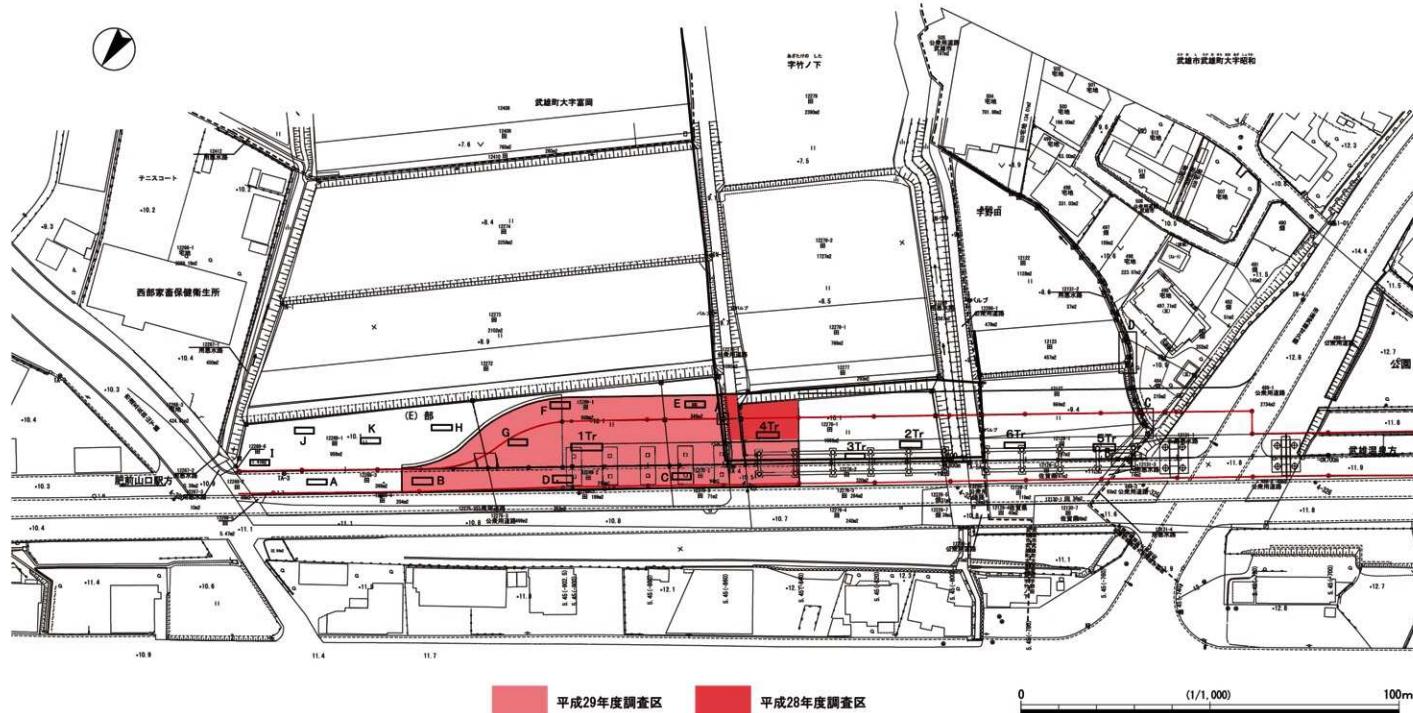


図10 竹ノ下遺跡調査区位置図
(路線測量図: 1/1,000)

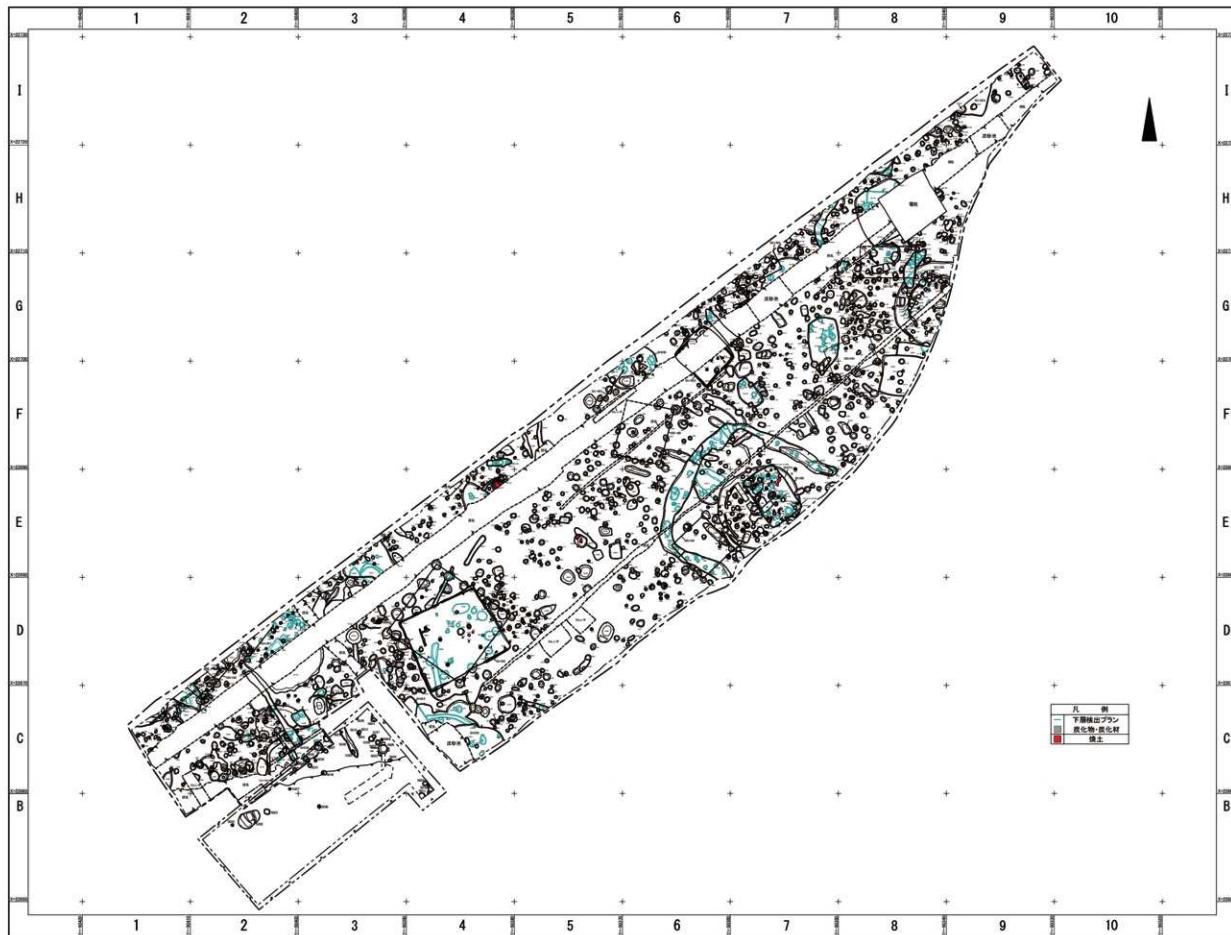


図11 遺構配置図 (1/350)



图 12 遗構配置図（オルツ画像）

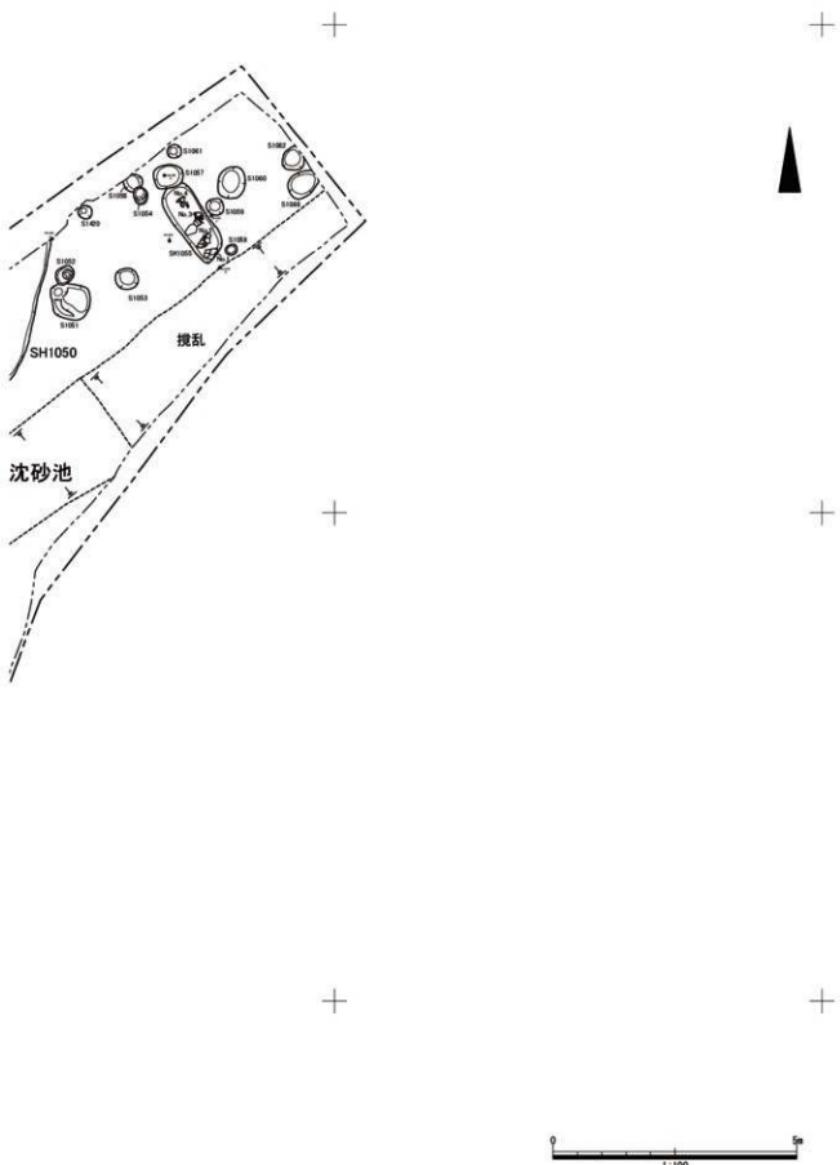
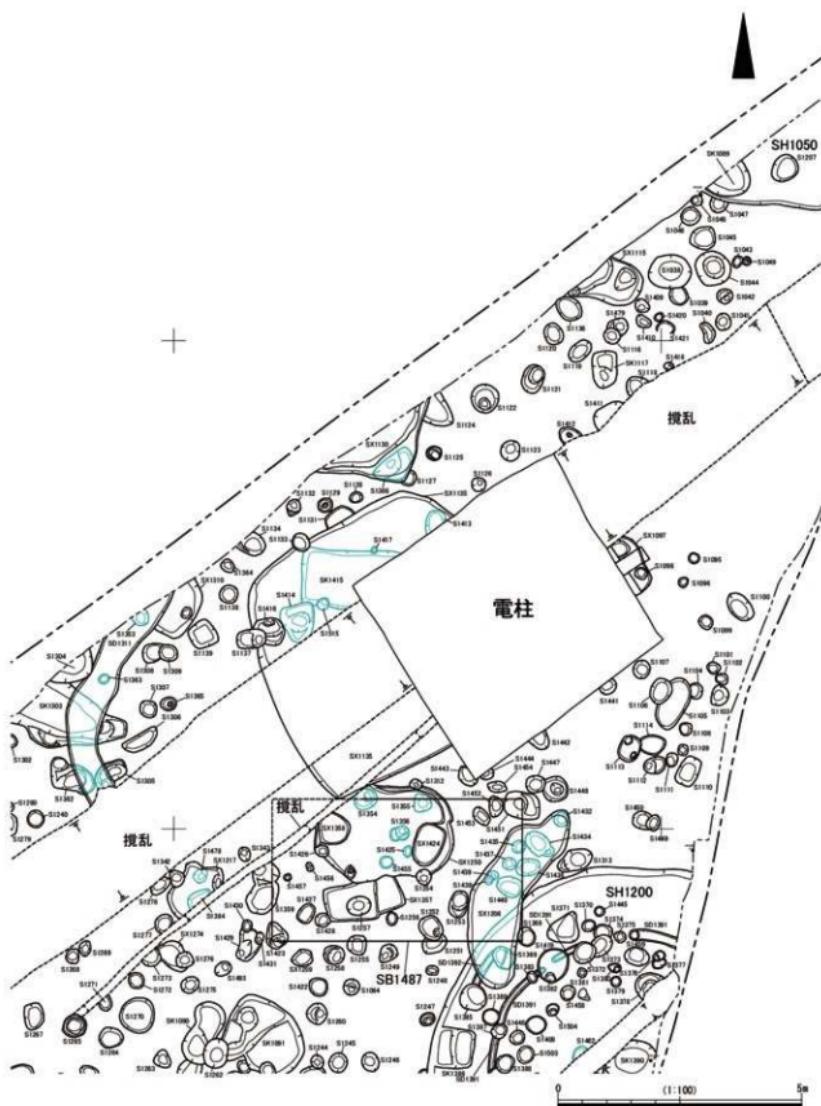


図 13 遺構配置詳細図①(1/100)

III. 竹ノ下遺跡



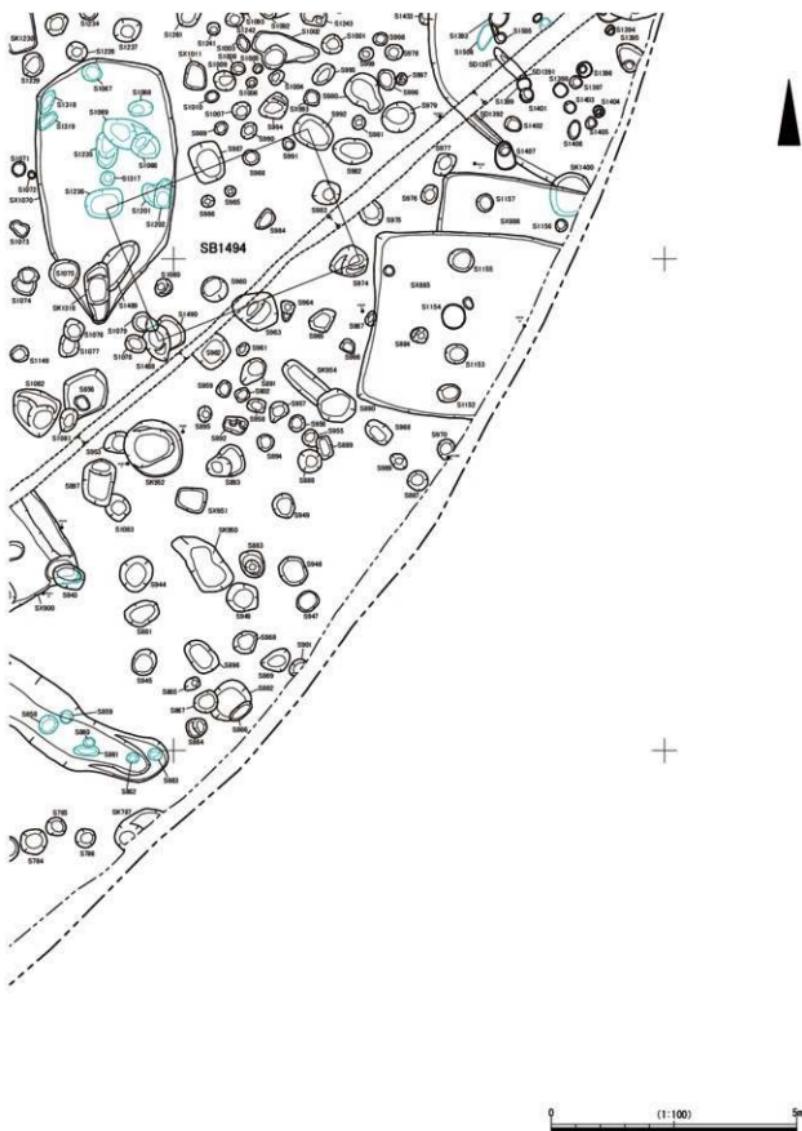


図 15 遺構配置詳細図③(1/100)

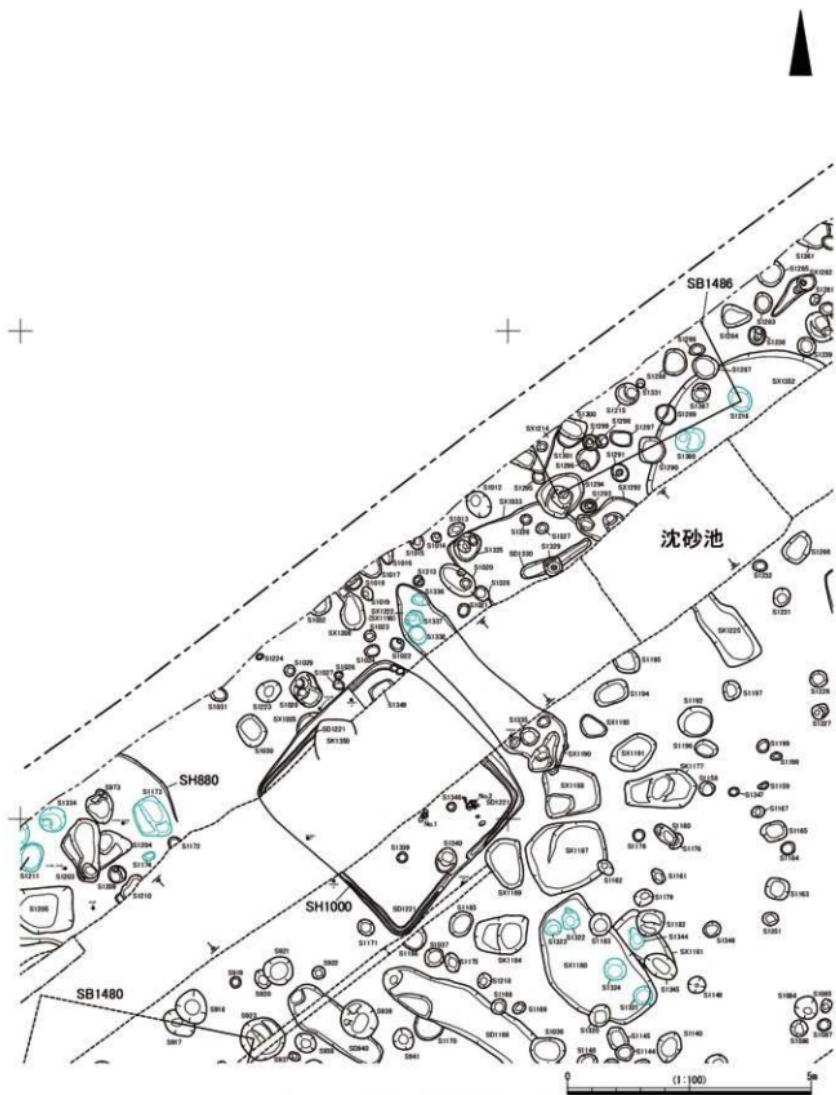


図 16 遺構配置詳細図④(1/100)

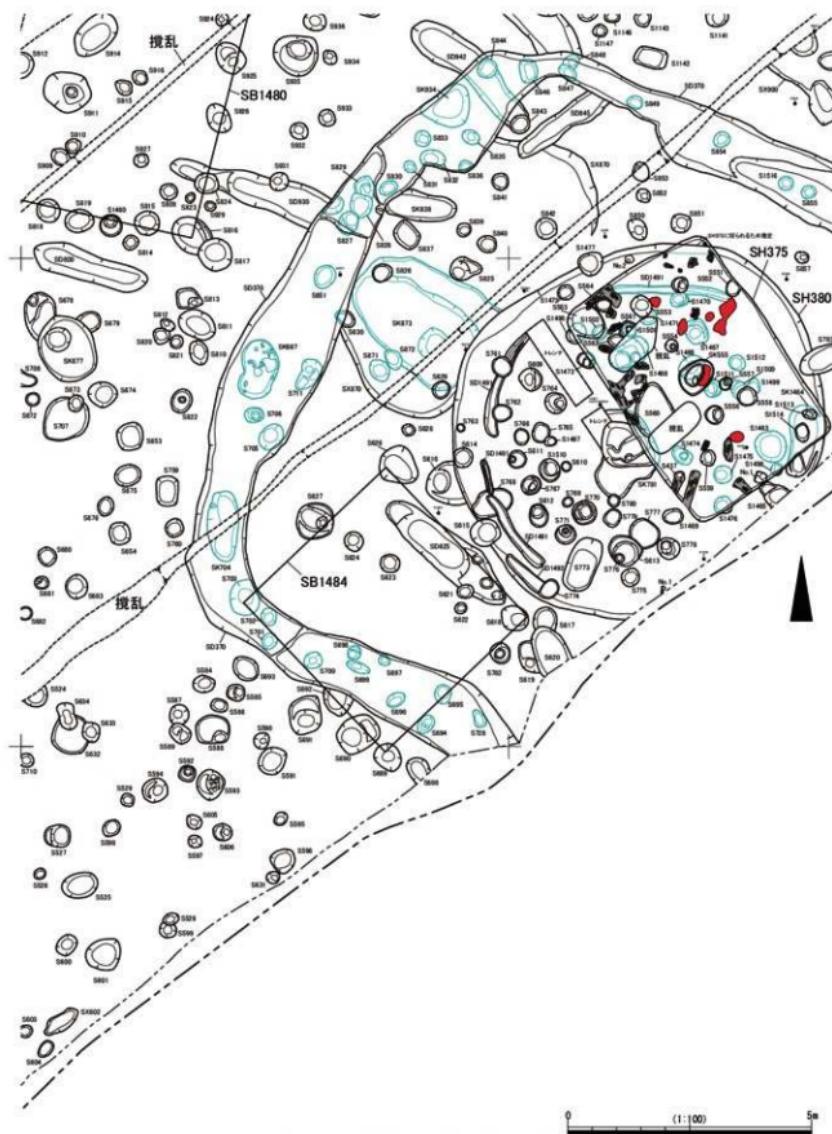


図 17 遺構配置詳細図⑤(1/100)

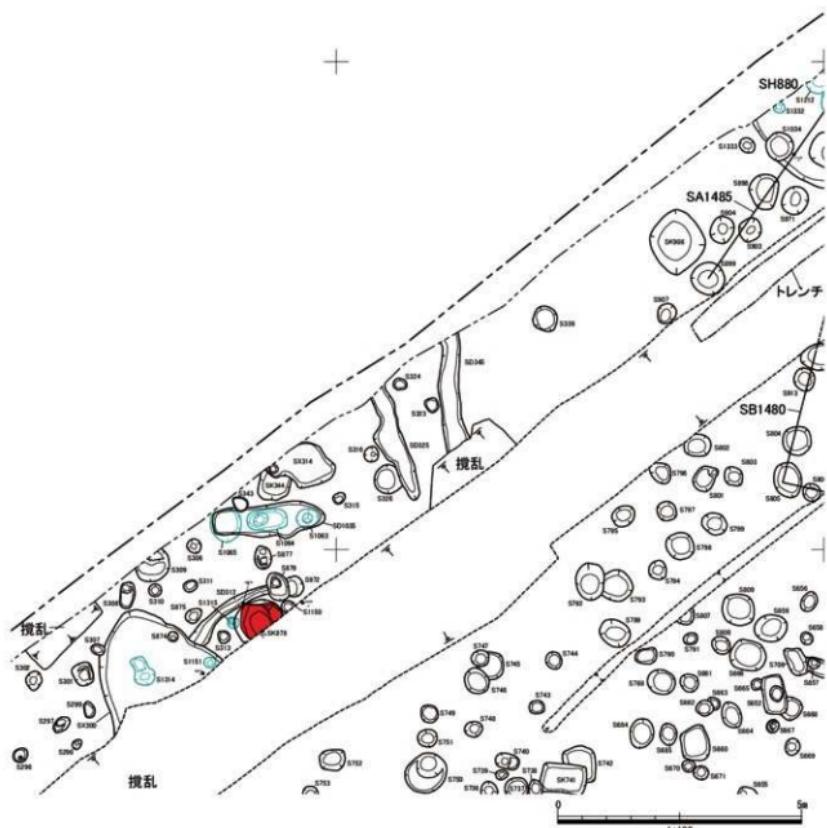


図18 造構配置詳細図⑥(1/100)

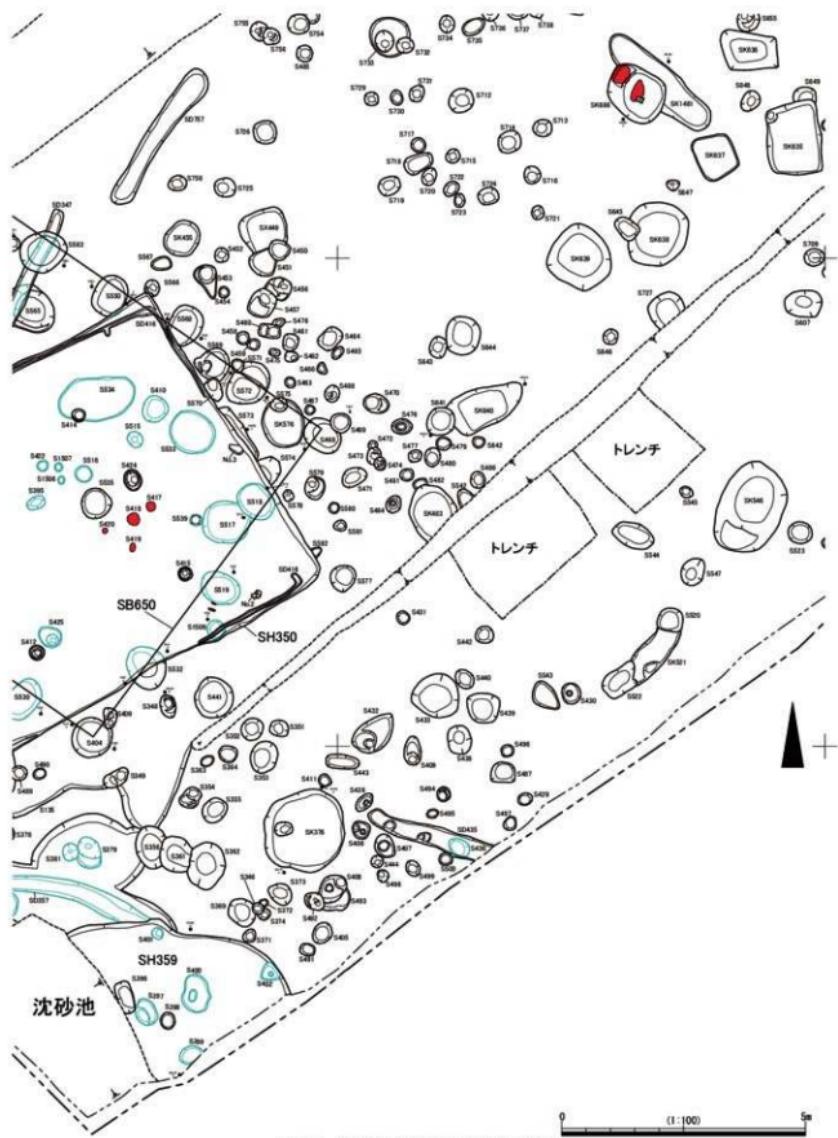


図 19 遺構配置詳細図⑦(1/100)

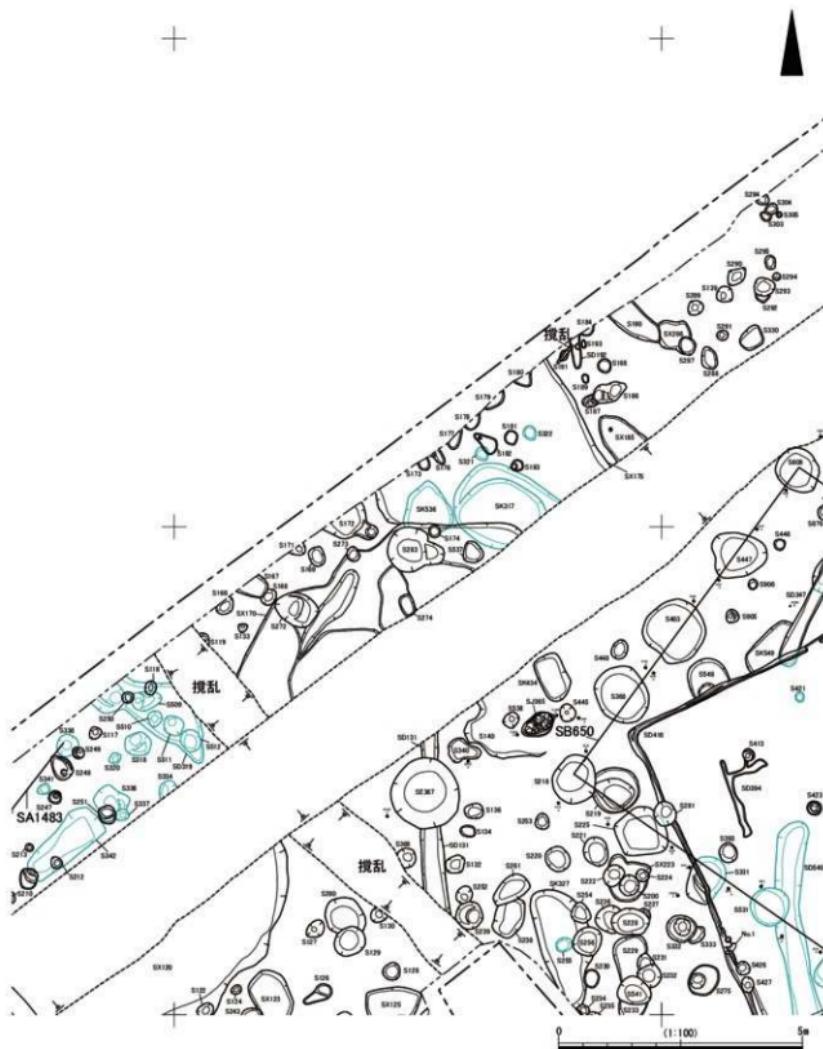


図20 遺構配置詳細図⑧(1/100)

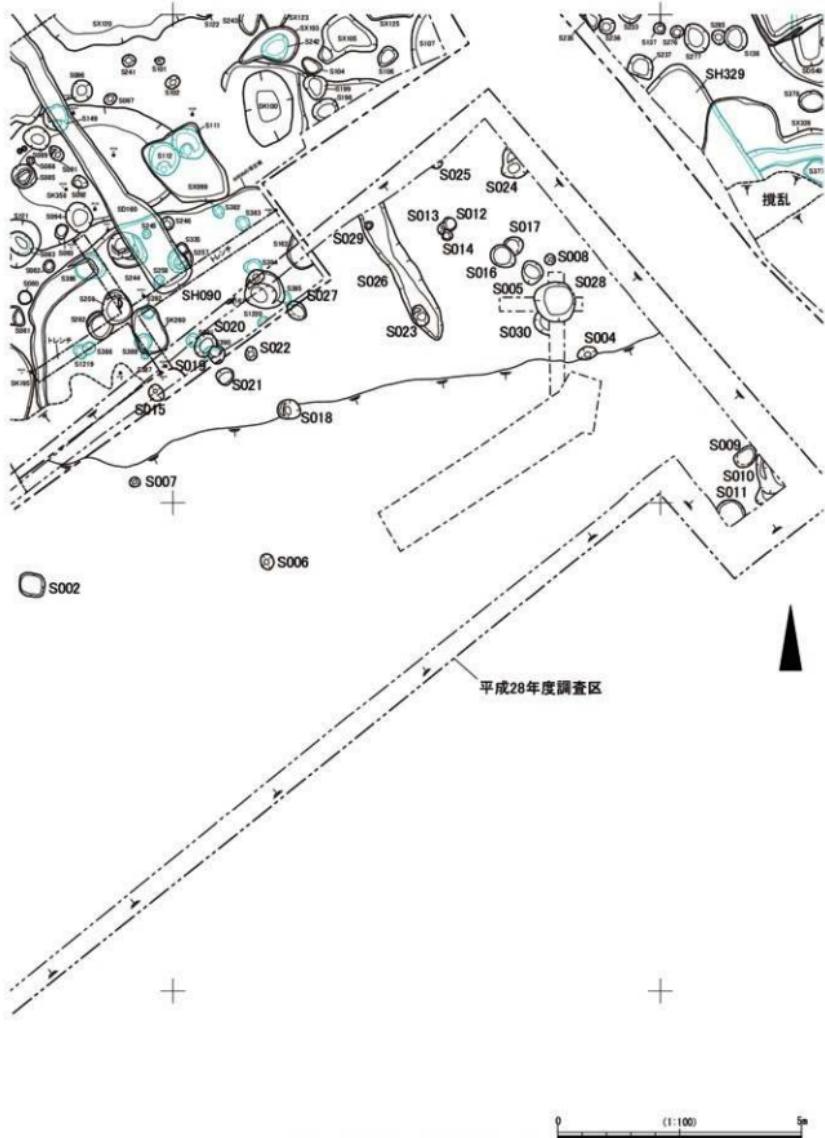


図21 遺構配置詳細図⑨(1/100)

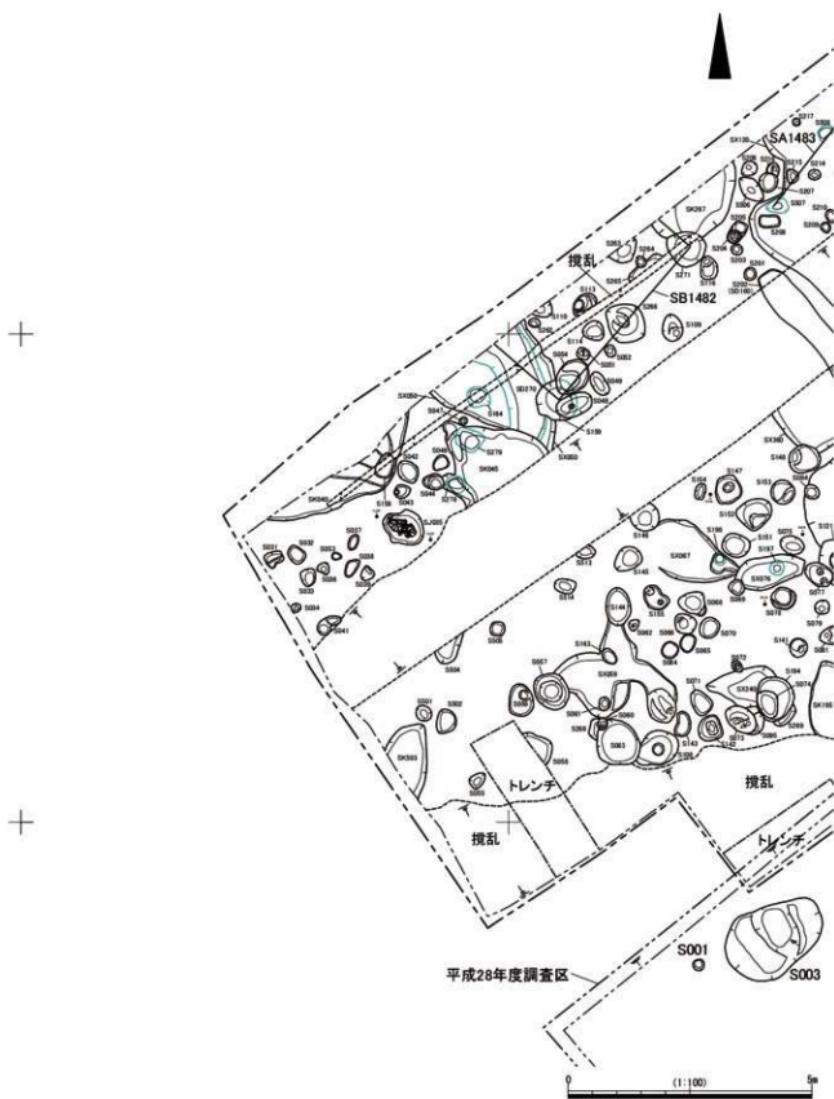


図 22 遺構配置詳細図⑩(1/100)



図 23 遺構配置詳細図①(1/100)

(3) 調査区の基本土層

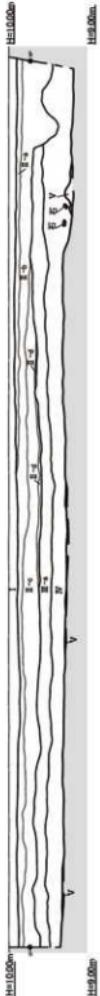
基本層序は、概ね3～4層ありC-4・5グリッドの調査区南壁とI-9グリッドの北壁の土層を例として図示した（図24）。C-4・5グリッドの南壁土層では地表面から約70cmで灰黄褐色粘質土の地山に到達する。I層が表土の現耕作土であり、厚さ約10cm。II層が3層に細分されているが基本的にはやや小礫を含む灰色～灰黄褐色粘質土の床土で、厚さ約30cm。III層が鉄分が多く含む灰黄褐色粘質土の旧水田層で、厚さ約20cm。IV層が鉄分を含む灰黄褐色粘質土の遺物包含層で下層から遺構が検出される。遺物は弥生時代～古墳時代の土器を中心として、石器や陶磁器等も出土する。

I-9グリッドの北壁では、調査前が道路部分であったためI層がアスファルト及び路盤材で厚さ約30cm。II層が道路の基盤層で造成土、厚さ約60cm。III-b層が灰色粘質土の旧表土で厚さ約3cm。III-c層が黄褐色粘質土の旧床土で厚さ約15cm。IV層が鉄分を含む暗褐色粘質土の遺物包含層で下層から遺構が検出される。遺物は弥生時代～古墳時代の土器を中心として、石器や陶磁器等も出土する。

調査区の長辺にあたる西側の幅約5mは道路及び水田との境の擁壁により削平が著しいものの、遺構検出面は標高約9.4～9.5mであり、旧地形は比較的平坦であったことが分かる。

2. 繩文時代の遺物

遺構検出時や他の時代の遺構から数点の縄文時代の遺物が出土している。図25の1は縄文中期後半～後期にかけての阿高式系土器片と思われる。胎土に滑石を多く含み、回線文が施されている。2も中期後半の阿高式系土器片と思われ、滑石が多量に含まれる。3は注口土器で後期後葉の三万田式と思われる。胴部に凸帯が一条巡り、注ぎ口は短くシンプルな形である。4は刻目凸帯文を持つ口縁部片で、晩期末頃の物と思われる。5は弥生時代の土坑（SK873）から出土した安山岩製の石匙である。形態は横型で左右対称となり、石器中央部は表裏で原縫面と主要剥離面を残しているが縁辺からの調整が丁寧に施されている。つまみ部と端部が欠損している。6は弥生時代の溝状遺構（SD1311）から出土した黒曜石製の楔形石器である。表裏に原縫面と主要剥離面を残している。左右と下部に調整が施されており、上端部には使用痕と思われる微細な剥離痕が見受けられる。楔形石器は弥生時代にも出土することがあるが、どちらの時代に属する石器かは不明である。



I層(表土)……制作土。
II-a層(表土)……灰色粘質土(Hue5Y5/1) しまりなし。粘性やあり、部分的に隙が混入する。

II-b層(表土)……灰色粘質土(Hue5Y5/1) しまりなし。粘性やあり、部分的に黄褐色の斑が含まれる。

II-c層(表土)……灰褐色粘質土(Hue10YR5/6) しまりなし。粘性あり、II-層と似る。

III-層(旧水田)……灰褐色粘土(Hue10YR5/6) しまりなし。粘性あり、該分の割を多く含む。

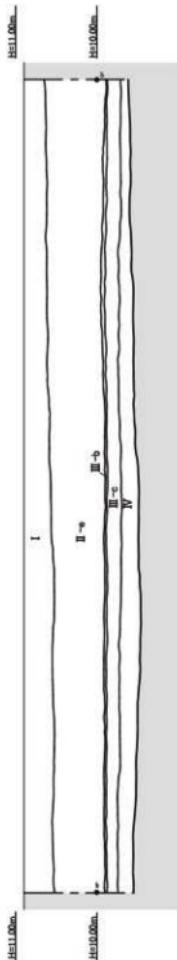
※ II層はアーチガム層になるが昭和二〇年の測量時に作成した旧水田跡か。

IV層(遺物包含層)……灰褐色粘土(Hue10YR5/2) しまりなし。粘性あり、小粒の該分が含まれる。

※ 遺物取上げは下層約10cmの未溝で検出面として取上げを行っている。遺構検出面。

V層(地山)

C-4・5グリッド調査区南壁土層断面図



I層……アスファルト及び路盤材。

II-層(表土)……現代の造成土(道路基層層)。しまりなし。

III-層(旧表土)……灰褐色粘土(Hue5Y5/1) しまりなし。粘性あり。

IV層(遺物包含層)……灰褐色粘土(Hue5Y5/3) しまりあり。粘性あり、2~7cmの隙が部分的に含む。

※ 遺物取上げは下層約10cmの未溝で検出面として取上げを行っている。

※ 下層10cmから遺構が確認できる。

I-9グリッド調査区北壁土層断面図

図24 調査区壁土層断面図 (1/60)

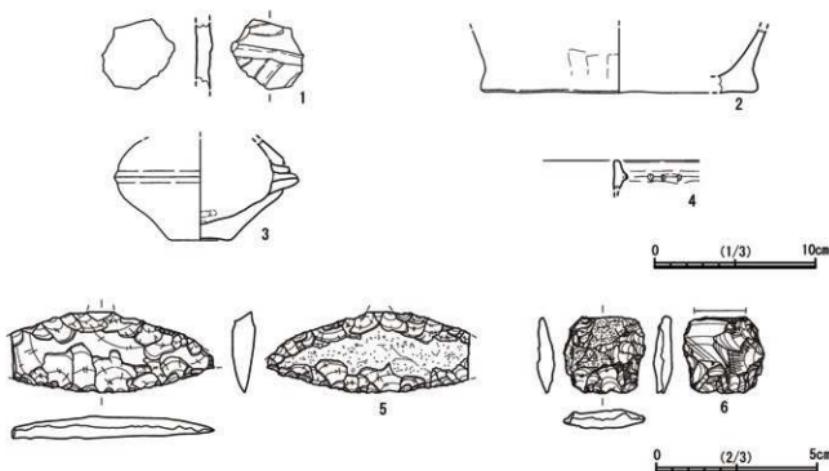


図 25 縄文時代の出土遺物

3. 弥生時代の遺構

(1) 掘立柱建物

・SB650 (図 26)

調査区の西側、D-4 グリッドで検出した掘立柱建物である。

規模は長軸 9 m の 5 間 × 短軸 8.7 m の 4 間で、ほぼ正方形のプランである。柱の間隔は長軸が 1.4 ~ 1.8 m、短軸が 1.7 ~ 2 m である。主軸が N55° W で検出面の標高が 9.4 ~ 9.5 m である。

柱穴は平面プランが円形または楕円形を呈し、径が 0.8 ~ 1.2 m、深さ 0.4 ~ 0.8 m あり、埋土は概ね 3 層に分けられ、水平へややレンズ状の堆積であるが、柱根は見られなかった。埋土からは弥生土器や石器が出土している。

・SB1480 (図 27)

調査区の中央、F-5・6 グリッドで検出した掘立柱建物である。

規模は長軸 6 m の 4 間 × 短軸 5 m の 3 間で、長方形のプランである。柱の間隔は長軸が 1.2 ~ 1.5 m、短軸が 0.5 ~ 0.9 m である。主軸が N14° E で検出面の標高が約 9.6 m である。柱穴は平面プランが円形または楕円形を呈し、径が 0.3 ~ 0.8 m、深さ 0.3 ~ 0.6 m ある。

埋土は単層で弥生土器や石器が出土している。北西隅の柱穴が搅乱により削平されており不明である。遺構の切り合いとしては SD930 を切る。なお、南側の 3 間とは S805、S818、S1460、S816 によって構成されたものと認定した。

III. 竹ノ下遺跡

・SB1482（図28）

調査区の南西隅、C・D-2 グリッドで検出した掘立柱建物である。

規模はそのほとんどが調査区外へと伸びているため不明である。現状で分かるのが短軸と思われる一边のみである。長さは約 4.8 m の 2 間で、柱間は約 2 m である。検出面は標高 9.5 ~ 9.6 m である。

主軸が N40° E で、柱穴の平面プランが円形または楕円形を呈し、径が 0.7 m、深さが 0.4 ~ 0.6 m である。埋土は単層で弥生土器や石器が出土している。S266 の柱穴では柱根の痕跡と考えられる段が中央に見られる。

・SB1484（図28）

調査区の中央、E-6 グリッドで検出した掘立柱建物である。

規模は長軸 5 m の 2 間 × 短軸 4.3 m の 2 間で、ほぼ正方形に近いプランである。柱の間隔は長軸で 1.8 ~ 2.5、短軸で 1.7 ~ 2.2 m とやや不揃いである。検出面は標高 9.4 ~ 9.5 m である。

主軸が N46° E で、柱穴の平面プランは円形または楕円形を呈し、径が 0.3 ~ 0.8 m、深さが 0.2 ~ 0.4 m である。埋土は単層で弥生土器や石器が出土している。

・SB1486（図29）

調査区の北東側、G-7 グリッドで検出した掘立柱建物である。

規模はそのほとんどが調査区外に延びており、不明である。現状で一边が分かるのみであるが、短軸と思われる。長さは 4.8 m で 2 間、間隔が約 2 m で軸が N63° E である。

柱穴は円形または楕円形を呈し、径 0.2 ~ 1 m とばらつきがある。深さは 0.2 ~ 0.4 m である。埋土は単層で S1294 では柱根と考えられる段が中央に見られる。

埋土からは弥生土器や石器が出土している。

・SB1487（図29）

調査区の北東側、G-8 グリッドで検出した掘立柱建物である

規模は長軸 5.5 m の 3 間 × 短軸 3.2 m の 2 間で、長方形のプランである。柱の間隔は長軸で 1.6 ~ 1.8 m、短軸で 1.3 ~ 1.4 あり、軸は N91° E である。検出面は標高 9.6 ~ 9.7 m である。

柱穴は円形または楕円形を呈し、径 0.4 ~ 0.7 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m である。埋土は単層で弥生土器や石器が出土している。

柱根と考えられる段が S1423 の柱穴で見られる。北西隅の柱穴が搅乱により消滅している。

（2）竪穴建物

・SH090（図30）

調査区の南西側 C-2・3 グリッドで検出した竪穴建物である。

全体の 1/3 のみ残存しており、その他は搅乱で消滅している。現状で長軸 6.2 m、短軸 3.3 m、深さ約 0.2 m である。プランは上述のように大部分が搅乱で消滅しているため不明である。建物内部には一部壁溝が巡り、柱穴が 2 基検出されている。位置的に考えれば本来は 4 本柱の建物であった可能性がある。また、やや北西側に寄っているものの中央土坑（SK260）が確認されている。

中央土坑は、長軸 1 m × 短軸 0.65 m の楕円形を呈し、深さは 0.1 m と浅いが、土器が集中して出土

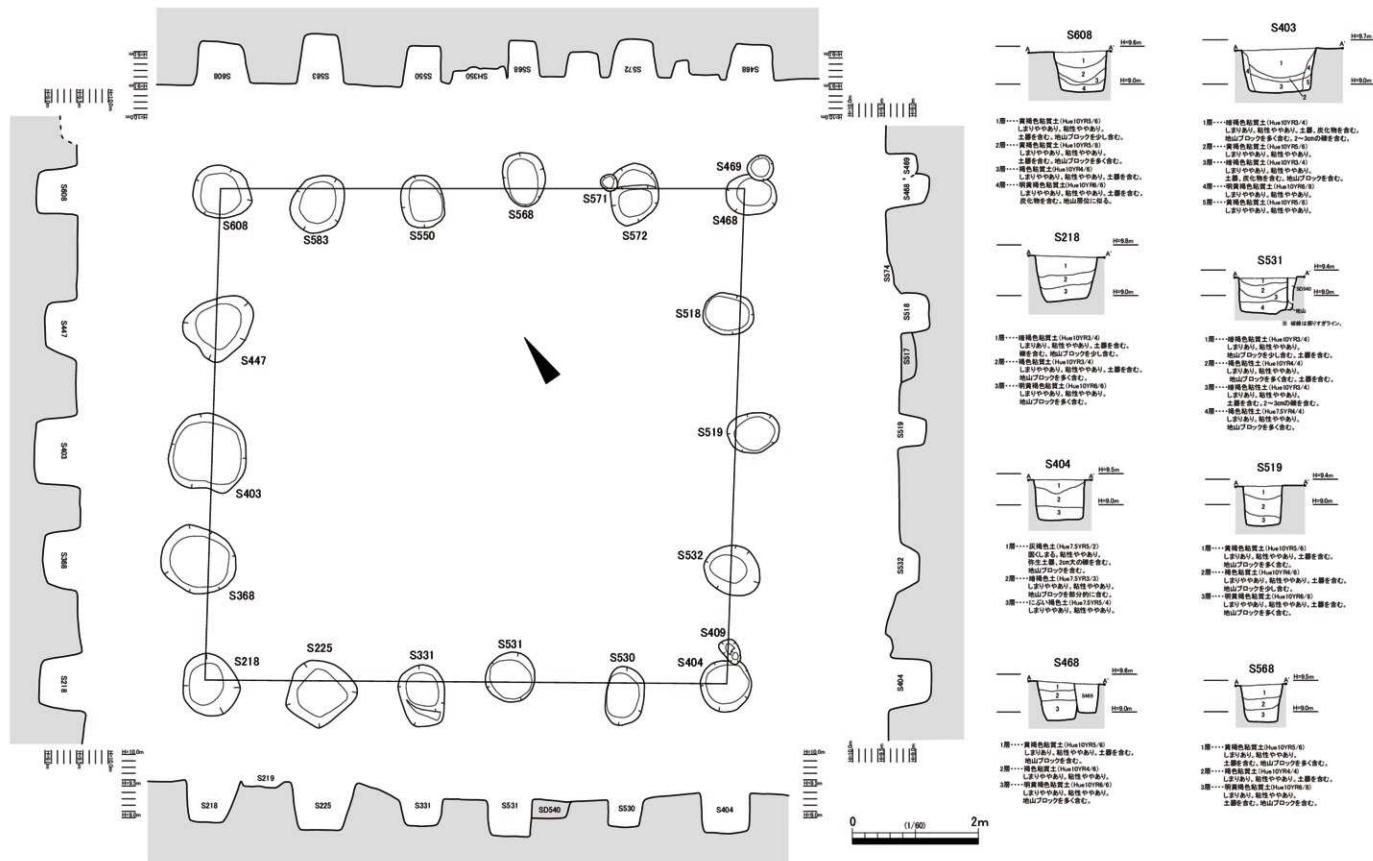


図 26 SB650 挖立柱建物 (1/60)

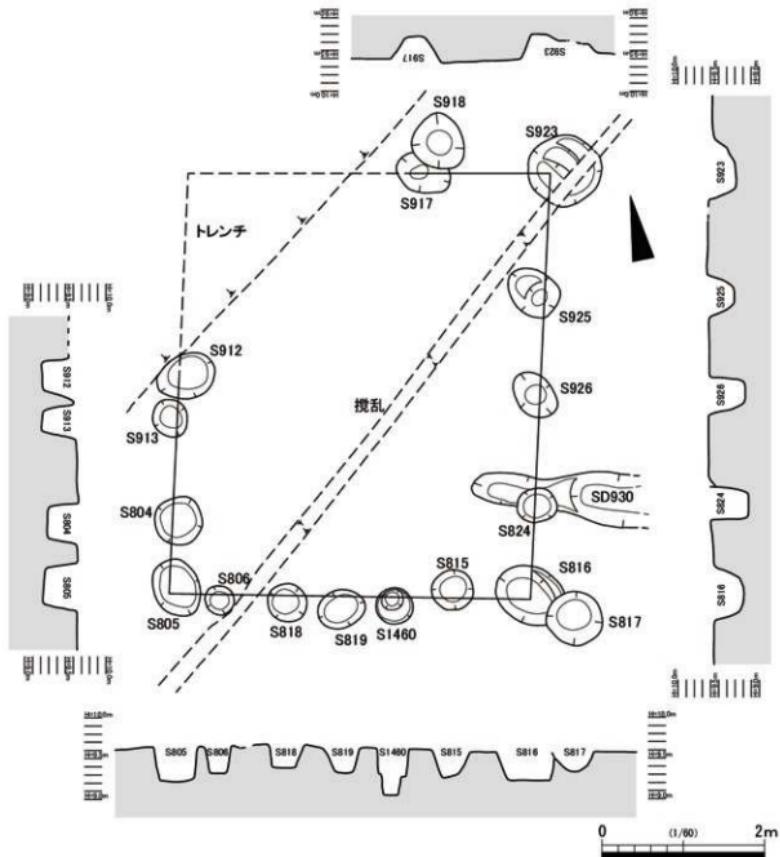


図 27 SB1480 挖立柱建物 (1/60)

している。また、本遺構からは検出面から0.1m掘り下げたところで貼床を検出している。貼床は他の堅穴建物からは見つかっていない。出土遺物は土器の他鍛錬車や砥石といった石製品と剥片等の石器があり、黒曜石の原石も出としている。

・SH375（図31）

調査区の中央東側、E-7 グリッドで検出した堅穴建物である。

規模は長軸5.2m×短軸3.5mで、長方形のプランを呈する。検出面からの掘り込みは0.2mで、炭化材と焼土が多数検出されている。炭化材についてはサンプリングを行い、年代測定を行っているので

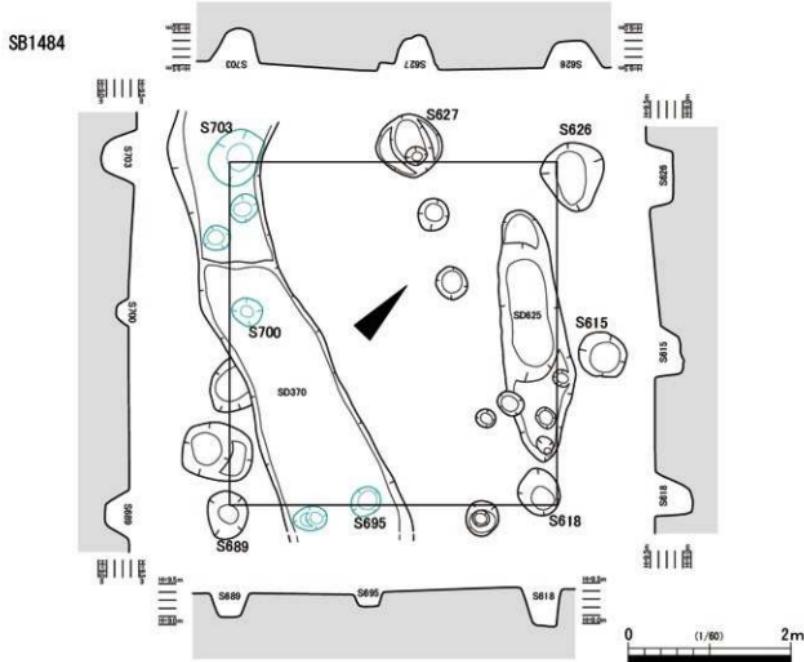
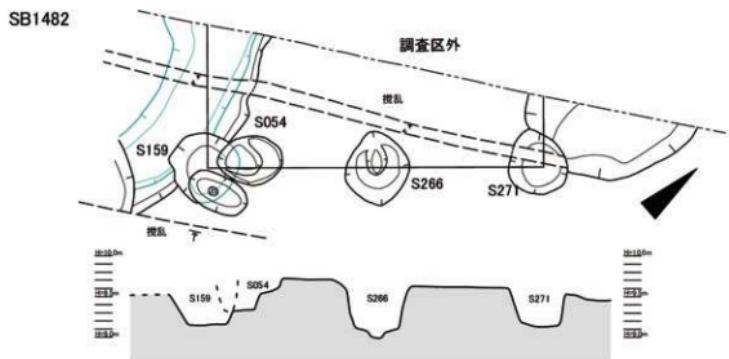
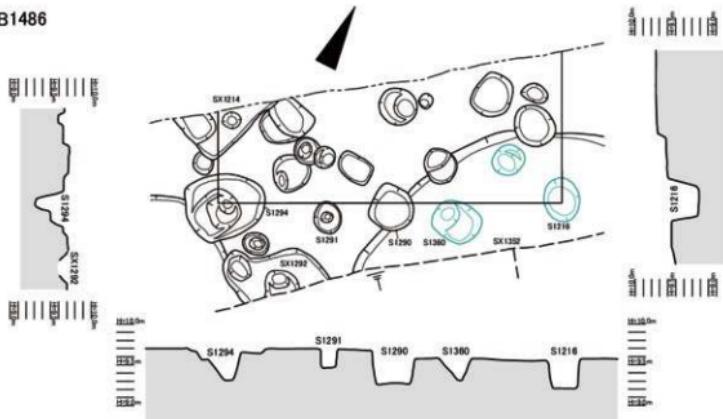


図 28 SB1482・1484 掘立柱建物 (1/60)

SB1486



SB1487

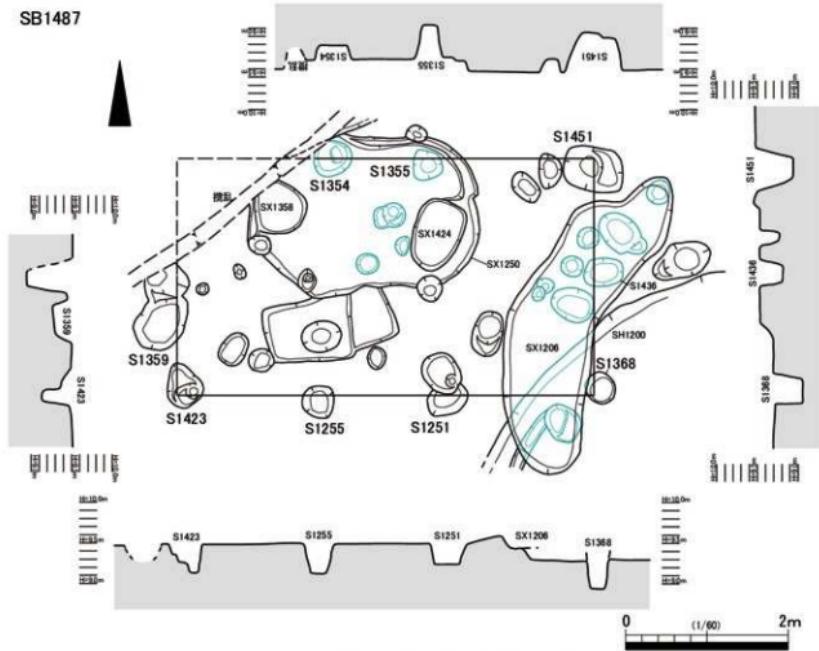
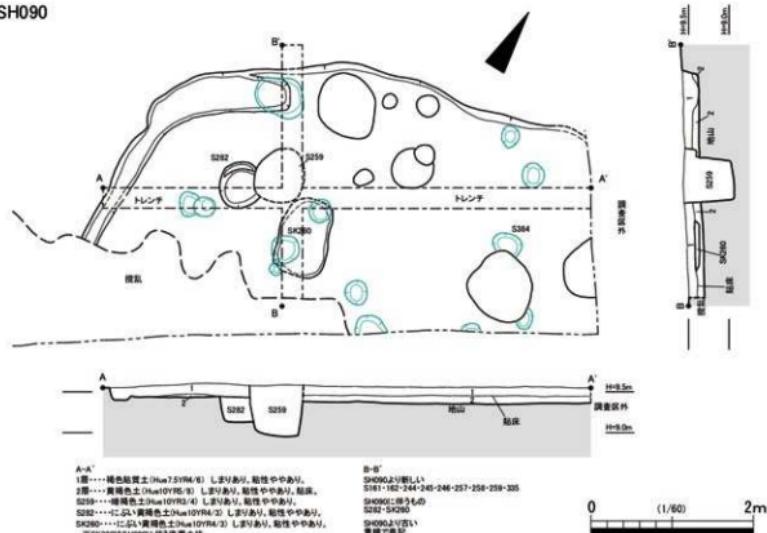


図 29 SB1486・1487 挖立柱建物 (1/60)

三、竹ノ下遺跡

SH090



SK260

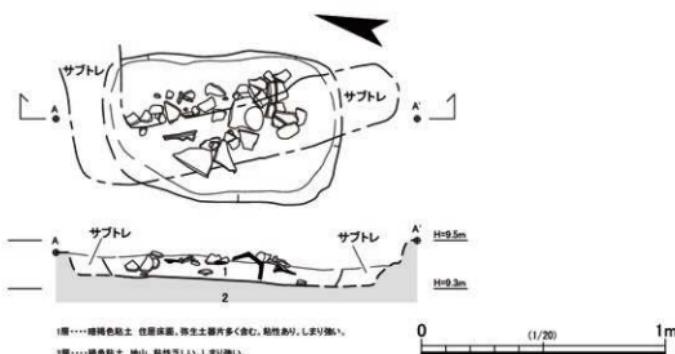


図 30 SH090 竪穴建物（1/60）・SK260 中央土坑（1/20）

結果は後述する。その他土器や石器が出土している。

・SH380(図32)

調査区中央、E-6・7 グリッドで検出した堅穴建物である。

一部調査区外に出ているがプランは円形を呈し、直径が最大で7.8mある。深さは約0.25mで、上層にはSH375が載る。検出面は標高9.5mで、壁から約0.5m内側を同心円状に溝が部分的に回る。中央

SH375

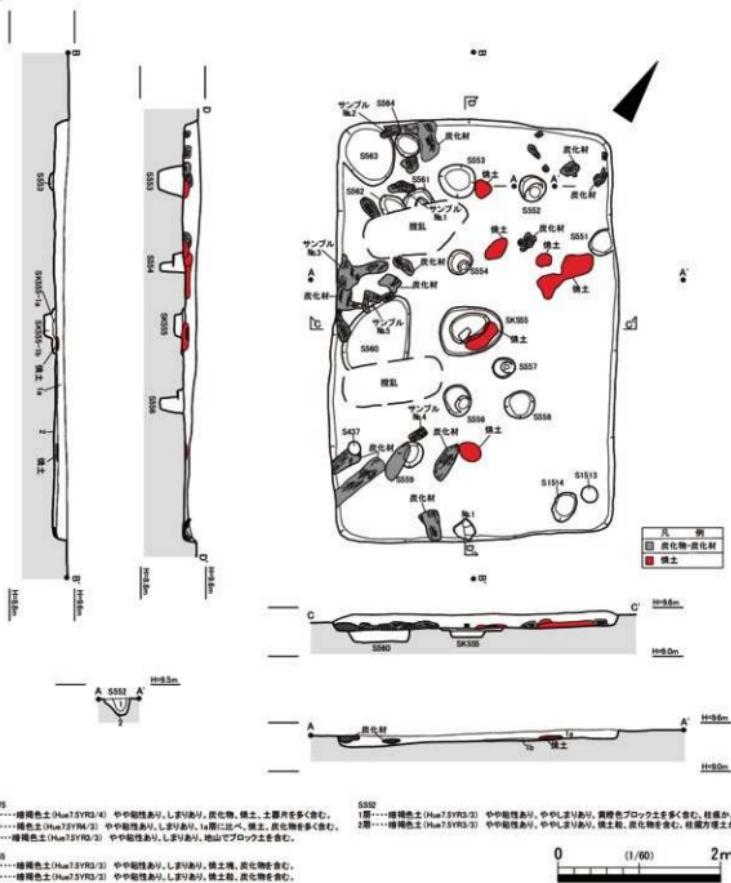


図 31 SH375 積穴建物 (1/60)

には土坑が掘られ (SK781)、その土坑と溝の間に柱穴が回る。土層図からも分かるが、円形の積穴建物の上に長方形の積穴建物があることから、居住形態の変遷を知るうえで重要な遺構と言える。出土遺物は弥生土器や石器、石製品が多く出土している。

・ SH880 (図 33)

調査区の中央北側、F・G-5・6 グリッドで検出した積穴建物である。

北側が調査区外、南側が擾乱で消滅している。そのため規模は不明であるが、残りの部分から円形ブ

III. 竹ノ下遺跡

SH380

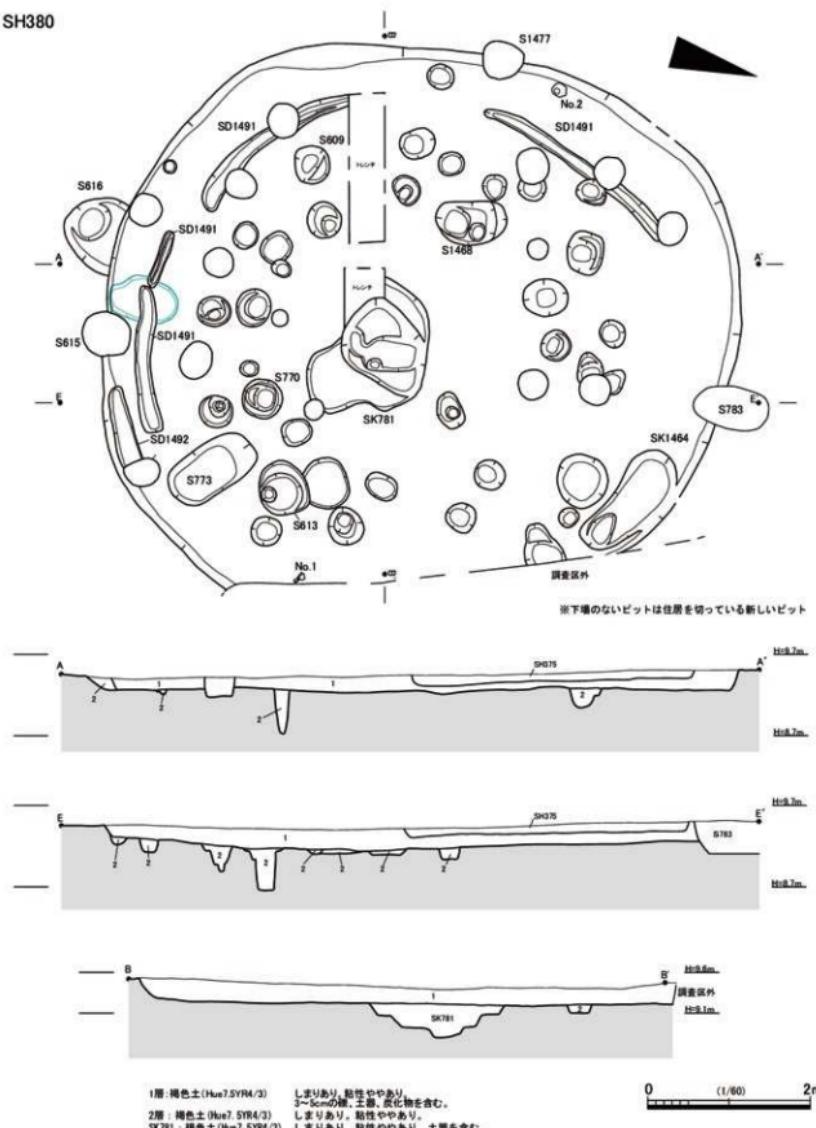


図32 SH380 堪穴建物(1/60)

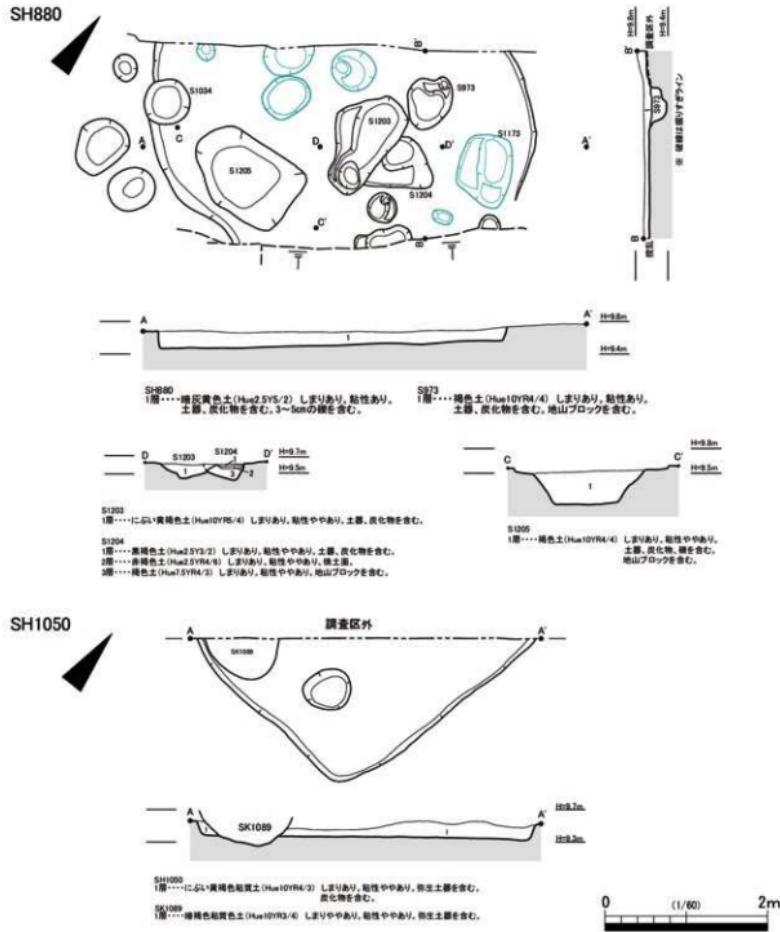


図33 SH880・1050 竪穴建物(1/60)

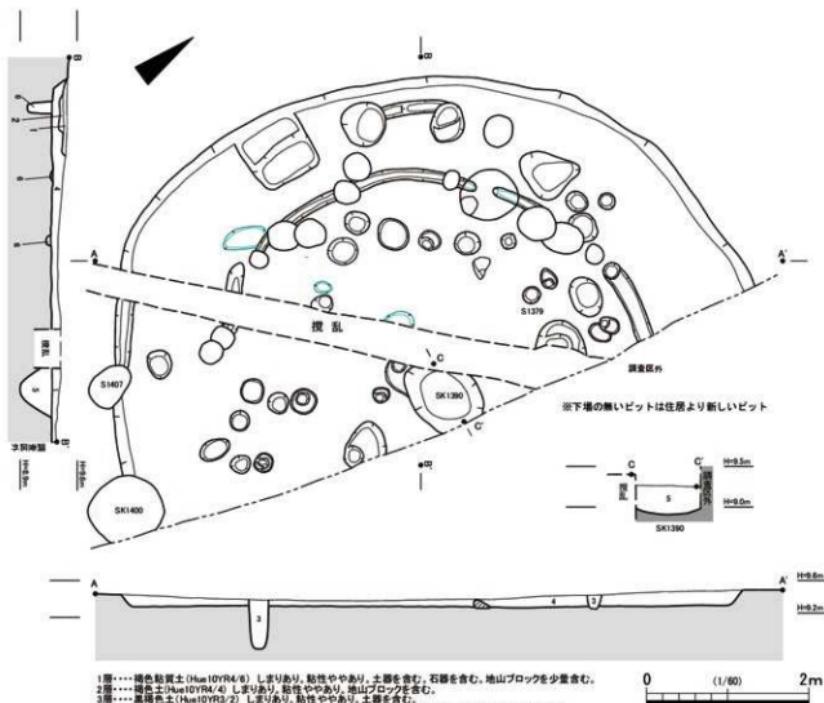
ランと考えられる。直径は約4.3mで、検出面が標高約9.7m、深さは約0.2mである。壁溝は見られず、内部に複数の柱穴や土坑が確認されている。埋土には炭化物が含まれ、S1204からは焼土が検出されている。弥生土器の他、石器、鉄製品が出土している。

• SH1050 (図 33)

調査区の北東隅、I-9 グリッドで検出した竪穴建物である。

III. 竹ノ下遺跡

SH1200



1層…褐色粘土 (Hue10YR4/6) しまりあり、粘性ややあり、土器を含む。地山ブロックを少量含む。
2層…褐色土 (Hue10YR4/4) しまりあり、粘性ややあり、地山ブロックを含む。
3層…黒褐色土 (Hue7SYR3/2) しまりあり、粘性ややあり、土器を含む。
4層…褐色土 (Hue7SYR4/4) しまりあり、粘性ややあり、土器、炭化物を含む。一部で地山ブロックを含む。
5層…褐色土 (Hue10YR4/6) しまりあり。粘性ややあり、土器、炭化物を含む。一部で粘土を含む。
6層…褐色粘質土 (Hue7SYR4/4) しまりあり。粘性ややあり。

図34 SH1200 積穴建物 (1/60)

半分以上が調査区外にあるが、恐らく方形のプランと思われる。SK1089に切られる。

・ SH1200 (図34)

調査区の北東側、G-8・9グリッドで検出した積穴建物である。

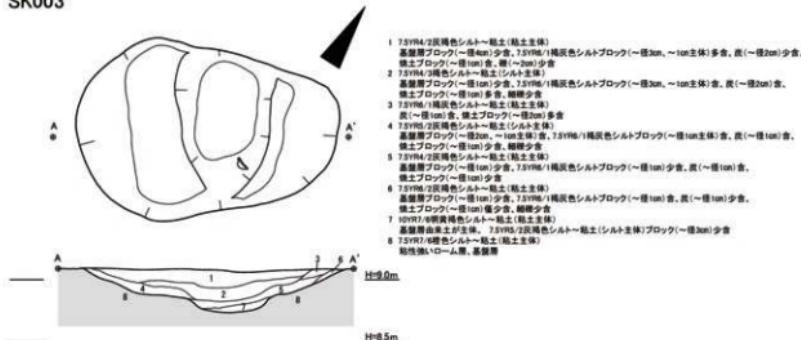
約半分が調査区外であるが、円形プランで規模は径7.8m、深さ約0.2mである。中央にSK1390の土坑があり、埋土中に焼土が検出されている。西側には出入口と思われるステップ状のプランが確認され、また壁から約1m内側に溝が巡る。出土遺物は弥生土器や石器である。

(3) 土坑

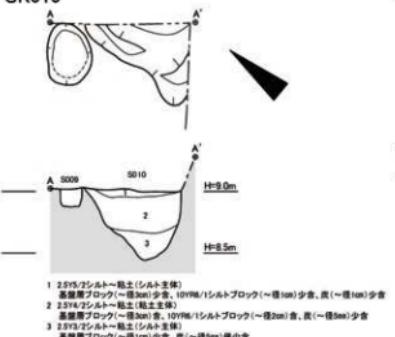
・ SK003 (図35)

調査区の南西隅、B-2グリッドで検出した土坑である。

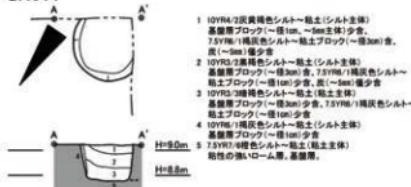
SK003



SK010



SK011



SK028

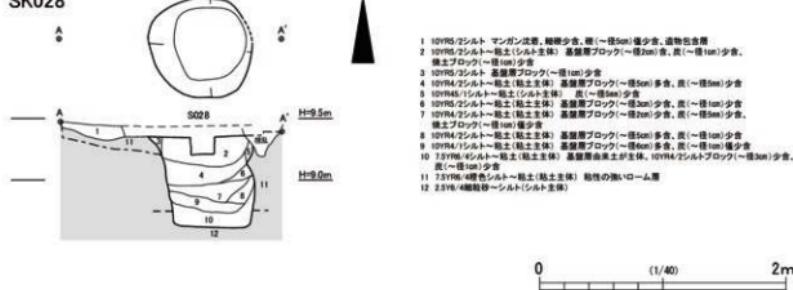


図 35 SK003・010・011・028 土坑 (1/40)

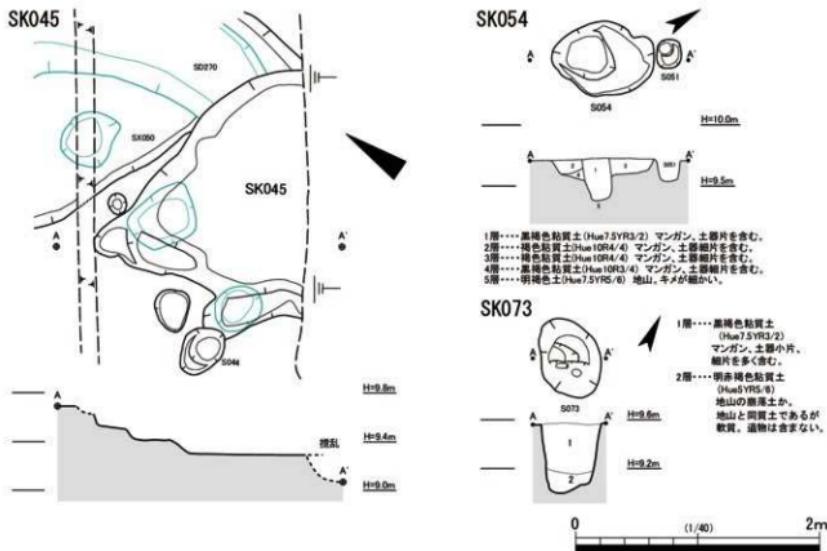


図 36 SK045・054・073 土坑 (1/40)

楕円形を呈し、一段のテラスが付く。規模は長軸 2.1 m × 短軸 1.5 m、深さ約 0.35 m である。出土遺物は弥生土器や石器の他、炭や焼土が多く検出された。

• SK010 (図 35)

調査区の南西側、B・C-4 グリッドで検出した土坑である。

全体の約 3/4 が調査区外であるが、不定形なプランを呈した土坑と思われる。規模は現状で長軸 0.85 m × 短軸 0.7 m、深さ約 0.6 m である。出土遺物は弥生土器や石器の他、少量の炭が検出されている。

• SK011 (図 35)

調査区の南西側、B・C-4 グリッドで検出した土坑である。

全体の約 1/2 が調査区外であるが円形のプランを呈し、規模は現状で径 0.6 m、深さ 0.3 m である。出土している弥生土器は後述するが、夜臼式で調査された遺構の中では古い段階のものである。

• SK028 (図 35)

調査区の南西側、C-3 グリッドで検出した土坑である。

プランは円形で、規模は径 0.85 m、深さ 0.7 m である。出土遺物は弥生土器や石器の他、炭を少量検出している。

• SK045 (図 36)

調査区の南西隅、C-1・2 グリッドで検出した土坑である。

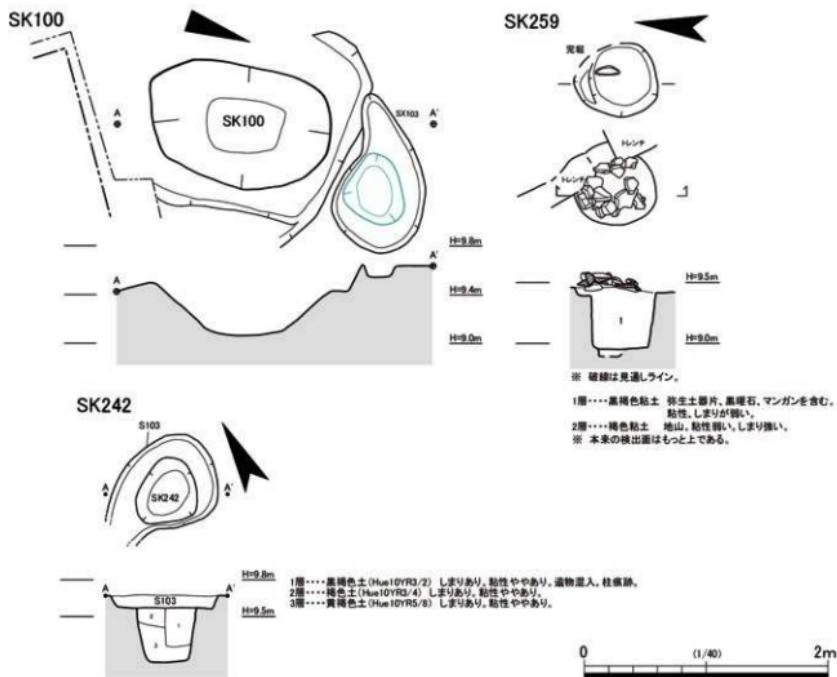


図37 SK100・242・259 土坑 (1/40)

全体の半分が擾乱で消滅しているが、不定形なプランと思われる。規模は現状で長軸 1.75 m × 短軸 2 m、深さ 0.3 m である。遺物は弥生土器や石器が多く出土している。

・ SK054 (図 36)

調査区の南西側、C-2 グリッドで検出された土坑である。

楕円形を呈し、規模は長軸 0.84 m × 短軸 0.6 m、深さ 0.35 m である。一段のテラスを設け、柱根がみられる。遺物は弥生土器や石器が出土している。

・ SK073 (図 36)

調査区の南西側、C-2 グリッドで検出された土坑である。

楕円形を呈し、規模は長軸 0.7 m × 短軸 0.5 m、深さ 0.56 m である。底面近くで一段のテラスを設けている。遺物は弥生土器や石器が出土している。

・ SK100 (図 37)

調査区の南西側、C-3 グリッドで検出された土坑である。

楕円形で播鉢状を呈し、規模は長軸 1.55 m × 短軸 1 m、深さ 0.4 m である。遺物は弥生土器や石器

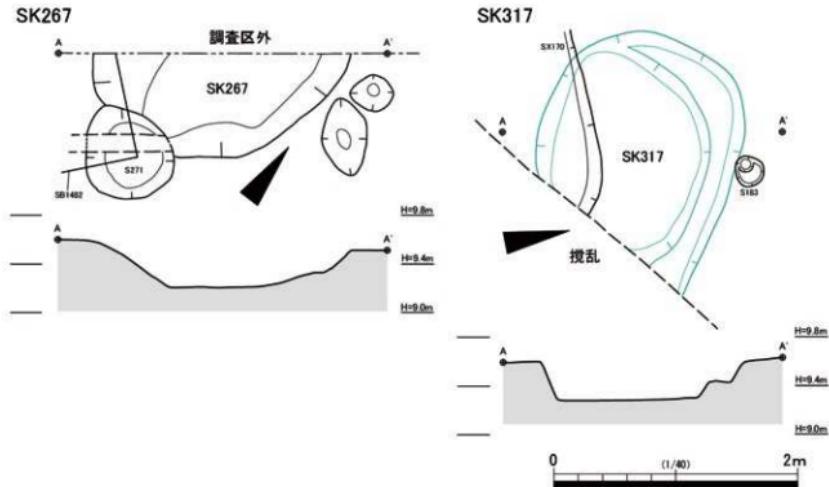


図38 SK267・317土坑 (1/40)

が出土している。

・SK242（図37）

調査区の南西側、C-3 グリッドで検出した土坑である。

不定形なプランを呈し、東寄りに柱根がみられる。規模は長軸 0.9 m × 短軸 0.75 m、深さ 0.45 m である。口唇部に刻み目がある城ノ越式～須久Ⅰ式の土器片が出土している。

・SK259（図37）

調査区の南西側、C-2 グリッドで検出した土坑である。

楕円形を呈し、規模は長軸 0.7 m × 短軸 0.6 m、深さ 0.55 m である。検出面で集石がみられ、埋土は黒褐色の単層である。遺物は中期末の土器片が出土している。

・SK267（図38）

調査区の南西側、D-2 グリッドで検出した土坑である。

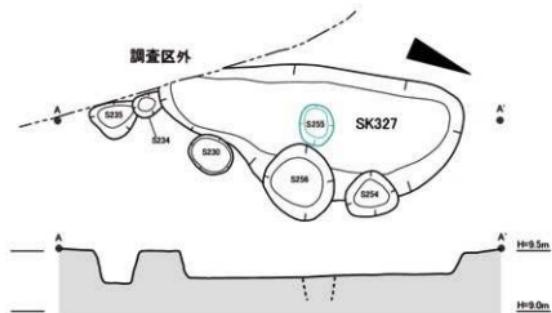
全体の半分が調査区外であるが、楕円形を呈し、規模は長軸 2.1 m × 短軸 0.9 m、深さ 0.35 m である。SB1482 を構成する柱穴の一つである S271 に切られる。中期後半の土器がまとめて出土している。

・SK317（図38）

調査区の南西側、D・E-3 グリッドで検出した土坑である。

全体の 1/3 が搅乱で消滅している。規模は現状で長軸 1.7 m × 短軸 1.65 m、深さ 0.3 m である。SX170 の下部から検出された土坑で、中期前半の土器片が出土している。

SK327



SK358

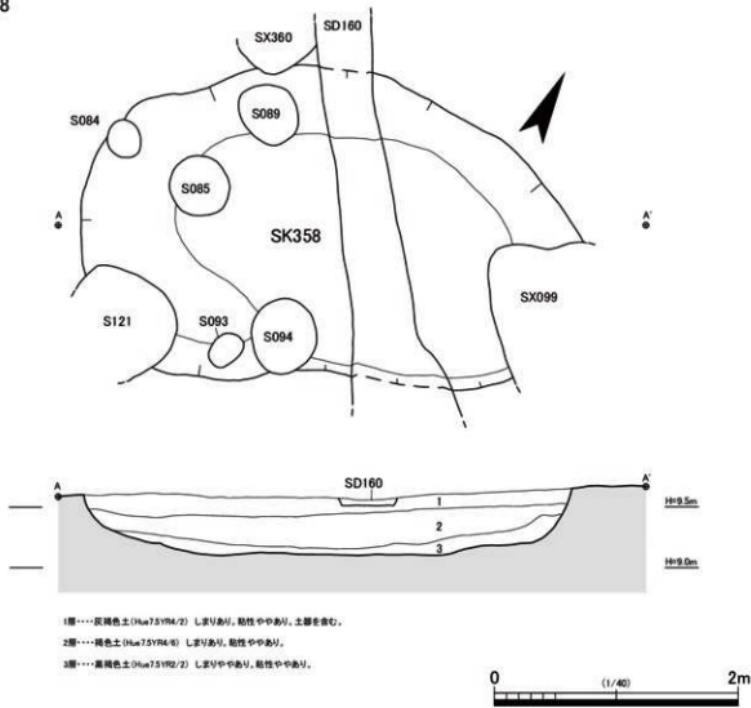


図 39 SK327・358 土坑 (1/40)

III. 竹ノ下遺跡

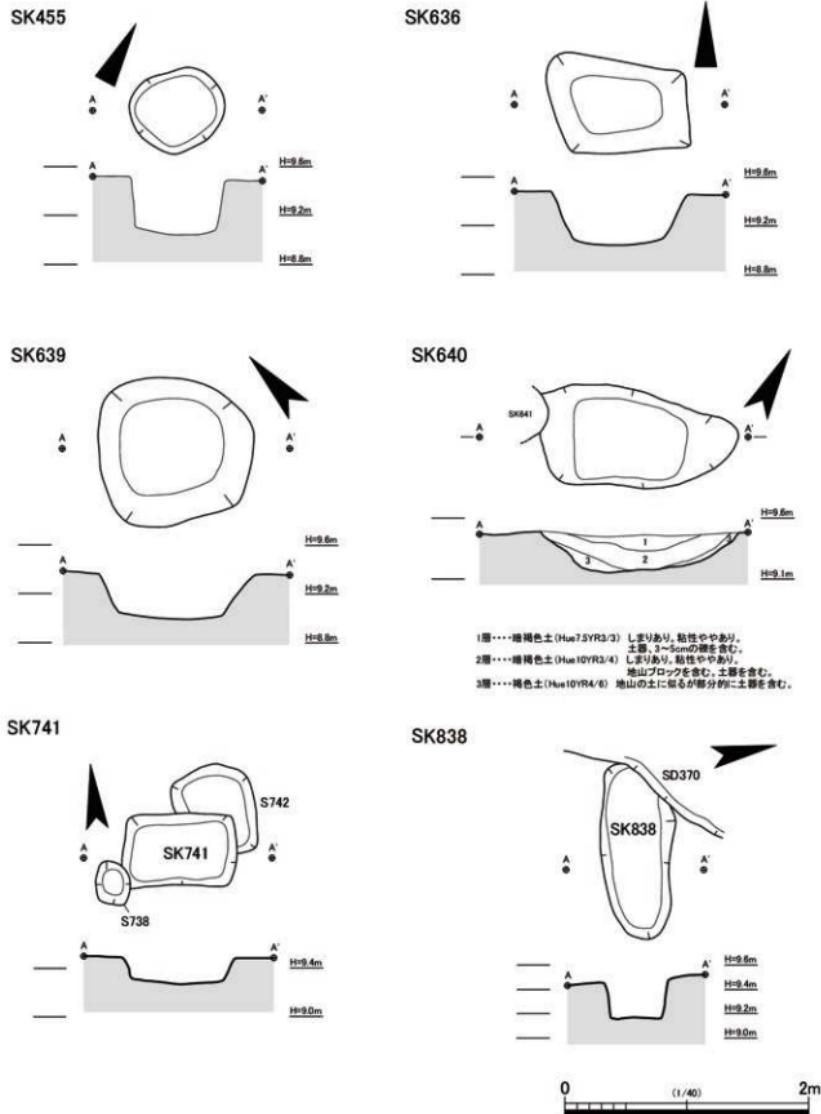


図 40 SK455・636・639・640・741・838 土坑 (1/40)

・SK327（図39）

調査区の南西側、D-3 グリッドで検出した土坑である。

楕円形を呈し、規模は長軸 2.5 m × 短軸 1.1 m、深さ 0.2 m である。三つのピットに切られる。

・SK358（図39）

調査区の南西側、C-2 グリッドで検出した土坑である。

楕円形を呈し、規模は長軸 4.1 m × 短軸 2.5 m、深さ 0.5 m である。複数の造構に切られているが、中期前半の土器が比較的まとまって出土している。

・SK455（図40）

調査区の中央よりやや西側、E-4 グリッドで検出した土坑である。

円形を呈し、規模は径 0.8 m、深さ 0.45 m である。中期前半の土器が出土している。

・SK636（図40）

調査区のほぼ中央、E-5 グリッドで検出した土坑である。

隅丸長方形を呈し、規模は長軸 1.15 m × 短軸 0.8 m、深さ 0.4 m である。

・SK639（図40）

調査区のほぼ中央、D・E-5 グリッドで検出した土坑である。

円形を呈し、規模は径 1.3 m、深さ 0.35 m である。

・SK640（図40）

調査区中央よりやや南側、D-5 グリッドで検出した土坑である。

楕円形を呈し、規模は長軸 1.6 m × 短軸 0.8 m、深さ 0.3 m である。SK641 に切られる。

・SK741（図40）

調査区のほぼ中央、E-5 グリッドで検出した土坑である。

隅丸長方形を呈し、規模は長軸 0.9 m × 短軸 0.6 m、深さ 0.2 m である。S742 を切り、S738 に切られる。

・SK838（図40）

調査区のほぼ中央、F-6 グリッドで検出した土坑である。

楕円形を呈し、規模は長軸 1.5 m × 短軸 0.6 m、深さ 0.3 m である。底がほぼ平らで、SD370 に切られる。

・SK873（図41）

調査区のほぼ中央、E-6 グリッドで検出した土坑である。

楕円形を呈し、SH380 等に切られる。規模は現状で長軸 2.7 m × 短軸 2.2 m、深さ 0.4 m である。中期初頭～前半の土器が多量に出土すると共に、少量の炭化物と 5 ~ 15 cm 大の礫が多く検出された。

・SK952（図42）

調査区中央よりやや東側、F-7 グリッドで検出した土坑である。

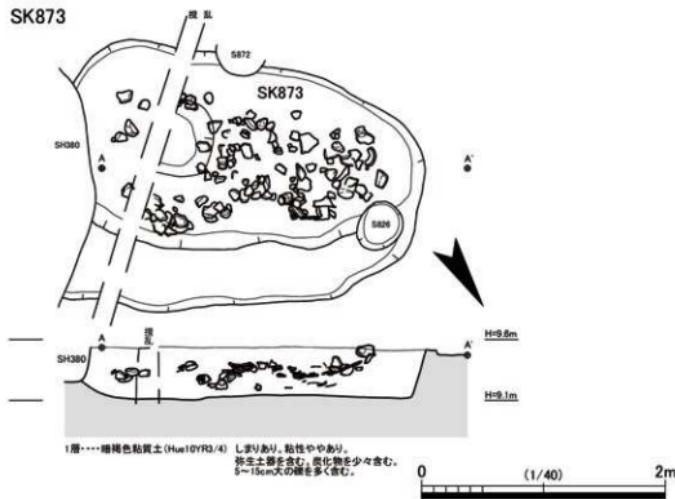


図41 SK873土坑 (1/40)

円形を呈し、規模は径 1.2 m、深さ 0.5 m である。柱痕が見られることから柱穴の可能性が高い。

・ SK1055 (図 42)

調査区の北東隅、I-9 グリッドで検出した土坑である。

隅丸長方形を呈し、規模は長軸 1.8 m × 短軸 0.7 m、深さ 0.3 m である。S1057 に切られる、中期中頃の土器がまとまって出土しており、また、20 cm を超える大型の安山岩製の台石も検出されている。

・ SK1091 (図 42)

調査区の北東側、G-8 グリッドで検出した土坑である。

不定形なプランを呈し、S1092 と S1262 に切られ、S1093 を切る。前期・中期の土器が出土している。

・ SK1184 (図 42)

調査区中央よりやや東側、F-6・7 グリッドで検出した土坑である。

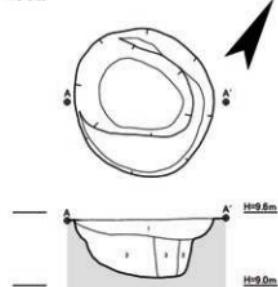
隅丸長方形を呈し、規模は長軸 1.1 m × 短軸 0.8 m、深さ 0.5 m である。西側に一段のテラスが付く。

・ SK1303 (図 43)

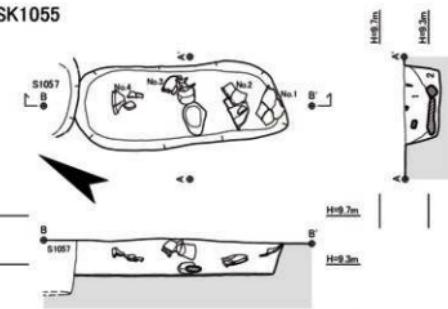
調査区の北東側、H-7 グリッドで検出した土坑である。

全体の約半分が調査区外である。不定形なプランで SD1311 と S1304 に切られる。規模は現状で長軸 2.5 m × 短軸 1.4 m、深さ 0.4 m である。中期初頭～前半の土器が出土している。

SK952



SK1055

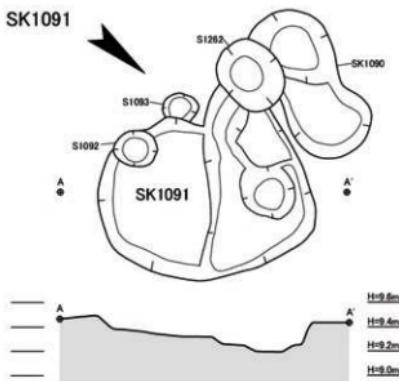


1層……褐色粘質土(Hue10YR4/6)
しまりやあり。粘性ややあり。土器を含む。

2層……同じく褐色粘質土(Hue10YR4/3)
しまりややあり。粘性ややあり。土器を含む。

3層……褐色粘質土(Hue10YR3/4)
しまりややあり。粘性ややあり。柱痕？。

SK1091



SK1184

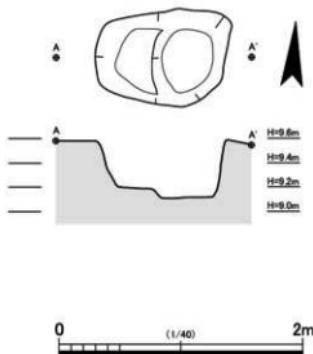


図42 SK952・1055・1091・1184土坑 (1/40)

• SK1316 (図43)

調査区の北東側、G-7 グリッドで検出した土坑である。

楕円形を呈し、S1489 を切る。両脇に一段のテラスが付くが北側は緩い。規模は長軸 1.2 m × 短軸 0.5 m、深さ 0.3 m である。中期後半の土器が出土している。

(4) 溝状遺構

• SD026 (図44)

調査区の南西側 C-3 グリッドで検出された溝状遺構である。

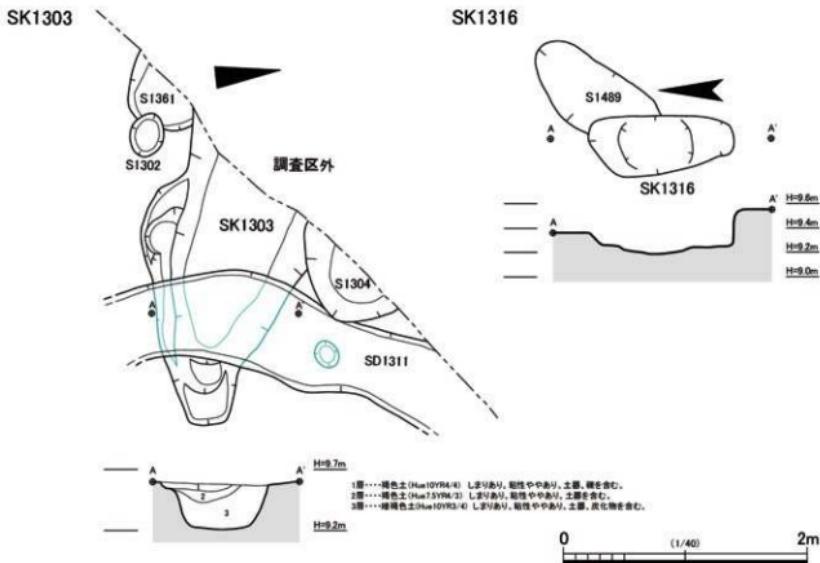


図43 SK1303・1316 土坑 (1/40)

北側は調査区外に伸びているため全長は不明である。規模は現状で長さ 3 m × 幅 0.6 m、深さ 0.15 m である。2箇所でピット状の落ち込みが見られる。

・ SD270 (図 44)

調査区の南西隅、C・D-1・2 グリッドで検出した溝状遺構である。

SK045 等に切られ、調査区外にも伸びているため全長は不明である。規模は幅 1.1 m、深さ 0.2 m である。中期前半～中頃の土器が出土している。

・ SD540 (図 44)

調査区の南西側、C・D-4 グリッドで検出した溝状遺構である。

SH350 等に切られるが全体の分かる遺構である。規模は長さ 5 m × 幅 0.7 m、深さ 0.35 m である。中期前半の土器の他、石劍の破片が出土している。

・ SD625 (図 44)

調査区中央、E-6 グリッドで検出した溝状遺構である。

両側で一段のテラスを設け、東側テラスでは複数のピット状の落ち込みが見られる。規模は長さ 3.1 m × 幅 0.9 m、深さ 0.45 m である。

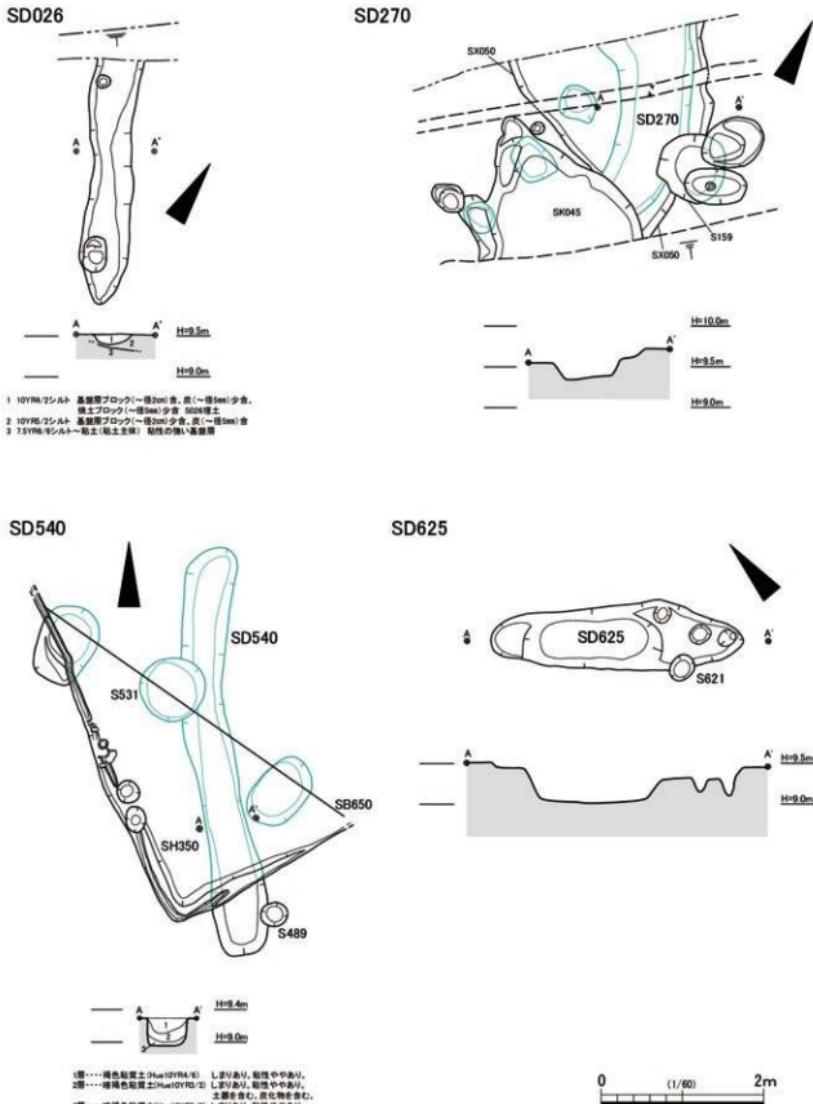


図 44 SD026・270・540・625 溝 (1/60)

III. 竹ノ下遺跡

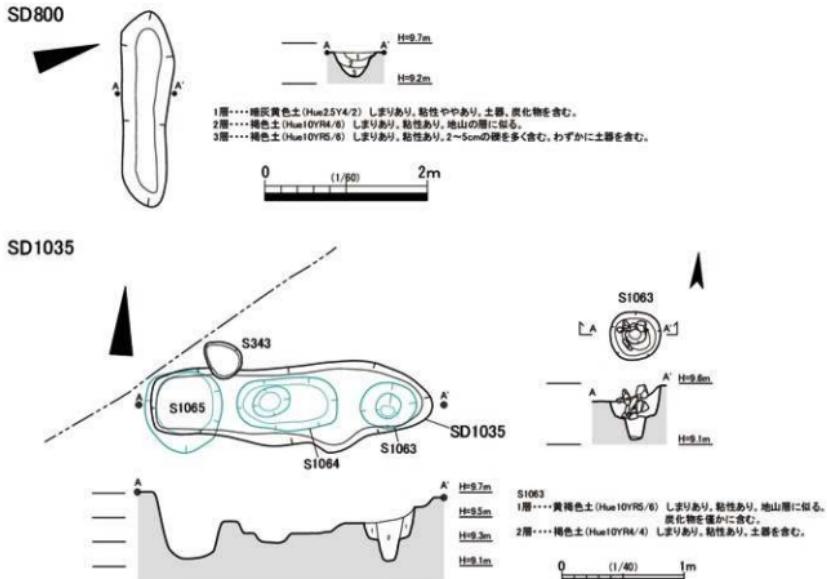


図 45 SD800・1035 溝 (1/60・1/40)

・ SD800 (図 45)

調査区中央、E・F-6 グリッドで検出した溝状遺構である。

規模は長さ 2.4 m × 幅 0.6 m、深さ 0.3 m である。後期の土器片が出土している。

・ SD1035 (図 45)

調査区の西側、F-4 グリッドで検出した溝状遺構である。

S343 に切られ、S1063 ~ 1065 を切る。規模は長さ 2.35 m × 幅 0.7 m、深さ 0.2 m である。中期初頭の土器や石器が出土している。

(5) その他の遺構

・ SJ035 (図 46)

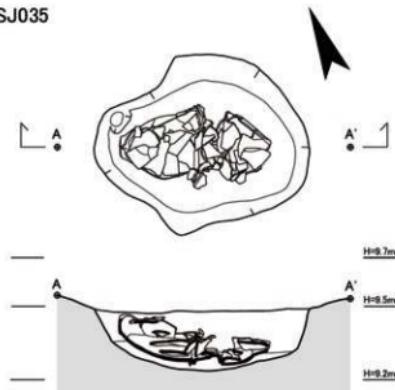
調査区南西隅、C-1 グリッドで検出した小型甕棺墓である。

墓壙は楕円形を呈し、大きさが長軸 0.9 m × 短軸 0.7 m、深さ 0.25 m である。甕棺は下甕が「壺」で上甕が「蓋」の合口である。圧し潰された状態で検出され、主軸が N65° W、角度が 6° である。

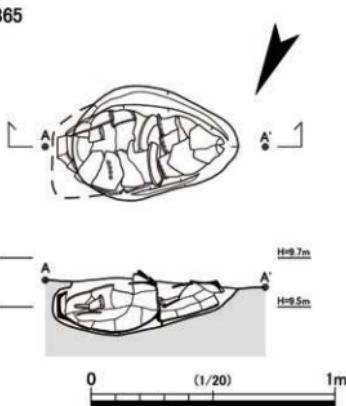
・ SJ365 (図 46)

調査区南西侧、D-3 グリッドで検出した小型甕棺墓である。

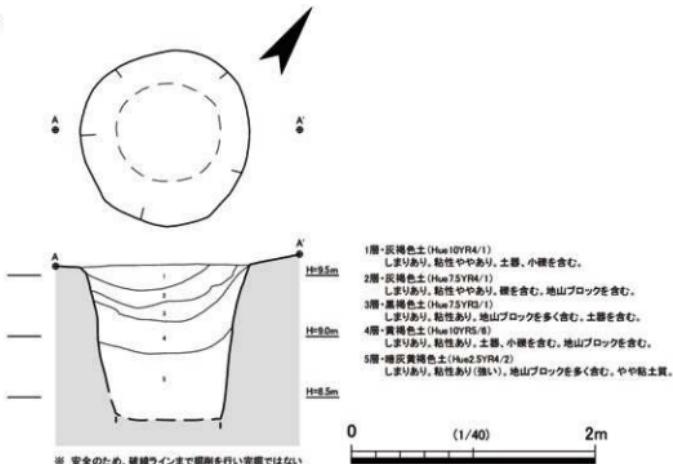
SJ035



SJ365



SE367



※ 安全のため、破線ラインまで掘削を行わなかった。

図46 SJ035・365墓棺・SE367井戸 (1/20・1/40)

墓壙は梢円形を呈し、大きさが長軸 0.7 m × 短軸 0.47 m、深さ 0.25 m である。上・下ともに「甕」で合口の構造である。圧し潰された状態で検出され、主軸が N64° E、角度が 6.5° である。
甕棺内からは何も検出されなかった。

・SE367 (図 46)

調査区の南西側、D-3 グリッドで検出した井戸である。出土土器から弥生終末と思われる。規模は径 1.4 m で、深さは現状で 1.3 m である。安全対策上底までは掘り切っていない。

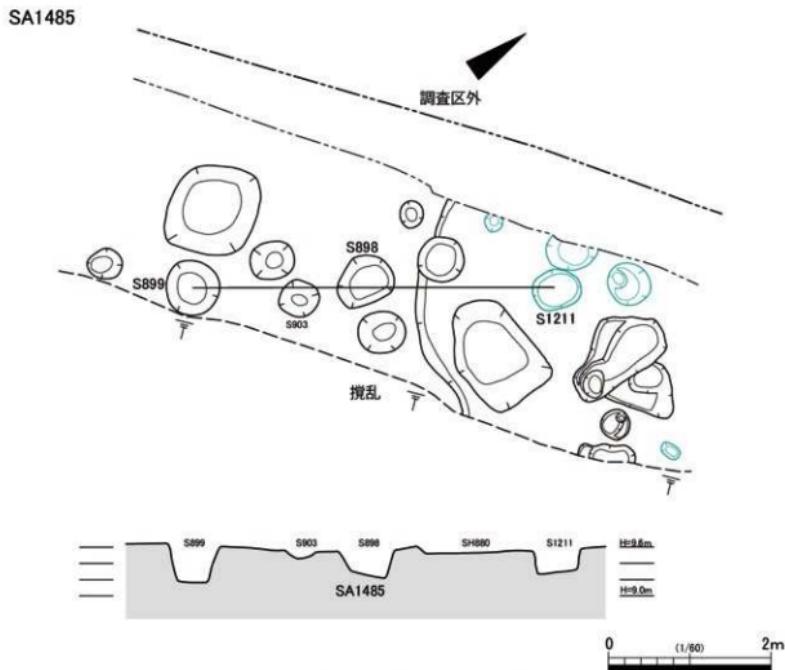


図 47 SA1485 棚列 (1/60)

・SA1485 (図 47)

調査区中央、F-5・6 グリッドで検出した棚列である。

三つの柱穴があるが、本来は左右に伸びると思われるが搅乱や調査区外で不明である。一部 SH880 と被る。規模は現状で長さ 4.5 m、柱間は 2.2 m で主軸は N35° E である。柱穴の規模は径 0.6 m、深さ 0.45 m である。

・SX120 (図 48)

調査区の南西側、C・D-2・3 グリッドで検出した不明遺構である。

搅乱によって大部分が削平されており、不定形なプランである。規模は現状で長軸 6.8 m × 短軸 6.6 m、深さ 0.25 m である。北側で多数のビットが検出されている。中期中頃の土器が出土している他、石器が多く検出されている。本来は竪穴建物の可能性もある。

・SX900 (図 49)

調査区の中央、F-7 グリッドで検出した不明遺構である。

搅乱により全体は不明で、南側角に楕円形状の落ち込みが見られる。規模は現状で長軸 2 m × 短軸 2.3

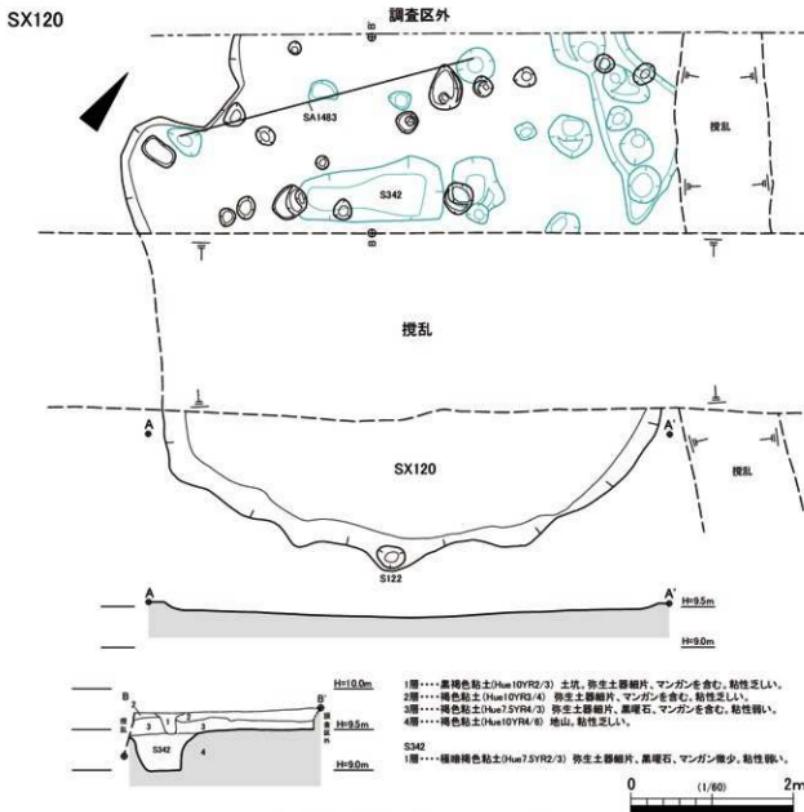


図 48 SX120 不明遺構 (1/60)

m、深さ 0.3 m である。後期前半の土器片が出土しており、炭化物や礫が多く検出されている。

4. 弥生時代の遺物

図 50 の 7 ~ 24 は SB650 から出土した遺物である。7 ~ 14・19 は壺の口縁部である。断面 T 字形が多いが、中には 19 のような断面逆 L 字形もみられる。須久 I 式 ~ II 式の範疇と思われる。その他、断面「く」の字状の口縁部(15)等もあり、若干の混じりが見られる。16・17 は壺の口縁部と胴部片であり凸帯が付く。18 はやや緩い「く」の字状口縁で、樽形壺の口縁部と思われる。20 ~ 22 は壺の底部と思われる。平底からやや丸底があり、内面には指押さえの跡が残る。23 は広口壺の口縁部で鋸形を呈する。24 は凝灰岩製の石包丁である。両端が欠損しており全体の形状は不明であるが、丁寧な研磨が見られる。

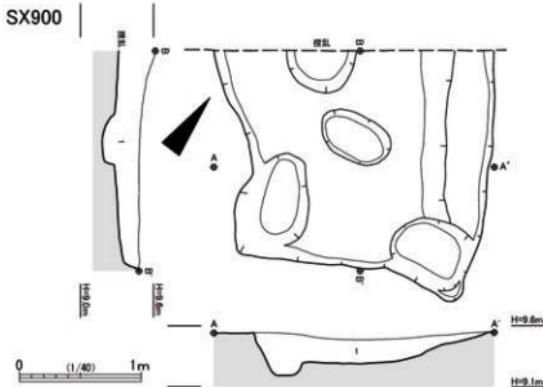


図 49 SX900 不明遺構 (1/40)

図 50 の 25 ~ 27 は SB1480 から出土した遺物である。25 は甕の口縁部で断面逆 L 字状を呈する。26 は厚手で上げ底の底部である。27 は平底の底部で、一端くびれてから胴部に向かって開くタイプである。底部は中期前葉、須久 I 式に相当するものと思われ、口縁部も中期前葉と思われる。

図 50 の 28 ~ 32 は SB1482 から出土した遺物である。28 は甕の口縁部で断面逆 L 字から T 字の中間的なもので中期前葉の須久 I 式段階と思われる。29 は壺の底部。30 は甕棺の口縁部。31 は蓋の転用品と思われる。32 は安山岩製の使用痕剥片で両側縁に細かな剥離が顕著である。

図 51 の 33・34 は SB1484 の出土遺物である。33 は素口縁広口壺の口縁部で、やや外反する。34 は高坏の脚部である。摩耗が激しく不明瞭であるが外面にハケメが見られる。

図 51 の 35 は SB1486 から出土した甕の口縁部である。断面逆 L 字から T 字の中間的なもので中期前葉の須久 I 式段階と思われる。

図 51 の 36・37 は SB1487 から出土した遺物である。36 は甕の底部で平底を呈する。内面の底に僅かに指押さえが見られる。37 は壺の胴部で断面 M 字形の凸帯が巡る。

図 51 の 38 ~ 51 は SH090 から出土した遺物である。38 ~ 42 は甕の口縁部で断面逆 L 字形から T 字形のものが見られる。43 は鋤先状口縁の広口壺、44 は素口縁広口壺の口縁部である。45・46 は甕の底部である。47 は粘板岩製の紡錘車で半分以上欠損している。48 は砂岩製の砥石である。棒状の形態を呈し、上端部が欠損しており、折れ面以外は擦痕がみられる。49 は黒曜石製の二次加工剥片である。厚手の幅広剥片を素材とし、裏面には原礫面を残す。打面側の上部に顕著な調整を施している。50 は黒曜石製の使用痕剥片である。やや厚手の縱長剥片を素材とし、端部が欠損している。右側縁に微細な剥離痕が見られ。51 は黒曜石の原石である。手のひらに乗るくらいの大きさで亜円錐を呈する。数か所剥離されているが、人為的なものではない。

図 52 の 52 ~ 55 は SH090 の中央土坑である SK260 から出土した遺物である。52 は甕の口縁部で、断面 T 字形を呈し、口縁直下に凸帯が一条巡る。摩耗して不明瞭であるが、内面に横方向のハケメを施す。53 も甕の口縁部で、断面三角形から断面逆 L 字形を成す。54 は甕の底部で 52 と同一個体の可能性が高い。平底で底部付近はやや外反する。摩耗して不明瞭であるが内外面に縦方向のハケメを施す。55 は

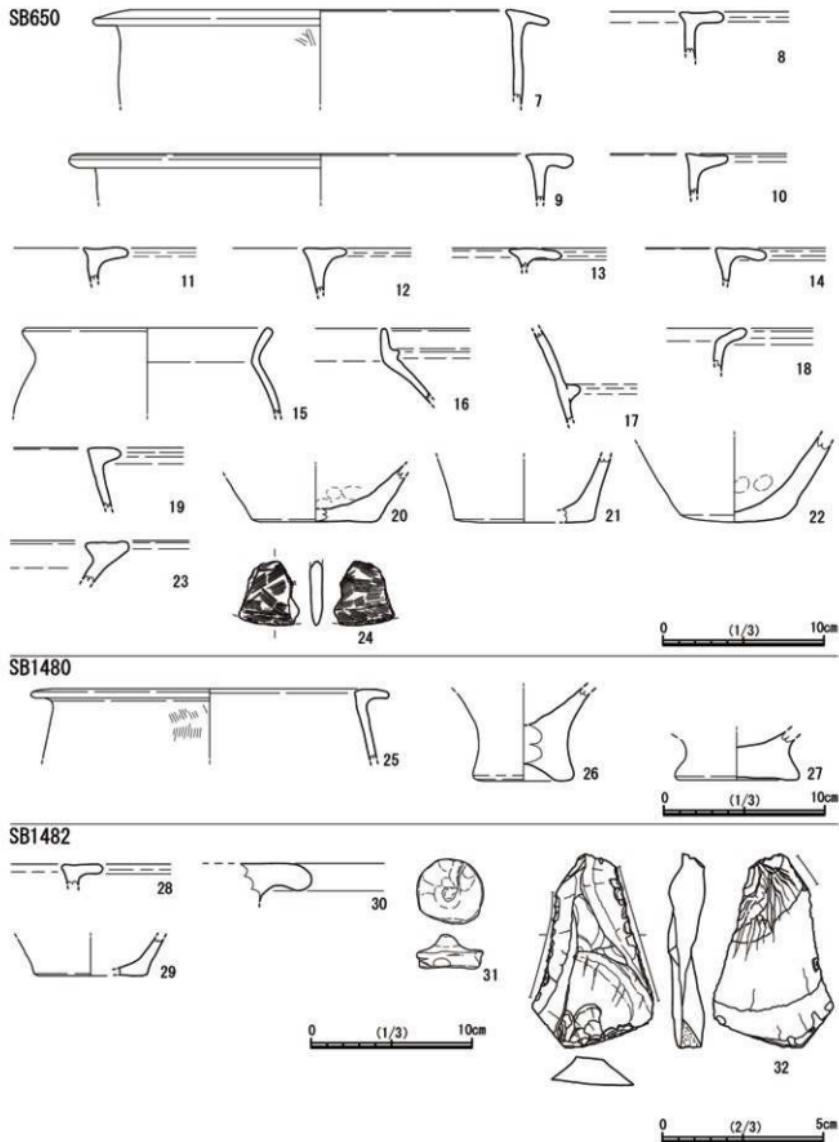


図 50 SB650・1480・1482 出土遺物

III. 竹ノ下遺跡

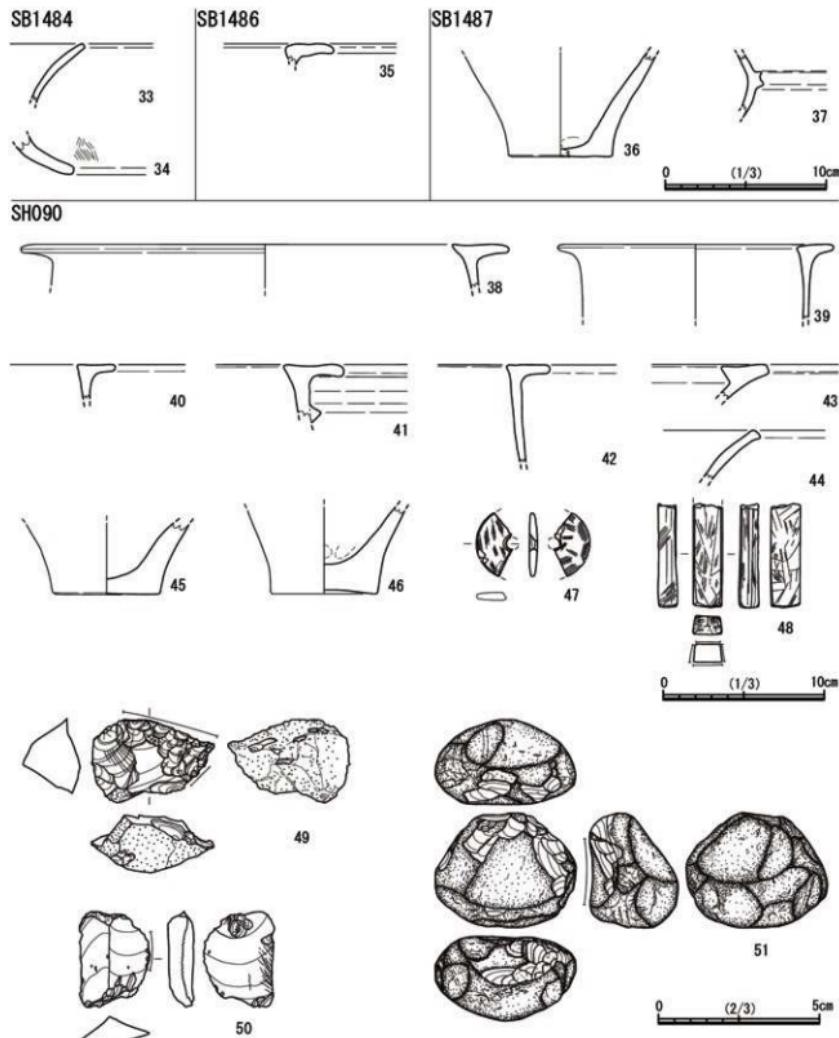


図 51 SB1484・1486・1487・SH090 出土遺物

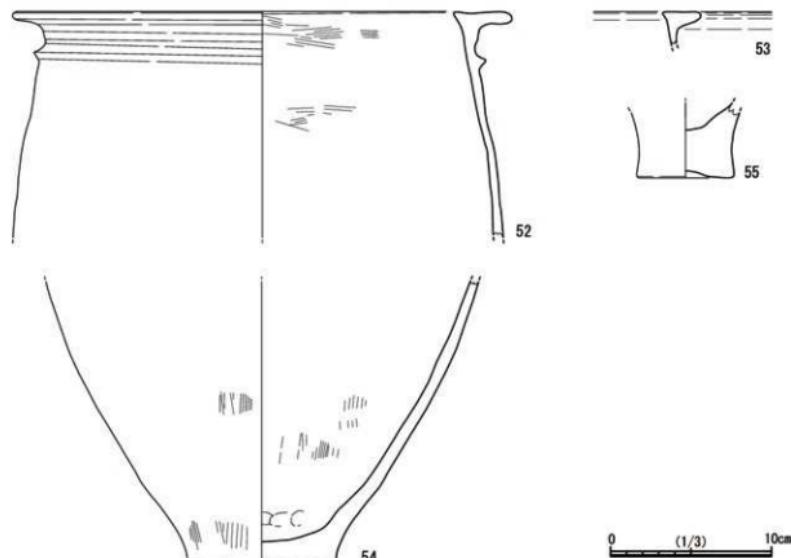


図 52 SK260 出土遺物

厚手の上げ底を呈する底部である。52・54が中期後葉の須久II式段階、53・55が中期前葉の須久I式段階のものと思われる。

図53の56～70はSH375から出土した遺物である。56は甕棺の口縁部。57～60が甕の口縁部である。断面形態が逆L字からT字を成し、58は肩部に一条の凸帯が巡る。中期前葉の須久I式の範疇に入ると思われる。61は壺の胴部で断面台形状の凸帯が一条巡る。62は壺の底部で平底を呈し、胴部下半の外面に縱方向のハケメが施されているが、摩耗で不明瞭である。63・64は甕の底部で上げ底になつていて。特に63は厚手の上げ底になつており中期前葉と思われる。65は壺の底部で、内面底に指押さえが施されている。66は袋状口縁壺の口縁部から肩部の破片である。口縁部の末端が欠損しているが比較的厚手に口縁部に頸部から肩部にかけてやや器壁が薄くなる。内面には指押さえが見られる。中期末～後期初頭の所産と考えられる。67は手捏ね土器で小型の鉢である。口縁端部はやや波打っているが、丸く整えられて、内外面に指押さえが見られる。68は安山岩製の二次加工剥片である。大型の板状剥片を素材としているが上半部が折れしており、さらにその折れ面を打面として剥片剥離を行っていることから、元々は石核であった可能性があるが、その後端部を粗く調整している。69は砂岩製の砥石である表裏や下端部を使用しており、裏面には2・3条の溝も見受けられる。角度は若干異なるが、ほぼ上下の同一方向に擦痕が見られる。70は黒曜石製の使用痕剥片である。幅広の剥片を素材とし、端部に微細剥離痕が顕著に見受けられる。

図54の71～89と図55の90～99はSH380から出土した遺物である。71～73と77～86は甕の口縁部で逆L字形の物が主体的であるが、72のように内面への突出が明瞭化するものもみられる。74～

III. 竹ノ下遺跡

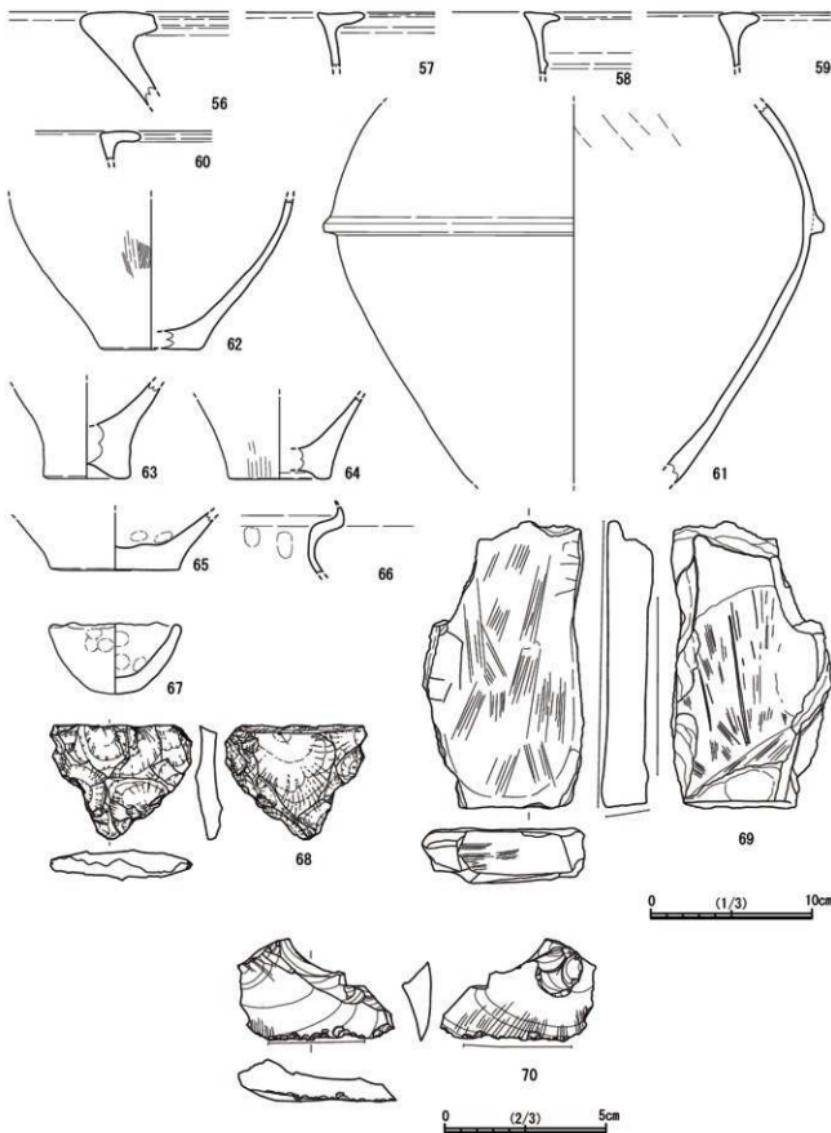


図 53 SH375 出土遺物

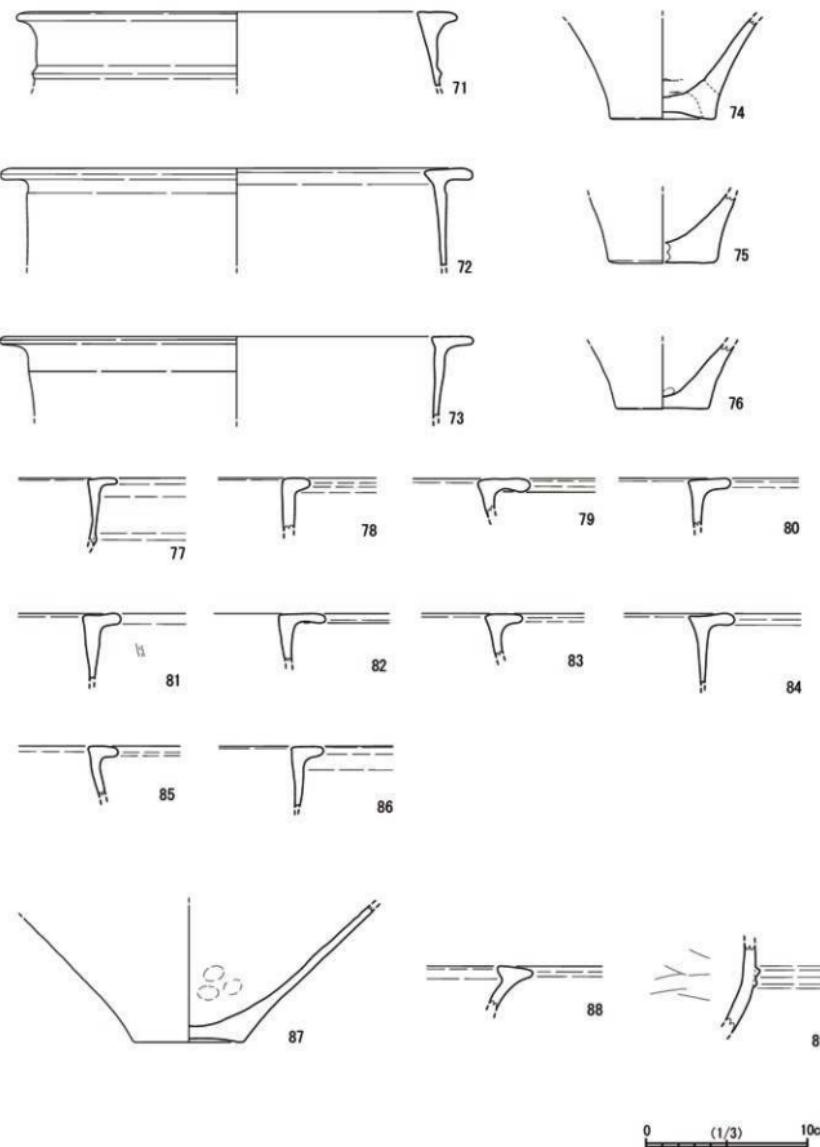


図 54 SH380 出土遺物 (1)

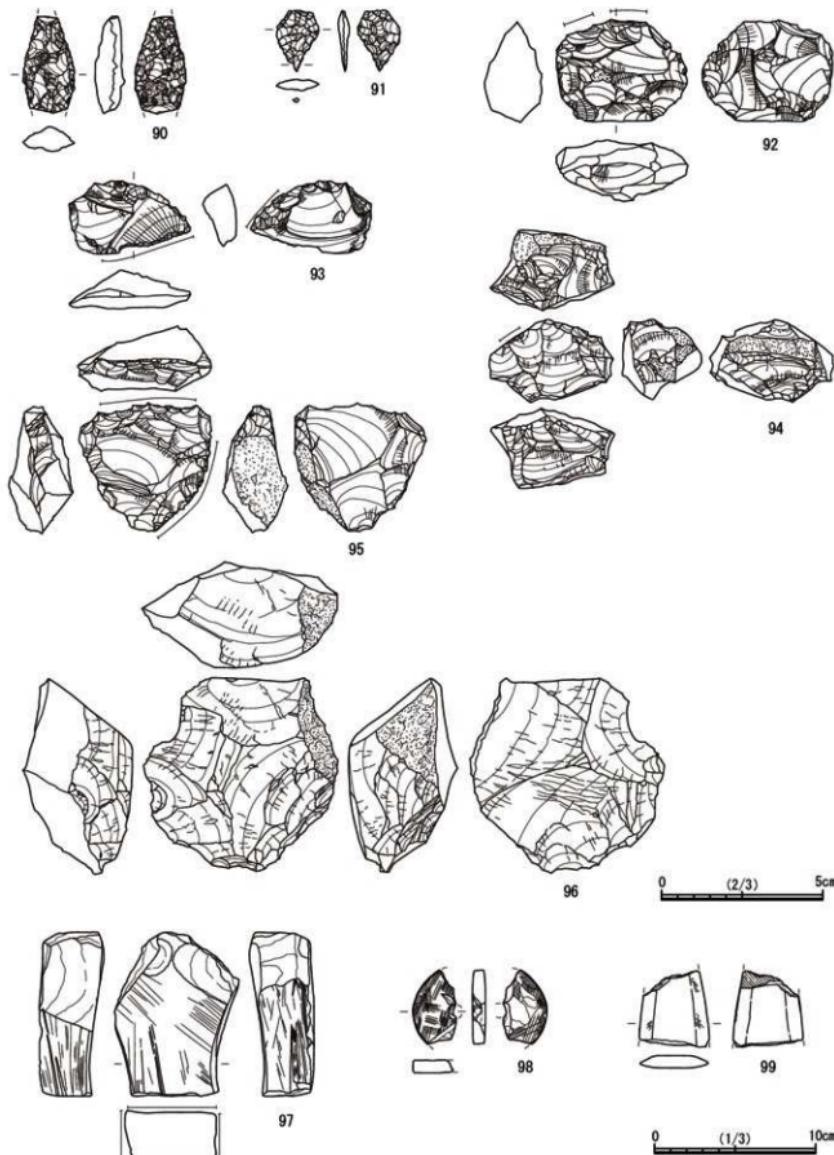


図 55 SH380 出土遺物 (2)

76は甕の底部で、上げ底（74）と平底（75・76）が見られる。87は壺の底部でやや上げ底、内面には指押さえが見られる。88は鋤形口縁広口壺の口縁部と思われる。89は壺の胴部片でM字形の凸帯が一条巡る。

図55の90は黒曜石製の石鐵である。両端部を欠損しているが、尖基鐵と思われる。裏面中央に僅かに素材剥離時の剥離面が残る他は、縁辺からの調整によってほぼ全面に二次加工が施されている。91は黒曜石製の錐である。つまみ状の頭部を持ち、錐部は短い。石鐵と同じく縁辺からの丁寧な押圧剥離により調整が施され、先端を尖らせている。93は黒曜石製の使用痕剥片である。厚手の横長剥片を素材とし、右側縁の裏面に調整が施されているので二次加工剥片ともいえる石器である。正面下端部に細かな剥離が見受けられる。94・95は黒曜石製の石核である。いずれも一部に原礫面を残し、縁辺から不規則に幅広剥片を剥離している。95は残核を再調整している。上端部と右側縁に細かな調整が施されており、搔器へ転用したと思われる。96は安山岩製の石核である。一部に原礫面を残し、求心状に幅広剥片を剥離している。97は砂岩製の砥石である。分厚い板状の石材で下端は折れて欠損し、上端は数回剥離されたように欠損している。正面と両側面に擦痕が見られ、いずれの面にも縦方向や斜め方向の擦痕が見られ、一部にやや強い擦痕が残る。98は砂岩製の紡錘車である約2/3を欠損しており僅かに中央の穴が見える。99は粘板岩製の石剣である。上下の大部分を欠損しているが、両縁辺の刃部成形は丁寧である。

図56の100～104はSH380に伴う中央土坑であるSK781から出土した遺物である。100・101は甕の口縁部で断面逆L字形（100）とT字形（101）に形態が分かれる。調整は摩耗で不明。102は甕の底部と思われる。器壁はそれほど厚くはないが、やや上げ底である。内面底部に指押さえが見られる。103は砂岩製の砥石である。直方体を成し、表裏と上下端部の面に擦痕が見られ、ほぼ縦方向である。砥石として使用後に台石に転用されており、表裏中央に打痕が残る。104は安山岩製の石核である。円錐と思われる原石を分割して母岩としており、幅広剥片を求心状に剥離している。

図56の105はSH380内の土坑であるSK1464から出土した遺物である。袋状口縁壺の口縁部で、口縁端部が欠損している。

図57の106～109はSH880から出土した遺物である。106・107は甕の口縁部で断面逆L字形を呈している。108は不明鉄製品である。両端が欠損しているが、棒状の形態であり、裏面側に折り曲げている。下部には帶状の金具が付いている。109は黒曜石製の使用痕剥片である。幅広剥片を素材とし、左側縁上半部と右側縁下端部、それに左側縁下端部に微細な剥離痕や細かな剥離痕が見られる。

図57の110～113はSH1050から出土した遺物である。110・111は甕の口縁部で、やや内面に突き出るが概ね逆L字形を呈する。調整は摩耗により不明瞭である。112は素口縁の広口壺の口縁部である。大きく外反し、端部はやや丸みを帯びる。113は安山岩製のスクレイバーである。板状の横長剥片を素材とし、半分に分割している。打面が原礫面で打角が鈍角となっている。下端部に細かな調整を施して刃部としている。

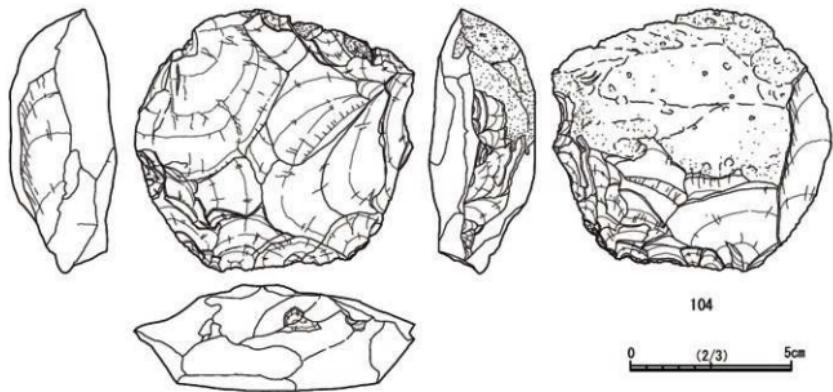
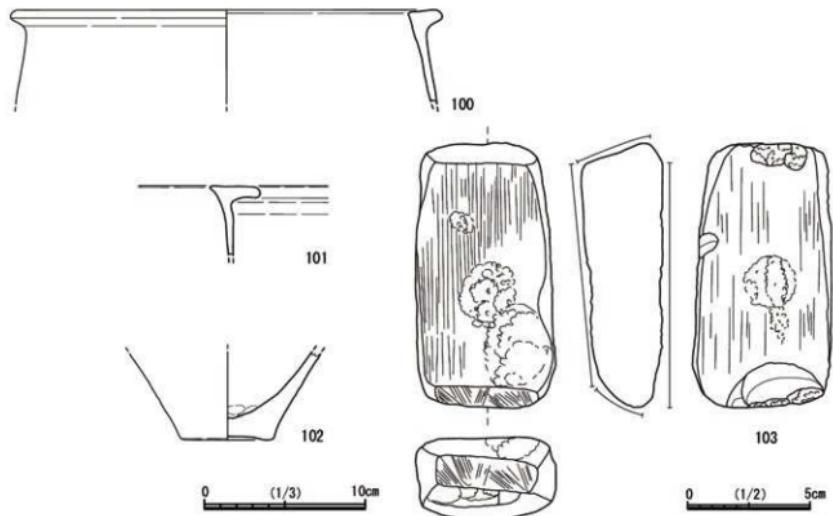
図57の114・115はSH1050を切る土坑SK1089から出土した甕の口縁部である。両者とも断面逆L字形を呈している。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。

図57の116～124はSH1200から出土した遺物である。116～120は甕の口縁部で断面三角形～逆L字形が見られる。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。122・123は甕の底部であり、上げ底になっている。122はかなりの厚手の底部である。123は高坏の脚部である、124は貝の化石である。

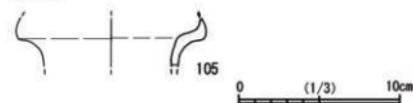
図57の125はSH1200に伴うビットS1379から出土した黒曜石製の石鐵未成品である。形態的には凹基無茎鐵で、裏面に素材剥離時の剥離面を大きく残し、左脚部が欠損している。右脚部が小さく、裏面

III. 竹ノ下遺跡

SK781



SK1464



0 (1/3) 10cm

図 56 SK781・SK1464 (SH380 に伴う土坑) 出土遺物

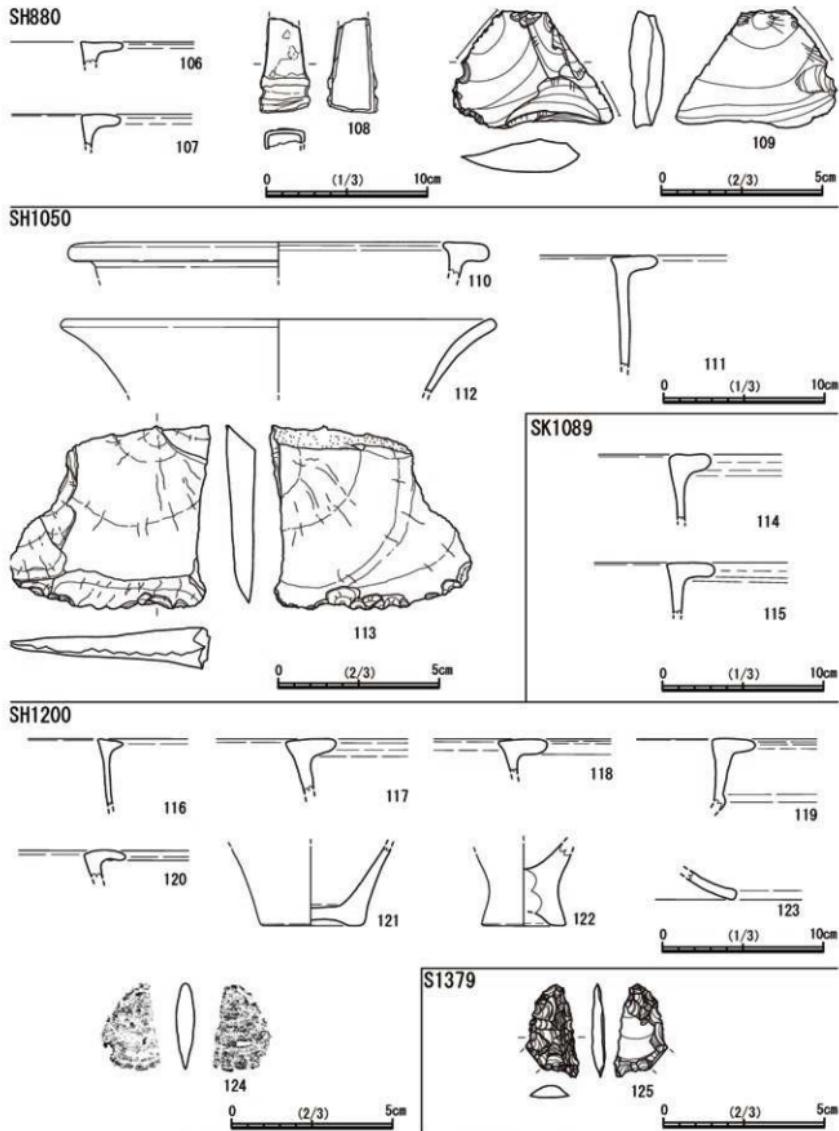


図 57 SH880・SH1050・SK1089 (SH1050 を切る土坑)
・SH1200・S1379 (SH1200 に伴うピット) 出土遺物

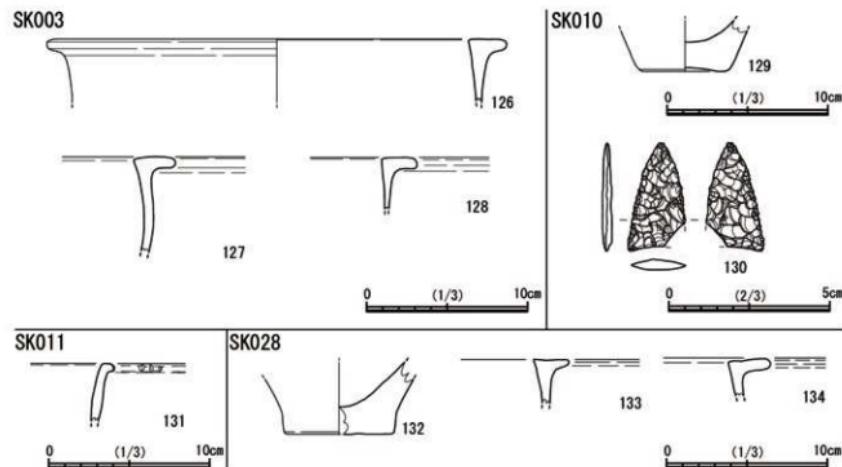


図 58 SK003・010・011・028 出土遺物

に素材剥離時の剥離面が残っていることから、作成中に左脚部が折れて失敗したものと思われる。

図 58 の 126～128 は SK003 から出土した遺物である。全て甕の口縁部で、断面逆 L 字形を呈している。調整は摩耗が激しく不明である。中期前葉の須久 I 式段階と思われる。

図 58 の 129・130 は SK010 から出土した遺物である。129 は甕の底部でやや厚手上げ底タイプのものである。130 は黒曜石製の石器である。回基無茎器であるが、基部の抉りはやや浅い。縦長の三角形を呈し、丁寧な調整により形が整っている。右脚部を欠損する。

図 58 の 131 は SK011 から出土した甕の口縁部である。口縁部は短く外に屈曲し、端部に刻み目を有する。前期初頭の夜白 II 式段階のものと思われる。

図 58 の 132～134 は SK028 から出土した遺物である。132 は甕の底部でやや厚手であるが底は平底である。133・134 は甕の口縁部である。両者とも断面逆 L 字形を呈し、中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。

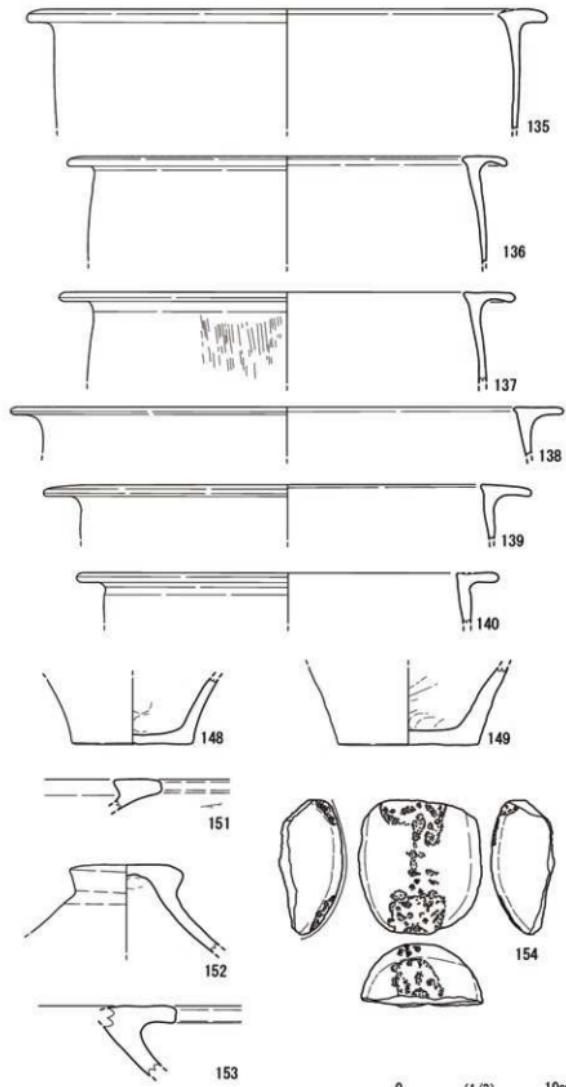
図 59 の 135～154 は SK045 から出土した遺物である。135～147 は甕の口縁部である。ほとんどが断面逆 L 字形から T 字形のものであり、中期後葉の須久 II 式段階に当たると思われる。148～150 は甕の底部で平底を呈する。器壁はそれほど厚くなく、胴部に向かって外反する。調整は摩耗により不明瞭であるが、内面に指押さえが見られる。151 は鋤先状口縁の広口壺である。152 は蓋、153 は甕棺の口縁部である。154 は玄武岩質の敲石である。上半部が欠損し、また縦方向に半分に割れている。下端部や正面中央付近にも敲打痕が見られる。

図 59 の 155 は SK054 から出土した甕の口縁部である。口縁部が内面にやや突出しており逆 L 字～T 字形の中間的なものである。中期後葉の須久 II 式段階のものと思われる。

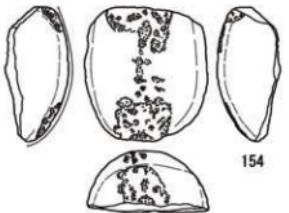
図 59 の 156 は SK073 から出土した甕の口縁部である。断面三角形～逆 L 字形の中間的なもので、中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。

図 60 の 157～163 は SK100 から出土した遺物である。157～159 は甕の口縁部である。断面逆 L 字形

SK045



SK054



SK073

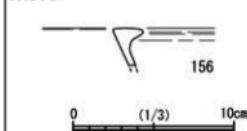


図 59 SK045・054・073 出土遺物

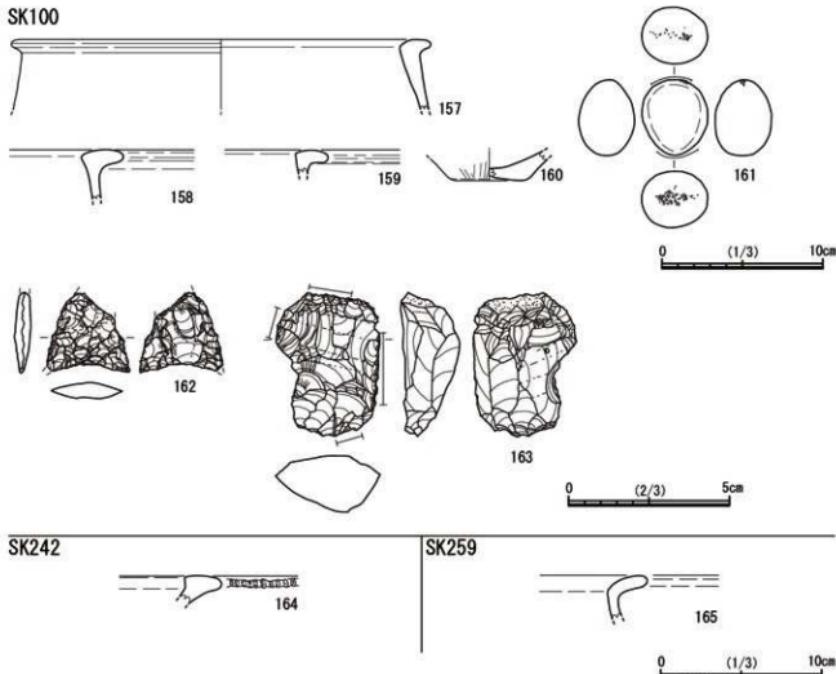


図 60 SK100・242・259 出土遺物

を呈し、口唇部が短い。中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。160 は壺の底部である。外面にハケメが僅かに見える。161 は砂岩製の敲石である。卵型を呈し、上下両端に敲打痕が残る。162 は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で平面形態は正三角形に近い。先端と左脚部を欠損する。基部の回みはやや緩い。163 は黒曜石製の二次加工剥片及び使用痕剥片である。分厚い幅広剥片を素材とし、左側縁にはノッチ状の抉りが入る。上端部と右側縁に連続した押圧剥離による調整が丁寧に施され、使用痕と思われる微細な剥離も見受けられる。裏面上部には原礪面が残る。

図 60 の 164 は SK242 から出土した鋤先状口縁の広口壺である。口縁部のみで端部に刻み目を施している。中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。

図 60 の 165 は SK259 から出土した鉢の口縁部である。断面逆 L 字からやや立ち上がっているが「く」の字まではいかない。やや器壁が肥厚する。中期末のものと思われる。

図 61 の 166 ~ 171 は SK267 から出土した甕の口縁部である。内面への突出が顕著であり、断面 T 字形を呈する。調整は摩耗により不明瞭ながらも外面縦方向のハケメが見られる。167 は内面にハケメの単位のみが見られる。中期後葉の須久 II 式段階と思われる。

図 62 の 172 ~ 183 も SK267 から出土した遺物である。172・173、180 ~ 183 は甕の口縁部である。断

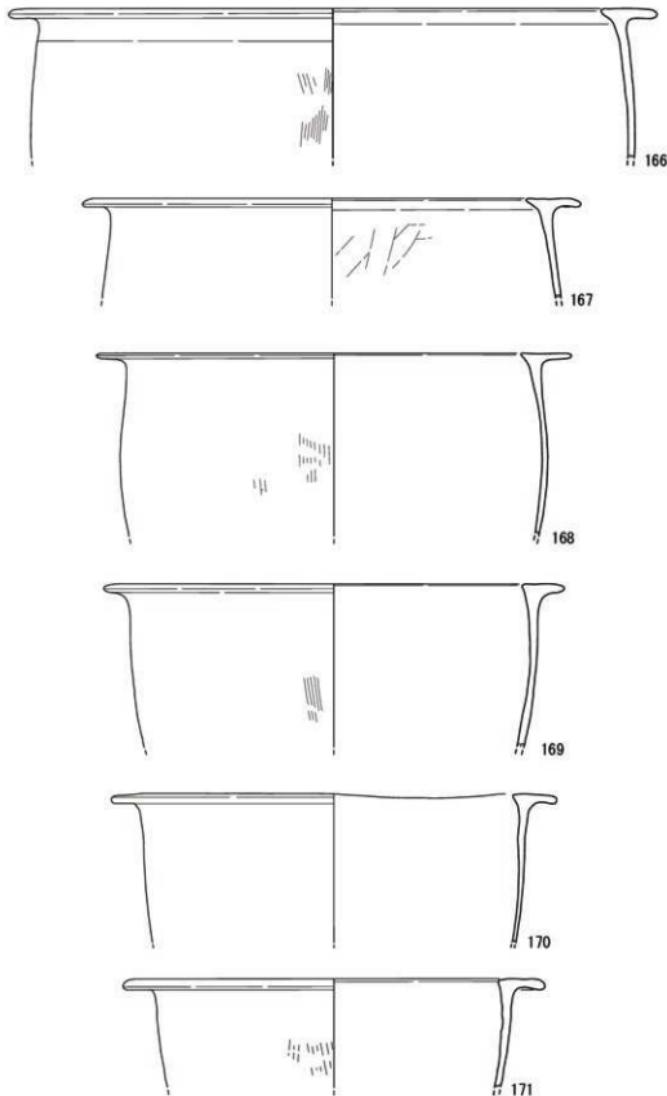


図 61 SK267 出土遺物 (1)

0 (1/3) 10cm

III. 竹ノ下遺跡

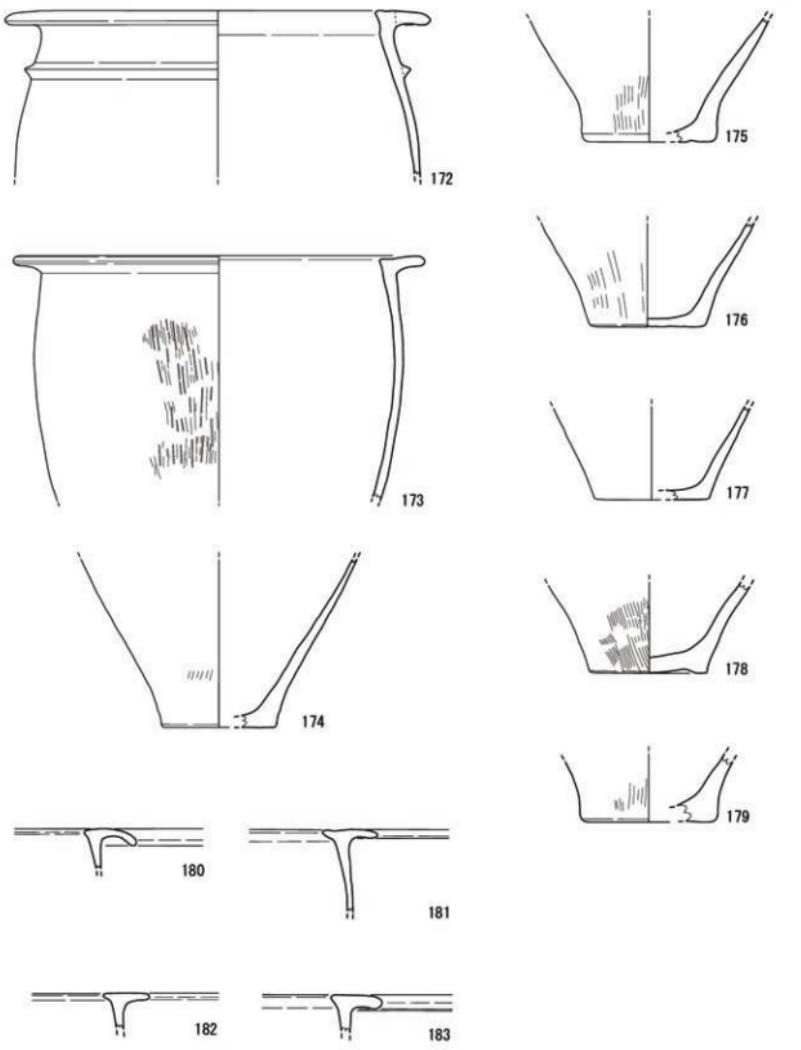


図 62 SK267 出土遺物 (2)

0 (1/3) 10cm

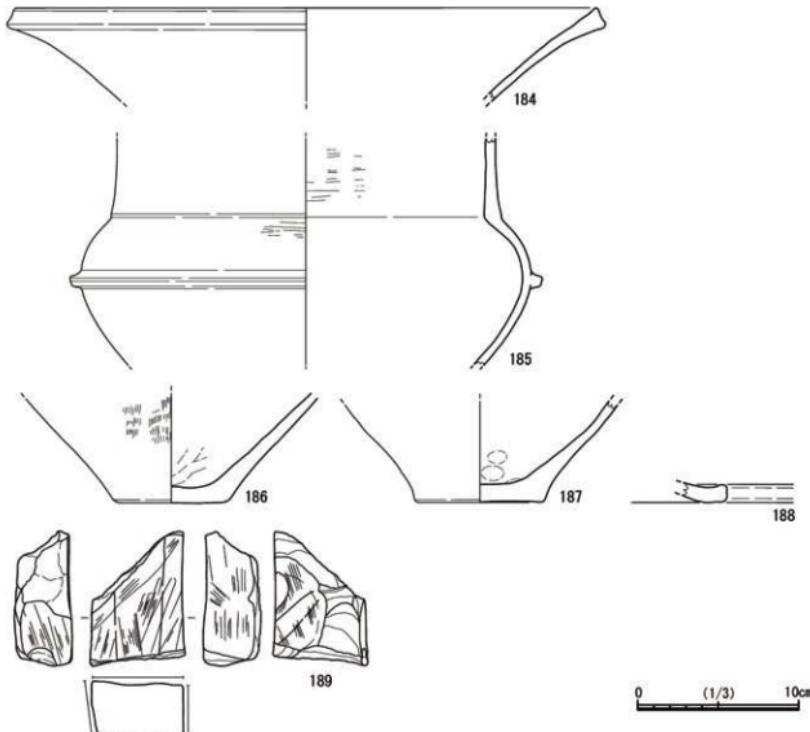


図 63 SK267 出土遺物 (3)

面逆L字形～T字形が主体で、172は肩部に三角凸帯が一条巡る。173は外面に縦方向のハケメが見られる。180は口唇部が下に垂れる。175～179は甕の底部である。ほぼ平底で外面に縦方向のハケメが見られる。

図63の184～189もSK267から出土した遺物である。184は素口縁の広口壺の口縁部である。直線的に開く口縁部で、端部はやや凹む。185は壺の胴部である。内外面に僅かではあるが横方向のミガキが見られる。胴部は丸みを帯び、肩部で真っすぐ上に立ち上がる。胴部には断面台形～ややM字形の凸帯が一条巡る。186・187は壺の底部である。平底で186の外面には縦方向のハケメがみられ、187の内面には指押さえが見られる。188は高壺の脚部である。189は砂岩製の砥石である。棒状の砥石で、上下両端を欠損している。擦痕は表裏・左右の側面に縦や斜め方向に向かって付いている。

図64の190・191はSK317から出土した遺物である。190は甕の口縁部である。断面三角～逆L字形のもので中期前葉の須久I式段階のものと思われる。191は壺の底部である。上げ底タイプで調整は摩耗により不明である。

III. 竹ノ下遺跡

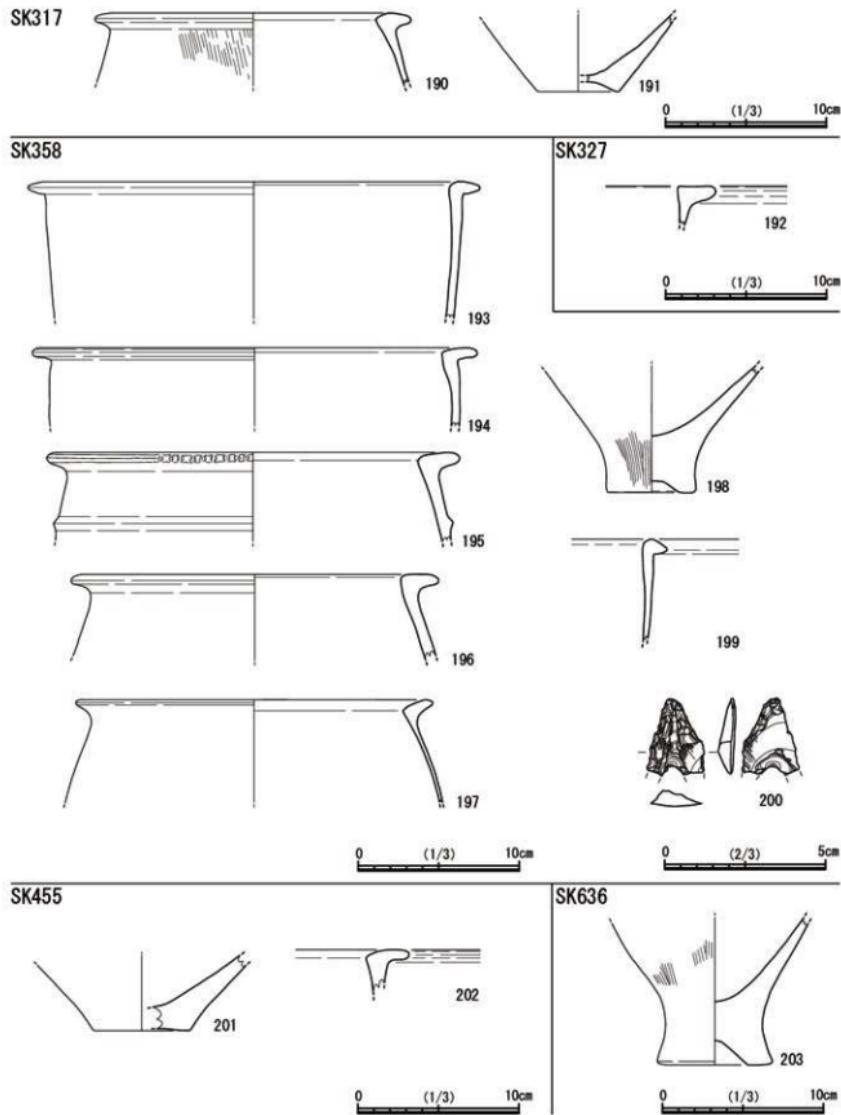


図 64 SK317・327・358・455・636 出土遺物

図 64 の 192 は SK327 から出土した甕の口縁部である。断面逆 L 字形で口唇部があまり伸びない。中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。

図 64 の 193 ~ 200 は SK358 から出土した遺物である。193 ~ 197・199 は甕の口縁部である。断面三角形～逆 L 字形を呈している。いずれも摩耗が激しく調整が不明である。195 は口縁端部に刻み目が付き、肩部に弱い三角凸帯が一条巡る。中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。198 は甕の底部である。厚手の上げ底タイプで外面に縦方向のハケメが見られる。200 は黒曜石製の石鎌である。回基無茎鎌である。未製品で、裏面の調整をしている途中で失敗し、廃棄されたものと思われる。脚部が両方とも欠損している。

図 64 の 201・202 は SK455 から出土した遺物である。201 は壺の底部、202 は甕の口縁部である。断面逆 L 字形を呈し、口唇部は短い。中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。

図 64 の 203 は SK636 から出土した甕の底部である。厚手の上げ底タイプである。摩耗で調整が見にくいか、外面に縦方向のハケメが僅かに見える。中期初頭の城ノ越式段階のものと思われる。

図 65 の 204 ~ 207 は SK639 から出土した遺物である。204 は甕の底部である。基本的には平底であるがやや上げ底となっている。立ち上がりで一旦内側に屈曲してから胴部に向かって開くタイプで前期末～中期初頭のものと思われる。205 は黒曜石製の石鎌未製品である。表裏共に素材剥離時の剥離面を残し、縁辺からの押圧剥離もやや粗いため製作途中で基部付近が折れて失敗したものと考えられる。206 は黒曜石製の錐である。やや変形した三角形を成し、全面を押圧剥離によって二次加工が施されている。全体的に厚みを減らし、先端部を丁寧に仕上げている。207 は黒曜石製の二次加工剥片である。亜角礫を素材とし、片面を大まかな剥離を上部から施した後、縁辺から細かな剥離を行っている。左側縁と上縁辺に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。

図 65 の 208 ~ 210 は SK640 から出土した遺物である。208・209 は甕の口縁部である。208 は断面 T 字形で上端部が平になり内側にやや突出し、口唇部が伸びる。中期後葉の須久 II 式段階のものと思われる。209 は断面逆 L 字形～T 字形と思われるがやや口唇端部が短い。中期後葉の須久 II 式段階と思われる。210 は甕の底部である。平底で厚みがやや薄い。

図 65 の 211・212 は SK741 から出土した遺物である。211 は甕の口縁部である。断面逆 L 字形を呈し、中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。212 は壺の底部である。やや上げ底のタイプで、胴部に向かって直線的に開く。

図 65 の 213 は SK838 から出土した甕の底部である。压手の平底タイプで外面に縦方向のハケメが見られる。中期前葉のものと思われる。

図 66 の 214 ~ 224 は SK873 から出土した甕の口縁部である。小規模な土坑ながら土器がまとまって出土しており、甕も口縁部から胴部付近まで復元できるものが数例あった。全体的に逆 L 字形を呈し、一部 218 のように断面三角形との中間的なものもみられる。また 214・219・221・223・224 は肩部に一条の三角凸帯が巡る。調整は全体的に摩耗が激しく見えづらいが概ね縦方向のハケメが外面に施されている。中期前葉の須久 I 式段階のものと思われる。

図 67 の 225 ~ 239 も SK873 から出土した遺物である。225 ~ 230 は甕の口縁部である。断面三角形～逆 L 字形を呈し調整は摩耗により不明である。特に 229・230 は断面がほぼ三角形を呈しており、中期初頭の城ノ越式と思われる。231 ~ 234 は甕の底部である。厚手の上げ底で 232 と 234 の外面には縦方向のハケメがみられ、231 と 232 の内面には指壓さえが見られる。中期前葉と思われる。235 と 236 は壺の口縁部で 235 は素口縁の広口壺、236 は錐先状口縁壺である。236 の外面には縦方向のハケメが見られる。237 は壺の肩部で頸部に凸帯が一条巡る。238 は壺の底部。239 は高壠の脚部である。脚部の形

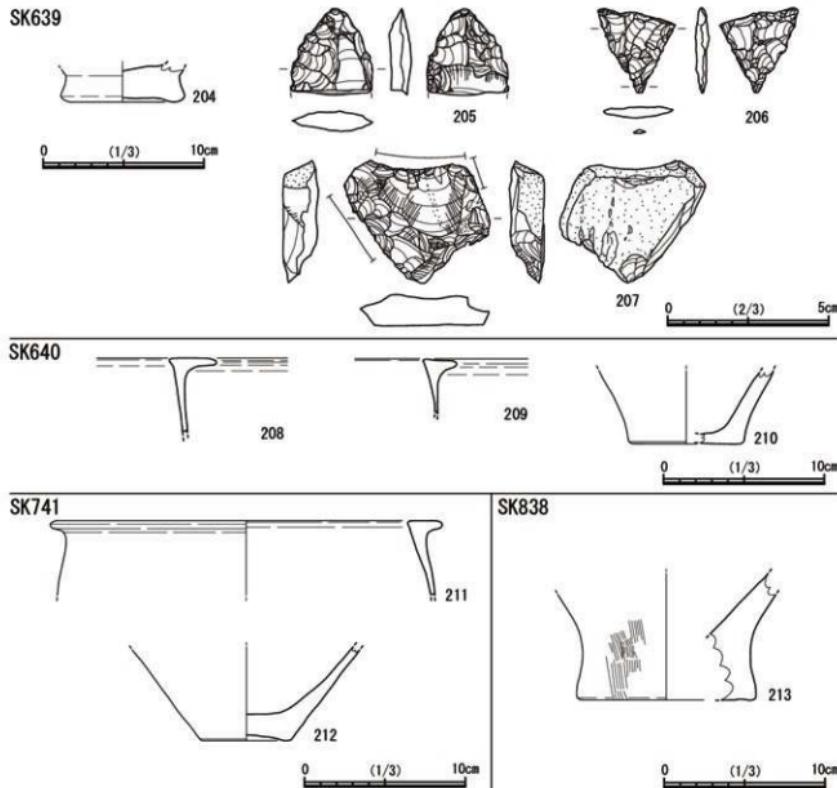


図 65 SK639・640・741・838 出土遺物

態から中期前葉と思われる。

図 68 の 240 ~ 242 も SK873 から出土した遺物である。240 は安山岩製の二次加工剥片である。原礫面を打面とする分厚い横長剥片を素材とし、両側縁に二次加工を施す先端の縁辺には使用痕と思われる微細な剥離が見られる。241 は安山岩製の二次加工剥片である。板状の横長剥片を素材とし、左側縁から先端と右側縁下半部に細かな調整が施されている。また、先端と右側縁下半部には使用痕と思われる微細な剥離が見られる。242 は砂岩製の磨製石斧である。板状の剥片が素材と思われ、薄く大まかな剥離が施された後、縁辺に細かな調整を行い、その後全体的に磨いている。上半部を欠損する。

図 68 の 243・244 は SK952 から出土した甕の口縁部である。逆 L 字形～T 字形の形態をしており、中期後葉の須久 II 式段階のものと思われる。

図 69 の 245 ~ 254 は SK1055 から出土した遺物である。245 ~ 251 は甕の口縁部～胴部の資料である。

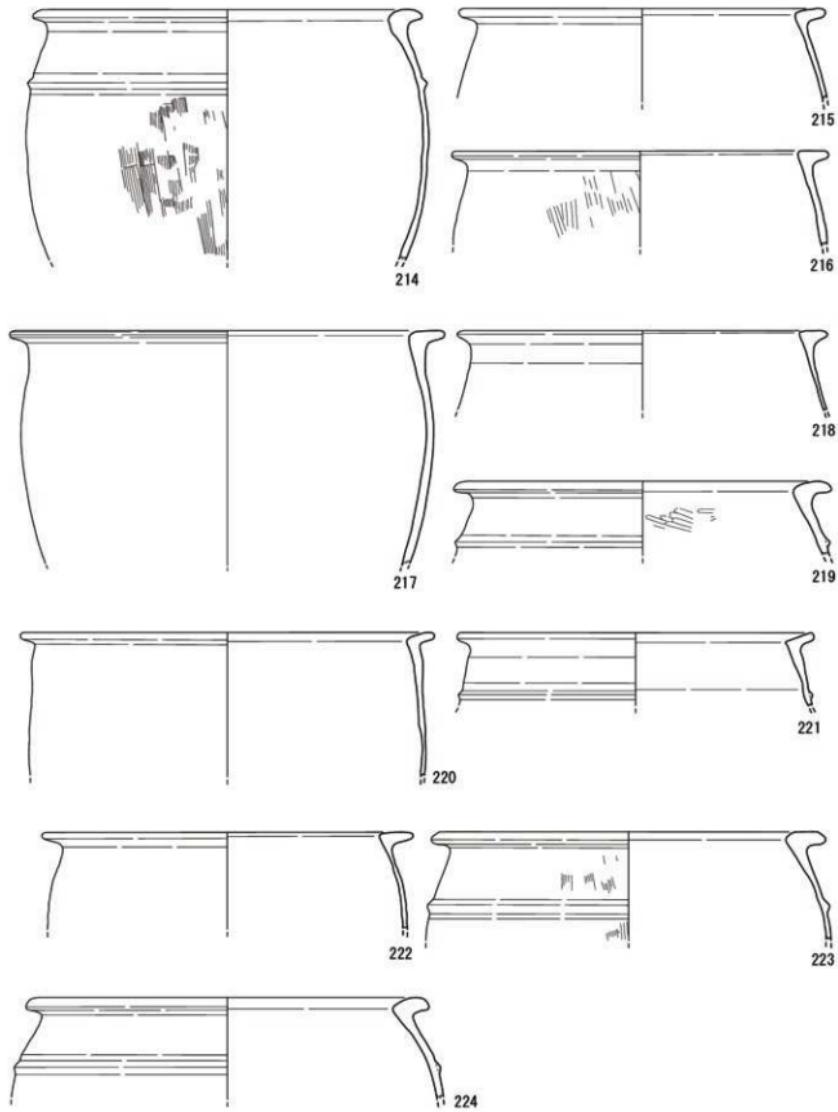


図 66 SK873 出土遺物 (1)

0 (1/3) 10cm

III. 竹ノ下遺跡

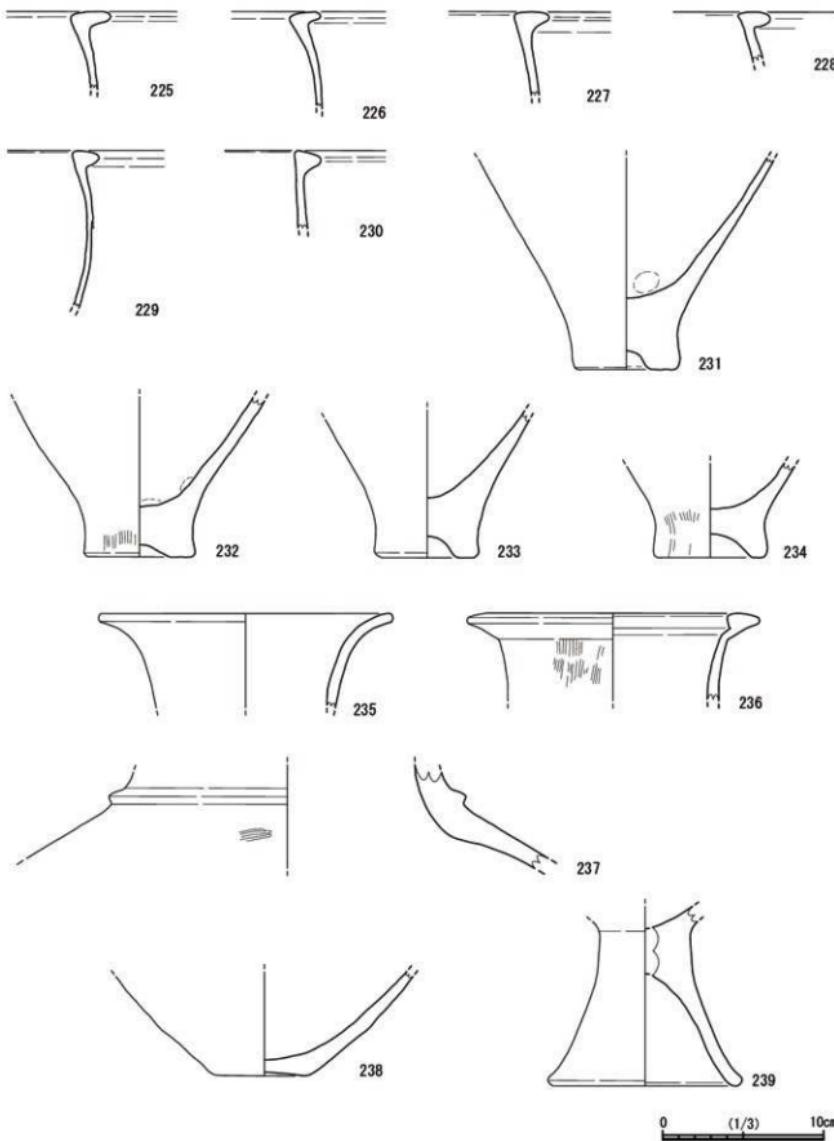
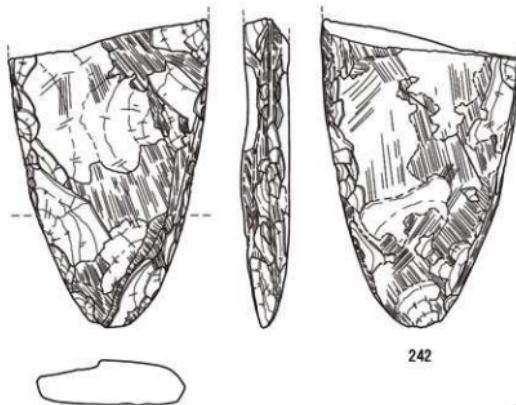
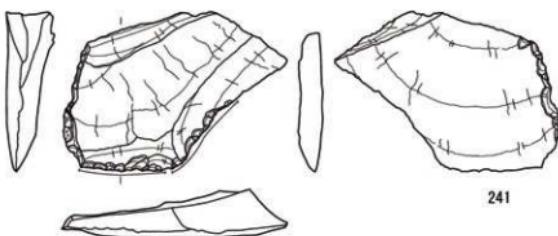
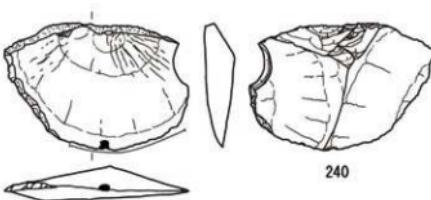


図 67 SK873 出土遺物 (2)

SK873



0 (2/3) 5cm

SK952



0 (1/3) 10cm

図 68 SK873 (3)・952 出土遺物

III. 竹ノ下遺跡

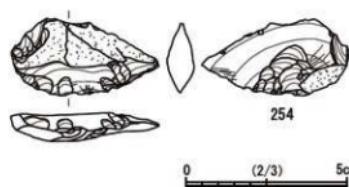
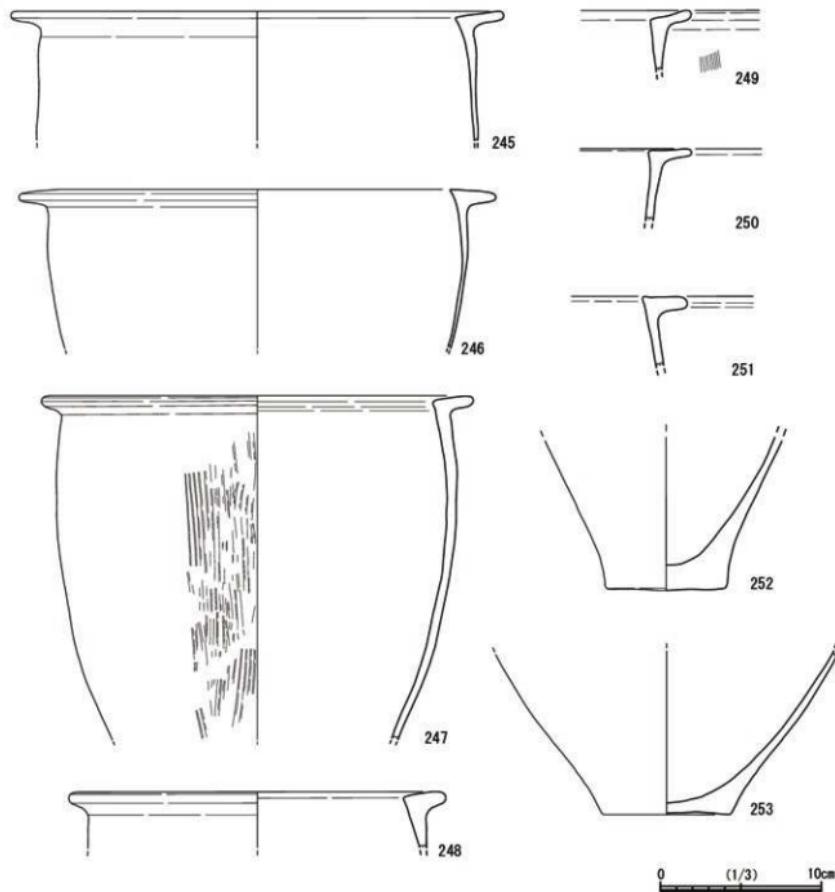
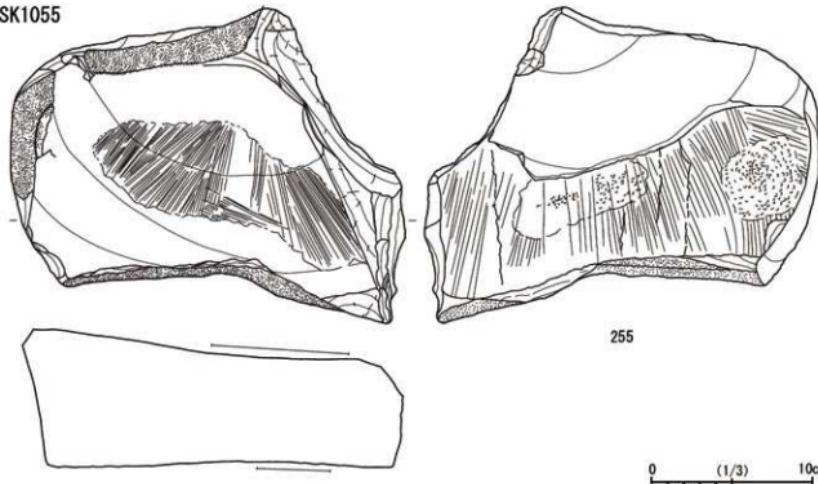
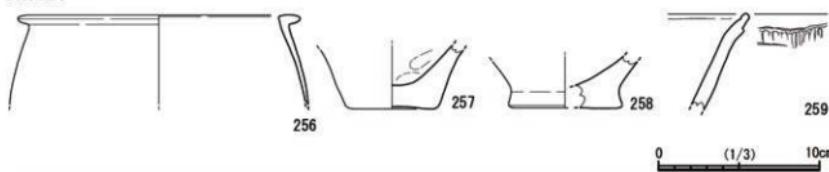


図 69 SK1055 出土遺物 (1)

SK1055



SK1091



SK1184



図 70 SK1055 (2) - 1091 - 1184出土遺物

断面逆L字形～T字形のものまである。摩耗が激しく調整が不明な資料が多いが、247の外面には縦方向のやや幅広のハケメが、249の外面にも縦方向のハケメが見られる。252は甕の底部で平底である。253は壺の底部でやや上げ底である。254は黒曜石製のスクレイパーである。横長剥片を素材とし、原礫面の打面が残る。一部打面部を除去するように調整が施されている。その他部分的に縁辺に加工が施されている。

図70の255もSK1055から出土した遺物で、安山岩製の台石である。20cmを超える原石を板状に加工を施し、正面には研磨痕が、裏面には研磨痕と敲打痕が見られる。

図70の256～259はSK1091から出土した遺物である。256は甕の口縁部で断面が逆L字形を成し、調整は摩耗のため不明である。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。257・258は甕の底部でどちらもほぼ平底を呈する。257は内面に指押さえが見られる。258は底部からの立ち上がりが一旦内側

III. 竹ノ下遺跡

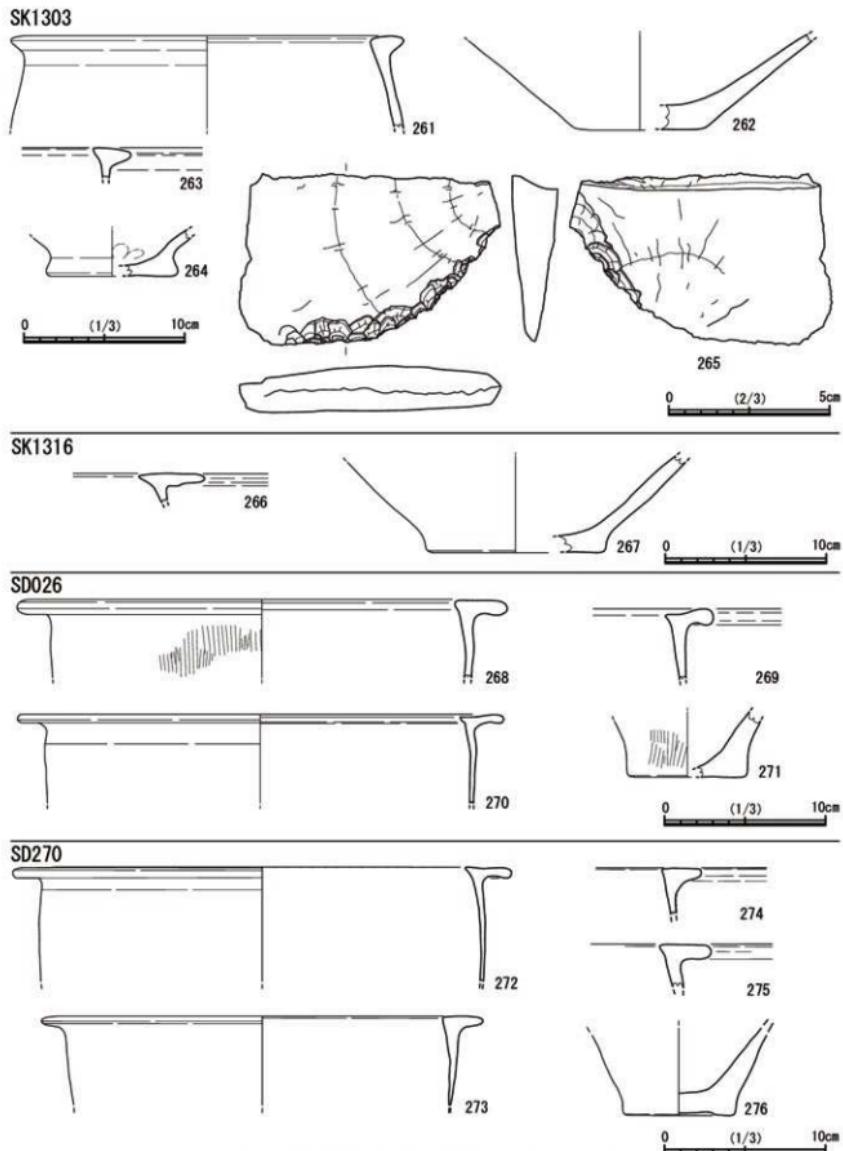


図 71 SK1303・1316・SD026・270 出土遺物

に屈曲しているタイプで古い様相を呈している。前期の板付式段階のものと思われる。259は鉢の口縁部である。口唇部下に緩い刻目の凸帯が一条巡る。前期初頭～前半の夜白II式段階のものと思われる。

図70の260はSK1184から出土した壺の底部と思われる。やや厚手の平底タイプである。中期段階ではあると思われるが詳細は不明である。

図71の261～265はSK1303から出土した遺物である。261・263は甕の口縁部である。261は断面三角形の口縁部で調整は摩耗により不明である。中期初頭～前葉の城ノ越式～須久I式段階のものと思われる。263は断面逆L字形～T字形の口縁部で調整は摩耗により不明である。中期後葉の須久II式古段階のものと思われる。262は壺の底部である。平底のタイプで胴部に向けて直線的に開く。264は甕の底部である。平底を成し、立ち上がりで一旦内側に屈曲して胴部に向かって開く。内面には指押さえが見られる。前期の板付式段階のものと思われる。265は安山岩製のスクレイバーである。分厚い板状の剥片を素材とし、上半部が折れて欠損している。縁辺には荒く大まかな剝離を施した後細かな調整を行っている。一部裏面にも二次加工を施している。

図71の266・267はSK1316から出土した遺物である。266は甕の口縁部である。内面への突出が顕著で、口唇部も外方向に長く伸びる断面T字形の形態である。中期後葉の須久II式段階のものと思われる。267は壺及び鉢の底部と思われる。器壁はそれほど厚くなく、平底を呈している。底部末端で一度真上に立ち上がり、その後胴部に向けて直線的に開く形を成している。調整は摩耗のため不明である。

図71の268～271はSD026から出土した遺物である。268～270は甕の口縁部である。口唇部が厚手のタイプ(268・269)と薄手のタイプ(270)がある。内面への突出が見られることから断面T字形のタイプである。調整は摩耗により不明な部分が多いが268の外面で縦方向のハケメが見られる。中期後葉の須久II式段階のものと思われる。271は甕の底部である。やや厚手の平底で外面に縦方向のハケメが見られる。

図71の272～276はSD270から出土した遺物である。272～275は甕の口縁部である。断面三角形に近い逆L字形のタイプ(274)から逆L字形タイプ(273)、やや内面に突出し始めた逆L字形タイプ(275)、そして内面への突出が明確になるT字形タイプ(272)とバリエーションが豊富である。調整は摩耗により不明である。中期前葉(須久I式段階)～中期後葉(須久II式段階)のものと思われる。276は甕の底部である。やや厚手のやや上げ底タイプで、調整は摩耗のため不明である。

図72の277～282はSD540から出土した遺物である。277と278は甕の同一個体と思われるが胴部が僅かに接合しない。口縁部は内面にやや突出が見られるが口唇部はあまり伸びないタイプで逆L字形の範疇の形態と思われる。胴部はあまり張らず、底部は厚手の上げ底タイプである。調整は摩耗により不明な点が多いが外面上半部に縦方向と横方向のハケメが施されている。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。279・280は甕の口縁部である。断面逆L字形を呈し、280は口唇部に刻み目が施され、肩部に凸帯が一条巡る。その他の調整は摩耗のため不明である。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。281は鋤先状口縁壺の口縁部である。口唇部が回んでおり内面への突出はやや緩い。頭部にむけて内湾する。調整は摩耗のため不明である。口縁部の上端部は短い。中期前葉(須久I式段階)のものと思われる。282は粘板岩製の石鎌である。上半部を欠損しており、また縦方向に筋理に沿って割れている。

図72の283はSD625から出土した甕の口縁部である。断面T字形を呈し調整は摩耗のため不明である。中期後葉の須久II式段階のものと思われる。

図72の284はSD800から出土した壺及び鉢の底部と思われる。一定して厚みで丸底を成す。内面には指押さえが見られる。後期の中頃、千住式段階のものと思われる。

図72の285～288はSD1035から出土した遺物である。285・286は甕の口縁部である。断面三角形～

III. 竹ノ下遺跡

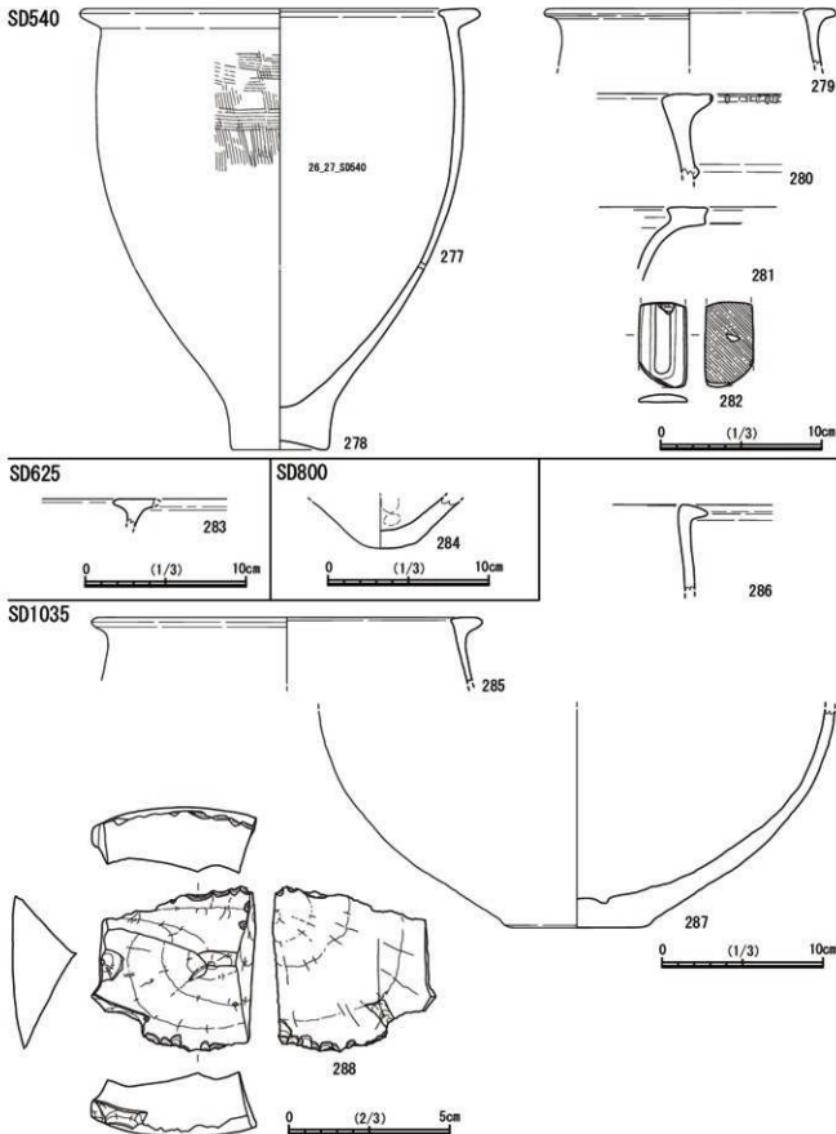


図 72 SD540・625・800・1035 出土遺物

逆L字の中間的な形態を呈し、調整は摩耗のため不明である。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。**287**は鉢の底部から胴部の破片である。底部は平底で胴部に向かってやや内湾しながら立ち上がり、胴部付近で丸みを帯びる。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。**288**は安山岩製のスクレイバーである。分厚い不定形な剥片を素材とし、上下両端部に細かな調整が施されている。左側縁は折れて欠損している。素材剥離時の剥離面が正面に二面残っており、その剥離方向からランダムな剥片剥離を行っていたことが窺われる。

図73の**289～291**はSJ035の甕棺である。**289**と**290**は同一個体であるが接合しなかつたため個別に図化している。上甕として使われた素口縁の広口壺である。口縁端部はやや圓形に整形され、歪んでいる。胴部はやや丸みを帯びたソロバン型を呈し、底部はやや丸みのある平底である。調整は摩耗が激しく不明である。**291**は下甕として使われた甕である。口縁部は断面逆L字形だがやや内側に突出する。胴部はあまり張らず、底部は平底である。調整は摩滅が激しく不明である。中期後葉の須久II式段階のものと思われる。

図74の**292・293**はSJ365の甕棺である。**292**は上甕の甕である。断面逆L字形たがやや内面に突出し、胴部はあまり張らない。底部は平底である。調整は摩滅が激しく不明である。**293**は下甕の甕である。大きさとしては中型で、口縁部はやや垂れさがる。胴部に三角凸帯が一条巡る。底部は平底である。調整は摩耗が激しく不明である。中期後葉の須久II式段階のものと思われる。

図75の**294・295**はSE367から出土した遺物である。**294**は甕の胴部片である。大型の甕棺の扁平幅広凸帯の部分で、斜行する櫛歯状のキザミが施されている。終末期の惣座式段階のものと思われる。**295**は壺の底部片である。平底と思われるが小片にて詳細は不明である。

図75の**296**はSA1485から出土した甕の口縁部である。断面逆L字形からT字形の中間的なものと思われるが、小片につき詳細は不明である。

図75の**297～314**はSX120から出土した遺物である。**297～299**は甕の口縁部である。断面逆L字形のもの(**297・298**)から内面にやや突出するT字形のもの(**299**)がある。調整は摩耗が激しく不明である。中期後葉(須久II式段階)のものと思われる。**300**は鈎先状口縁壺の口縁部である。内面への突出は緩い。**301**は甕の底部である。やや厚手の平底で、調整は摩耗が激しく不明である。**302**は壺の底部である。平底であるが、若干上げ底である。調整は外間にミガキが、内面に指押さえが見られる。**303**は高壺の脚部である。端部はやや圓形に整形し、調整は摩耗が激しく不明である。**304**は器台の脚部と思われる。内面端部に指押さえが見られる。**305**は安山岩製の石鍬である。回基無茎鍬で、両脚部と先端部を欠損する。調整は裏面がやや粗く大まかな剥離が施されている。**306**は黒曜石製のスクレイバーである。原石から初期段階に剥離したやや厚手の横長剥片を素材としている。そのため裏面に原礫面が見られる。本来はこちらが正面となるが、主要剥離面に対して二次加工が集中しているため逆とした。左側縁が欠損している。**307**も黒曜石製のスクレイバーである。縦長剥片を横位に用いている。主に右側縁と下端部に細かな調整を施している。**308**は黒曜石製の二次加工剥片である。剥離面の状況から残核の転用の可能性もある。部分的な二次加工が施されている他、上端部の一部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。**309**は黒曜石製の二次加工剥片である。不定形な剥片を素材とし、上下両端に調整が施されている。上端部と右側縁に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。**310**は黒曜石製の使用痕剥片である。分厚い縦長剥片であり、左側縁の裏面に細かな剥離が見られる。**311**は安山岩製の二次加工剥片である。厚手の不定形な剥片を素材とし、下端部に大まかな剥離を行った後細かな調整を行っている。また、使用痕と思われる微細な剥離もみられる。**312**は安山岩製の剥片である。風化が激しく剥離面が見にくいため板状の不定形剥片である。部分的に擦痕が見られるが使用によるものか、加工によるものかは不明である。

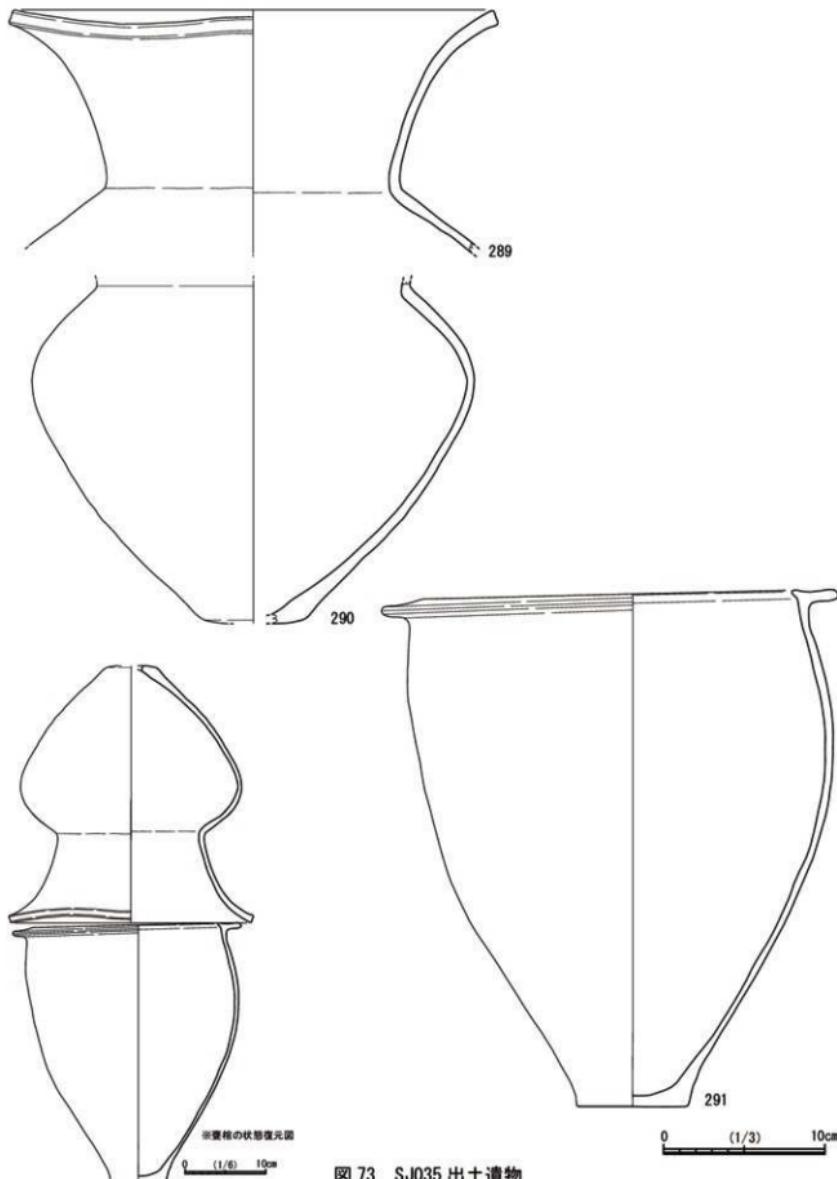
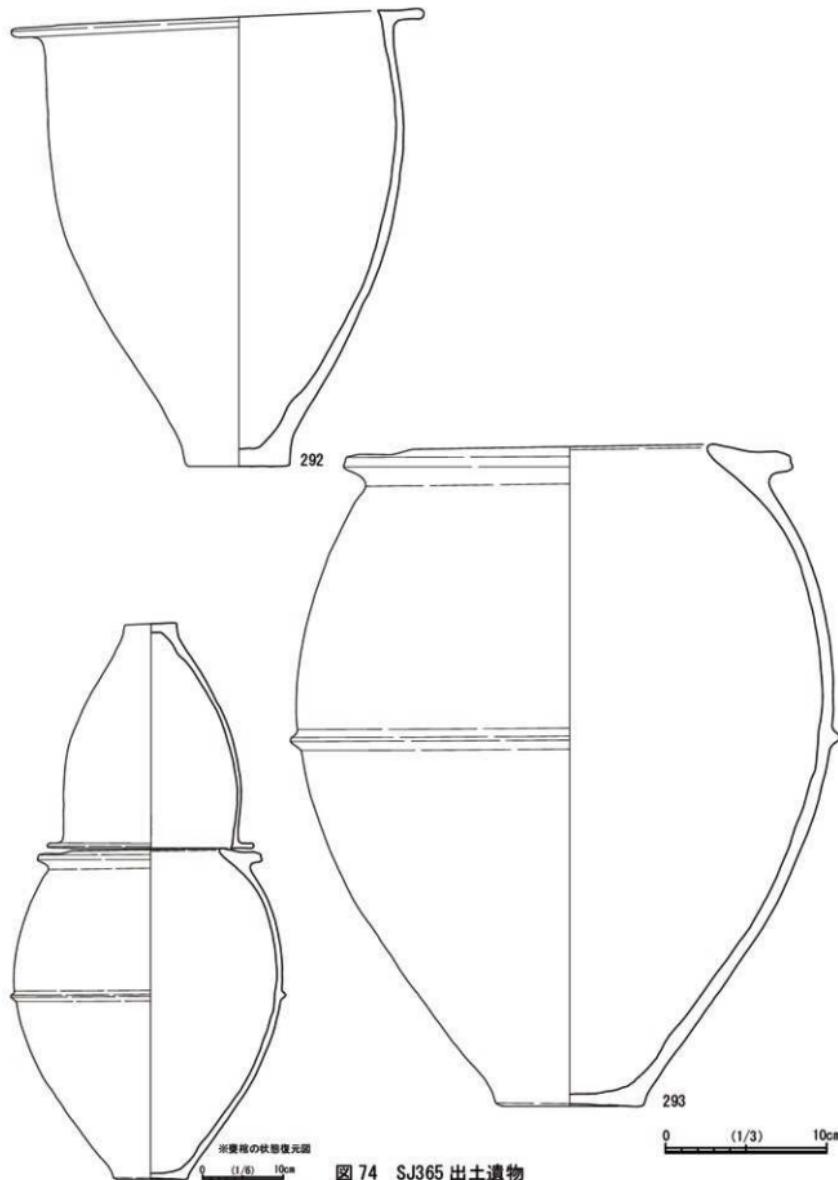


図 73 SJ035 出土遺物



III. 竹ノ下遺跡

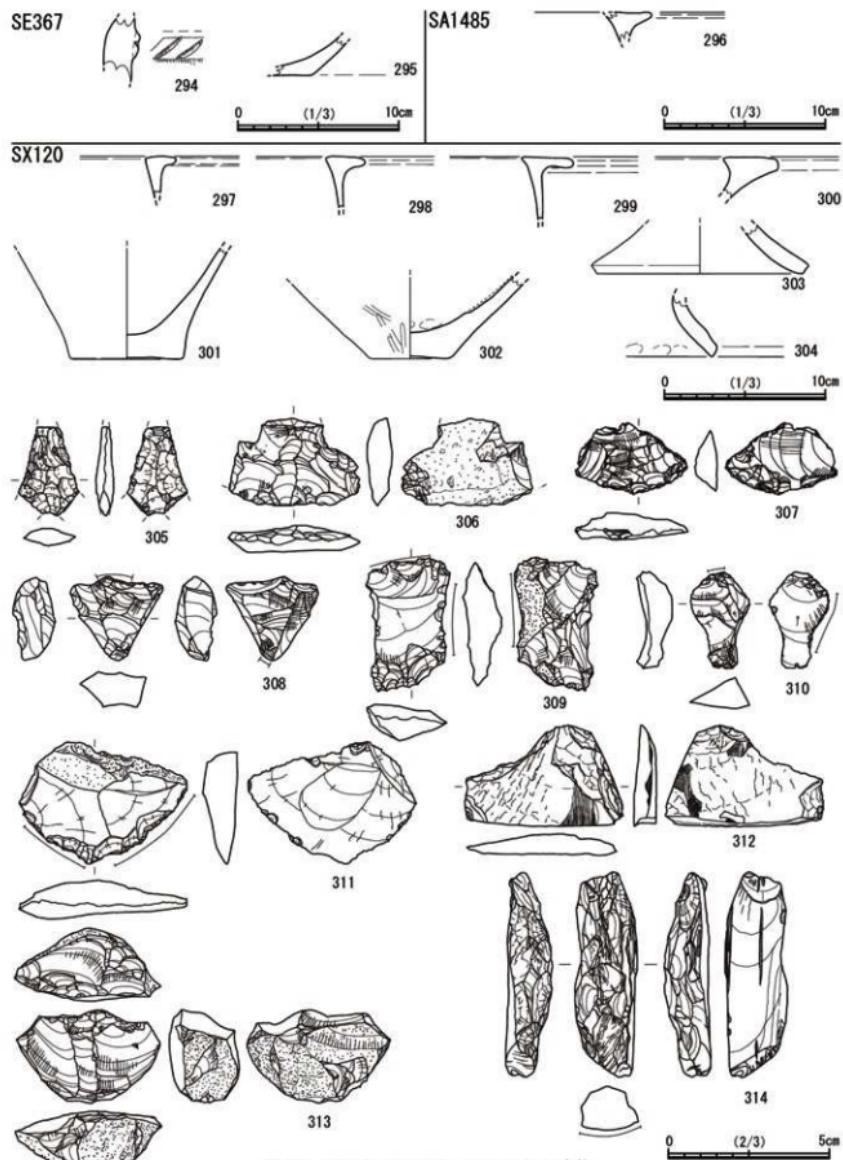


図 75 SE367・SA1485・SX120 出土遺物

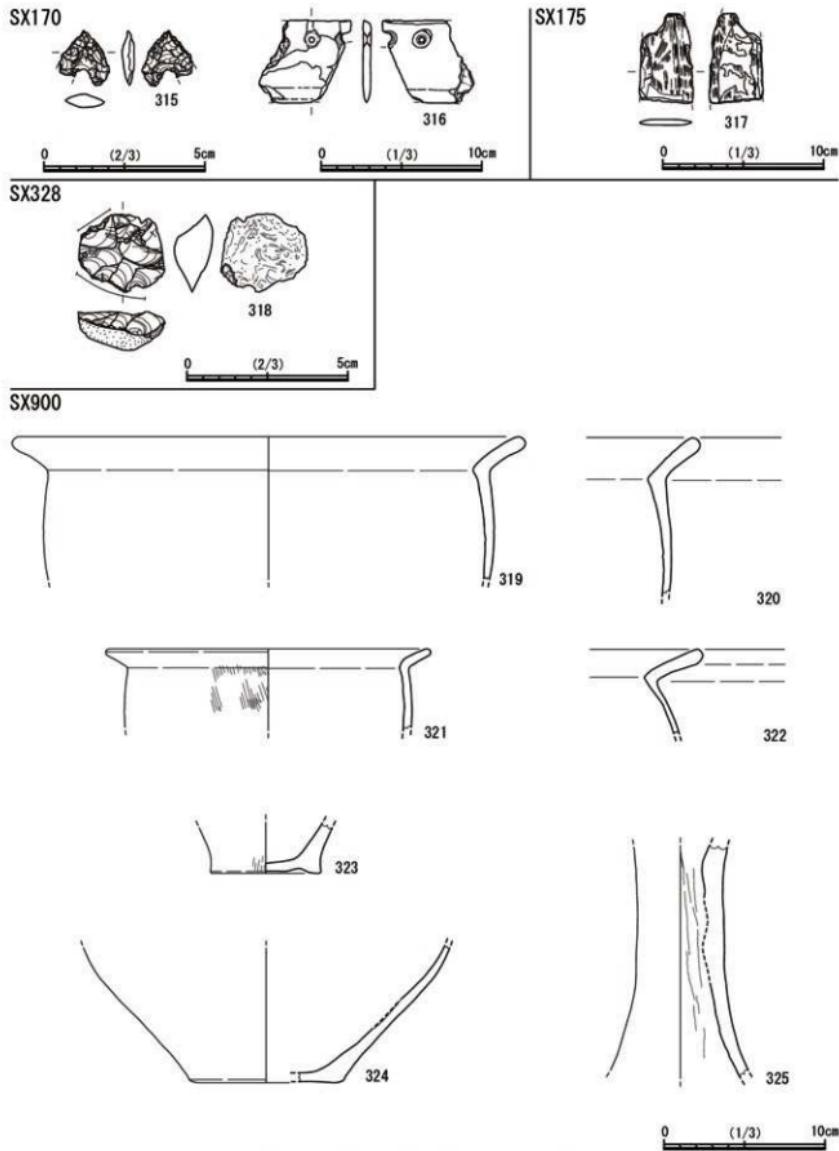
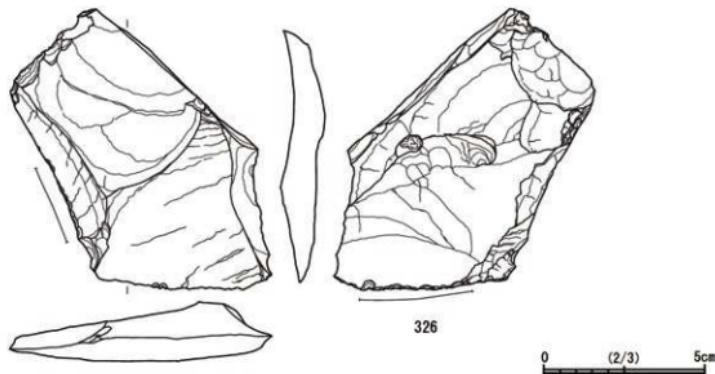
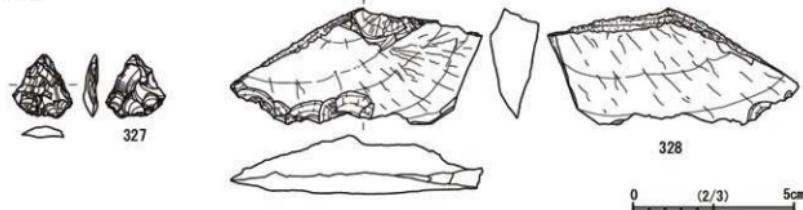


図 76 SX170・175・328・900 出土遺物

SX1250



SX1310



その他

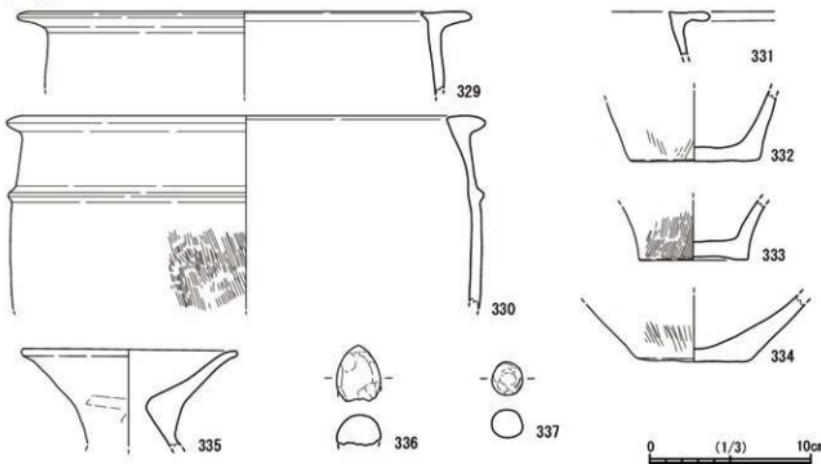


図 77 SX1250・1310・その他(1) 出土遺物

ある。313は黒曜石製の石核である。水和層の発達から旧石器時代の石器の可能性も残る。原礫面の状態から拳大の原石であったと思われる。打面は副剥離打面であるが剥離の方向は一つである。作業面側から打面調整が施され、やや幅広の縦長剥片を剥離していたと考えられる。314は頁岩製の石斧である。分厚い縦長剥片を素材とし、正面の稜上から左右に粗く大まかな剥離を行っている。未完成と思われる。

図76の315・316はSX170から出土した遺物である。315は黒曜石製の石鏨である。回基無茎鏨で基部の抉りがやや深く、両側縁はやや丸みを帯びる。表裏とも押圧剥離を連続的に施した後、細かな調整を行っている。左脚部が欠損している。316は安山岩製の石包丁である。正面の風化が激しく、研磨痕や擦痕等は確認できない。両側面が欠損している。上端部は平たく加工され、下端部に刃部が形成されている。穿孔が二つ見られ、表裏両方から穿孔が行われている。

図76の317はSX175から出土した粘板岩製の石剣である。先端と下半部が欠損している。風化により加工が不明瞭であるが、全体的に擦痕が見られ、両側縁は刃部が形成されている。

図76の318はSX328から出土した黒曜石製の二次加工剥片である。原石の段階で剥離された分厚い剥片を素材とし、剥離面側に大まかな剥離を行った後、一部細かな調整を施している。下縁辺と左側縁上半部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。裏面は原礫面である。

図76の319～325はSX900から出土した遺物である。319～322は甕の口縁部である。断面が「く」の字形を呈する口縁部で、調整は摩耗が激しく大部分が不明であるが、321の外縁の頭部から肩部にかけて縦方向のハケメが見られる。323は甕の底部である。基本的には平底であるが、一部上げ底になっている。外面に僅かではあるが縦方向のハケメが見られる。324は甕の底部である。底面は平底で、胴部に向かって直線的に開き、胴部下端からやや丸みを帯びる。調整は摩耗が激しく不明である。325は高壊の脚部である。上半部の壊部と下端部を欠損しているが、長く伸びるタイプの脚部である。外面の調整は摩耗のため不明である。内面には絞り込んだ時のしわのような痕跡が見られる。

図77の326はSX1250から出土した安山岩製の使用痕剥片である。板状の不定形な剥片を素材とし、左側縁下半部と裏面端部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。

図77の327・328はSX1310から出土した遺物である。327は黒曜石製の石鏨未完成である。回基無茎鏨と思われるが、調整中の資料であり、表裏の一部に素材剥離時の剥離面が残っている。左側縁からの調整が顕著で、脚部や基部の抉りは浅い。328は安山岩製の二次加工剥片である。分厚い横長剥片を素材とし、下端部の左側に粗く大まかな剥離が施されている。また、上端部の一部にも粗い調整が施されている。

図77の329～337はピットや包含層など上記掲載遺構以外の出土遺物である。329～331は甕の口縁部である。329は断面が内側に突出するT字形を呈し、調整は内外面ともに摩耗しており不明である。中期後葉の須久II式段階のものと思われる。330は断面三角形を成し、肩部に凸帯が一条巡る。外面に縦方向のハケメが見られる。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。331は断面逆L字形の口縁部で口唇部が伸びる。調整は内外面共に摩耗により不明である。中期前葉の須久I式段階のものと思われる。332・333は甕の底部である。両者とも平底であるが、333はやや上げ底になっている。両者とも外面に縦方向のハケメが見られる。334は甕の底部である。やや凹凸があるが平底を成し、胴部に向かって直線的に開く。外面には縦方向のハケメが見られる。335は器台の上半部と思われる。胴部は比較的まっすぐ立ち会がり、口縁部に向かって直線的に開き端部でやや外反する。胴部のくびれ部は分厚く突出し、「く」の字状を呈する。外面に横方向の工具ナデが見られる。336は土製の投弾である。下半部を欠損するが、上半部と同じく砲弾のようにやや尖ると思われる。正面はナデ調整が施されている。337は土製の土弾であるほぼ円形を呈し、外面はナデ調整である。



図 78 その他の出土遺物（2）

図 78 の 338 ~ 356 もピットや包含層などから出土した遺物である。以後、図 87 の 451 まで前述と同じ出土遺物である。338 は安山岩製の石包丁である。右半分が欠損している。中央に穿孔が二箇所穿たれている。穿孔は表裏の両方向から施されている。折れ面に研磨痕が見られることから、折れた状態で再利用した可能性もある。339 は堆積岩系の石包丁である。石材は頁岩か粘板岩と思われる。大部分が欠損しており、中央部の穿孔部が残存する。下端部の刃部は正面からの片刃である。穿孔は正面からが主体的であるが、裏面からも僅かに穿孔を行っている。340 は凝灰岩製の石包丁である。この資料も大部分が欠損している。穿孔部が僅かに残っているが、その部分から折れている。下端部の刃部は正面からの片刃である。折れ面に僅かな擦痕が見られる。341 は安山岩製の石包丁である。こちらの資料も大部分が欠損しており、僅かに穿孔部が残る。下端部の刃部は表裏から研ぎだされた両刃となっている。342 は凝灰岩製の石包丁である。右半分が欠損しており、穿孔部が僅かに残る。正面風化が激しく、研磨痕や擦痕等が確認できない。343 は安山岩製の石鎌である。下端部はほぼ直線的な刃部で、上端部が弧状を成す。先端部が欠損し、基部側の大部分が欠損しているため、全体の形状が不明である。344 も安山岩製の石鎌である。下端部に直線的な刃部が表裏両面から研ぎだされ、上端部は弧状に整形されている。やや細身の石鎌と思われる。345 は砂岩製の扁平片刃石斧である。全体的に制作時の研磨痕が縦方向から斜め方向に見られる。上半部は欠損する。346 は粘板岩製の扁平片刃石斧である。右側面と左側線上端部を欠損する。全体的に縦方向または斜め方向の研磨痕が見られる。347 は粘板岩製の柱状片刃石斧と思われる。概理に沿って左右両側面が割れており、大部分が欠損しているため全体の形状が不明であるが、大型の石斧と思われる。348 は安山岩製の石斧である。硬質で暗灰色を呈し、全体的に敲打痕が見られる。刃部は大きな剥離によって形成されており、基部を欠損する。349 は玄武岩製の磨製石斧である。報型の形態を成している。扁平な礫を素材とし、縁辺は細かな剥離が施されている。刃部は欠損の剥離が見られる。350 は安山岩製の磨製石斧である。大形の始刃石斧と思われるが、刃部が大きく欠損している。右側縁上半部に大きな剥離が施され、左側縁や基部付近は細かな剥離が行われている。全体的に風化が激しく研磨痕が不明瞭である。351 は玄武岩製の磨製石斧である。報型を呈し、始刃である。右側縁から数回の剥離により調整を行った後、刃部を磨きだしていると思われるが、風化が激しく詳細は不明である。352 は砂岩製の砥石である。砥石の剥離辺であり、小口面に僅かに使用面が残る。353 は砂岩製の砥石である。厚手で板状の礫を使用していたと思われるが、下半部を欠損している。正面中央には縦方向に溝が 2 条見られる。354 は砂岩製の砥石である。小形の棒状の砥石で、左側面が顕著に使用され、すり減ってやや凹んでいる。355 は砂岩製の砥石である。板状の砥石であるが、欠損と剥落により全体の形状は不定形なものとなっている。正面に縦方向の溝があり、それと交差するように横方向の溝が見られる。356 は砂岩製の砥石である。大形の板状を呈する砥石と思われるが、表裏共に顕著な使用による擦痕が見られ、両面から凹みが見られる。端部は欠損している。

図 79 の 357 ~ 386 はピットや包含層などから出土した石器である。357 は黒曜石製の石鎌である。回基無茎鎌で、基部の抉りが深く、右脚部が欠損している。調整は丁寧で縁辺を綺麗に整えている。358 は黒曜石製の石鎌である。回基無茎鎌で、左脚部が欠損している。両側縁は鋸歯状になり、裏面に主要剥離面が残る。359 は黒曜石製の石鎌である。回基無茎鎌で、側縁がやや内湾する。右脚部が欠損している。360 は青灰色黒曜石製の石鎌である。回基無茎鎌で、両側縁がやや内湾し、基部の抉りがやや深い。両脚部の端部が欠損している。361 は黒曜石製の石鎌である。回基無茎鎌で、先端と両脚部が欠損している。基部の抉りは浅く、両側縁がやや内湾する。362 は安山岩製の石鎌である。回基無茎鎌で、基部の抉りは浅い。先端と両脚部の端部が僅かに欠損している。両側縁はほぼ直線的である。363 は黒曜石製の石鎌である。回基無茎鎌で、基部の抉りは浅い。裏面に主要剥離面が大きく残り、縁辺からの細か

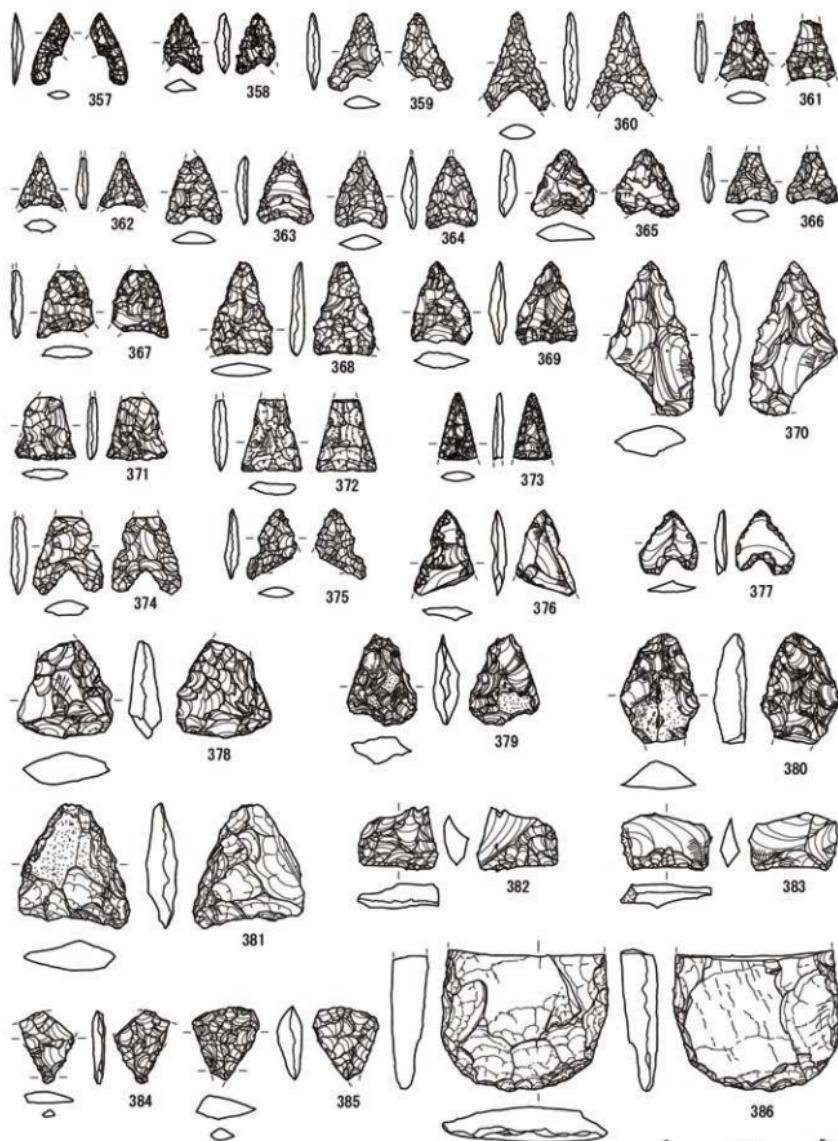


図 79 その他の出土遺物（3）

な調整のみ施している。先端部が僅かに欠損している。364は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で、基部の抉りは浅く、両側縁はやや丸みを帯びる。先端部が僅かに欠損している。365は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で、基部の抉りが直線的である。右脚部が欠損しているが、両側縁はほぼ直線的で全体として正三角形に近い。正面には素材剥離時の剥離面が、裏面には主要剥離面が残っている。366は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で、基部の抉りは浅く、先端が欠損している。両側縁はやや内湾気味である。367は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で、先端と右脚部が欠損している。両側縁は上半部でやや丸みを帯び、下半部は直線的である。368は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で、基部の抉りはほぼ無く、若干内側に湾曲する程度である。左脚部の先端が欠損しており、両側縁は上半部が直線的で、下半部がやや丸みを帯びる。369は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で、基部の抉りが浅いが製作途中なのか、中央部が除去しきれていない。側縁からの調整も粗く、ややいびつである。370は黒曜石製の石鏃である。大形の石鏃であるが、形態については左下半部が大きく欠損しており、不明である。調整は両側縁から大まかな剥離を行った後、細かな調整を裏面側に施している。371は黒曜石製の石鏃である。基部を平らに調整する平基無茎鏃で、先端部と左側縁の下半部を僅かに欠損する。372は安山岩製の石鏃である。平基無茎鏃で、綺麗な縦長の二等辺三角形を呈しているが、先端部が欠損している。大まかな剥離を両側縁から施した後、細かな調整を行っている。373は黒曜石製の石鏃である。基部が欠損しているため回基なのか平基なのか不明である。調整は細かく丁寧に施されており、両側縁が直線的に整えられている。正面の中央よりやや下部に擦痕が見られる。374は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で基部の抉りが直線的で深い。裏面には主要剥離面を残すが、調整は比較的大丁寧である。右側縁中央部に抉り込むような剥離が見られる。先端部が欠損している。375は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃と思われるが、右脚部が欠損しており詳細は不明である。左側縁中央部に抉るような調整が施されている。376は黒曜石製の石鏃である。基部が欠損しており形態は不明である。表裏共に素材剥離時の剥離面を大きく残しており、調整は正面の中央に右側縁から大きな剥離が一回行われた後、縁辺に細かな調整が施されている。縄文時代後期から晩期に見られる剥片鏃の可能性もある。377は黒曜石製の石鏃である。回基無茎鏃で、基部の抉りはやや深い。製作途中なのか、左右の脚部が非対称となっている。表裏に残る剥片剥離時の剥離面から、縦長剥片を素材としていることが分かる。素材となる剥片を剥離する前は打面を180°転位している。二次加工は縁辺のみに細かな調整を行っているだけであり、縄文時代後期から晩期の剥片鏃の可能性が高い。378は黒曜石製の石鏃未製品である。素材剥離時の剥離面が正面左下半部に残っているが、その他は二次加工による調整が施されている。厚みが除去しきれていない。379は黒曜石製の石鏃未製品である。表裏共に原礫面が僅かに残っていることから、元々小さな原石を素材とし、大きな剥離によって厚みを減らしつつ、細かな剥離で石鏃への形態へ近づけていくものと考えられる。380は黒曜石製の石鏃未製品である。裏面は比較的大まかな剥離によって器壁を平らに整えているが、正面は上半部にのみ大まかな調整を行った後細かな剥離を施している。下半部は原礫面が残り、基部が欠損している。全体の形態から有茎式の石鏃と考えられる。381は安山岩製の石鏃未製品である。回基無茎鏃と思われ、大型の石鏃である。両面に原礫面を残し、裏面には荒削段階の大まかな剥離が見られる。382は黒曜石製の二次加工剥片である。石鏃のような二次加工が施されており、裏面左側には大きな剥離面が残る。石鏃作成途中の失敗品の可能性もある。383は黒曜石製の二次加工剥片である。縦長剥片を横位に用いて下縁に細かな調整を施す。石鏃を製作する初期段階の物の可能性もある。384は黒曜石製の錐である。つまみ部の一部を欠損しているものの、三角形状を呈する錐である。調整は表裏両面に石鏃様の調整を施し、器壁を薄く整えている。385は黒曜石製の錐である。こちらも同様の三角形状の錐で、特に裏面の調整が丁寧に行われている。先端部が欠損している。386

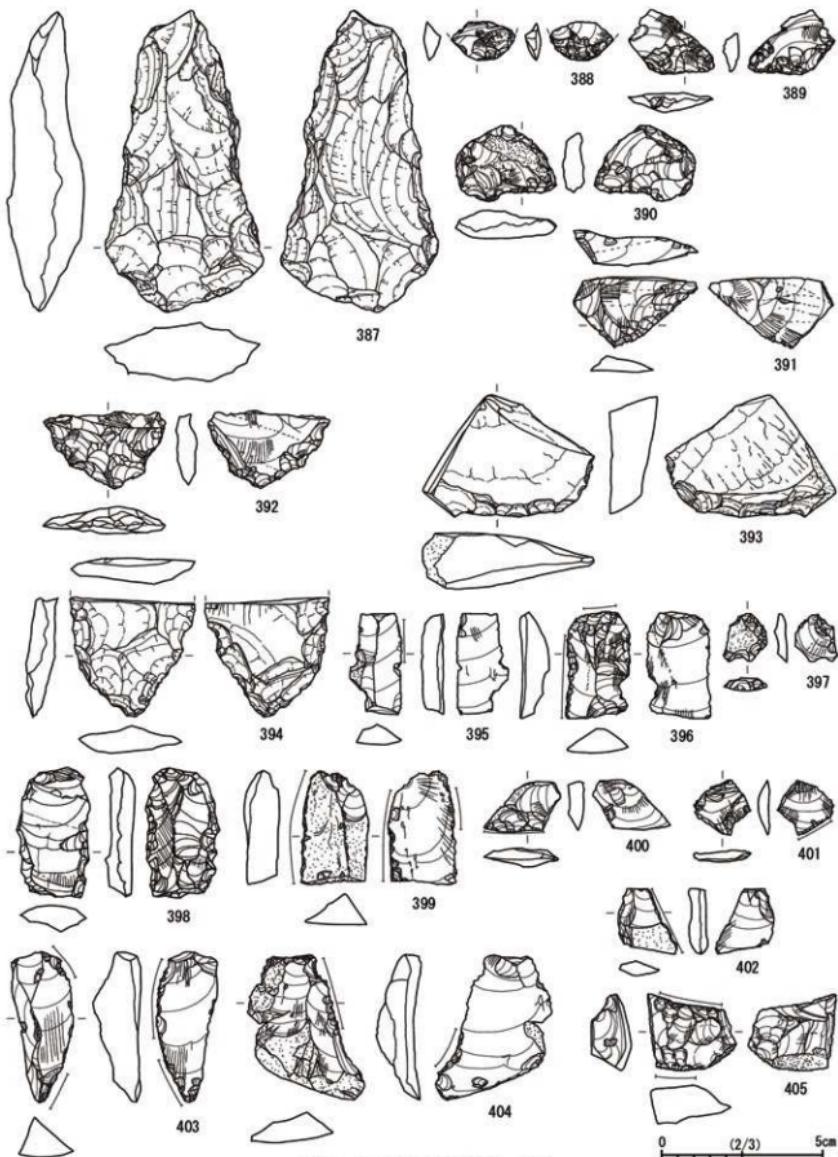


図 80 その他の出土遺物 (4)

は安山岩製の打製石斧である。板状の剥片を素材とし、縁辺から大まかな剥離を行った後、細かな調整を施している。上半部を欠損しているため全体的な形態は不明である。

図 80 の 387 ~ 405 もビットや包含層などから出土した遺物である。387 は安山岩製の打製石斧である。分厚い横長剥片を素材とし、大まかな剥離で全体を整えた後、細かな調整を施している。撥型を呈するが、刃部と基部がやや尖る。388 は黒曜石製のスクレイバーである。刃部のみの資料で、裏面への細かな調整が見られる。389 は黒曜石製のスクレイバーである。横長剥片を素材とし、打面側を刃部に設定しているため、打面側を丁寧に調整している。390 は黒曜石製のスクレイバーである。不定形剥片を横位に用いて縁辺に細かな調整を行っている。正面には原礫面が残っていることから、剥片剥離工程の初期段階で剥離された剥片である。下端部はやや抉り込むような調整が施されている。391 黒曜石製のスクレイバーである。分厚い縦長剥片を横位に用いて上半部を折断し、下半部正面の縁辺に細かな調整が施されている。左上半部の裏面縁辺にも細かな剥離が行われている。392 は黒曜石製のスクレイバーである。不定形な剥片を素材とし、正面に大まかな剥離を行った後、縁辺に細かな調整を部分的に施している。また裏面は縁辺のみ細かな調整が施されている。半円形の刃部が作られている。393 は安山岩製のスクレイバーである。分厚い板状の横長剥片を素材とし、打面側と左側縁を欠損しているが、故意に折断したのか、使用による折れなのかは不明である。縁辺にやや粗い調整が施され刃部が形成されている。394 は安山岩製のスクレイバーである。板状の剥片を素材とし、表裏共に大まかな剥離で形を成形した後、細かな調整を縁辺に施している。上半部が欠損しているため、側縁を刃部とするスクレイバーとしたが、打製石斧の可能性も残る。395 は黒曜石製の使用痕剥片である。表裏の素材剥離時の剥離面から石刀と思われる。打面と先端部が欠損しており、左側縁がやや不定形である。右側縁上半部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。396 は黒曜石製の使用痕剥片である。これも、石刀と思われる縦長剥片で、打面を残し、剥片剥離前の調整が打面から正面に行われており、左側縁に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。397 は黒曜石製の二次加工剥片である。小形の不定形な剥片を素材とし、正面には現礫面を残している。正面の右側縁と下端部に細かな調整を施している。裏面の主剥離面と風化が異なり、二重バティナを呈する。398 は黒曜石製の二次加工剥片である。縦長剥片を素材とし、両側縁に細かな調整を施している。先端部は欠損している。399 は黒曜石製の使用痕剥片である。不定形な剥片の両側縁に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。正面には原礫面が見られる。400 は黒曜石製の二次加工剥片である。不定形剥片を素材とし、正面端部に二位加工を施す。また使用痕と思われる微細な剥離もみられる。401 は黒曜石製の使用痕剥片である。小形の不定形剥片の端部裏面に微細な剥離痕が見られる。402 は黒曜石製の使用痕剥片である。不定形な剥片の右側縁に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。403 は黒曜石製の使用痕剥片である。縦長剥片の右側縁を中心に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。404 は黒曜石製の使用痕剥片である。背面に原礫面を有する縦長剥片で、右側縁を中心に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。405 は黒曜石製の二次加工及び使用痕剥片である。分厚い不定形な剥片を素材とし、上下の端部から大まかな剥離を施した後、細かな調整が行われている。また、その縁辺に微細な剥離もみられる。

図 81 の 406 ~ 418 もビットや包含層から出土した遺物である。406 は黒曜石製の二次加工剥片である。横長剥片を横位に用い、打面を右側面に置く。打面は原礫面で、そこから正面に 5・6 回のおおまかな調整剥離を行っている。407 は黒曜石製の使用痕剥片である。90° 打面転移して剥離された剥片で、正面の左側縁と裏面の下端部にそれぞれ使用痕と思われる微細な剥離が見られる。408 は黒曜石製の二次加工及び使用痕剥片である。角礫の調整剥片を素材とし、上端部や下端左側から大まかな剥離を行った後、上端部から細かな調整を施している。その上端部と下端部に使用痕と思われる微細な剥離が見られ

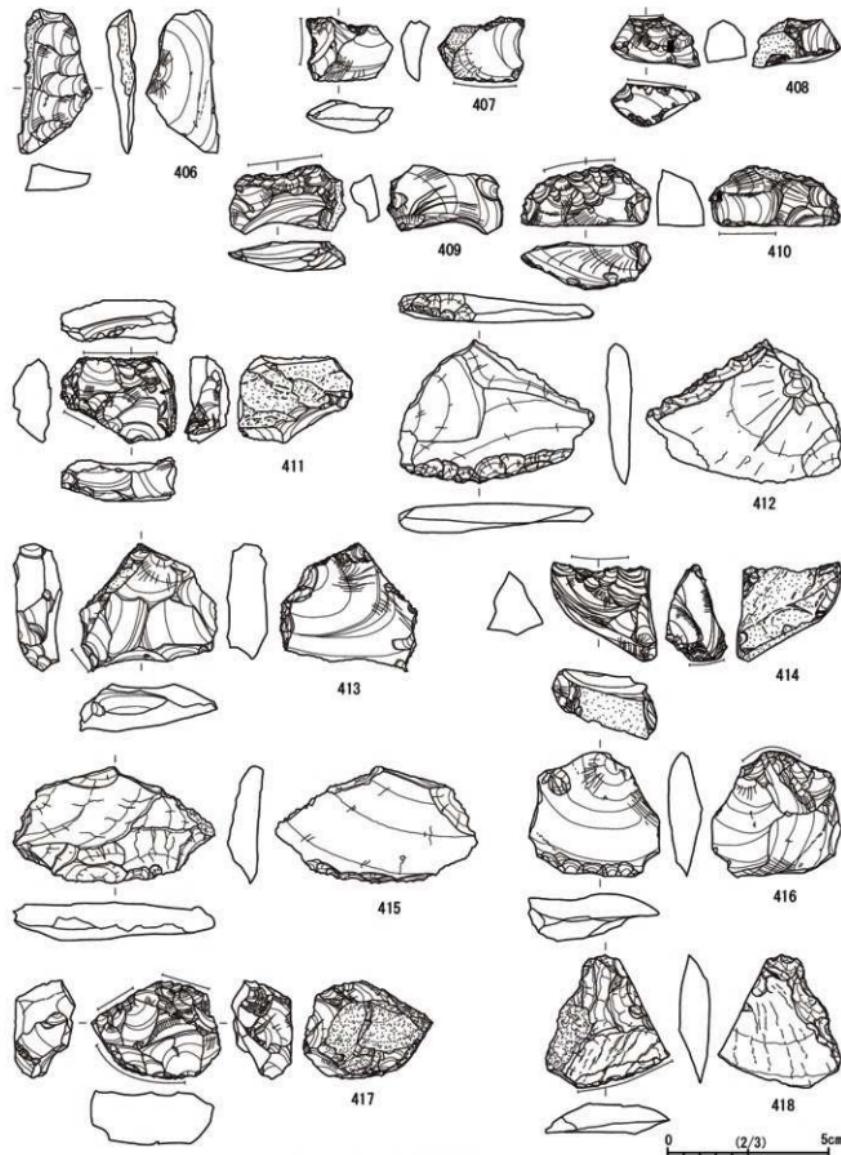


図 81 その他の出土遺物（5）

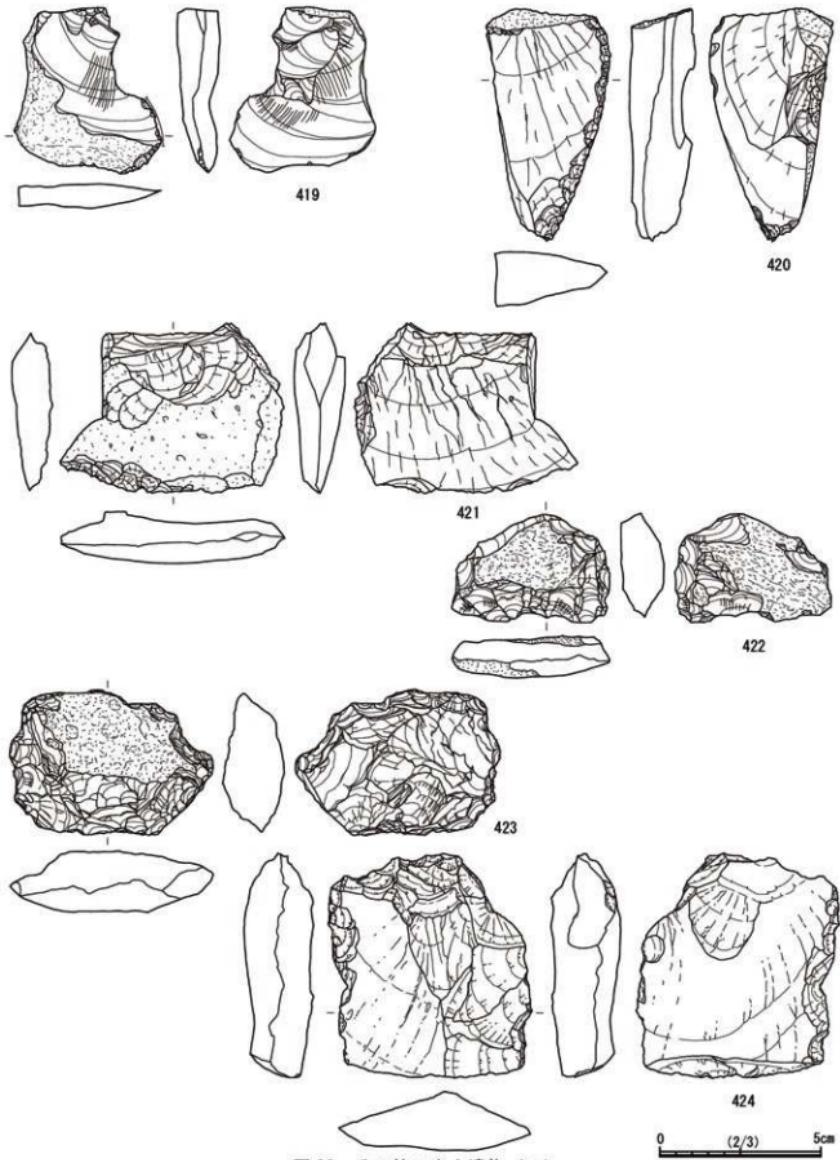


図 82 その他の出土遺物 (6)

る。409は黒曜石製の二次加工及び使用痕剥片である。不定形な剥片を素材とし、打面を右側縁に置き、下端部は欠損している。上端部に大まかな剥離を行った後細かな調整が行われている。また、その上端部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。410は黒曜石製の二次加工及び使用痕剥片である。分厚い幅広剥片を素材とし、正面と左側縁の両面に大まかな剥離が行われた後、細かな調整が施されている。また、その上端部と裏面下端部の左側に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。411は黒曜石製の二次加工及び使用痕剥片である。分厚い板状の剥片を素材とし、上下両端部を折断した後、そこから大まかな剥離を行った後、細かな調整を部分的に施している。また、右側面は下方向から大きな剥離で面を形成した後、下端部から調整を施している。裏面は原礫面である。上端部と下端左側に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。412は安山岩製のスクレイパーである。寸詰まりの剥片を素材とし、正面は下端に、裏面は上端部に、粗い大まかな剥離が行われている。また、打面部も二次加工が施されている。表裏の素材剥離時の剥離面構成から求心状の剥片剥離技術が使われている。413は黒曜石製の二次加工及び使用痕剥片である。不定形な剥片を素材とし、正面の上端部から大きな剥離が1回行われている他、右側縁の裏面に細かな調整が施されている。左側縁下端部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。414は黒曜石製の二次加工及び使用痕剥片である。分厚い不定形な剥片を素材とし、正面の上端部から大まかな剥離を行った後、細かな調整を施している。また、右側縁下端部にも細かな調整が施されており、その部分に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。裏面は原礫面である。415は安山岩製の二次加工剥片である。板状の幅広剥片を素材とし、打面を上に用いるが、除去されている。打面の左右には大まかな剥離が2回行われている。下端部に表裏とも粗い調整が施され若干鋸歯状の刃部を形成している。416は黒曜石製の二次加工剥片である。幅広剥片を素材とし、主要剥離面の端部と背面の上端部に細かな調整が施されている。打面は原礫面打面である。上端部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。417は黒曜石製の二次加工及び使用痕剥片である。分厚い板状の剥片を素材とし、正面に求心状の剥離を行った後、細かな調整が各側縁から施されている。また、右側面も大きな剥離を行った後、細かな調整が施されている。左側縁下半部も同様である。正面の上下両端部で部分的に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。418は安山岩製の使用痕剥片である。板状の不定形剥片で、下端部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。正面右側縁や左側縁の裏面に剥離痕が見られるが明瞭でない。

図82の419～424もピットや包含層等から出土した遺物である。419は黒曜石製の二次加工剥片及び使用痕剥片である。不定形な剥片を素材とし、原礫面打面を残す。右側縁下半部に細かな調整と使用痕と思われる微細な剥離が見られる。正面の素材剥離時の剥離面と原礫面の状況から、原石から2回目の剥離時に剥離された剥片を素材としていることが分かる。420は安山岩製に二次加工剥片である。打面を90°転位した剥片を素材とし、正面右側縁に連続した細かな調整が施されている。裏面には、原礫面の打面近くで中央縁辺に大まかな剥離の後、細かな調整は施している。下端部にも細かな調整が見られる。421は安山岩製の二次加工剥片である。分厚い板状の不定形剥片を素材とし、下端部の左側に細かな調整を施している。正面に原礫面を残し、打面は素材剥離時の衝撃によって欠損したと思われる。右側縁の裏面側にも若干調整が施されている。422は黒曜石製の二次加工痕のある石器である。表裏に原礫面を有することから、原石をそのまま素材としている。ほぼ全縁辺から加工が施されている。特に下端部と右側縁には大まかな剥離を行った後、細かな調整が部分的に施されている。423は安山岩製の二次加工剥片である。分厚い不定形剥片を素材とし、上端部の一部以外に調整が及ぶ。下端部と左側縁は大まかな剥離が行われ、右側縁と上端部の右側に細かな調整が施されている。右側縁はやや尖るようにならんが調整が施されている。また、裏面は各側縁から求心状の大まかな剥離を行った後、細かな調整を施し

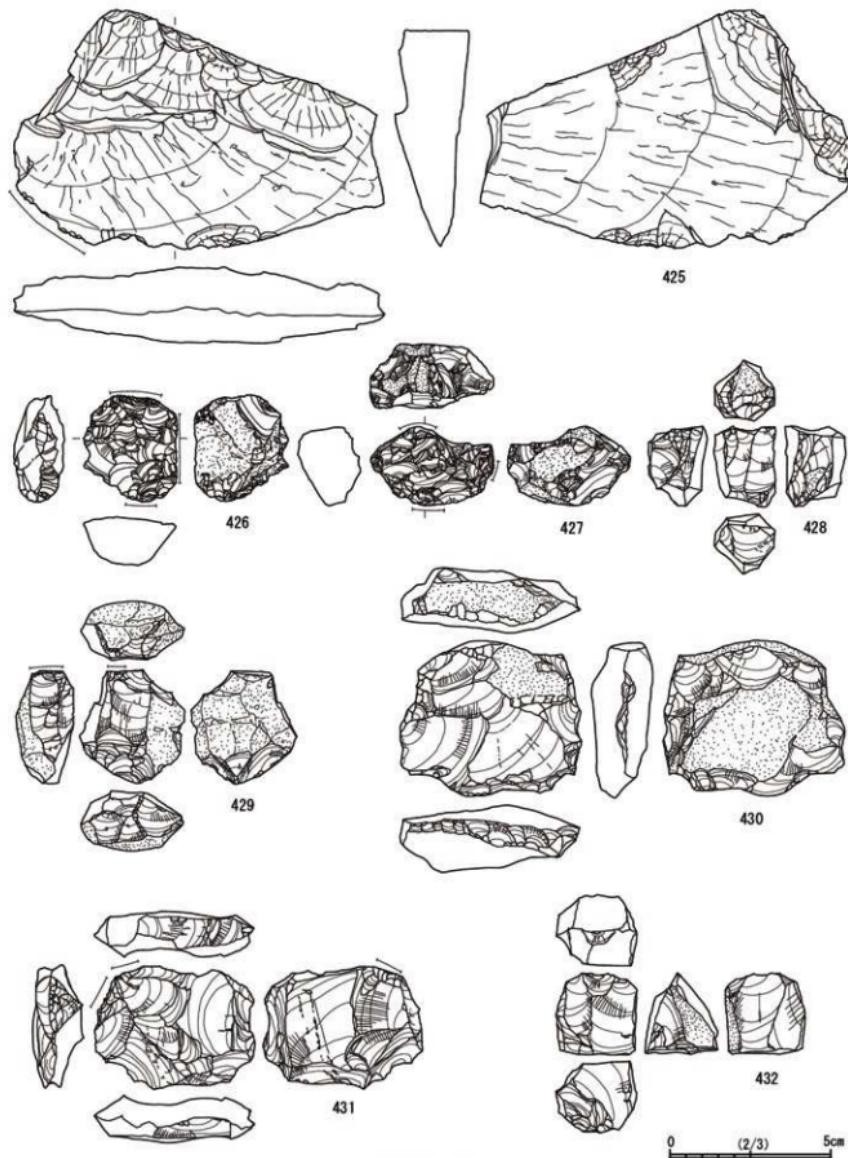


図 83 その他の出土遺物（7）

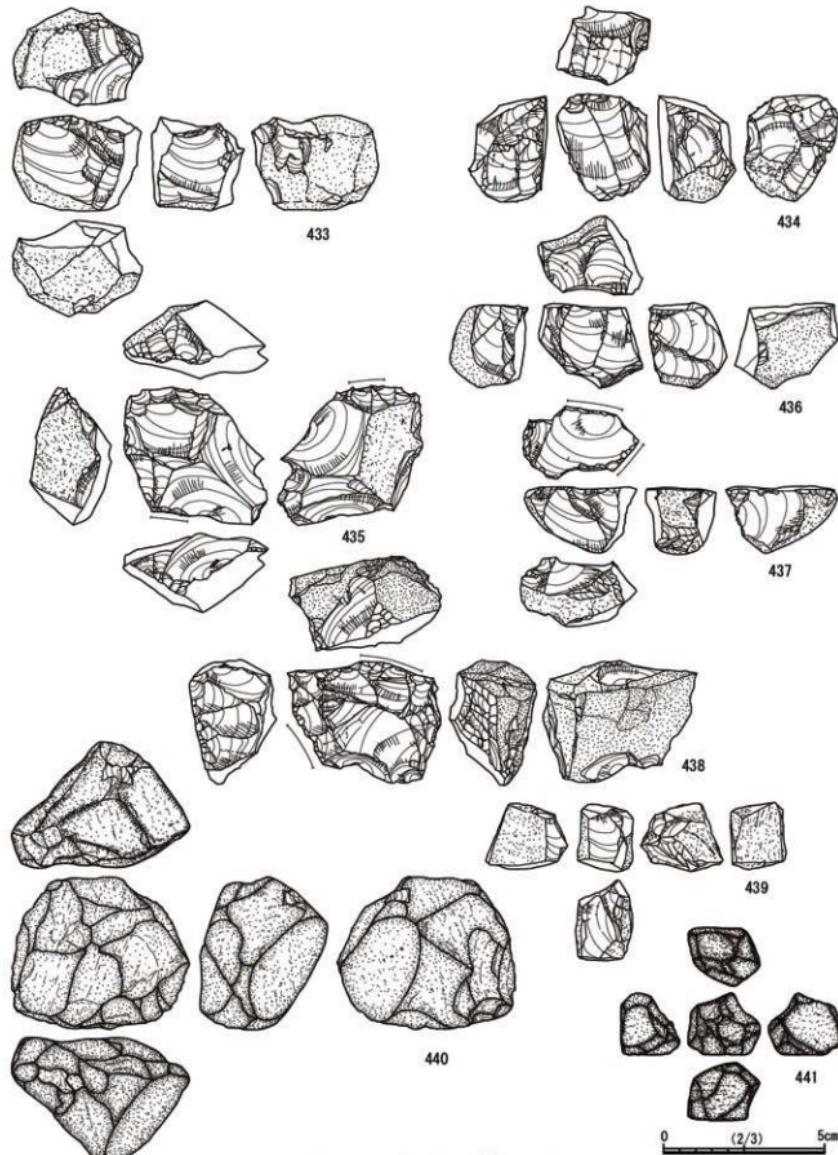


図 84 その他の出土遺物 (8)

ている。424は安山岩製の二次加工剥片である。大形の縦長剥片を素材とし、下半部が折損している。上端部は打面を除去するように調整が施されている。左側縁は細かな調整が、右側縁には粗く大まかな剥離が3回行なわれている。また、左側縁の裏面側にも調整が施されている。

図83の425～432もピットや包含層等から出土した遺物である。425は安山岩製の二次加工剥片及び使用痕剥片である。大形で分厚く90°打面転位している剥片を素材とし、正面の上端部を中心に大まかな剥離を行なった後、細かな調整を施している。下端左側に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。426は黒曜石製の二次加工剥片及び使用痕剥片である。正面は大まかな剥離が求心状に施され、主要剥離面がほぼなくなっている。その後細かな調整が施されている。裏面には原礫面が多く残る。上端部と右側縁、下端部の一部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。427は黒曜石製の二次加工剥片及び使用痕剥片である。ほぼ全面に調整が及んでおり、上面と裏面に原礫面が残る。特に正面の右側縁と下端部には細かな調整が施されている。また上下両端部の中央付近と右側縁中央付近に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。428は黒曜石製の石核である。サイコロ状の残核で、打面には原礫面が残るが打面調整を行なってから最後の剥片剥離を行なっている。作業面にも調整が見られる。429は黒曜石製の石核である。角礫の原石を利用した石核で、打面は原礫面のまま小形の縦長剥片を剥離しているが、途中でステップを起こしている。正面には打面側から大きな剥離が行われた後、下端から表裏共に剥離が行なわれている。下端の剥離は石核調整剥離と思われる。裏面は原礫面が残る。430は黒曜石製の石核である。扁平な石核で、原礫面を多く残すが、正面は4・5枚の剥片剥離が進んでいる。裏面は打角が取れなかつたのか細かな調整状の剥片剥離となっている。その後、剥片が剥離できなくなったものと思われ、下端部に細かな調整を施し、スクレイバーに転用していると考えられる。使用時に擦れたのか、稜線に摩滅が見られる。431は黒曜石製の石核である。板状の剥片を利用して打面は設けず、縁辺から求心状に剥片を剥離している。正面左側縁上半部には剥片剥離前の調整なのが細かな剥離が見られる。432は黒曜石製の石核である。打面は設けず縁辺から表裏で小形の縦長剥片及びや幅広の縦長剥片を剥離している。下端部は平坦な面を有し、一部に細かな調整が施されている。

図84の433～441もピットや包含層等から出土した遺物である。433は黒曜石製の石核である。亜角礫の原石を用いた石核で、打面を複数の剥離によって作出し、幅広剥片を正面と側面で一枚づつ剥離している。その後、作業面の調整と頭部調整を行なっている。その他の面には原礫面が残っている。434は黒曜石製の石核である。サイコロ状を呈する石核で、やや角度のある打面を作出した後、2枚の縦長剥片を剥離している。左側面にも縦長剥片を剥離した痕跡が残るが、その後の調整剥離により上半部が調整加工されている。右側面には正面の作業面を打面とし、縦長剥片が2枚剥離されている。裏面には原礫面が残る。435は黒曜石製の石核である。表裏共に求心状の剥片剥離を行なった石核で、最初の剥片剥離時には複剥離打面を作出して、打面から剥片剥離を行なっているが、その後の打面調整や頭部調整に失敗したのかステップを起こしている。その後、側縁や下縁から剥片剥離を行なっている。436は黒曜石製の石核である。亜角礫の原石を用いた石核で90°打面転位を行いながら剥片を剥離している。打面、正面、側面と大きく2枚の剥片剥離が見られ、いずれも寸詰まりの剥片を剥いでいる。437は黒曜石製の石核である。平坦な複剥離打面から2・3枚の不定形剥片を剥離している。また側面の原礫面を打面にして裏面で幅広剥片を剥離している。438は黒曜石製の石核である。角礫状の原石を用いて打面を作出した後、2・3枚の剥片を剥離しているが途中で若干ステップを起こしている。また、裏面の原礫面を打面として左側面に3枚の剥片剥離が行なわれている。その後上端部と左側縁下半部に細かな調整を施しており、使用痕と思われる微細な剥離が見られることからスクレイバーに転用した可能性がある。439は黒曜石製の石核である。サイコロ状の原石を用いて複数の剥離により打面を作出し、一枚の幅広

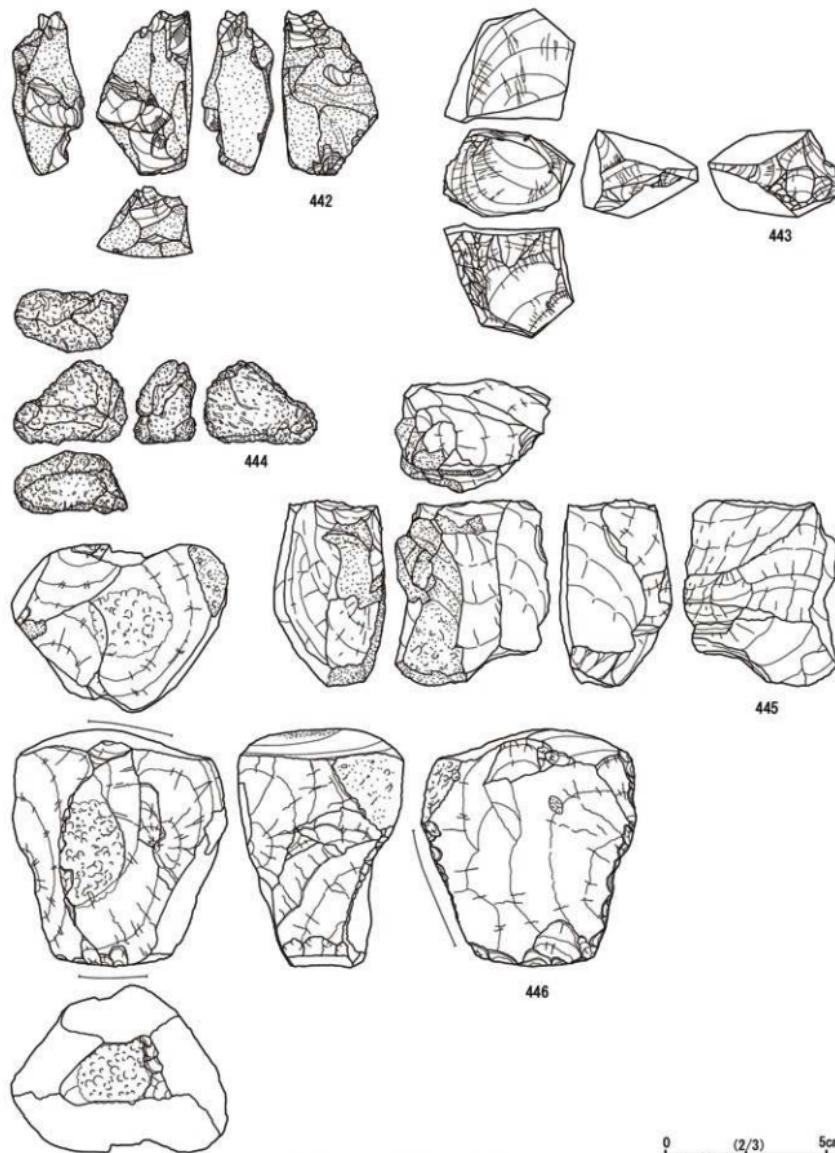
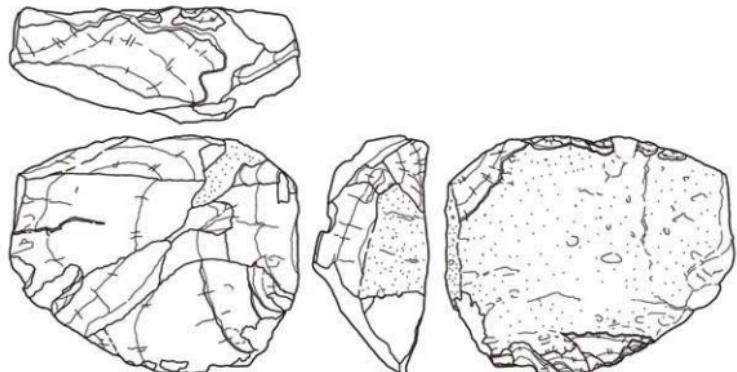
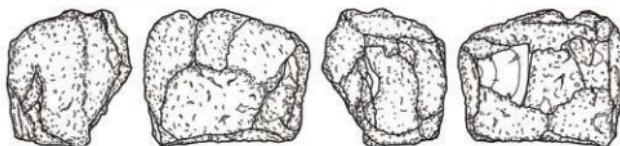


図 85 その他の出土遺物 (9)

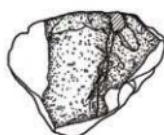
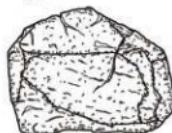
0 (2/3) 5cm



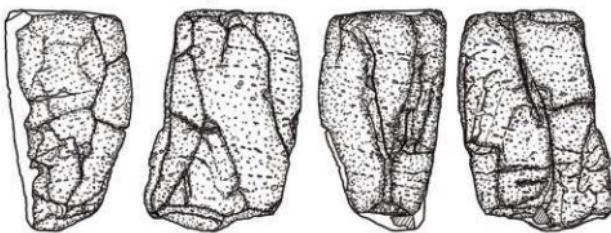
447



448



0 (2/3) 5cm



449

0 (1/4) 10cm

図 86 その他の出土遺物 (10)

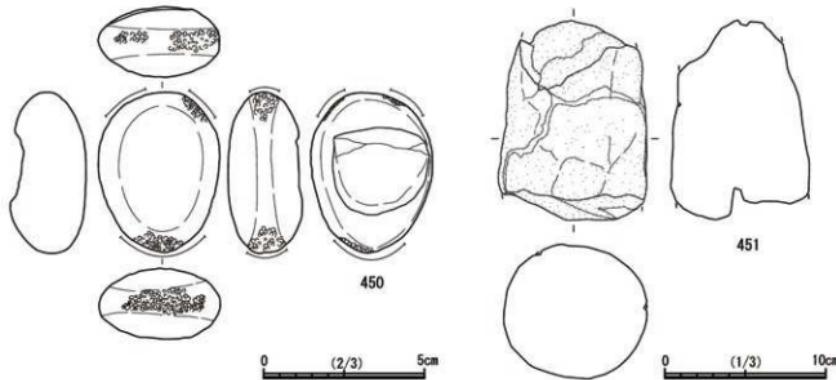


図 87 その他の出土遺物 (11)

剥片を剥離している。下面や右側面に調整剥離が見られるが、元々の原石が小さいためかこれ以上の剥片剥離は行われていない。440は黒曜石の原石である。5cmを超える握り拳大の亜角礫である。441は黒曜石の原石である。約2cmのサイコロ状の原石で角がやや潰れている。

図85の442～446もピットや包含層等から出土した遺物である。442は黒曜石の原石である。柱状の角礫で部分的に剥離しているが、人為的なものではない。443は安山岩製の石核である。打面は単剥離打面で、幅広の剥片を一枚剥離している。上面には打面が形成される前の剥離面が残っており、下面の剥片剥離の剥離面も見られることから、打面転位を繰り返しながら剥片剥離が進行したものと思われる。444は安山岩の原石である。大きさが2～3cmと安山岩にしては小振りである。表面は気泡状となっており、形態的には角礫である。445は安山岩製の石核である。両設打面の石核で縦長剥片を上下方向から剥離しているが、打点が弾けて飛んでいる。縦長剥片を剥離後に下面の調整を行っているが階段状剥離になっている。446は安山岩製の石核である。主に側面の作業面を打面として幅広の剥片を剥離している。右側面から裏面上半部にかけて原礫面を残す。剥片剥離後は叩き石や擦石として利用したのか、上面と正面中央部、下面に敲打痕や擦痕が見られる。

図86の447～449もピットや包含層等から出土した遺物である。447は安山岩の原石である。正面や上面・下面に剥離面が見られるが、目的的な剥片剥離には見えないため、粗削段階のプランクとして遺跡に持ち込まれたものと考えられる。裏面に原礫面が見られる。448は安山岩の原石である。表面は気泡状となっており、立方体のような形を呈する。裏面に一枚の剥離痕が見られる。449は安山岩の原石である。大形の柱状を呈する形で表面は気泡状をなす。

図87の450・451もピットや包含層等から出土した遺物である。450は石英製の敲石である。形状は楕円を呈し、上面と下面に敲打痕が見られる。裏面中央部は欠損している。451は砂岩製の支脚である。円柱状を呈し、上面がやや斜めに加工されているものの部分的に欠損している。下面も部分的に欠損しており、安定していない。

5. 古墳時代の遺構

(1) 壺穴建物

・SH329（図 88）

調査区の南西側 C-3・4 グリッドで検出した壺穴建物である。

ほとんどが調査区外であると同時に他の遺構や搅乱に切られており、全体の 1/5 程度しか検出できていない。現状で長軸 3 m、短軸 1 m、深さ約 0.1 m である。プランは上述のように大部分が搅乱等で不明であるが、角が一つ検出されていることから考えると方形のプランであった可能性がある。遺物は土師器が出土している。

・SH350（図 89）

調査区の南西側 C・D-3・4 グリッドで検出した壺穴建物である。

長軸 8.5 m、短軸 7 m と大形の建物で深さは上部が削平されており 0.25 m しかない。プランは方形で、部分的に壁溝が備わっている。内部には 4 本柱と思われるビットが検出されており、北側に数基の土坑が見られる。焼土や炭化物が若干検出されており、東や西、南側の壁付近でやや大きめの土器片や須恵器辺等が出土している。

・SH1000（図 90）

調査区の中央からやや北東側の F・G-6・7 グリッドで検出した壺穴建物である。

搅乱によって大部分を削平されているが、搅乱が中央付近を帯状に通っているため、遺構の四隅は残存している。プランは方形で、規模は長軸 4.3 m、短軸 4.2 m、深さ .01 m である。ほぼ正方形を成す。内部で検出された二つのビットの位置関係から 4 本柱の建物であったと考えられる。ほぼ全周に壁溝が巡っていたと思われる。遺構の北側に土坑（SK1350）が伴っており、その土坑から完形に近い土師器甕が 2 個体検出され、さらにその下から長さ 20 cm を超える大形の台石が出土している。

SH329

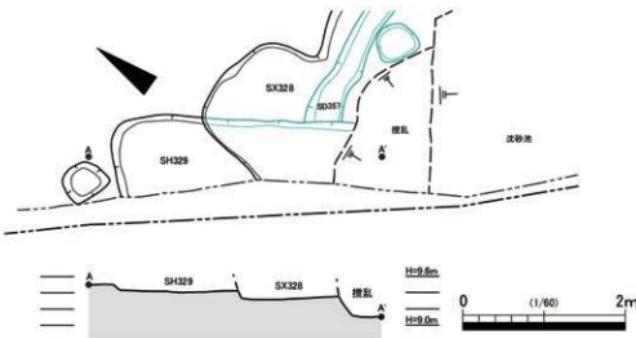


図 88 SH329 壺穴建物 (1/60)

(2) 土坑

・SK195（図 91）

SK195は調査区の南西側C-2グリッドで検出した土坑である。一部擾乱に切られているもののプランは楕円形と思われる。規模は現状で長軸1.6m、短軸1m、深さ0.2mである。遺物は土師器辺が出土している。

・SK686（図 91）

SK686は調査区の中央E-5グリッドで検出した土坑である。プランは楕円形を呈し、SK1481を切る。規模は長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.4mである。北西側に一段のテラスを設けており、底面は平底を呈している。テラス部分と底面付近から焼土がややまとまって検出されている。遺物は土師器が出士している。

・SK687（図 91）

SK687は調査区の中央E-6グリッドで検出した土坑である。プランは楕円形を呈し、中央がややくびれている。SD370に大部分を切られてしまっている。規模は長軸1.2m、短軸0.75m、深さ0.05mである。遺物は土師器が出士している。

・SK1090（図 91）

SK1090は調査区の北東側G-8グリッドで検出した土坑である。プランは楕円形を呈し、中央がややくびれる。S1261を切り、S1262に切られる。北側で一段のテラスが付く。規模は長軸1.3m、短軸0.6m、深さ0.4mである。遺物は土師器が出士している。

(3) 溝（古墳の周溝）

・SD370（図 92・93）

SD370は調査区の中央E・F-6・7グリッドで検出した古墳の周溝である。方形状に巡る周溝で約1/3は調査区外である。周溝の幅が場所によってさまざまであり0.7～1.8mと均一でない。また、溝の断面も場所によって深さ0.5mのU字状の所もあれば、深さ0.2m程と浅く底が平になる所も見られる。周溝はSK838やSD845、SX870、SD930、SD942、SD1166を切っており、周溝内のSH380やSH375の竪穴建物は弥生時代中期の遺構であるため、この周溝が作られるよりも前の遺構である。北東部は溝が一部収束しており、周溝の北端から南端までの距離が約14mある。遺物は土師器や須恵器が出士している。

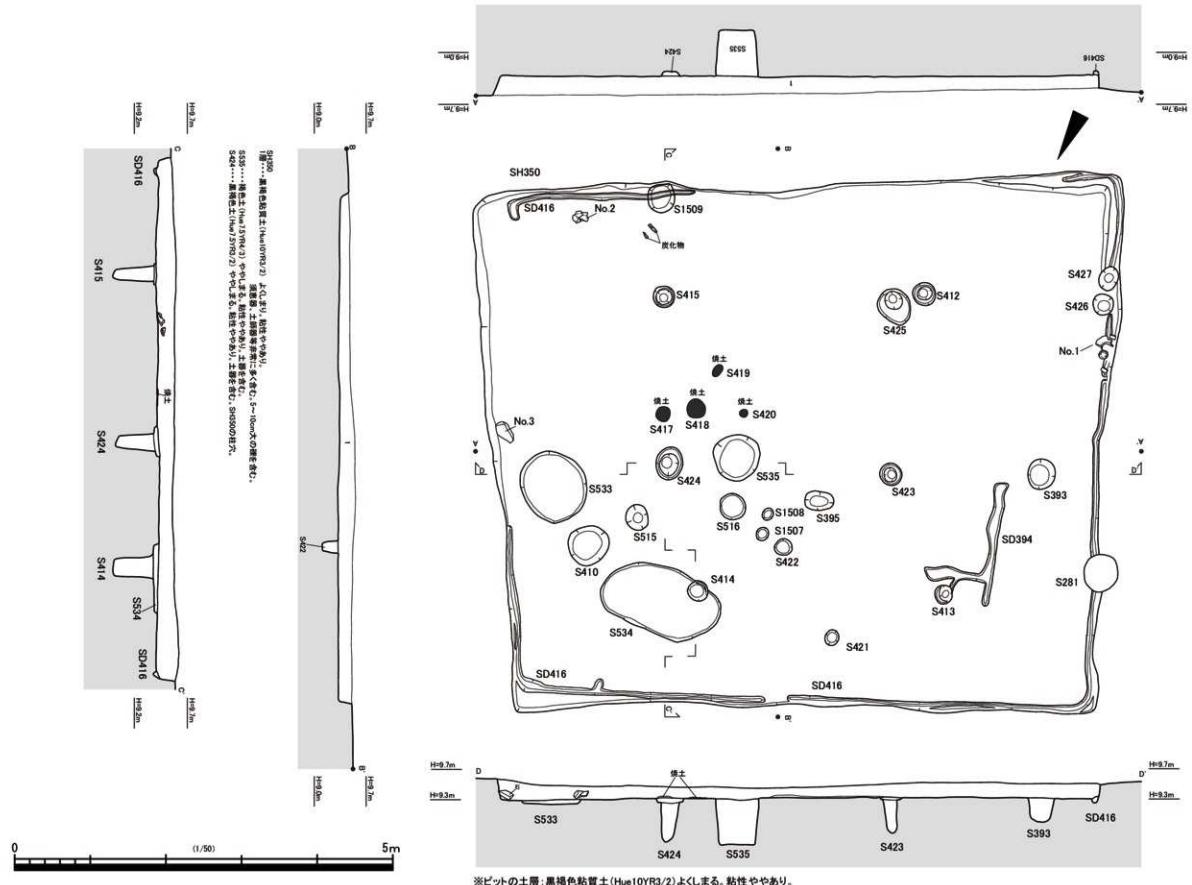
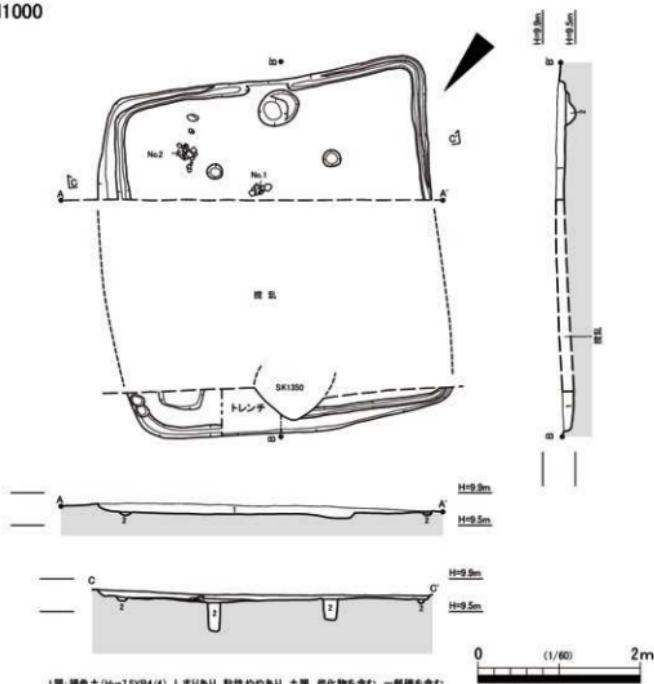


図 89 SH350 積穴建物 (1/50)

SH1000



SK1350

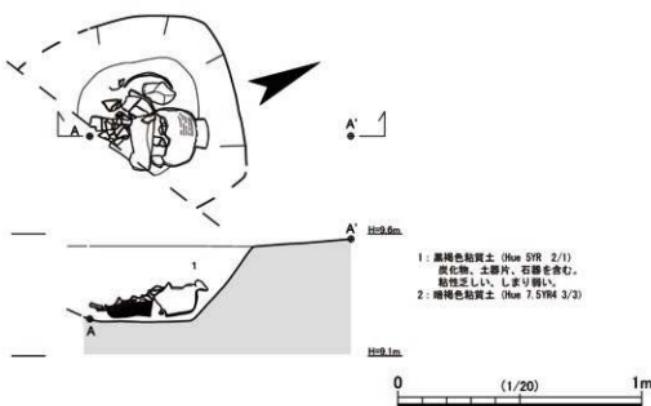


図 90 SH1000 壇穴建物・SK1350 土坑 (1/60・1/20)

III. 竹ノ下遺跡

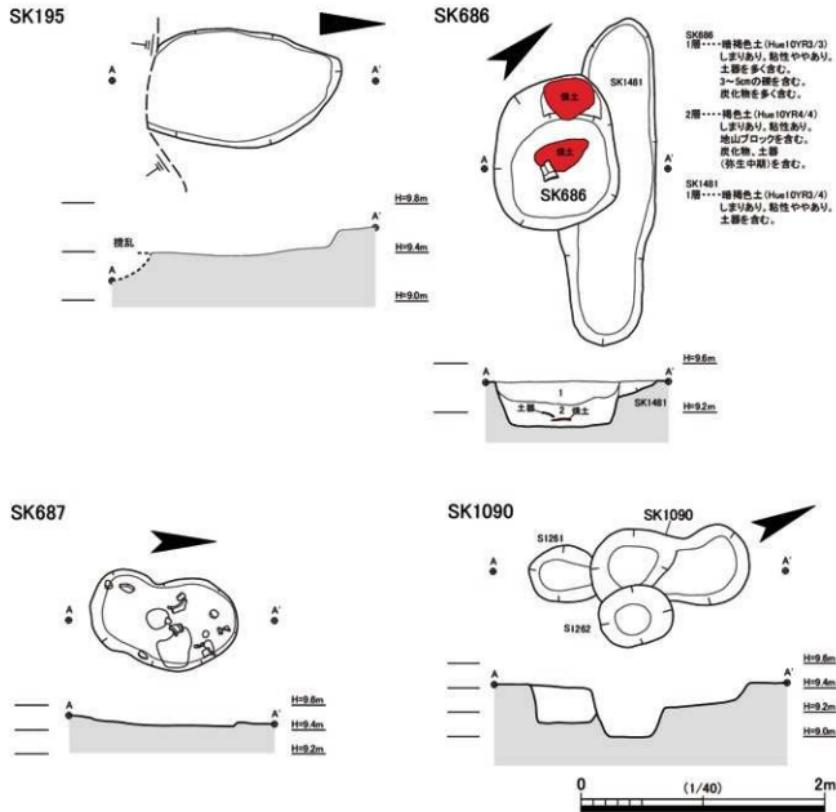


図 91 SK195・686・687・1090 土坑 (1/40)

SD370

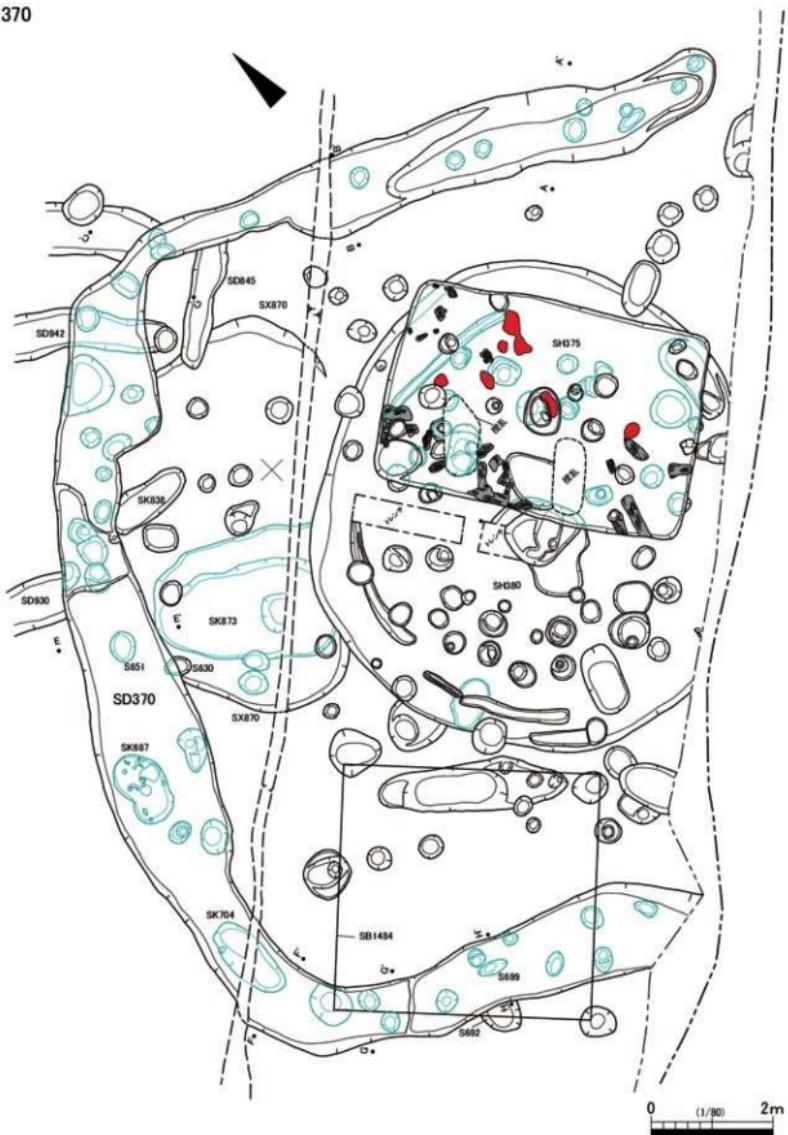


図 92 SD370 周溝 平面図 (1/80)

III. 竹ノ下遺跡

SD370

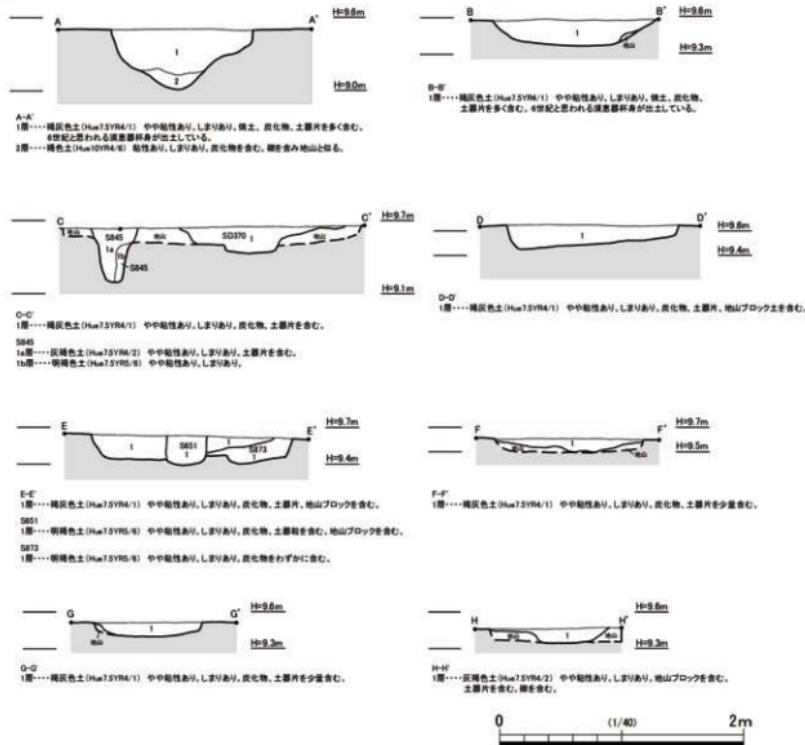


図93 SD370周溝 土層断面図 (1/40)

6. 古墳時代の遺物

図 94 の 452 は SH329 から出土した遺物である。土師器の甕の口縁部片である。断面形態は頸部で緩やかに屈曲し、端部は外反するタイプで、屈曲する頸部がやや厚い。口縁端部の厚みがやや薄くなり、頸部からの立ち上がりで若干屈曲する。口縁部の径は胴部よりやや小さい。調整は摩耗により不明瞭である。外面は不明で内面の肩部付近でケズリ後ナデと思われる。古墳時代中期後半段階のものと思われる。

図 94 の 453 ~ 458 は SH350 出土した遺物である。453 は土師器の甕の口縁部片である。頸部で屈曲し「く」の字状を呈するが端部に向かってやや外反するが器壁は厚い。端部は丸く成形しており、厚みが一定である。外面に縱方向のハケメが僅かにみられるが摩耗で不明瞭である。454 は土師器の甕の口縁部である。頸部で屈曲し直立気味にやや開き、端部に向かってさらに外反する。端部は外側に面を持たせるような成形を行っている。内面の頸部直下で屈曲し、肩部に向かって器壁が薄くなる。455 は土師器の甕の口縁部片である。外面は頸部で屈曲す直線気味に開き、端部でさらに外反する。内面は肩部まで器壁が薄く、頸部にむけて肥厚し大きく湾曲し、若干の稜が 2 箇所付く。調整は内外面共に摩滅が激しく不明である。456 は土師器の甕の口縁部片である。他の土器より頸部が長く、凸凹しながら若干開き、端部で外反する。頸部から肩部にかけて内面で稜が見られ、内面のケズリにより器壁が薄くなる。457 は須恵器の大甕の口縁部から胴部までの資料である。最大径が胴部よりやや上部にあり、肩部は若干まるみを帯びる。頸部から口縁部に向けて直線気味に開く。頸部から口縁部の間に二条の三角凸帯が巡り、凸帯から口縁端部までの間に波状文が施文されている。口縁端部は肥厚させて段が付く。頸部から胴部にかけて外面ではタタキ目が、内面には当て具痕の青海波状文が見られる。458 は須恵器の大甕である。口縁部から肩部までの資料で、肩部が若干張る。頸部は真っすぐ上に立ち上がってから緩やかに外反する。頸部から口縁部の間の上半部に 3 本の沈線が施され、その沈線の間に波状文が 3 列施文されている。口縁端部は肥厚させて段が付く。頸部から肩部の外面にはタタキ目が、内面には当て具痕の青海波状文が見られる。また、頸部の内面には指押さえの痕跡が見える。これらの資料は 5 世紀中頃～後半段階の資料と思われる。

図 95 の 459 ~ 468 も SH350 から出土した遺物である。459 は土師器の甕である。口縁部から胴部下半までの資料で、最大径が胴部にくくる。胴部はほぼ球形を呈し、頸部から口縁部にかけて直線気味に短く開く。調整は摩滅により不明瞭であるが、外面の胴部下半に斜め方向のハケメが僅かに見える。また、頸部から肩部の内面に接合痕が若干見られる。460 は土師器の甕である。口縁部から胴部の資料でやや寸胴である。肩部は張らず、頸部は緩く屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部は丸く仕上げている。調整は摩滅により不明瞭で外面は不明、内面は肩部から胴部にかけて斜め方向のケズリが見られる。461 は土師器の壺である。口縁部から肩部の資料で、肩部はあまり張らず、頸部で直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。内面の頸部から肩部の屈曲が強く、稜ができる。調整は摩滅が激しく、不明瞭である。内面肩部に横方向のケズリが若干見られる。462 は土師器の甕である。口縁部から肩部の資料で、肩部はあまり張らない。頸部は緩く屈曲し、口縁部は外反する。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面の肩部では斜め方向のケズリが見られる。463 は土師器の甕である。口縁部から肩部までの資料で、肩部は直線的で、頸部で丸く屈曲し、口縁部は外反する。頸部から口縁部にかけて器壁がやや厚くなる。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面の肩部に斜め方向のケズリが僅かに見える。464 は土師器の甕である。口縁部から肩部の資料で、肩部はほとんど張らない。頸部もほとんどくびれず、口縁部にむけて若干外反する。内面の頸部から肩部にかけてケズリによって稜が形成され、肩部より下は器壁がやや薄くなっている。調整は外面で斜め方向のハケメが、内面で頸部に横方向のハケメ、肩部で斜め方向のケ

III. 竹ノ下遺跡

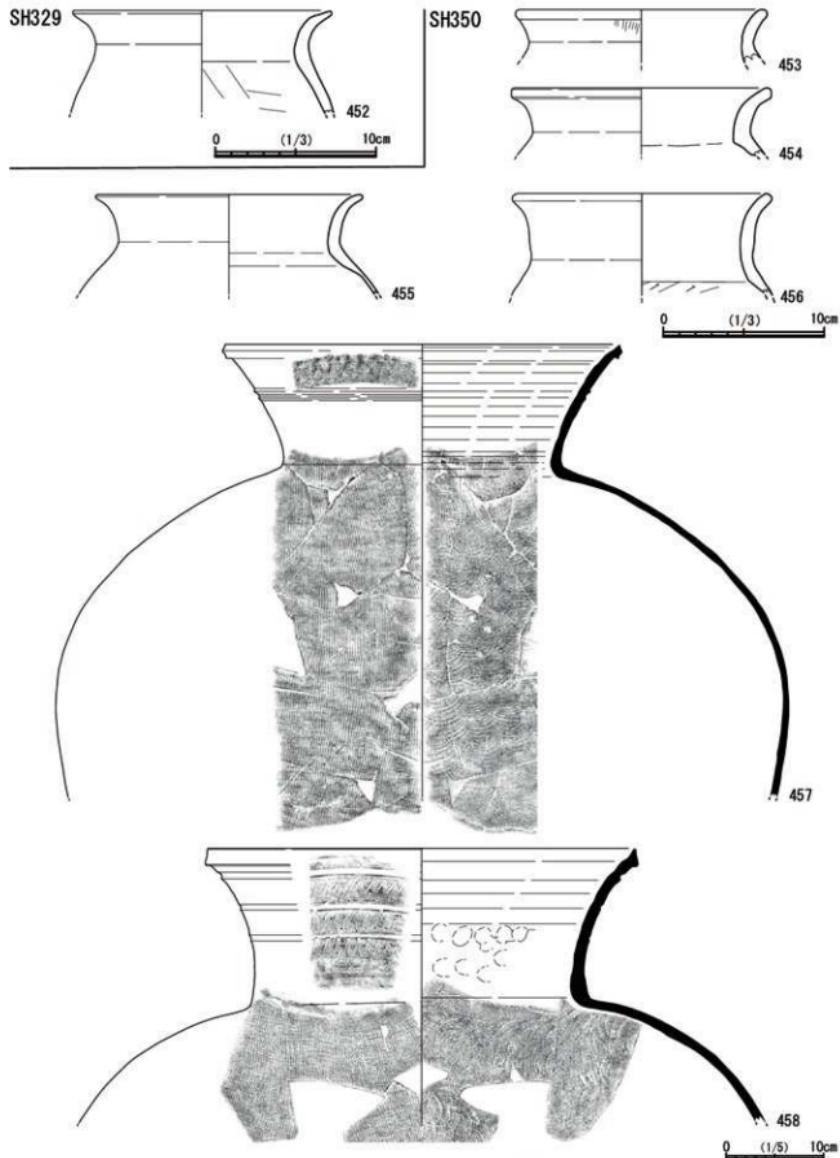


図 94 SH329・350 (1) 出土遺物

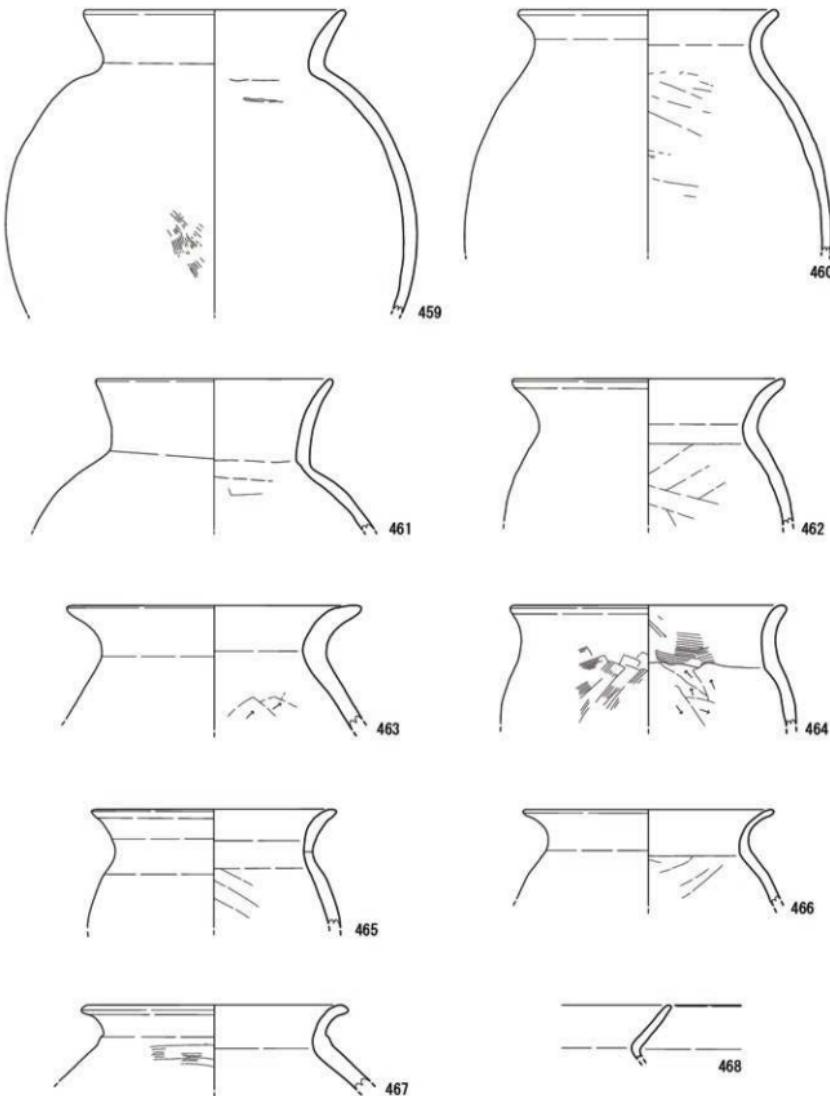


図 95 SH350 出土遺物 (2)

0 (1/3) 10cm

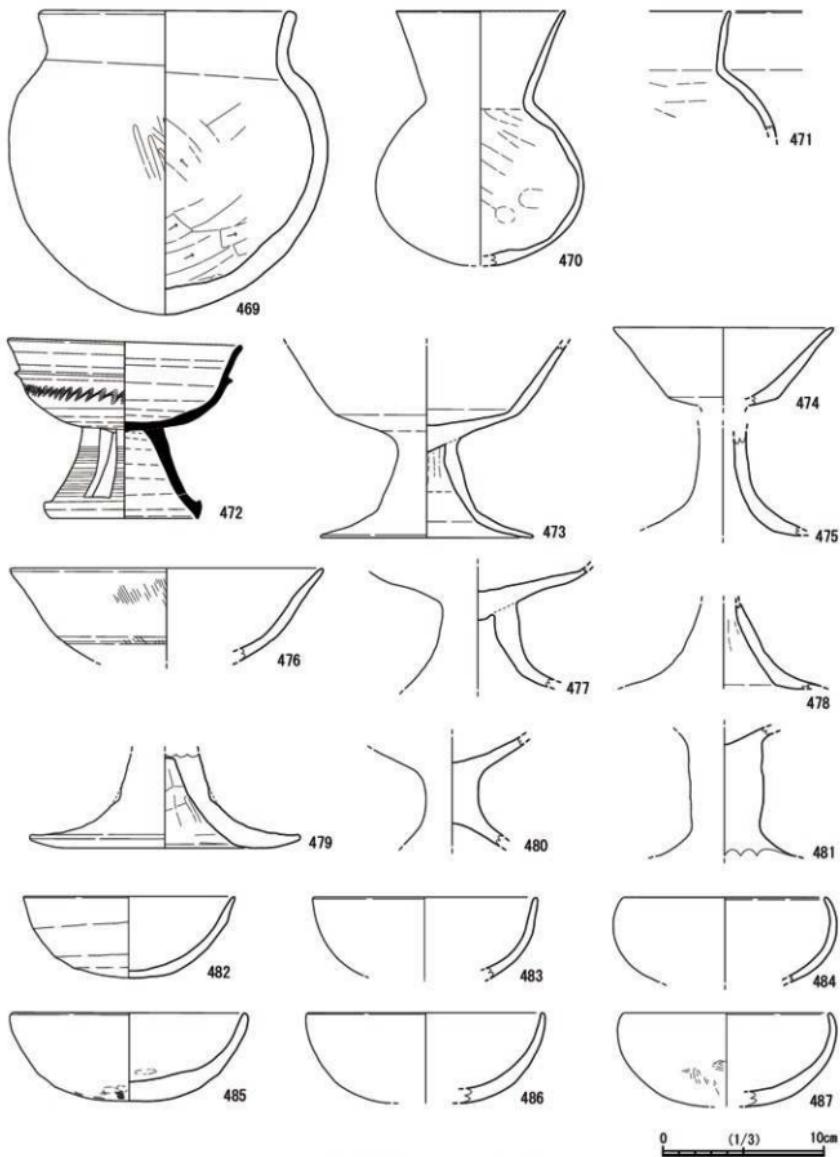


図 96 SH350 出土遺物 (3)

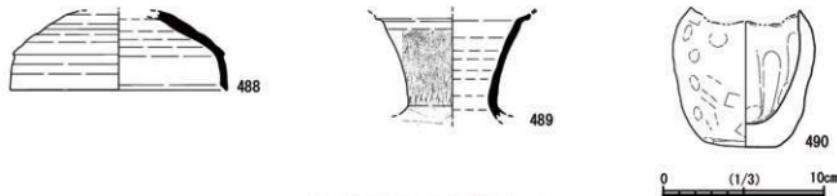


図 97 SH350 出土遺物 (4)

ズリが見られる。465は土師器の甕である。口縁部から肩部までの資料で、肩はあまり張らない。頸部で緩く屈曲し、口縁部に向かって緩く外反する。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面肩部で斜め方向のケズリが見られる。466は土師器の甕である。口縁部から肩部の資料で、肩が若干張る。頸部は緩く立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部の外反部分の器壁が薄く仕上げられている。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面肩部で斜め方向のケズリが僅かに見える。467は土師器の甕である。口縁部から肩部までの資料で、肩は張らず直線的である。頸部に低い凸帯が一条巡り、口縁部はきつ外反する。調整は摩滅により不明瞭であるが、外面の頸部付近に横方向のハケメが若干見られる。468は土師器の甕である。口縁部から頸部の資料である。頸部で屈曲し、口縁部は僅かに内湾しながら直線的に開く。調整は摩滅により不明である。これらの資料は概ね5世紀後半段階のものと思われる。

図 96 の 469 ~ 487 も SH350 から出土した遺物である。469は土師器の甕である。底部はやや砲弾気味の丸底で厚い。胴部は球形で肩が若干張り、頸部で直線的に立ち上がる。口縁部は直線的にやや開く。調整は摩滅により不明瞭であるが、外面胴部にミガキが僅かに見える。内面は胴部から底部に斜め方向のケズリが見られる。470は土師器の直口壺である。最大径は胴部で肩は張らず頸部で屈曲し口縁部は直線的に開く。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面胴部にケズリや指押さえが見られる。471は土師器の直口壺である。口縁部から肩部の資料で、肩はあまり張らず、頸部で立ち上がり、口縁部は直線的にやや開く。内面にケズリが見られる。472は須恵器の高杯である。ほぼ完形の資料で、脚部に3つの方形スカシが開けられている。杯部には胴部に波状文が施文され、その上に受け部の段が付く。口縁部はやや開く。473は土師器の高杯である。脚部の裾部と杯部中位で屈曲する。口縁部は欠損しているがそのまま直線的に開くものと思われる。杯部の底を凸形態にして脚部と接合している。調整は摩滅により不明である。474は土師器の高杯である。杯部のみの資料で、底部付近で屈曲し直線的に開く。調整は摩滅により不明である。475は土師器の高杯である。脚部のみの資料で、裾端部が欠損している。裾部から下半部には内湾し、上半部はほぼ真っすぐ立ち上がる。調整は摩滅により不明である。476は土師器の高杯である。杯部のみの資料で、底部付近から一旦内湾し、その後口縁部が直線的に開く。中位には一条の沈線が巡る。調整は摩滅により不明瞭であるが、外面に斜め方向のハケメが若干見られる。477は土師器の高杯である。脚部の端部と杯部の口縁部が欠損している。杯部底部の中心が凸形態で脚部と接合する。調整は摩滅により不明である。478は土師器の高杯である。脚部のみの資料で、端部も欠損している。ラッパ状に開くタイプで内面裾部に屈曲が見られ稜が付く。479は土師器の高杯である。脚部のみの資料で器壁がやや厚い。裾部が大きく開き端部が若干持ち上がる。内面にはケズリが見られる。480は土師器の高杯である。脚部の端部と杯部の口縁部が欠損している。杯部の底部内面がやや凹み、杯部と脚部の接合部分の厚みがある。481は土師器の高杯である。杯部と脚部の接合部分のみの資料で、脚部の裾部までは真っすぐで、柱状を呈する。482は土師器の杯である。丸底で、口縁部

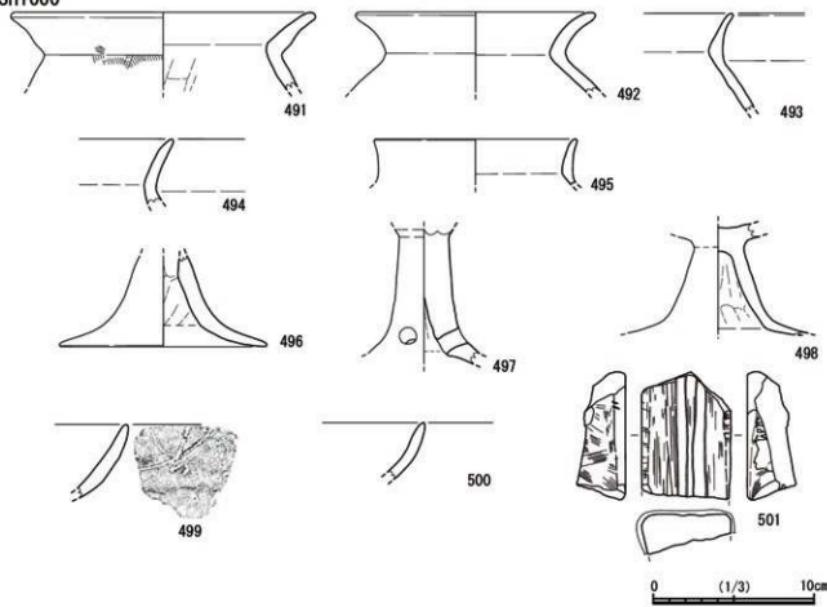
がやや開く。摩滅により調整が不明瞭であるが、外面にナデによる若干の稜が見える。**483**は土師器の杯である。底部が欠損しているものの、丸底と思われる。器高が5cmとやや高く、口縁部は直線的に若干開く。**484**は土師器の杯である。底部が欠損しているが、丸底と思われる。胴部に最大径があり、口縁部が内湾する。**485**は土師器の杯である。底部は丸底で器壁が厚く、胴部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。器壁は底部から胴部にかけてやや薄くなり、胴部から口縁部は一定である。**486**は土師器の杯である。底部が欠損しているが、丸底と思われる。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。**487**は土師器の杯である。底部が欠損しているものの、丸底と思われる。胴部に最大径があり、口縁部が内湾する。これらの資料は若干前後する資料も見られるが、概ね5世紀後半を中心としたものと考えられる。

図97の**488～490**もSH350から出土した遺物である。**488**は須恵器の杯蓋である。天井部が欠損しているものの全体的には丸みを帯びる。天井部から口縁部の間で屈曲し段が付く。また口唇部にも段が付く。**489**は須恵器のハソウである。頭部のみの資料で口唇部も欠損している。立ち上がりは直線的でやや開くタイプである。外面には波状文が三列施文されており、内面は工具による回転ナデと思われる。**490**はミニチュア土器の鉢である。手づくねで製作されており、底部は平底、胴部は直線気味にやや開き肩部で最大径となり口縁部はやや内湾し、口唇部は尖りぎみにすぼまり、凸凹している。外面は指押さえや工具によるナデが見られ、内面は強いナデが縦方向に見られる。これらの資料は概ね5世紀後半から6世紀前半のものと考えられる。

図98の**491～501**はSH1000から出土した遺物である。**491**は土師器の甕の口縁部である。頭部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。調整は摩滅により不明瞭であるが、外面に斜め方向のハケメが、内面にやや斜め方向のケズリが見られる。**492**は土師器の甕の口縁部である。頭部で強く「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。調整は摩滅のため不明である。**493**は土師器の甕の口縁部である。頭部で真上に立ち上がり、口縁部はやや外反する。外面の屈曲は緩いが、内面は強く明瞭な稜を形成している。**494**は土師器の甕の口縁部である。頭部で屈曲しやや開き気味に立ち上がり、口縁部は直線的に若干開く。口唇部がやや細くなる。**495**は土師器の壺の口縁部である。頭部で立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。調整は摩滅のため不明である。**496**は土師器の高杯である。脚部のみの資料で、裾部から大きく開く。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面に斜め方向のケズリが見られる。**497**は土師器の高杯である。脚部の資料であるが、裾部から先の端部も欠損している。脚部は円柱状で上半部がやすぼまっている。裾部で屈曲する部分に円形の透かしが1箇所穿たれている。調整は摩滅により不明である。**498**は土師器の高杯である。脚部のみの資料で、裾部から先の端部も欠損している。杯部との接合部が辛うじて残存している。脚部は裾部に向かって直線的に開き、裾部で屈曲しさらに端部が開く。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面にケズリが見られる。**499**は土師器の杯である。口縁部で外面にヘラ状の工具による線刻が施されている。**500**は土師器の杯である。口縁部で内湾しながら開き、端部に最大径がくる。調整は摩滅により不明である。**501**は砂岩製の砥石である。分厚い板状の形態と思われるが、欠損しており詳細は不明である。正面に2条の溝状擦痕がみられ、その他両側面にも擦痕が見られる。これらの資料は、5世紀前半から6世紀前半の資料と思われ、若干時期幅がある。

図98の**502・503**はSH1000に伴うSK1350から出土した遺物である。**502**は土師器の甕である。ほぼ完形の資料であるが、底部が若干欠損している。胴部に最大径があり、ほぼ球形の形態で丸底である。頭部できつく屈曲し、口縁部は若干外反しながら開く。調整は外面に口縁部から底部まで縦方向から斜め方向のハケメが、内面には横方向のケズリが見られる。肩部の内面には接合痕が見られる。**503**は土師器の甕である。ほぼ完形の資料であるが、底部が僅かに欠損している。胴部が最大径となるがやや寸

SH1000



SK1350 (SH1000 に伴う土坑)

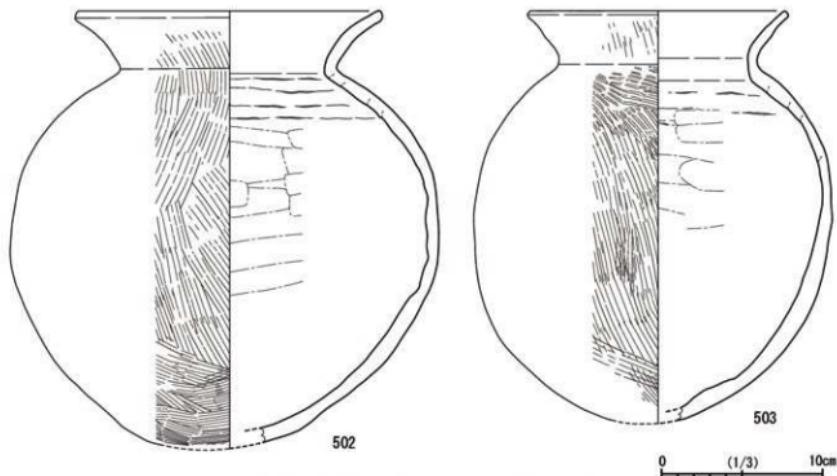
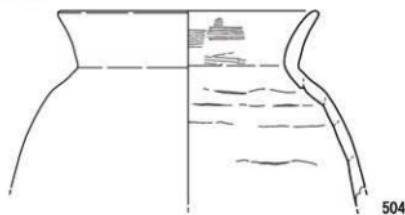


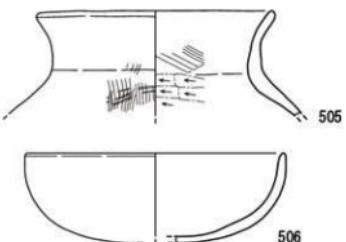
図 98 SH1000・SK1350 (1) 出土遺物

III. 竹ノ下遺跡

SK1350



504

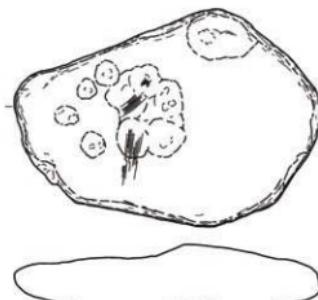


505

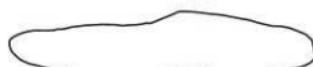


506

0 (1/3) 10cm



507



0 (1/4) 10cm

SK195

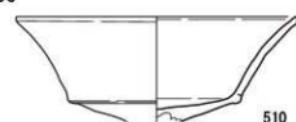


508

509

0 (1/3) 10cm

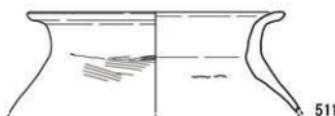
SK686



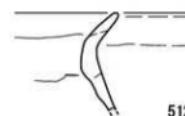
510

0 (1/3) 10cm

SK687



511



512

0 (1/3) 10cm

図 99 SK1350 (2)・195・686・687 出土遺物

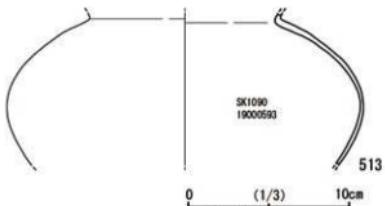


図 100 SK1090 出土遺物

るが、欠損しており詳細は不明である。肩はあまり張らず、頸部で屈曲し、口縁部はやや外反しながら開く。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面の口縁部に横方向のハケメが見られ、肩部では接合痕が見られる。505は土師器の壺である。口縁部から肩部までの資料で、肩はあまり張らず、頸部で立ち上がり、口縁部はやや外反する。器壁は頸部が厚く口縁部と肩部は薄くなる。調整は外面肩部に横方向のハケメ後縦方向のハケメ、内面口縁部に斜め方向のハケメ、内面頸部へ肩部に横方向のケズリが見られる。506は土師器の杯である。底部が僅かに欠損しているが平底気味の丸底と思われる。底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。調整は摩滅により不明である。507は砂岩製の台石である。扁平な自然礫を台石として使用しており、表裏に擦痕や敲打痕が見られる。これらの資料は5世紀中頃から後半のものと考えられる。

図 99 の 508・509 は SK195 から出土した遺物である。508は土師器の甕である。口縁部の資料で、頸部は緩く立ち上がり、口縁部は外反する。内面では頸部に稜が付く。調整は摩滅のため不明である。509は土師器の甕である。口縁部の資料で、頸部で緩く屈曲し、口縁部は外反する。調整は摩滅のため不明である。これらの資料は5世紀後半から6世紀前半のものと考えられる。

図 99 の 510 は SK686 から出土した土師器の高杯である。杯部のみの資料で、底部付近で段が付き、強く屈曲する。そこから口縁部までは緩やかに外反する。調整は摩滅のため不明である。5世紀の中頃のものと思われる。

図 99 の 511・512 は SK687 から出土した遺物である。511は土師器の甕である。口縁部の資料で、肩は張らず、頸部で真上に立ち上がり、口縁部は強く外反する。頸部内面には稜が付く。調整は摩滅により不明瞭であるが、外面頸部に横方向のハケメが見られる。512は土師器の甕である。口縁部の資料で、肩は張らず、頸部で屈曲し、口縁部は直線的に開く。調整は摩滅により不明であるが、内面肩部に接合痕が見られる。これらの資料は5世紀後半から6世紀前半のものと考えられる。

図 100 の 513 は SK1090 から出土した土師器の壺である。口縁部と底部が欠損している。胴部はややきつ曲し、頸部で屈曲し口縁部は開くものと思われる。器壁が非常に薄く、調整は摩滅により不明である。5世紀中頃の資料と思われる。

図 101 の 514～534 は SD370 から出土した遺物である。514は須恵器の杯蓋である。天井部が僅かに欠損している。全体的に丸みを帯び、天井部と口縁部の境に稜をもつが短く鋭さに欠ける。口縁部はほぼ垂直におりるが若干内湾する。端部には内傾する段をもつ。515は須恵器の杯身である。口縁部はほぼ真っすぐ立ち上がり端部を丸くおさめる。蓋受け部はほぼ水平に短く突き出し、そこから底部までは緩やかに湾曲する。516は須恵器の杯身である。口縁部が内傾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。蓋受け部が若干立ち上がる。517は須恵器の杯蓋である。口縁部は垂直に垂れ下がり、端部は内傾する段が付く。天井部と口縁部の境に稜をもつが短い。天井部は欠損しているものの丸みを帯び、一部

脛である。底部は丸底である。頸部で立ち上がり、口縁部は直線的に開く。調整は外面の口縁部と胴部で縦方向のハケメが、肩部で横方向のハケメが見られる。内面は胴部で横方向のケズリが見られる。肩部では接合痕が見られる。これらの資料は5世紀中頃のものと思われる。

図 99 の 504～507 は SK1350 から出土した遺物である。504は土師器の壺である。甕との区別が難しい資料である。胴部に最大径がくると思われる。

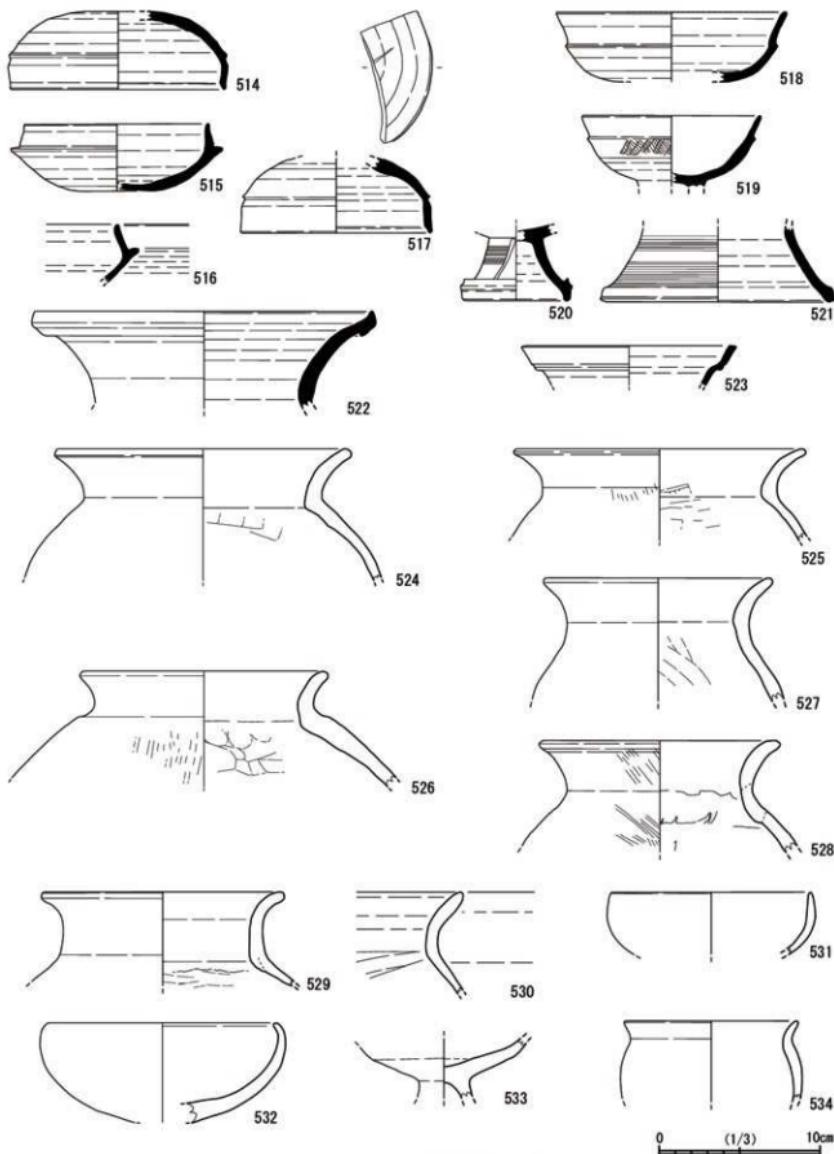


図 101 SD370 出土遺物

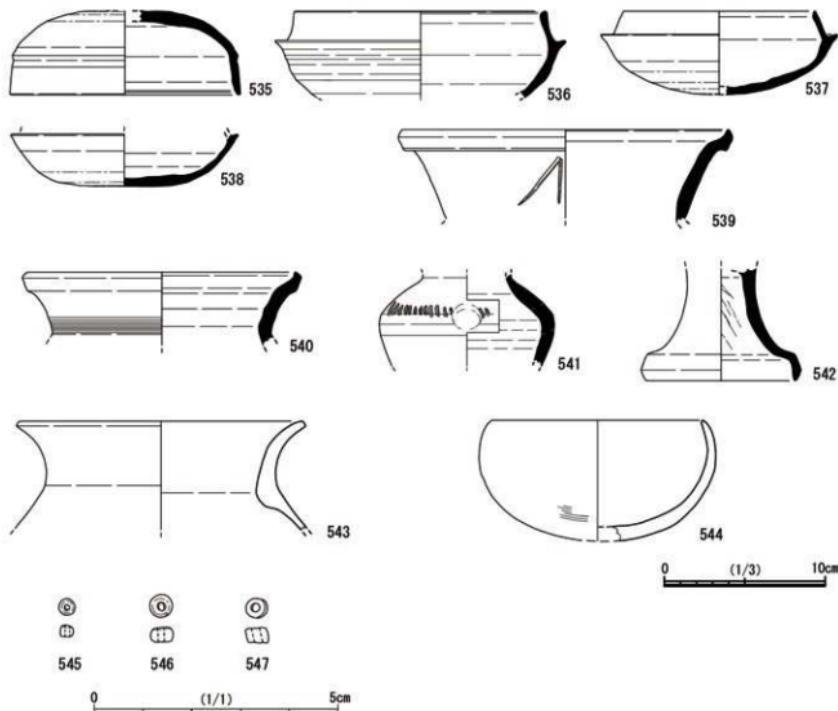


図 102 その他の出土遺物

ヘラ記号の線刻が見られる。518は須恵器の高杯である。口縁部はほぼ直線的に開き端部をまるくおさめる。体部との境に明瞭な稜があり、体部下半は丸く湾曲する。脚部は欠損しており不明である。519は須恵器の高杯である。519は須恵器の高杯である。519は須恵器の高杯である。脚部を欠損しているが、接合部が僅かに残存している。口縁部は直線的に開き、体部との境に明確な稜をもつ。体部には波状文が施文されている。体部から下半にかけては丸みを帯びる。520は須恵器の高杯である。脚部のみの資料で、短く、三方向の透かしが見られる。端部は一度短く上につまみ上げ、その後、稜をもう一つ持たせながら垂直に下がり、端部は丸くおさめる。521は須恵器の高杯である。大形の高杯で、脚部のみの資料である。脚部の径が大きく、端部で小さな稜が付く。522は須恵器の大甕である。口縁部の資料で、頭部で屈曲し、口縁部は外反する。口唇部は肥厚させ段が付き、先端をつまみ上げている。523は須恵器のハソウである。口縁部の資料で、全体は直線的に開くが、途中で屈曲し段が付く。524は土師器の甕である。肩はあまり張らず、頭部で屈曲し口縁部は外反する。調整は内面にケズリが若干見られるがその他は摩滅により不明である。525は土師器の甕である。肩はあまり張らず、頭部で立ち上がり、口縁部は外反する。外面で僅かに縱方向のハケメが、内面で横方向のケズリが見られる。526は土師器の甕である。肩部で大き

く開き、頸部で水平となる段が付き、そこから立ち上がる。口縁部は外反するが径が小さい。調整は外面に縦方向のハケメが、内面にはケズリ後、指压さえがみられる。やや特殊な形で壺との区別が難しい資料である。527は土師器の甕である。肩が張らず、頸部で緩く立ち上がり、口縁部は外反する。調整は摩滅により不明瞭であるが、内面に斜め方向のケズリが見られる。528は土師器の甕である。肩はあまり張らず、頸部で立ち上がり、口縁部は外反する。内面には接合痕が見られ、外面には斜め方向のハケメが施されている。529は土師器の甕である。肩はあまり張らず、頸部で直立気味にやや長く立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。調整は摩滅のため不明瞭であるが、内面の肩部に横方向のケズリが僅かに見える。530は土師器の甕である。肩は張らず、頸部で垂直気味に立ち上がり口縁部は直線的に開く。調整は摩滅のため不明瞭であるが、内面頸部から肩部付近に斜め方向のケズリが見られる。531は土師器の杯である。底部を欠損している。底部付近から胴部にかけて内湾し、口縁部は直立する。調整は摩滅のため不明である。532は土師器の杯である。底部を欠損するが、丸底と思われる。胴部に向けて緩やかに湾曲し、口縁部は内湾する。調整は摩滅のため不明である。533は土師器の高杯である。脚部と口縁部を欠損している。脚部と杯部の接合部で杯部の体部に向かって上がり気味に開き口縁部との境で屈曲する。調整は摩滅のため不明瞭である。534は土師器の鉢である。底部が欠損しており、胴部があり張らず、やや寸胴である。頭部で緩く屈曲し、口縁部は直線的に開くが短い。これらの資料は5世紀後半から6世紀前半のものと考えられる。

図102の535～547はピットや包含層などから出土した遺物である。535は須恵器の杯蓋である。全体的に丸みを帯び、天井部を僅かに欠損する。口縁部との境に若干稜が付く。口縁部はほぼ垂直に下がるが若干開く。口唇部は内傾する段が付く。536は須恵器の杯身である。底部が欠損している。受け部が水平より若干跳ね上げ気味に付き、口縁部は内傾しながら若干反る。端部は丸くおさめる。537は須恵器の杯身である。底部を僅かに欠損する。受け部がやや跳ね上げ気味に短く付き、口縁部は内傾する。端部に内傾する段が付く。538は須恵器の杯身である。口縁部が欠損しており、受け部が僅かに付く。底部は平底である。539は須恵器の甕である。大甕の口縁部の資料であり、頸部で屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁端部は外反し段が付き、口唇部で内湾するようにすぼまる。外面にはヘラ記号のような工具による線刻がある。540は須恵器の甕である。口縁部の資料で、頸部で屈曲し、口縁部は外反する。端部で段が付き、口唇部でやや内湾する。541は須恵器のハソウである。胴部の資料で、口縁部と底部を欠損する。胴部中央よりやや上で緩く屈曲している。また工具による刺突文を施し、円形のスカシが穿孔されている。542は須恵器の高杯である。脚部のみの資料で、裾部と端部の境で屈曲し、端部はほぼ垂直におろす。543は土師器の甕である。口縁部の資料で肩は張らず、頸部で立ち上がり口縁部は外反する。口唇部はやや面をついている。頭部が肥厚し、肩部で器壁が薄くなる。調整は摩滅により不明である。544は土師器の杯である。底部を僅かに欠損するが、丸底と思われる。胴部は丸く湾曲し口縁部はやや内湾する。545はガラス製の小玉である。紺青色を呈し、径が3mmである。角をやや面取りしており丸みを帯びる。546はガラス製の小玉である。アイスグリーン色を呈し、径は4.5mmである。角をやや面取りしており丸みを帯びる。547はガラス製の小玉である。水色を呈し、径は4.5mmである。角は面取りされておらず、円柱状を呈する。

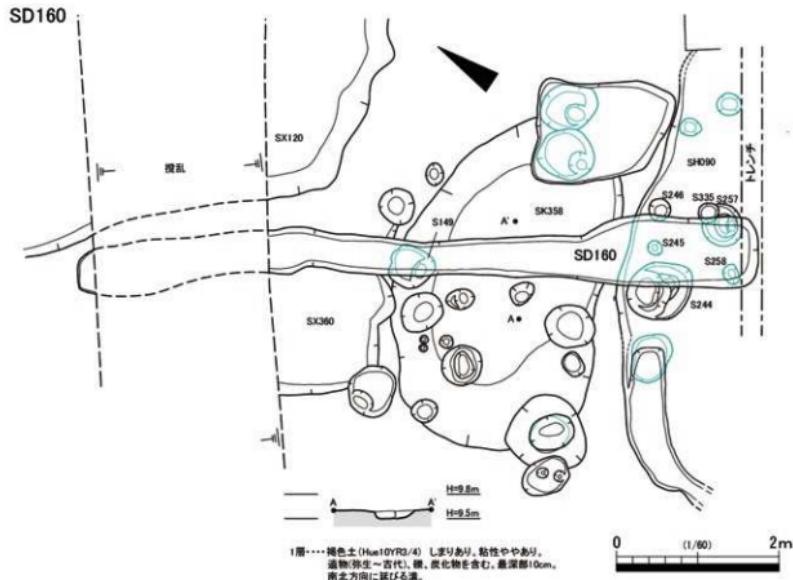


図 103 SD160 溝 (1/60)

7. その他の時代の遺構と遺物

その他に古代から中世・近世の遺構や遺物が若干検出されている。遺構としては図 103 の SD160 がある。C・D-2 グリッドで検出した古代の溝である。長さは 8.4 m、幅は 0.4 m ~ 0.8 m と一定でない。深さは 0.1 m と浅い。SH090 や SK358、SX360 等を切り、一部搅乱に切られる。出土遺物は図 104 の 548 で、土師器の椀である。底部はわずかに欠損しているが、丸底と思われる。胴部は内湾し、口縁部はやや内傾する。端部は丸くおさめており、まり状を呈する。調整は摩滅により不明瞭であるが、外面は工具による横方向の強いナデが、内面は工具による縱方向の強いナデが施されている。7世紀代のものと考えられる。

図 104 の 549 ~ 557 はその他ビットや包含層等から出土した遺物のうち主なものを図化した。549 は須恵器の杯身である。口縁部は欠損しているが、箱型の杯で底部に低い角形の高台が付く。8世紀代のものと思われる。550 は須恵器の杯身である。口縁部と底部中央部を欠損する。高台の付け根がやや細く、端部が広がる。8世紀代の資料と思われる。551 は白磁の碗である。器壁が薄く、底部が欠損している。胴部は緩やかに内湾しながら開き、口縁部は若干外反する。口唇部は釉剥離している。素地は白くきめが細かい。内外面の色調はやや青みがかった白色である。外面には胴部と口縁部の境に、内面には胴部の中央部にそれぞれ一条の細い沈線が巡る。中世のものと思われる。552 は白磁の碗である。玉縁口縁を有するもので、口縁部のみの資料である。素地は灰色でキメが若干粗い。内外面の色調は灰褐色を呈する。中世のものと思われる。553 は陶器の鉢である。口縁部のみの資料で、端部で若干外反す

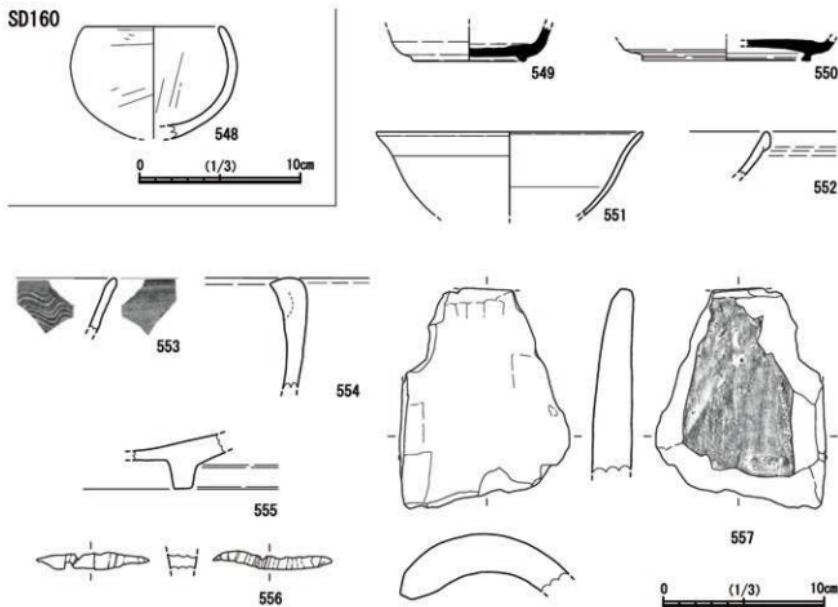


図 104 SD160・その他の出土遺物

るが、ほぼ直線的に開く。素地は暗灰褐色でキメが粗い。外面は緑茶褐色に貫入が入る。内面は白土を波状に装飾する刷毛目が見られる。近世のものと思われる。554は土製の鉢である。口縁部のみの資料で、全体の形態が不明である。口縁部はほぼ直立して、内面に飛び出す形で端部が肥厚する。近世の火鉢かと思われる。555は炻器の皿である。高台付近の破片資料で、外面は高台から内側が無釉、その他は鉄釉がかかることある。内面見込みには砂目がみられる。近世のものと思われる。556は滑石製の石鍋の碎片である。表裏に加工痕の線が縦方向に見える。中世のものと思われる。557は丸瓦である。非常に摩耗しており、また下半部を欠損している。正面は工具痕が縦方向に部分的に見られ、左側縁には面取りが施されている。内面には僅かに布目痕が見られそれをナデ消している。先端も面取りしている。摩耗が激しく、詳細は不明だが近世のものと思われる。

表2 遺構観察表（掘立柱建物）

遺構番号	区画	規模 (間×間)	規模 (m)				主軸	柱穴 (m)		出土遺物	時期	備考
			長軸 (全長)	長軸 (柱間)	短軸 (全長)	短軸 (柱間)		径	深さ			
SB650	D-4	5×4	9	1.4~1.8	8.7	1.7~2	N55° W	0.8~1.2	0.4~0.8	弥生土器	弥生中期	
SB1480	F-6	4×3	6	1.2~1.5	5	0.5~0.9	N14° E	0.3~0.8	0.3~0.6	弥生土器	弥生中期	
SB1482	C・D-2	不明×2	-	-	4.8	2	N40° E	0.7	0.4~0.6	弥生土器	弥生中期	
SB1484	E-6	2×2	5	1.8~2.5	4.3	1.7~2.2	N46° E	0.3~0.8	0.2~0.4	弥生土器	弥生中期	
SB1486	G-7	不明×2	-	-	4.8	2	N63° E	0.2~1.0	0.2~0.4	弥生土器	弥生中期	
SB1487	G-8	3×2	5.5	1.6~1.8	3.2	1.3~1.4	N91° E	0.4~0.7	0.2~0.4	弥生土器	弥生中期	

表3 遺構観察表（竪穴建物）

遺構番号	区画	規模 (m)			平面形態	出土遺物	時期	備考		
		長軸	短軸	深さ						
SH090	C-2・3	(6.2)	(3.3)	0.2	不明	弥生土器・石器	弥生中期	半分以上が調査区外、中央土坑 (SK260) 有り		
SH375	E・F-7	5.2	3.5	0.2	長方形	弥生土器・石器	弥生中期	焼土・炭化材を多量に検出		
SH380	E-6・7	7.8	(6.6)	0.25	円形	弥生土器・石器	弥生中期	中央土坑 (SK781) 有り		
SH880	F・G-5・6	4.3	(2.5)	0.2	円形	弥生土器・石器	弥生中期			
SH1050	I-9	(3.1)	(2.5)	0.2	長方形	弥生土器・石器	弥生中期			
SH1200	G-8・9	7.8	(4.4)	0.2	円形	弥生土器・石器	弥生中期	中央土坑 (SK1390) 有り		
SH329	C-3・4	(3.0)	(1.0)	0.1	不明	土師器	古墳中期	半分以上が調査区外		
SH350	C・D-3・4	8.5	7.0	0.25	方形	土師器・須恵器	古墳中期			
SH1000	F・G-6・7	4.3	4.2	0.1	方形	土師器・石製品	古墳中期	半分以上擾乱に切られる		

表4 遺構観察表（溝状遺構）

遺構番号	区画	規模 (m)			出土遺物	時期	備考		
		長さ	幅	深さ					
SD026	C-3	(3.0)	0.6	0.15	弥生土器	弥生中期			
SD270	C・D-1・2	(2.1)	1.1	0.2	弥生土器・石器	弥生中期	SK045・SX050・S159に切られる		
SD540	C・D-4	5.0	0.7	0.35	弥生土器・石器	弥生中期	SH350・S489・S531に切られる		
SD625	E-6	3.1	0.9	0.45	弥生土器・石器	弥生中期	S621のピットに切られる		
SD800	E・F-6	2.4	0.6	0.3	弥生土器・石器	弥生中期			
SD1035	F-4	2.35	0.7	0.2	弥生土器・石器	弥生中期	S343に切られ、S1063~1065を切る		
SD370	E・F-6・7	-	1.2	0.5	土師器・須恵器	古墳中期	SK838、SD845、SX870、SD930、SD942、SD1166等を切る		
SD160	C・D-2	8.4	0.8	0.1	土師器・須恵器	古代	SH090、SK358、SX360等を切る		

表5 遺構観察表（土坑）

遺構番号	区画	規模 (m)			平面形態	出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ				
SK003	B-2	2.1	1.5	0.35	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	炭・焼土を多く含む
SK010	B・C-4	(0.85)	(0.7)	0.6	不明	弥生土器・石器	弥生中期	全体の3/4が調査区外
SK011	B・C-4	0.6	0.6	0.3	円形	弥生土器	弥生中期	全体の1/4が調査区外
SK028	C-3	0.85	0.85	0.7	円形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK045	C-1・2	(1.75)	2.0	0.3	不定形	弥生土器・石器	弥生中期	全体の1/2が攪乱で不明
SK054	C-2	0.84	0.6	0.35	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK073	C-2	0.7	0.5	0.56	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK100	C-3	1.55	1.0	0.4	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK242	C-3	0.9	0.75	0.45	不定形	弥生土器	弥生中期	
SK259	C-2	0.7	0.6	0.55	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	検出面に集石あり
SK260	C-2	1.0	0.65	0.1	長方形	弥生土器・石器	弥生中期	SH090に伴う中央土坑
SK267	D-2	2.1	(0.9)	0.35	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	全体の1/2が調査区外
SK317	D・E-3	(1.7)	1.65	0.3	不定形	弥生土器・石器	弥生中期	SX170の下部から検出
SK327	D-3	2.5	1.1	0.2	楕円形	弥生土器	弥生中期	S230・254・256のピットに切られる
SK358	C-2	4.1	2.5	0.5	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	複数の遺構に切られる
SK455	E-4	0.8	0.7	0.45	円形	弥生土器	弥生中期	
SK636	E-5	1.15	0.8	0.4	長方形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK639	D・E-5	1.3	1.2	0.35	円形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK640	D-5	(1.6)	0.8	0.3	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK741	E-5	0.9	0.6	0.2	長方形	弥生土器	弥生中期	S738のピットに切られ、S742を切る
SK838	F-6	1.5	0.6	0.3	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK873	E-6	(2.7)	2.2	0.4	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	SH380とS872・826のピットに切られる
SK952	F-7	1.2	1.1	0.5	円形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK1055	I-9	1.8	0.7	0.3	長方形	弥生土器・石器	弥生中期	S1057のピットに切られる
SK1091	G-8	1.8	1.3	0.2	不定形	弥生土器・石器	弥生中期	S1092・1262のピットに切られ、S1093のピットを切る
SK1184	F-6・7	1.1	0.8	0.5	長方形	弥生土器・石器	弥生中期	
SK1303	H-7	(2.5)	(1.4)	0.4	不定形	弥生土器・石器	弥生中期	SD1311・S1304に切られる
SK1316	G-7	1.2	0.5	0.3	楕円形	弥生土器・石器	弥生中期	S1489を切る
SK1350	G-6	(0.8)	(0.8)	0.3	楕円形	土師器・石製品	古墳中期	半分攪乱に切られる
SK195	C-2	(1.6)	1.0	0.2	楕円形	土師器	古墳中期	一部攪乱に切られる
SK686	E-5	1.2	1.0	0.4	楕円形	土師器	古墳中期	SK1481を切る
SK687	E-6	1.2	0.75	0.05	楕円形	土師器	古墳中期	SD370に切られる
SK1090	G-8	1.3	0.6	0.4	楕円形	土師器	古墳中期	S1262に切られ、S1261を切る

表 6 遺構観察表（甕棺）

遺構番号	区画	甕棺形式			棺の埋置		墓壙			副葬品	時期	備考	
		構造	上臺	下臺	主軸 (°)	角度 (°)	平面形態	規模 (m)	長軸	短軸	深さ		
SJ035	C-1	合口	壺	甕	N65° W	6	橢円	0.9	0.7	0.25		中期後半	
SJ365	D-3	合口	甕	甕	N64° E	6.5	橢円	0.7	0.47	0.25		中期後半	

表 7 遺構観察表（井戸）

遺構番号	区画	規模 (m)			平面形態	出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ				
SE367	D-3	1.4	1.4	(1.3)	円形	弥生土器・石器	弥生終末	

表 8 遺構観察表（柵列）

遺構番号	区画	規模 (m)		主軸	柱穴 (m)		出土遺物	時期	備考
		全長	柱間		径	深さ			
SA1485	F-5・6	(4.5)	2.2	N35° E	0.6	0.45	弥生土器	弥生中期	

表 9 遺構観察表（不明遺構）

遺構番号	区画	規模 (m)			平面形態	出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ				
SX120	C・D-2・3	(6.8)	(6.6)	0.25	不定形	弥生土器・石器	弥生中期	擾乱により大きく削平される
SX900	F-7	(2.0)	2.3	0.3	不定形	弥生土器・石器	弥生後期	

III. 竹ノ下遺跡

表 10 遺物観察表(土器 1)

調査番号	グリッド	出土遺物	出土層位	種類	器形	法面 (cm)	底面 (cm)	側面 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	断面 (cm)	色調	胎土	焼成	備考	遺物登録番号
1	D-5	S135	一層	縄文土器	鉢		(4.1)	外:にしら(7.5YR5/3) 内:にしら(7.5YR6/2)				後2mm程の長石、石英、角閃石、雲母を多く含む。	良好	内外面に黒斑あり		19000685
2	E-3	検出面	一層	縄文土器	鉢		(17.0)	(3.9)	外:透明白(10YR15/1) 内:透明白(10YR15/4)			滑石を多量に含み、砂粒、金雲母を含む。	良好	中温一部に黒斑あり		19000685
3	C-3	S237	一層	縄文土器	口付土器	3.6	(6.2)	内:外にぶい(黄褐色) (10YR7/2)				長石、石英を多く含み、赤色絞り、金雲母を少額含む。	良好	外温一部に黒斑あり		19000683
4	E-6	S3170	一層	縄文土器	深鉢		(1.46)	外:にしら(黄褐色) (10YR7/4) 内:にしら(黄褐色) (10YR7/4)			後1mm以下の中石英、角閃石を少し含む。	良好	弱火実際土器		19000423	
7	D-4	S8650 (S331)	一層	弥生土器	壺	(28.00)	(6.96)	外:暗褐色 (5YR6/6) 内:透明白 (10YR7/6)				後1mm以下の中石英、長石を多く含む。後2mm以下の中石英を少し含む。	良好			19000303
8	D-2	S8650 (S318)	一層	弥生土器	壺		(2.46)	外:灰黄褐色 (10YR5/2) 内:灰黄褐色 (10YR5/2)			後1mm以下の中石英、長石、角閃石を少し含む。	良好			19000299	
9	D-3-4	S8650 (S318)	1層	弥生土器	壺	(31.00)	(3.96)	外:透明白 (5YR7/2) 内:透明白 (5YR7/2)				後1~2mm程の長石、石英を少し含む。	良好			19000305
10	D-4	S8650 (S318)	一層	弥生土器	壺		(2.46)	外:にしら(黄褐色) (10YR7/3) 内:灰黄褐色 (10YR6/2)			後2mm以下の中石英、長石を少し含む。	良好			19000310	
11	D-3	S8650 (S325)	一層	弥生土器	壺		(2.15)	外:基褐色 (10YR2/2) 内:灰黄褐色 (10YR5/2)			後1~2mm程の長石、長石を少し含む。後1mm以下の中石英を少し含む。	良好			19000300	
12	D-4	S8650 (S331)	一層	弥生土器	壺		(1.46)	外:にしら(黄褐色) (10YR7/3) 内:透明白 (10YR8/3)			後1~4mm程の長石、長石を少し含む。後2mm以下の中石英を少し含む。	良好	内口部上部に黒斑あり		19000302	
13	D-4	S8650 (S368)	1層	弥生土器	壺		(1.26)	外:暗褐色 (5YR6/6) 内:にしら(黄褐色) (10YR7/4)			後1~3mm程の長石、石英、長石、角閃石を少し含む。	良好			19000313	
14	E-4	S8650 (S368)	一層	弥生土器	壺		(2.16)	外:灰黄褐色 (10YR9/4) 内:にしら(黄褐色) (7.5YR7/4)			後3mm以下の石英、長石を含む。	良好			19000319	
15	D-4	S8650 (S320)	3層	土器類	壺	(15.40)	(5.46)	外:にしら(黄褐色) (10YR6/4) 内:透明白 (5YR6/6)			後1~3mm程の長石、石英、長石を含む。	良好			19000307	
16	D-4	S8650	一層	弥生土器	壺		(4.46)	外:透明白 (5YR6/6) 内:透明白 (10YR8/2)			後2mm以下の中石英、長石、角閃石を少し含む。	良好			19000312	
17	D-3	S8650 (S325)	一層	弥生土器	壺		(5.96)	外:透明白 (5YR6/6) 内:灰白(10YR7/2)			後1~3mm程の長石、石英、長石、角閃石を少し含む。	良好			19000301	
18	D-4	S8650 (S347)	2層	弥生土器	壺		(2.46)	外:灰褐色 (5YR7/1) 内:灰黄褐色 (10YR6/4)			後1~2mm程の石英を少し含む。	良好			19000306	
19	D-4	S8650 (S318)	一層	弥生土器	壺		(3.46)	外:にしら(黄褐色) (10YR5/3) 内:にしら(黄褐色) (10YR7/4)			後3mm以下の石英、長石を含む。	良好			19000309	
20	D-3-4	S8650 (S403)	1層	弥生土器	壺		(7.80)	外:暗褐色 (5YR6/6) 内:透明白 (5YR7/6)			後1~3mm程の長石、石英、長石を含む。	良好			19000304	
21	E-4	S8650	2層	弥生土器	壺		(8.60)	外:透明白 (5YR6/6) 内:にしら(黄褐色) (10YR2/3)			後1~3mm程の石英、長石を多く含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000320	
22	D-4	S8650 (S593)	2層	弥生土器	壺		(6.50)	外:透明白 (5YR6/6) 内:透明白 (5YR7/6)			後1~3mm程の石英、長石を含む。角閃石を少し含む。	良好	外温に赤色顔料あり		19000318	
23	D-4	S8650 (S331)	一層	弥生土器	壺		(2.66)	外:にしら(黄褐色) (10YR5/3) 内:透明白 (10YR6/3)			後2mm以下の石英、長石を含む。後1mm程の角閃石を含む。	良好			19000311	
25	F-6	S81480 (S985)	一層	弥生土器	壺	(22.00)	(4.46)	外:暗褐色 (5YR6/6) 内:暗褐色 (5YR6/6)			後1~4mm程の石英、長石を多く含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000321	
26	F-6	S81480 (S985)	一層	弥生土器	壺	(6.20)	(5.46)	外:にしら(暗褐色) (7.5YR7/4) 内:灰白(2.5YR7/2)			後1~3mm程の長石を多く含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000322	
27	F-6	S81480 (S1460)	一層	弥生土器	壺	7.60	(2.95)	外:にしら(暗褐色) (7.5YR7/4) 内:にしら(黄褐色) (10YR7/2)			後1mm以下の中石英を含む。後1~2mm程の角閃石を含む。	良好			19000323	
28	O-2	S81482 (S1519)	一層	弥生土器	壺		(1.36)	外:基褐色 (10YR2/2) 内:透明白 (2.5YR7/2)			後1~2mm程の長石を含む。後1mm以下の中石英を含む。	良好			19000328	
29	D-2	S81482 (S271)	2層	弥生土器	壺	(7.00)	(2.40)	外:透明白 (5YR6/6) 内:透明白 (5YR6/6)			後1~3mm程の石英、長石を含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000331	
30	D-2	S81482 (S271)	一層	弥生土器	壺		(2.46)	外:灰白(10YR6/2) 内:透明白 (10YR6/2)			後1~4mm程の石英、長石を少し含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000330	
31	D-2	S81482 (S296)	一層	土器類	壺?	高8.29	幅4.10	高さ:10	外:暗褐色 (5YR6/6) 内:透明白 (2.5YR7/6)			後1~2mm程の石英を含む。角閃石を含む。	良好	温の転用か		19000326
33	E-6	S81484 (S627)	1層	弥生土器	壺		(3.46)	外:透明白 (5YR6/6) 内:透明白 (5YR6/6)			後1~3mm程の石英、長石を含む。	良好			19000314	
34	D-6	S81484 (S627)	一層	弥生土器	高杯		(2.35)	外:暗褐色 (5YR6/6) 内:暗褐色 (5YR6/6)			後1~3mm程の石英、長石を含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000315	
35	G-7	S81486 (S1294)	一層	弥生土器	壺		(1.26)	外:暗褐色 (5YR7/4) 内:暗褐色 (5YR6/6)			後1~3mm程の石英、長石を含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000316	
36	H-6	S81487 (S1355)	一層	弥生土器	壺	(6.40)	(4.46)	外:暗褐色 (2.5YR7/4) 内:暗褐色 (10YR6/2)			後1~3mm程の石英を含む。角閃石を含む。	良好			19000324	
37	G-6	S81487 (S1366)	一層	弥生土器	壺		(3.46)	外:暗褐色 (5YR6/6) 内:暗褐色 (5YR6/6)			後1~3mm程の石英を含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000325	
38	C-2-3	S81900	一層	弥生土器	壺	(30.00)	(2.76)	外:灰白(10YR6/2) 内:灰白(2.5YR6/2)			後1~4mm程の石英、長石を含む。	良好			19000343	
39	C-2-3	S81900	一層	弥生土器	壺	(17.00)	(4.46)	外:にしら(透明白) (10YR6/2) 内:にしら(透明白) (10YR7/2)			後1mm以下の中石英を含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000338	
40	C-2	S81900	一層	弥生土器	壺		(2.16)	外:透明白 (10YR6/2) 内:透明白 (2.5YR6/2)			後1mm以下の中石英を含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000336	
41	C-2-3	S81900	一層	弥生土器	壺		(3.46)	外:にしら(透明白) (7.5YR2/3) 内:にしら(透明白) (7.5YR6/3)			後1mm以下の中石英を含む。後2mm以下の中石英を含む。	良好			19000340	
42	C-2-3	S81900	一層	弥生土器	壺		(8.46)	外:にしら(透明白) (10YR6/2) 内:にしら(透明白) (10YR7/2)			後1~2mm程の長石を含む。	良好			19000342	
43	C-2-3	S81900	一層	弥生土器	底口壺		(2.16)	外:暗褐色 (5YR6/6) 内:にしら(透明白) (10YR7/4)			後1~2mm程の石英、長石を含む。後1mm以下の中石英を含む。	良好			19000339	
44	C-2	S81900	一層	弥生土器	底口壺		(3.06)	外:にしら(透明白) (7.5YR6/4) 内:暗褐色 (5YR6/6)			後1~3mm程の石英を含む。後1mm以下の中石英を含む。	良好			19000337	

表11 遺物観察表(土器2)

調査番号	グリッド	出土場所	出土層位	種類	基準	比重 (m)	埋没度	断片化率	色調	土質	性成	備考	遺物登録番号
					口径	底径	高さ						
45	O-2・3	SH050	一層	弥生土器	壺		6.60	[4.40]	外:灰白色 (10YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	径1~5mmの長石を少し含む。	良好		19000341
46	O-2・3	SH050	一層	弥生土器	壺		6.50	[5.35]	外:赤褐色 (5YR8/6) 内:褐色 (5YR8/6)	径1~2mm程の石英、長石を含む。	良好		19000345
52	O-2	SH050	一層	弥生土器	壺	(8.75)		[13.40]	外:灰白色 (7S9R8/2) 内:灰白色 (7S9R8/2)	径3mm以下の長石を少し含む。径4mm以下の長石を含む。径2mm以下の角閃石を含む。径1mm以下の角閃石を少し含む。	良好	外縁に黒斑あり	19000466
53	O-2	SH050	一層	弥生土器	壺		[2.10]		外:に赤い変色色 (10YR7/4) 内:迷黄褐色 (10YR8/3)	径1~3mmの石英を少し含む。径4mm以下の長石を含む。径1~4mm程の赤色。白色粒子を少し含む。径1~2mm程の角閃石を少し含む。	良好		19000489
54	O-2	SH050	一層	弥生土器	壺		(9.15)	[17.35]	外:に赤い変色色 (10YR7/4) 内:迷黄褐色 (10YR8/3)	径1~3mmの石英を少し含む。径4mm以下の長石を含む。径1~5mm以下の赤色を含む。径1~2mm程の白色。白色粒子を少し含む。径1~2mm程の角閃石を含む。	良好	外縁に黒斑あり	19000487
55	O-2	SH050	一層	弥生土器	壺		(5.90)	[4.40]	外:浅黄色 (10YR8/2) 内:迷黄褐色 (10YR8/3)	径6mm以下の長石を含む。径4mm以下の赤色を含む。径1~2mm程の白色。白色粒子を少し含む。径1~2mm程の角閃石を含む。	良好		19000490
56	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		[3.75]		外:浅黄色 (7S9R8/2) 内:褐色 (7S9R7/1)	径6mm以下の長石を含む。径4mm以下の角閃石を含む。	良好		19000493
57	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		[3.45]		外:褐色 (5YR8/6) 内:灰白色 (7S9R6/2)	径6mm以下の長石を含む。径4mm以下の角閃石を含む。	良好		19000499
58	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		[3.80]		外:浅黄色 (10YR8/3) 内:褐色 (2.5YR6/1)	径6mm以下の長石を含む。径4mm以下の角閃石を含む。	良好		19000495
59	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		[3.45]		外:に赤い變色色 (7.5YR7/4) 内:褐色 (5YR6/6)	径3mm以下の長石を含む。径4mm以下の角閃石を含む。径1~2mm程の赤色を含む。径1~2mm程の褐色を含む。	良好		19000491
60	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		[1.40]		外:浅黄色 (10YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	径2mm以下の長石を含む。径1mm以下の角閃石を含む。	良好		19000498
61	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		[23.30]		外:に赤い變色色 (10YR7/4) 内:灰白色 (2.5YR7/4)	径2mm以下の長石を含む。径1mm以下の角閃石を含む。	良好		19000492
62	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		(6.30)	[9.25]	外:に赤い變色色 (10YR7/2) 内:褐色 (7.5YR7/4)	径2mm以下の長石を含む。径1mm以下の角閃石を含む。	良好	外縁に黒斑あり	19000494
63	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		(5.30)	[5.90]	外:褐色 (7.5YR7/6) 内:灰白色 (10YR5/2)	径2mm以下の長石を含む。径1mm以下の角閃石を含む。	良好		19000497
64	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		(5.10)	[5.65]	外:に赤い變色色 (10YR7/4) 内:灰白色 (5YR7/4)	径2mm以下の長石を含む。径1mm以下の角閃石を含む。	良好	外縁に黒斑あり	19000496
65	E-7	SH075	一層	弥生土器	壺		7.90	[3.95]	外:灰白色 (10YR8/2) 内:迷黄褐色 (10YR8/3)	径2mm以下の長石を含む。径1mm以下の角閃石を含む。	良好		19000488
66	E-7	SH075	一層	弥生土器	調査回収		[4.10]		外:褐色 (5YR7/6) 内:褐色 (7.5YR7/6)	砂粒を地に含まない。	良好		19000490
67	E-7	SH075	1層	ミクチャ2号	鉢	(8.10)	4.40		外:灰白色 (10YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	径1mm以下の長石を含む。径2mm以下の角閃石を含む。	良好	外縁に黒斑あり	19000487
71	E-6・7	SH080	一層	弥生土器	壺	(27.00)	[4.40]		外:褐色 (5YR7/6) 内:褐色 (5YR7/6)	径1~3mm程の石英。長石を多く含む。径1mm以下の角閃石を含む。	良好		19000400
72	E-6・7	SH080	一層	弥生土器	壺	(28.00)	[6.00]		外:褐色 (7.5YR7/6) 内:褐色 (7.5YR6/6)	径1~3mm程の石英。長石を多く含む。	良好		19000401
73	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺	(28.00)	[5.65]		外:浅黄色 (7.5YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	径1~3mm程の石英を少し含む。径2mm以下の角閃石を含む。	良好		19000468
74	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺	(8.50)	[6.20]		外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (10YR7/2)	径1~4mm程の角閃石を含む。径1~2mm程の長石を多く含む。	良好		19000413
75	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺	(8.60)	[4.35]		外:に赤い變色色 (10YR7/4)	径1~3mm程の石英。長石を多く含む。径1mm以下の角閃石を含む。	良好		19000415
76	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺	(5.70)	[4.00]		外:浅黄色 (10YR8/2) 内:灰白色 (2.5YR8/2)	径1~3mm程の石英。長石を少し含む。径2mm以下の角閃石を含む。	良好		19000418
77	E-6・7	SH080	一層	弥生土器	壺		[4.20]		外:褐色 (2.5YR7/6) 内:灰白色 (2.5YR7/6)	径1~3mm程の石英。長石を含む。	良好		19000399
78	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[3.30]		外:浅黄色 (10YR8/2) 内:迷黄褐色 (10YR8/2)	径1~4mm程の石英を多く含む。径1~2mm程の角閃石を含む。	良好		19000403
79	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[2.40]		外:に赤い變色色 (10YR7/4) 内:に赤い變色色 (2.5YR7/4)	径1~3mm程の石英。長石を多く含む。	良好		19000404
80	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[3.00]		外:迷黄褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	径1~3mm程の石英。長石を少し含む。径2mm以下の角閃石を含む。	良好		19000405
81	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[4.15]		外:に赤い變色色 (10YR7/2) 内:褐色 (2.5YR7/2)	径1~3mm程の石英。長石を少し含む。	良好		19000406
82	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[3.00]		外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	径1~3mm程の石英を多く含む。径2mm以下の角閃石を含む。	良好		19000407
83	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[2.70]		外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	径1~4mm程の石英を多く含む。径1~2mm程の角閃石を含む。	良好		19000409
84	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[4.40]		外:褐色 (2.5YR7/6) 内:に赤い變色色 (10YR7/4)	径1~3mm程の石英を少し含む。径2mm以下の角閃石を含む。	良好		19000410
85	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[3.20]		外:に赤い變色色 (2.5YR7/4) 内:に赤い變色色 (2.5YR7/4)	径1~3mm程の石英。長石を含む。	良好		19000412
86	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[3.75]		外:灰白色 (10YR8/2) 内:灰白色 (2.5YR8/2)	径1~3mm程の石英。長石、角閃石を少し含む。	良好	外縁に黒斑あり	19000417
87	E-6・7	SH080	1層	弥生土器	壺	6.70	[8.40]		外:褐色 (5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	径1~3mm程の石英。長石を含む。	良好		19000402
88	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[2.75]		外:に赤い變色色 (10YR7/3) 内:褐色 (2.5YR7/6)	径1~2mm程の石英。長石を多く含む。径1~1.5mm程の褐色を少し含む。	良好		19000411
89	E-7	SH080	一層	弥生土器	壺		[5.90]		外:に赤い變色色 (3YR7/4) 内:灰白色 (10YR8/4)	径1~4mm程の石英を多く含む。径2mm以下の長石を含む。	良好		19000414

III. 竹ノ下遺跡

表 12 遺物観察表(土器3)

辨認番号	グリッド	出土位置	出土層位	種別	基盤	底面 (cm) (裏面) (側面)	口径 底径 高さ 厚さ	色調	地土	焼成	備考	遺物登録番号
100	E-7	SK781	一括	弥生土器	裏	(28.80)	[5.85]	外:褐色 (2.5YR6/5) 内:にじみ青褐色 (10YR7/4)	45mm以下の石英を多く含む。往 3mm以下の長石を少し含む。	良好		19000545
101	E-7	SK781	一括	弥生土器	裏		[4.45]	外:淡黄色 (10YR8/6) 内:褐灰色 (10YR8/2)	3mm以下の長石を少し含む。 往3mm以下の長石を多く含む。	良好		19000547
102	E-7	SK781	一括	弥生土器	裏		[5.65]	外:褐色 (2.5YR6/5) 内:褐灰色 (10YR8/1)	45mm以下の石英を多く含む。往 3mm以下の長石を多く含む。	良好	表面に黒斑あり	19000546
105	E-7	SK1464	一括	弥生土器	帶状の 断面		[3.40]	外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	往1mm以下の石英を含む。	良好		19000416
106	F-0-5-6	SH1880	一括	弥生土器	裏		[1.40]	外:灰白色 (10YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	往1mm以下の石英、長石、角閃石 を少し含む。	良好		19000419
107	F-0-5-6	SH1880	一括	弥生土器	裏		[2.10]	外:淡黄色 (10YR8/3) 内:灰白色 (2.5YR7/2)	往1mm以下の石英、長石、角閃石 を少し含む。	良好		19000420
110	I-9	SH1050	一括	弥生土器	裏	(25.90)	[2.25]	外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	往2mm以下の石英、長石を少し含 む。往1mm以下の長石を少し含む。	良好	内部に黒斑あり	19000434
111	I-9	SH1050	1層	弥生土器	裏		[4.40]	外:にじみ青褐色 (10YR7/3) 内:にじみ青褐色 (10YR7/3)	往1mm以下の石英を含む。往 3mm以下の長石を少し含む。往 ~3mmの角閃石を少し含む。	良好		19000435
112	I-9	SH1050	1層	弥生土器	広口盤	(28.80)	[4.40]	外:淡黄色 (10YR8/1) 内:にじみ青褐色 (10YR7/4)	往1mm以下の石英、長石を含む。	良好		19000436
114	I-9	SK1089	一括	弥生土器	裏		[4.40]	外:黑褐色 (10YR8/1) 内:にじみ青褐色 (10YR8/3)	往1.5~4mmの石英を多く含 む。往1mm以下の長石を多く含 む。	良好		19000591
115	I-9	SK1089	一括	弥生土器	裏		[3.10]	外:灰褐色 (2.5YR5/2) 内:灰褐色 (10YR8/2)	往1~4mmの石英を多く含 む。往0.5~2mmの長石を含 む。往1mm以下の長石を多く含 む。往2mmの角閃石を少し含 む。	良好		19000592
116	G-8-9	SH1200	一括	弥生土器	裏		[4.10]	外:褐赤褐色 (2.5YR5/8) 内:褐赤褐色 (10YR8/8)	往1~3mmの石英、長石を含 む。	良好		19000439
117	G-8-9	SH1200	一括	弥生土器	裏		[3.40]	外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐赤褐色 (2.5YR7/6)	往1mmの石英、長石を少し含 む。	良好		19000442
118	G-8-9	SH1200	一括	弥生土器	裏		[2.20]	外:黄褐色 (2.5YR8/8) 内:にじみ青褐色 (10YR8/7)	往1~3mmの石英、長石を少し 含む。	良好	表面に赤茶系色あり	19000444
119	G-8	SH1200	一括	弥生土器	裏		[4.40]	外:淡黄色 (10YR8/3) 内:褐赤褐色 (2.5YR8/3)	往1~3mmの石英、長石を少し 含む。	良好		19000437
120	G-8-9	SH1200	一括	弥生土器	裏		[1.70]	外:褐褐色 (2.5YR8/4) 内:褐赤褐色 (2.5YR8/4)	往1~3mmの石英、長石を少し 含む。	良好		19000443
121	G-8-9	SH1200	一括	弥生土器	裏	6.30	[4.40]	外:褐色 (2.5YR8/4) 内:褐赤褐色 (10YR8/1)	往1~3mmの石英、長石を含 む。	良好		19000440
122	G-8-9	SH1200	一括	弥生土器	裏	(5.20)	[5.10]	外:にじみ青褐色 (10YR7/4) 内:にじみ青褐色 (10YR7/3)	往1~3mmの石英、長石を含 む。	良好		19000445
123	G-8	SH1200	一括	弥生土器	高脚か		[1.40]	外:褐色 (2.5YR8/6) 内:にじみ青褐色 (10YR8/3)	往1mmの石英を少し含む。	良好		19000438
124	G-8-9	SH1200	一括	化石	-	長さ2.60 極さ1.50		外:褐赤褐色 (2.5YR8/3) 内:褐赤褐色 (2.5YR8/3)	往5mm以下の石英を多く含む。往 1mm以下の長石を多く含む。往 0.5mmの角閃石を含む。	良好	二枚貝と考えられる	19000441
126	B-2	SK603	一括	弥生土器	裏	(28.30)	[3.90]	外:褐赤褐色 (2.5YR8/6) 内:褐色 (5YR6/6)	往5mm以下の石英を多く含む。往 1mm以下の長石を多く含む。往 0.5mmの角閃石を含む。	良好		19000446
127	B-2	SK603	一括	弥生土器	裏		[6.90]	外:にじみ褐色 (2.5YR8/6) 内:にじみ赤褐色 (2.5YR8/3)	往3mm以下の石英を含む。往 1mm以下の長石を含む。往1mmの 角閃石を含む。	良好	外壁にスリット有	19000451
128	B-2	SK603	一括	弥生土器	裏		[3.20]	外:褐色 (2.5YR6/6) 内:褐色 (2.5YR6/6)	往3mm以下の石英を多く含 む。往1mm以下の長石を多く含 む。	良好		19000450
129	B-C-4	SK610	一括	弥生土器	裏	5.60	[1.15]	外:褐赤褐色 (2.5YR8/6) 内:黒褐色 (10YR8/2)	往0.5~2mmの石英、長石、 褐色を多く含む。往0.5mmの 角閃石を含む。	良好		19000327
131	B-C-4	SK611	一括	弥生土器	鉢		[3.40]	外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	往1mm以下の石英を少し含 む。	良好	脚部目凸帶文	19000448
132	C-3	SK628	一括	弥生土器	裏	(6.70)	[4.40]	外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	往1~2mmの石英、長石を多く 含む。	良好		19000453
133	C-3	SK628	一括	弥生土器	裏		[2.75]	外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)	往1~5mmの石英、長石を少し 含む。往1mmの角閃石を少し含 む。	良好		19000454
134	D-3	SK628	一括	弥生土器	裏		[2.20]	外:にじみ青褐色 (10YR8/4) 内:褐赤褐色 (2.5YR7/2)	往1~3mmの石英、長石を少し 含む。往1mmの角閃石を少し含 む。	良好		19000455
135	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏	(32.00)	[7.40]	外:淡黄色 (2.5YR8/4) 内:灰白色 (10YR8/2)	往1~4mmの長石を少し含 む。往1~3mmの角閃石を含む。	良好		19000466
136	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏	(37.00)	[8.40]	外:灰白色 (10YR8/2) 内:褐灰色 (10YR8/1)	往1~2mmの石英、長石、角 閃石を含む。	良好		19000467
137	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏	(38.00)	[5.40]	外:にじみ褐色 (2.5YR7/4) 内:にじみ褐色 (2.5YR7/4)	往1~3mmの石英、長石を少し 含む。往1~2mmの角閃石を少 し含む。	良好		19000472
138	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏	(34.00)	[3.95]	外:灰白色 (10YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	往1mm以下の石英、角閃石を少 し含む。往1~3mmの長石を含む。	良好		19000462
139	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏	(38.00)	[3.40]	外:灰白色 (10YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	往1~5mmの石英、長石を含 む。往1~2mmの角閃石を少 し含む。	良好		19000465
140	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏	(38.00)	[3.15]	外:褐赤褐色 (10YR8/2) 内:褐色 (5YR6/6)	往1mm以下の石英、長石を含む。 往1~2mmの角閃石を少 し含む。	良好		19000461
141	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏		[2.40]	外:淡黄色 (10YR8/3) 内:淡黄色 (10YR8/3)	往1~3mmの石英、長石を含 む。往1mm以下の角閃石を少 し含む。	良好	内面口縁上部に黒斑あ り	19000458
142	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏		[5.15]	外:灰白色 (10YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	往1~2mmの石英、長石を含 む。往2mm以下の角閃石を少 し含む。	良好		19000464
143	D-1-2	SK645	一括	弥生土器	裏		[1.40]	外:灰白色 (10YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/2)	往1~2mmの石英、長石を含 む。往2mm以下の角閃石を少 し含む。	良好		19000456

表 13 遺物観察表(土器4)

件名番号	グリッド	出土場所	出土所位	種類	基盤	深度 (cm)	測定面 (測定面)	口径	底径	基盤	色調		土色	地成	備考	遺物登録番号
											内	外				
144	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(2.45)			外:灰白色 (3SYR8/2) 内:にやけ黄褐色 (10YR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000459
145	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(3.7)			外:深黄色 (2.5YR8/2) 内:灰白色 (2.5YR7/1)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000473
146	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(7.70)			外:灰白色 (3SYR8/2) 内:灰白色 (3SYR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000474
147	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(2.40)			外:灰白色 (3SYR8/2) 内:灰白色 (3SYR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000457
148	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(7.40)	(4.10)		外:深黄色 (2.5YR8/2) 内:灰白色 (3YR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000460
149	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(9.60)	(4.40)		外:灰白色 (2.5YR8/2) 内:灰白色 (2.5YR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000469
150	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(7.50)	(5.60)		外:深黄色 (2.5YR8/2) 内:灰白色 (10YR8/4)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000471
151	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(1.90)			外:にやけ黄褐色 (10YR7/4) 内:にやけ黄褐色 (10YR7/4)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000463
152	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(3.40)			外:褐色 (3YR7/6) 内:深黄色 (10YR8/6)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000470
153	C-1-2	SK045	一層	弥生土器	壺			(4.30)			外:褐色 (5YR7/6) 内:褐色 (5YR7/6)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000468
155	C-2	SK054	一層	弥生土器	壺			(1.70)			外:深黄色 (10YR8/2) 内:深黄色 (10YR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000479
156	C-2	SK073	一層	弥生土器	壺			(2.40)			外:にやけ黄褐色 (10YR7/2) 内:にやけ黄褐色 (10YR7/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000474
157	D-3	SK100	一層	弥生土器	壺	(28.60)		(4.30)			外:褐色 (3YR7/6) 内:褐色 (3YR5/6)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000483
158	D-3	SK100	一層	弥生土器	壺			(3.10)			外:褐色 (3YR7/6) 内:褐色 (3YR7/6)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000480
159	D-3	SK100	一層	弥生土器	壺			(1.80)			外:にやけ黄褐色 (10YR7/2) 内:にやけ黄褐色 (10YR7/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000482
160	D-3	SK100	一層	弥生土器	壺			(4.80)			外:にやけ黄褐色 (10YR7/2) 内:灰白色 (10YR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000481
164	D-3	SK042	一層	弥生土器	壺			(1.70)			外:褐色 (2.5YR7/6) 内:褐色 (2.5YR7/6)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000460
165	D-2	SK059	一層	弥生土器	壺			(2.70)			外:褐色 (3YR7/6) 内:褐色 (3YR7/4)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000477
166	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(28.90)		(9.20)			外:基褐色 (3YR7/1) 内:褐色 (3YR6/6)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000512
167	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(38.40)		(6.20)			外:灰褐色 (10YR7/2) 内:にやけ黄褐色 (10YR7/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000511
168	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(28.20)		(11.30)			外:灰褐色 (10YR7/2) 内:灰褐色 (10YR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000508
169	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(28.40)		(10.10)			外:深黄色 (10YR8/3) 内:灰白色 (10YR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000500
170	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(27.40)		(9.10)			外:灰白色 (2.5YR8/2) 内:灰白色 (3YR8/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000517
171	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(28.00)		(6.70)			外:にやけ黄褐色 (10YR7/2) 内:にやけ黄褐色 (10YR7/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000507
172	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(28.20)		(10.20)			外:深黄色 (2.5YR8/4) 内:灰褐色 (10YR8/4)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000502
173	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(29.30)		(10.60)			外:にやけ黄褐色 (2.5YR8/2) 内:灰白色 (2.5YR7/1)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000518
174	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(7.10)		(10.30)			外:にやけ黄褐色 (2.5YR8/4) 内:灰白色 (3YR8/3)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000509
175	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(8.30)		(7.40)			外:赤褐色 (10RE6/1) 内:褐赤褐色 (10RE6/1)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000498
176	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(7.20)		(8.40)			外:赤褐色 (2.5YR6/1) 内:灰白色 (2.5YR6/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000499
177	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(7.20)		(9.10)			外:にやけ黄褐色 (3YR7/2) 内:灰白色 (3YR7/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000504
178	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	7.30		(9.40)			外:にやけ黄褐色 (10YR7/2) 内:深黄色 (10YR7/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000505
179	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺	(9.30)		(4.20)			外:褐灰色 (3YR6/1) 内:灰赤褐色 (2.5YR5/2)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000497
180	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺			(2.90)			外:深黄色 (10YR6/3) 内:褐色 (3YR7/6)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000496
181	D-2	SK067	I層	弥生土器	壺			(9.10)			外:にやけ黄褐色 (2.5YR7/1) 内:灰白色 (3YR7/1)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000513
182	D-2	SK067	一層	弥生土器	壺			(2.20)			外:にやけ黄褐色 (10YR7/4) 内:深黄色 (3YR7/1)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000516
183	D-2	SK067	一層	弥生土器	壺			(2.40)			外:にやけ黄褐色 (10YR7/3) 内:にやけ黄褐色 (10YR7/3)		灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	19000514

III. 竹ノ下遺跡

表 14 遺物観察表(土器 5)

件名番号	グリッド	出土層番	土器層番	種別	器種	底面 口径	底径	高さ	(底面) (底外周)	色調	胎土	構成	備考	造物登録番号
164	D-2	SK267	I層	弥生土器	壺	(36.80)		[5.70]	外: 淡黄褐色 (10YR8/3) 内: 淡黄褐色 (10YR8/3)	外: 0.5~1cmの石英、長石、砂粒を多く含む。0.5~1cm程の角閃石を含む。	良好	外面に赤色顔料あり	19000501	
165	D-2	SK267	I層	弥生土器	壺		[28.10]	[19.85]	外: 淡黄褐色 (7.5YR8/4) 内: にぶい褐色 (7.5YR8/4)	外: 1mm以下の角閃石を含む。径4mm以下の淡色顔料を多く含む。 内: 1mm以下の角閃石を含む。	良好	外口部、内外面に赤色顔料あり	19000495	
166	D-2	SK267	I層	弥生土器	壺		[7.20]	[6.70]	外: 棕色 (2.5YR8/6) 内: にぶい褐色 (7.5YR8/4)	外: 0.5~1cmの石英、長石を少し含む。0.5~1cmの角閃石を含む。	良好	外面に顔料あり	19000510	
167	D-2	SK267	I層	弥生土器	壺		[8.00]	[6.20]	外: 淡黄褐色 (7.5YR8/3) 内: 淡黄褐色 (7.5YR8/3)	外: 0.5~1cmの石英、長石を少し含む。0.5~1cmの角閃石を含む。	良好	外面上に黒層あり	19000506	
168	D-2	SK267	一層	弥生土器	高杯		[1.25]	[0.80]	外: 淡黄褐色 (10YR8/3) 内: 淡黄褐色 (10YR8/3)	外: 0.5~2mmの石英、長石を少し含む。1mm程の角閃石を少し含む。	良好	外面上に赤色顔料あり	19000515	
169	D-E-3	SK317	一層	弥生土器	壺	(39.40)		[4.60]	外: にぶい褐色 (7.5YR8/4) 内: 素面褐色 (10YR8/2)	外: 1mm程の石英、長石を多く含む。径1mm程の赤色顔料を少し含む。	良好		19000519	
170	D-E-3	SK317	一層	弥生土器	壺		[5.00]	[4.75]	外: にぶい黄褐色 (10YR7/4) 内: にぶい黄褐色 (10YR7/2)	外: 1mm程の石英、長石を含む。径1mm以下の角閃石を少し含む。	良好		19000520	
172	D-2	SK327	一層	弥生土器	壺		[2.40]	[2.40]	外: 棕色 (5YR7/6) 内: 淡黄褐色 (10YR8/3)	外: 1~5mm程の石英、長石を少し含む。径1mm程の角閃石を少し含む。	良好		19000521	
173	C-2	SK358	一層	弥生土器	壺	(27.80)		[8.40]	外: にぶい褐色 (7.5YR8/4) 内: にぶい黄褐色 (10YR8/4)	外: 1~3mm程の石英、長石を多く含む。径1mm程の赤色顔料を少し含む。葉緑石を含む。	良好		19000524	
174	C-2	SK358	一層	弥生土器	壺	(27.40)		[4.80]	外: にぶい褐色 (7.5YR8/3) 内: にぶい黄褐色 (10YR8/3)	外: 1~3mm程の石英、長石を多く含む。径1mm程の赤色顔料を少し含む。	良好		19000530	
175	C-2	SK358	一層	弥生土器	壺	(29.40)		[5.40]	外: 棕色 (7.5YR7/6) 内: 素面褐色 (2.5YR8/1)	外: 1~5mm程の石英、長石を多く含む。径1mm程の角閃石を少し含む。	良好		19000525	
176	C-2	SK358	一層	弥生土器	壺	(22.60)		[5.30]	外: 淡黄褐色 (7.5YR8/4) 内: 素面褐色 (10YR8/4)	外: 1~3mm程の石英、長石を多く含む。径1mm程の赤色顔料を少し含む。葉緑石を含む。	良好		19000528	
177	C-2	SK358	一層	弥生土器	壺	(22.0)		[6.30]	外: 明黄色 (10YR7/6) 内: 素面褐色 (10YR8/5)	外: 1~4mm程の石英、長石を含む。径1~2mm程の赤色顔料を少し含む。	良好		19000529	
178	C-2	SK358	一層	弥生土器	壺		[5.30]	[7.40]	外: 棕色 (7.5YR7/6) 内: にぶい黄褐色 (10YR7/4)	外: 1~4mm程の石英、長石を含む。葉緑石を含む。	良好		19000526	
179	C-2	SK358	一層	弥生土器	壺		[6.30]	[7.40]	外: 棕色 (5YR7/6) 内: 棕色 (2.5YR8/3)	外: 1~3mm程の石英、長石を多く含む。葉緑石を含む。	良好		19000532	
201	E-4	SK455	一層	弥生土器	壺		[5.80]	[4.40]	外: 明黄色 (10YR7/6) 内: にぶい黄褐色 (10YR7/4)	外: 1~4mm程の石英、長石を含む。葉緑石を含む。	良好		19000523	
202	E-4	SK455	一層	弥生土器	壺			[2.80]	外: 淡黄褐色 (7.5YR8/8) 内: 淡黄褐色 (7.5YR8/4)	外: 1~5mm程の石英、長石を多く含む。径1mm程の赤色顔料を少し含む。	良好		19000522	
203	E-5	SK536	一層	弥生土器	壺			[7.10]	[9.10]	外: 棕色 (5YR7/6) 内: にぶい黄褐色 (10YR7/2)	外: 1~3mm程の石英、長石を多く含む。径1~2mm程の赤色顔料を少し含む。	良好		19000531
204	D-E-5	SK539	一層	弥生土器	壺	(7.60)		[2.30]	外: にぶい黄褐色 (10YR7/3) 内: 素面褐色 (10YR8/4)	外: 1~3mm程の石英、長石を含む。0.5~2mm程の赤色顔料を多く含む。赤色顔料を少し含む。	良好		19000535	
208	D-5	SK540	一層	弥生土器	壺			[4.40]	外: 淡黄褐色 (10YR8/3) 内: 白褐色 (10YR8/2)	外: 1~3mm程の石英、長石を含む。白色顔料を少し含む。	良好		19000536	
209	D-5	SK540	一層	弥生土器	壺			[3.30]	外: 棕色 (5YR7/6) 内: 棕色 (2.5YR8/3)	外: 1~3mm程の石英、長石を多く含む。葉緑石を含む。	良好		19000537	
210	D-5	SK540	一層	弥生土器	壺			[7.00]	外: 淡黄褐色 (2.5YR7/3) 内: 黄褐色 (2.5YR7/1)	外: 1~3mm程の石英、長石を含む。葉緑石を含む。	良好		19000538	
211	E-5	SK541	一層	弥生土器	壺	(34.10)		[4.60]	外: 明赤褐色 (5YR8/6) 内: 明赤褐色 (5YR8/6)	外: 0.5~3mm程の石英、長石を多く含む。1~1.5mm程の赤色顔料を少し含む。	良好		19000541	
212	E-5	SK541	一層	弥生土器	壺			[5.70]	外: 棕色 (5YR7/6) 内: 黄褐色 (2.5YR8/1)	外: 0.5~3mm程の石英、長石を多く含む。径1~5mm程の赤色顔料を含む。	良好	外面上に黒層あり	19000540	
213	F-6	SK538	一層	弥生土器	壺			[11.00]	[7.80]	外: にぶい褐色 (7.5YR8/3) 内: 褐色 (2.5YR7/1)	外: 1~5mm程の石英、長石を含む。葉緑石を含む。	良好		19000542
214	E-6	SK573	一層	弥生土器	壺	(24.60)		[16.40]	外: にぶい褐色 (7.5YR8/4) 内: にぶい褐色 (7.5YR8/4)	外: 1~7mm程の石英、長石を含む。	良好		19000564	
215	E-6	SK573	一層	弥生土器	壺	(22.60)		[5.70]	外: にぶい褐色 (7.5YR8/5) 内: にぶい褐色 (7.5YR8/4)	外: 1~3mm程の石英、長石を多く含む。葉緑石を含む。	良好		19000561	
216	E-6	SK573	一層	弥生土器	壺	(22.20)		[5.40]	外: にぶい褐色 (7.5YR8/5) 内: 棕色 (7.5YR7/6)	外: 1~2mm程の石英、長石を多く含む。葉緑石を含む。	良好		19000563	
217	E-6	SK573	一層	弥生土器	壺	(28.80)		[14.40]	外: 棕色 (2.5YR8/6) 内: 棕色 (7.5YR7/6)	外: 4mm以下の石英、砂粒を多く含む。径1mm以下の赤色顔料を含む。葉緑石を含む。	良好		19000562	
218	E-6	SK573	一層	弥生土器	壺	(22.80)		[4.90]	外: にぶい褐色 (2.5YR8/4) 内: にぶい褐色 (5YR8/3)	外: 1~4mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000570	
219	E-6	SK573	一層	弥生土器	壺	(23.20)		[4.60]	外: 黄褐色 (7.5YR8/2) 内: 黄褐色 (7.5YR8/4)	外: 1~3mm程の石英、長石を含む。葉緑石を含む。	良好		19000569	
220	E-6	SK573	一層	弥生土器	壺	(28.60)		[8.90]	外: にぶい褐色 (2.5YR8/4) 内: にぶい褐色 (5YR8/3)	外: 1~3mm程の石英、長石を少し含む。葉緑石を含む。	良好		19000568	
221	E-6	SK573	一層	弥生土器	壺	(22.60)		[4.60]	外: 棕色 (5YR7/6) 内: 黄褐色 (2.5YR8/1)	外: 1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000560	

表 15 遺物觀察表(土器 6)

遺物番号	グリッド	出土遺物	出土層位	種類	断面	底径 (mm) (壁高さ) (操作部)	色調	胎土	焼成	備考	遺物登録番号		
						口径 底径 断面							
222	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	(25.90) (8.00)	外: ぶい(褐色) (7.5VR/4) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後1~2mm程の石英、長石を多く含み、黒褐色を少し含む。	良好		19000567		
223	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	(24.30) (8.70)	外: ぶい(褐色) (7.5VR/4) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1) (7.5VR/4)	後1~2mm程の石英、長石、砂粒を多く含む。	良好		19000571		
224	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	(24.80) (8.00)	外: ぶい(褐色) (7.5VR/4) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1) (7.5VR/2)	後1~2mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000558		
225	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺		[4.40]	外: ぶい(褐色) (7.5VR/4) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後1~2mm程の石英、長石を少し含む。	良好		19000549	
226	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺		[6.10]	外: ぶい(褐色) (5YR6/6) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。角閃石を少し含む。	良好		19000551	
227	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺		[5.10]	外: ぶい(褐色) (7.5VR/2) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000552	
228	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺		[3.10]	外: 褐色 (5YR6/6) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後1~2mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000550	
229	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺		[9.70]	外: ぶい(褐色) (10YR6/3) 内: ぶい(褐色) (10YR7/4)	後1~3mm程の石英、長石を少し含む。	良好		19000556	
230	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺		[4.40]	外: 褐色 (5YR6/6) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000565	
231	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	6.40	[13.0]	外: ぶい(褐色) (7.5VR/6) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1) (10YR6/4)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000553	
232	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	6.80	[9.80]	外: ぶい(褐色) (7.5VR/6) 内: ぶい(褐色) (10YR6/4)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000548	
233	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	6.30	[9.10]	外: ぶい(褐色) (7.5VR/6) 内: ぶい(褐色) (7.5VR/3)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000573	
234	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	6.90	[5.00]	外: ぶい(褐色) (2.5YR6/6) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後1~3mm程の石英、長石を含む。	良好		19000566	
235	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	[18.10]	[5.00]	外: ぶい(褐色) (5YR6/6) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1) (5YR6/6)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。径1cm以下の角閃石を少し含む。	良好		19000559	
236	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	[18.00]	[5.00]	外: ぶい(褐色) (10YR6/4) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000554	
237	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺		[8.00]	外: ぶい(褐色) (10YR5/2) 内: 黄褐色 (3Y5/1)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。黒褐色を少し含む。	良好	広口壺	19000555	
238	E-6	SK073	一語	弥生土器	壺	5.90	[8.00]	外: ぶい(褐色) (5YR6/4) 内: ぶい(褐色) (10YR7/2)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好	外縁に黒斑あり	19000572	
239	E-6	SK073	一語	弥生土器	高杯	[12.00]	[11.00]	外: 黄褐色 (10YR6/4) 内: ぶい(褐色) (10YR7/3)	後1~3mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000557	
243	F-7	SK052	一語	弥生土器	壺		[5.00]	外: ぶい(褐色) (5YR6/4) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	0.5~3mm程の石英、長石を含む。径1cm以下の角閃石を含む。0.5mm以下の金剛石を含む。	良好		19000543	
244	F-7	SK052	一語	弥生土器	壺		[1.40]	外: ぶい(褐色) (7.5VR/2) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後0.5~4mm程の石英を含む。径0.5mmの表面、長石を含む。角閃石を含む。	良好		19000544	
245	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺	(26.30)	[8.00]	外: ぶい(褐色) (2.5YR7/4) 内: 黄褐色 (2.5YR7/4)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mmの表面を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。	良好		19000582	
246	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺	(28.20)	[9.00]	外: ぶい(褐色) (10YR7/2) 内: 黄褐色 (2.5YR7/4)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000575	
247	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺	26.60	[21.40]	外: 褐色 (3.5YR7/6) 内: 黄褐色 (2.5YR7/4)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好	内外両面に黒斑あり	19000574	
248	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺	(23.20)	[3.00]	外: ぶい(褐色) (2.5YR7/4) 内: ぶい(褐色) (7.5VR2/4)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。	良好		19000581	
249	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺		[3.75]	外: ぶい(褐色) (2.5YR7/4) 内: ぶい(褐色) (10YR7/4)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。	良好		19000577	
250	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺		[4.45]	外: 褐色 (3.5YR6/6) 内: 黄褐色 (2.5YR6/6)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000576	
251	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺		[4.40]	外: ぶい(褐色) (10YR7/3) 内: ぶい(褐色) (10YR7/2)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000578	
252	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺		[7.30]	[9.40]	外: ぶい(褐色) (10YR6/4) 内: ぶい(褐色) (10YR6/4)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000580
253	I-9	SK055	一語	弥生土器	壺		[7.80]	[10.40]	外: ぶい(褐色) (5YR6/6) 内: 黄褐色 (2.5Y5/1)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000579
256	G-8	SK091	一語	弥生土器	壺	(17.40)	[5.00]	外: 黄褐色 (10YR3/7) 内: 黄褐色 (10YR2/2)	後0.5~3mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000585	
257	G-8	SK091	一語	弥生土器	壺	5.70	[3.40]	外: ぶい(褐色) (5YR6/6) 内: ぶい(褐色) (10YR6/4)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000586	
258	G-8	SK091	一語	弥生土器	壺	(7.00)	[3.00]	外: 暗赤色 (5YR5/6) 内: 明赤色 (5YR5/6)	後0.5~2mm程の石英を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000595	
259	G-8	SK091	一語	弥生土器	鉢		[5.00]	外: 褐色 (5YR7/6) 内: 暗赤色 (5YR5/1)	後0.5~2mm程の石英を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好	斜面突出文	19000594	
260	F-6・7	SK0104	一語	弥生土器	壺	(8.80)	[4.20]	外: 褐色 (7.5VR2/6) 内: 深褐色 (10YR6/2)	後0.5~2mm程の石英を含む。白褐色、赤褐色を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好	一部赤色削除の残りか?	19000587	
261	H-7	SK0103	一語	弥生土器	壺	(24.20)	[5.70]	外: ぶい(褐色) (5YR6/6) 内: ぶい(褐色) (10YR7/2)	後0.5~2mm程の石英を含む。白褐色、赤褐色を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好		19000590	
262	H-7	SK0103	一語	弥生土器	壺	(8.20)	[5.00]	外: ぶい(褐色) (10YR7/2) 内: 暗赤色 (10YR6/1)	後0.5~2mm程の石英を含む。白褐色、赤褐色を含む。徑0.5mm以下の中空部を含む。白褐色、赤褐色を含む。	良好	外縁赤色削除か?	19000589	

III. 竹ノ下遺跡

表16 遺物觀察表(土器7)

辨識番号	グリッド	出土遺構	出土層位	種類	形態	底面 (cm) (底丸径) (角付幅)	口径 (cm)	底面 (cm) (底丸径) (角付幅)	器種	色調		胎土	焼成	備考	出土登録番号
										(I, 1.40)	(I, 1.40)				
263	H-7	SK1203	一層	弥生土器	壺					外: 棕色 (7. SYR7/6) 内: 棕色 (SYR7/6)		底2mm下の石英を多く含む。往々4mm以下の長石を多く含み、基盤を少し食む。	良好		19000422
264	H-7	SK1203	一層	弥生土器	壺	(8. 10)	[2. 40]			外: 黑褐色 (7. SYR7/1) 内: にしら・黄褐色 (7. SYR7/4)		0.5mm~2mm程の石英を含む。	良好		19000588
266	G-7	SK1216	一層	弥生土器	壺	(1. 14)				外: にしら・黄褐色 (7. SYR7/3) 内: にしら・黄褐色 (7. SYR7/3)		往々1mm下の石英、長石を少し含む。	良好		19000475
267	G-7	SK1216	一層	弥生土器	壺	(16. 80)	[8. 00]			外: にしら・黄褐色 (7. SYR7/2) 内: 棕色 (57S1)		往々1mm下の石英、長石を少し含む。	良好		19000476
268	O-3	SD026	一層	弥生土器	壺	(30. 20)	[4. 00]			外: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4) 内: 棕褐色 (7. SYR7/2)		往々5mm下の石英を多く含む。往々5mm下の長石を多く含む。	良好		19000596
269	O-3	SD026	一層	弥生土器	壺		[4. 00]			外: 深褐色 (10. SYR7/4) 内: 深褐色 (10. SYR7/2)		往々5mm下の石英を含み、角状石を少し含む。往々5mm下の長石を含む。	良好	内面に黒斑あり	19000598
270	O-3	SD026	一層	弥生土器	壺	(29. 90)	[5. 00]			外: 棕色 (10. SYR7/2) 内: 深褐色 (10. SYR7/2)		往々5mm下の長石を含む。往々5mm下の長石、角状石を少し含む。	良好	内面に黒斑あり	19000597
271	O-3	SD026	一層	弥生土器	壺	(7. 20)	[4. 00]			外: 棕色 (7. SYR7/6) 内: にしら・黄褐色 (7. SYR7/3)		往々5mm下の石英を含む。往々5mm下の長石を含む。	良好		19000599
272	O-2	SB270	一層	弥生土器	壺	(30. 70)	[7. 00]			外: 棕色 (7. SYR7/6) 内: 棕色 (7. SYR7/6)		往々4mm下の石英を多く含む。往々2mm以下の長石を多く含む。	良好		19000603
273	O-2	SB270	一層	弥生土器	壺	(31. 20)	[5. 00]			外: 棕色 (7. SYR7/6) 内: 棕色 (7. SYR7/6)		往々4mm下の石英を多く含む。往々3mm以下の長石を多く含む。	良好		19000604
274	O-2	SB270	一層	弥生土器	壺		[2. 00]			外: 深褐色 (10. SYR7/2) 内: 黑褐色 (2. 57S1)		往々1mm下の石英、長石を多く含む。底面を少し含む。	良好		19000601
275	O-2	SB270	一層	弥生土器	壺		[2. 70]			外: 棕色 (7. SYR7/6) 内: 棕色 (7. SYR7/6)		往々3mm下の石英を含む。往々2mm以下5mmまでの長石を含む。	良好		19000602
276	O-1~2	SB270	一層	弥生土器	壺	6. 80	[5. 40]			外: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4) 内: にしら・黄褐色 (7. SYR7/2)		往々4mm下の石英を多く含む。往々5mm下の長石を多く含む。	良好		19000600
277	D-4	SD540	一層	弥生土器	壺	(24. 6)	[15. 00]			内: にしら・黄褐色 (10. SYR7/2) 高麗 (10. SYR7/2) 内: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4)		往々5mm下の長石、石英を多く含む。底面を含む。	良好	278と同一個体	19000669
278	D-4	SD540	一層	弥生土器	壺		6. 0	[12. 00]		外: 棕色 (7. SYR7/6) 内: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4)		往々5mm下の長石、石英を多く含む。底面を含む。	良好	277と同一個体	19000670
279	D-4	SD540	一層	弥生土器	壺	(18. 00)	[3. 00]			外: 棕色 (7. SYR7/6) 内: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4)		往々5~6mm程の石英、長石を多く含む。往々5mm程の纏膜を少し含む。	良好		19000382
280	D-4	SD540	一層	弥生土器	壺		[6. 20]			外: にしら・棕褐色 (7. SYR7/6) 内: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4)		往々1~2mm程の石英、長石を多く含む。	良好		19000383
281	D-4	SD540	一層	弥生土器	壺		[4. 00]			外: 棕色 (7. SYR7/6) 内: にしら・棕褐色 (7. SYR7/3)		往々5~20mm程の石英、長石を多く含む。往々10mm程の纏膜を少し含む。	良好	内面に赤色斜面あり	19000384
283	E-6	SD625	一層	弥生土器	壺		[1. 10]			外: 深褐色 (2. SYR7/4) 内: 深褐色 (2. SYR7/4)		往々1mm程の石英、長石を多く含む。底面を含む。白色粒子を少し含む。	良好		19000491
284	E·F-6	SD600	一層	弥生土器	壺		[3. 00]			外: 黑褐色 (2. SYR7/1) 内: 棕色 (1. 57S7/4)		往々1~5mm程の石英、長石を少し含む。	良好	スズ村港	19000492
285	F-4	SD1035	一層	弥生土器	壺	(24. 00)	[4. 10]			外: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4) 内: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4)		往々1~3mm程の石英、長石を含む。	良好		19000624
286	F-4	SD1035	一層	弥生土器	壺		[5. 00]			外: にしら・棕褐色 (10. SYR7/3) 内: にしら・棕褐色 (10. SYR7/4)		往々1mm程の石英、長石を含む。底面を含む。白色粒子を少し含む。	良好		19000625
287	F-4	SD1035	一層	弥生土器	壺		[5. 90]			外: 棕色 (10. SYR7/1) 内: 棕褐色 (10. SYR7/1)		往々1~5mm程の石英、長石を少し含む。	良好		19000626
289	C-1	SJ305	一層	弥生土器	広口壺	(20. 00)	[14. 00]			外: 棕色 (2. SYR7/6) 内: 棕色 (2. SYR7/6)		往々5mm下の石英を含む。往々5mm以下5mmまでの纏膜を含む。	良好		19000627
290	C-1	SJ305	一層	弥生土器	広口壺	6. 00	[21. 00]			外: 棕色 (2. SYR7/6) 内: 棕色 (2. SYR7/6)		往々5mm下の石英を含む。往々5mm以下5mmまでの纏膜を含む。	良好		19000628
291	C-1	SJ305	一層	弥生土器	薄壁 (下腹)	25. 15	6. 00	31. 70		外: 淡褐色 (3. SYR7/4) 内: 淡褐色 (3. SYR7/3)		往々5mm下の白粉。白色粒子を含む。往々3mm以下の纏膜を含む。底面を含む。往々5mm程の纏膜を少しある。	良好	内面に黒斑あり	19000629
292	D-3	SJ305	一層	弥生土器	薄壁 (上腹)	25. 60	6. 40	28. 40		外: 深褐色 (2. SYR7/6) 内: 深褐色 (2. SYR7/2)		往々1~5mm程の石英、長石を含む。往々1~2mm程の纏膜を含む。底面を含む。往々5mm程の纏膜を含む。	良好	表面にスズ村港	19000631
293	D-3	SJ305	一層	弥生土器	薄壁 (下腹)	27. 50	40. 60	9. 00		外: 淡褐色 (2. SYR7/2) 内: 淡褐色 (2. SYR7/2)		往々1~3mm程の石英を多く含む。往々1mm程の石英を含む。底面を含む。往々5mm程の纏膜を少しある。	良好	内面に黒斑あり	19000630
294	D-3	SE367	一層	弥生土器	壺		[3. 00]			外: 棕色 (3. SYR7/6) 内: 棕色 (3. SYR7/6)		往々1~5mm程の石英、長石を含む。往々1~2mm程の纏膜を含む。底面を含む。往々5mm程の纏膜を少しある。	良好		19000494
295	D-3	SE367	一層	弥生土器	壺		[2. 00]			外: 深褐色 (10. SYR7/4) 内: 深褐色 (10. SYR7/3)		往々1~2mm程の石英、長石を少しある。	良好		19000493
296	F-6	SA1485 (SJ1211)	1層	弥生土器	壺	[1. 45]				外: にしら・棕褐色 (10. SYR7/3) 内: 深褐色 (10. SYR7/2)		往々1~2mm程の石英を少しある。往々1~2mm程の纏膜を少しある。	良好		19000308
297	D-2~3	SX120	一層	弥生土器	壺		[2. 00]			外: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4) 内: にしら・棕褐色 (7. SYR7/4)		往々5mm下の石英を多く含む。往々5mm以下5mmまでの纏膜を含む。	良好		19000636
298	D-2	SX120	一層	弥生土器	壺		[3. 00]			外: 棕色 (2. SYR7/4) 内: 棕色 (2. SYR7/4)		往々4mm下の石英を含む。往々2mm以下5mmまでの長石を含む。	良好	内面にスズ村港	19000637
299	D-2	SX120	一層	弥生土器	壺		[3. 00]			外: 棕色 (2. SYR7/4) 内: 深褐色 (2. SYR7/1)		往々4mm下の石英を多く含む。往々3mm以下の長石を多く含む。	良好		19000632
300	D-2~3	SX120	一層	弥生土器	壺		[2. 00]			外: にしら・棕褐色 (10. SYR7/4) 内: 深褐色 (10. SYR7/3)		往々5mm下の石英、長石を含む。往々5mm以下5mmまでの纏膜を含む。	良好		19000634
301	D-2~3	SX120	一層	弥生土器	壺	6. 00	[6. 00]			外: にしら・棕褐色 (10. SYR7/2) 内: 深褐色 (2. 57S1)		往々3mm以下5mmまでの石英、長石を含む。	良好		19000635
302	D-2	SX120	一層	弥生土器	壺	5. 00	[5. 00]			外: 棕色 (3. SYR7/6) 内: にしら・棕褐色 (10. SYR7/4)		往々5mm下の石英、長石を少しある。	良好	内面に黒斑あり	19000584

表 17 遺物観察表(土器8)

件番号	グリッド	出土層位	土厚位	形種	器種	口径	底径	高さ	(底面) (底内面) (側面)	色調		地土	構成	備考	遺物登録番号
										(底面)	(底内面)				
303	D-2	SX120	一括	弥生土器	高杯		(15.30)	[3.00]	外: ぶい裏面色 (10YR7/4) 内: ぶい裏面色 (10YR7/4)	底3mm以下の石英を少し含む。徑1mm以下の角閃石を少し含む。	良好			19000633	
304	D-2	SX120	一括	弥生土器	器台			[3.75]	外: 透明白 (2.5YR7/2) 内: 透明白 (10YR7/3)	徑3mm以下の石英を少し含む。	良好			19000683	
319	F-7	SX900	一括	弥生土器	蓋	(31.6)		(8.6)	内: 深黄褐色 (7.5YR8/4) 外: ぶい裏面 (7.5YR8/4)	徑1~2mmの長石、石英を多く含む。角閃石、赤色粘子、金雲母を含む。	良好			19000672	
320	F-7	SX900	一括	弥生土器	蓋			(9.6)	内: 深黄褐色 (7.5YR8/4) 外: ぶい裏面 (7.5YR8/3)	徑1~2mmの長石、石英を多く含む。角閃石、赤色粘子、金雲母を含む。	良好			19000674	
321	F-7	SX900	一括	弥生土器	蓋	(30.0)		(5.6)	内: 深黄褐色 (7.5YR8/2) 外: 透明白 (7.5YR8/4)	徑2mmの長石、石英を多く含む。赤色粘子を含む。	良好			19000676	
322	F-7	SX900	一括	弥生土器	蓋			(5.2)	内: 外: 深黄褐色 (7.5YR8/4)	徑1mm程の長石、石英、企鵠斑、赤色粘子を多く含む。	良好			19000677	
323	F-7	SX900	一括	弥生土器	蓋			(6.6)	(3.1)	内: 朱褐色 (10YR8/1) 外: 朱褐色 (10YR8/2) 透明白 (7.5YR8/6)	徑1mm程の長石、石英、角閃石、企鵠斑を含む。	良好			19000673
324	F-7	SX900	一括	弥生土器	蓋			(9.6)	(6.6)	内: ぶい裏面 (7.5YR8/4) 外: ぶい裏面 (10YR7/4)	徑2mmの長石、石英を多く含む。金雲母を少し含む。	良好			19000675
325	F-7	SX900	一括	弥生土器	高坪			(14.36)	内: 朱褐色 (10YR5/1) 外: 透明白 (10YR8/2)	徑1mm程の長石、石英を含む。金雲母を含む。	良好			19000671	
329	D-3	検出面	一括	弥生土器	蓋	(27.80)		(5.15)	内: ぶい裏面色 (10YR6/4) 外: ぶい裏面色 (10YR6/4)	徑5mm以下の長石、石英を含む。徑2mm以下の角閃石を少し含む。	良好			19000447	
330	D-E-6-7	検出面	一括	弥生土器	蓋	(29.46)		(11.66)	内: 褐色 (7.5YR7/6) 外: 白色 (10YR8/2)	徑4mm以下の石英を含む。徑1mm以下の長石、石英を多く含む。金雲母を少し含む。	良好			19000641	
331	C-3	包合層	一括	弥生土器	蓋			(2.7)	(4) 深黄褐色 (20YR8/2) / (2) 深 透明白 (10YR8/2)	徑1mm程の長石、石英、黃母、赤色粘子を含む。	良好			19000666	
332	C-3	包合層	一括	弥生土器	蓋			7.95	(4.35)	(4) 朱褐色 (10YR8/2) / (2) 朱褐色 (10YR8/2) / (2) 透明白 (7.5YR8/6)	0.5mmの長石、石英、黃母、角閃石、赤色粘子を含む。	良好			19000667
333	C-3	包合層	一括	弥生土器	蓋			(6.7)	(3.7)	(4) 朱褐色 (10YR8/1) / (2) 朱褐色 (10YR5/1)	1mmの長石、石英、黃母を多く含む。	良好			19000668
334	D-4	S135	I周	弥生土器	蓋			7.0	(4.1)	(4) 朱褐色 (2.5YR8/1) / (1) 白 色 (10YR8/2)	微細な長石、長石、黃母を少し含む。	良好			19000644
335	D-4	S135	I周	弥生土器	器台	13.3		(6.6)	(内) 深黄褐色 (10YR8/2)	徑2mmの長石、石英、赤色粘子を多く含む。	良好			19000649	
452	G-3-4	SX29	一括	土師器	蓋	(55.90)		(8.30)	外: 褐色 (5YR8/6) 内: 褐色 (5YR8/8)	徑3mm以下の石英を含む。長石を少し含む。徑1.2mm程の細粒を少し含む。	良好	外面上に黒斑あり		19000421	
453	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	(55.40)		(3.30)	外: 透明白 (7.5YR8/2) 内: 透明白 (7.5YR8/2)	徑1~3mm程の長石と砂粒を少し含む。	良好	外面上にスヌ付差		19000374	
454	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	(55.90)		(4.15)	内: ぶい裏面色 (10YR8/2) 外: 朱褐色 (10YR8/2)	徑1mm以下の長石を少し含む。徑1~3mm程の赤色粘子を少し含む。	良好			19000354	
455	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	(56.40)		(8.10)	外: 褐色 (2.5YR8/6) 内: 褐色 (2.5YR8/8)	徑1~2mm程の長石を含む。徑1mm以下の長石、角閃石を少し含む。	良好			19000350	
456	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	(56.00)		(6.10)	外: 褐色 (2.5YR8/6) 内: 朱褐色 (2.5YR8/2)	徑1~3mm程の長石、長石を含む。	良好			19000348	
457	D-4	SX50	一括	須恵器	■ (火腹)	(36.95)		(4.10)	外: 朱褐色 (2.5YR8/1) 内: 朱褐色 (2.5YR8/1)	徑1mm以下の長石、長石を少し含む。	良好			19000365	
458	D-4	SX50	I周	須恵器	■ (火腹)	82.00		(16.20)	外: 朱褐色 (2.5YR8/1) 内: 朱褐色 (2.5YR8/1)	徑2mm程の白色粘子を含む。	良好			19000366	
459	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	16.10		(16.60)	外: 褐色 (3YR7/6) 内: 朱褐色 (2.5YR8/2)	徑1mm~5mm程の長石、長石を含む。徑1~3mm程の細粒の角閃石を含む。徑1~4mm程の赤色粘子を含む。	良好			19000357	
460	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	(16.00)		(16.00)	外: 褐色 (2.5YR8/6) 内: 朱褐色 (2.5YR8/6)	徑1~3mm程の長石、長石を含む。徑1~2mm程の細粒粘子を含む。	良好	外面上スヌ付差?		19000356	
461	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	14.60		(9.20)	内: ぶい裏面色 (10YR8/2) 内: 朱褐色 (10YR8/2)	徑1mm~5mm程の長石、長石を含む。細粒粘子を少し含む。徑1mm以下の角閃石を含む。	良好	全体的に黒斑が少し含む。		19000355	
462	D-4	SX50	一括	土師器	蓋	(16.80)		(9.00)	内: 朝鮮青磁 (3YR5/6) 内: 滅漢青磁 (10YR8/4)	徑0.5~1mm程の石英、長石を多く含む。角閃石を少し含む。	良好			19000379	
463	D-4	SX50	一括	土師器	蓋	(18.10)		(7.45)	外: 褐色 (2.5YR8/6) 内: 朱褐色 (2.5YR8/6)	徑4mm以下の長石、長石を多く含む。	良好			19000363	
464	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	(17.00)		(7.90)	外: ぶい裏面色 (2.5YR8/4) 内: 朱褐色 (2.5YR8/4)	徑3mm以下の長石を少し含む。徑1mm以下の角閃石を少し含む。	良好			19000361	
465	D-4	SX50	一括	土師器	蓋	(18.10)		(7.20)	外: 褐色 (2.5YR8/6) 内: ぶい裏面色 (10YR8/4)	徑1~4mm程の石英、長石と砂粒を多く含む。徑1mm程の角閃石を含む。	良好			19000376	
466	D-4	SX50	一括	土師器	蓋	(18.50)		(9.30)	外: 褐色 (2.5YR8/6) 内: ぶい裏面色 (2.5YR8/4)	徑0.5~1mm程の石英、長石を多く含む。角閃石を少し含む。	良好			19000377	
467	D-4	SX50	一括	土師器	蓋	(18.40)		(5.20)	外: ぶい裏面色 (2.5YR8/2) 内: ぶい裏面色 (2.5YR8/4)	徑0.5~1mm程の石英、長石を多く含む。角閃石を少し含む。	良好			19000380	
468	D-4	SX50	一括	土師器	蓋	(18.80)		(3.35)	内: 深黄褐色 (10YR8/4) 内: ぶい裏面色 (10YR8/2)	徑0.5~1mm程の石英を多く含む。徑1mm以下の角閃石を含む。	良好			19000368	
469	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	(18.85)		(18.70)	外: 褐色 (2.5YR8/6) 内: 褐色 (2.5YR8/6)	徑0.5~1mm程の石英を多く含む。徑1mm以下の角閃石を含む。	良好	外面上に黒斑あり		19000349	
470	D-4	SX50	I周	土師器	蓋	10.40	-	(15.70)	内: 褐色 (5YR8/6)	徑1mm以下の石英、長石を含む。	良好			19000347	

III. 竹ノ下遺跡

表 18 遺物觀察表(土器9)

標記番号	グリッド	出土遺構	出土場所	埋置	器種	測定 (mm)	測定部位	[操作箇所]	色調	地土	備考	遺物登録番号	
									口徑	底径			
471	D-4	SK350	1層	土器部	壺				[7.75]	外:灰白色 (SY98/2) 内:灰黄色 (SY98/2)	径3mm以下の石英を少し含む。	良好 外面に黒斑あり	19003366
472	D-4	SK350	1層	遺物層	高杯	14. 40	測定部位 8.30	11. 10	外:灰黄色 (SY98/1) 内:灰黄色 (SY98/1)	径5mm以下の長石を多く含む。	良好	19003346	
473	D-4	SK350	1層	土器部	高杯		(13. 10)	[11. 00]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:褐紫色 (7. SY97/6)	径1~3mmの砂粒を少し含む。	良好	19003371	
474	D-4	SK350	1層	土器部	高杯	(13. 40)		[4. 80]	外:褐紫色 (SY97/6) 内:褐紫色 (SY97/6)	径1~5mmの石英、長石を少し含む。	良好	19003381	
475	D-4	SK350	1層	土器部	高杯			[6. 00]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:灰黄色 (SY97/4)	径1mm以下の長石を含む。径3mm以下の砂粒を含む。	良好	19003367	
476	D-4	SK350	1層	土器部	高杯	(10. 20)		[5. 70]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:深褐色 (7. SY97/4)	径0.5~2mm程の石英、長石を少しあわせた。	良好	19003373	
477	D-4	SK350	1層	土器部	高杯			[7. 00]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:褐紫色 (SY97/6)	砂粒を殆ど含まない。	良好	19003372	
478	D-4	SK350	1層	土器部	高杯			[5. 20]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:褐紫色 (SY97/6)	径2mm以下の石英、長石を少し含む。	良好	19003364	
479	D-4	SK350	1層	土器部	高杯	(16. 60)		[5. 00]	外:灰 (7. SY97/6) 内:灰 (SY97/4)	砂粒を殆ど含まない。	良好	19003378	
480	D-4	SK350	1層	土器部	高杯			[6. 75]	外:にじみ黄褐色 (SY97/2) 内:深褐色 (SY97/4)	径1mm以下の石英を多く含む。径4mm以下の長石を少し含む。径3mm以下の砂粒を含む。	良好	19003370	
481	D-4	SK350	1層	土器部	高杯			[7. 00]	外:褐紫色 (SY97/6) 内:褐紫色 (SY97/6)	径1mm以下の石英を多く含む。径4mm以下の長石を少しあわせた。径2mm以下の砂粒を含む。	良好	19003375	
482	D-4	SK350	1層	土器部	杯	13. 00	丸底	5. 00	外:深褐色 (7. SY97/4) 内:褐紫色 (7. SY97/6)	径1mm以下の石英、長石、赤色粒子を含む。	良好 全体的に擦耗	19003351	
483	D-4	SK350	1層	土器部	杯	13. 80		[5. 00]	外:褐紫色 (SY97/6) 内:褐紫色 (SY97/6)	径1~3mm程の石英、長石を含む。径1mm以下の角閃石を含む。径3mm以下の赤色粒子を含む。	良好 外面に黒斑あり	19003353	
484	D-4	SK350	1層	土器部	杯	(12. 40)		[1. 20]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:褐紫色 (7. SY97/6)	径1mm以下の赤色粒子を含む。径4mm以下の長石を含む。	良好	19003358	
485	D-4	SK350	1層	土器部	杯	(14. 60)		[5. 40]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:にじみ黄褐色 (SY97/4)	径1mm以下の石英、角閃石を少し含む。径1mm以下の角閃石を含む。径3mm以下の赤色粒子を含む。	良好 外表面に黒斑あり	19003362	
486	D-4	SK350	1層	土器部	杯	(14. 60)		[5. 95]	外:褐紫色 (SY97/6) 内:褐紫色 (SY97/6)	径1~2mm程の石英を含む。径1mm以下の長石を含む。	良好	19003369	
487	D-4	SK350	1層	土器部	杯	(12. 40)	丸底	5. 70	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:明褐色 (SY95/6)	径1mm以下の石英、長石を含む。	良好 外面に黒斑あり	19003352	
488	D-4	SK350	1層	遺物層	杯	(12. 40)		[4. 00]	外:灰 (N5) 内:灰 (N5)	径2mm以下の石英、長石を含む。	良好	19003359	
489	D-4	SK350	1層	遺物層	ハソウ			[6. 00]	外:にじみ黄褐色 (SY97/2) 内:にじみ黄褐色 (SY97/3)	径1mm以下の石英、長石を含む。	良好	19003365	
490	D-4	SK350	1層	ミニチュア土器	鉢	(6. 70)	4. 75	8. 60	外:褐紫色 (SY96/6) 内:褐紫色 (SY96/6)	径1mm以下の長石を少し含む。径3mm以下の角閃石を少し含む。	良好 外表面に黒斑あり	19003360	
491	F - G-6	SH1000	1層	土器部	壺	(18. 20)		[4. 00]	外:にじみ黄褐色 (SY97/4) 内:にじみ黄褐色 (7. SY97/4)	径1mm以下の角閃石を少し含む。	良好	1900426	
492	F - G-6	SH1000	1層	土器部	壺	(14. 80)		[4. 00]	外:褐紫色 (SY97/6) 内:灰白色 (SY97/2)	径1~3mm程の石英を含む。径2mm程の角閃石を少し含む。	良好 外表面にスズ付着	1900431	
493	F - G-6	SH1000	1層	土器部	壺			[6. 10]	外:褐紫色 (SY97/6) 内:にじみ黄褐色 (7. SY97/4)	径1~3mm程の石英を含む。径2mm程の角閃石を少し含む。	良好	1900432	
494	F - G-6	SH1000	1層	土器部	壺			[4. 00]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:にじみ黄褐色 (SY97/4)	径1~3mm程の石英、長石を含む。	良好	1900430	
495	F - G-6	SH1000	1層	土器部	壺	(12. 50)		[2. 00]	外:褐紫色 (SY97/6) 内:褐紫色 (7. SY97/6)	径1mm以下の石英、長石を多く含む。	良好	1900433	
496	F - G-6	SH1000	1層	土器部	高杯			[3. 00]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:褐紫色 (SY97/6)	径4mm以下のか底を少し含む。	良好	1900424	
497	F - G-6	SH1000	1層	土器部	高杯			[8. 20]	外:にじみ黄褐色 (7. SY97/4) 内:にじみ黄褐色 (7. SY97/4)	径1mm以下の長石を少し含む。	良好 一ヶ所削孔あり	1900427	
498	F - G-7	SH1000	1層	土器部	高杯			[8. 00]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:褐紫色 (7. SY97/6)	径1mm以下の砂粒を少し含む。	良好	1900428	
499	F - G-7	SH1000	1層	土器部	杯			[4. 00]	外:褐紫色 (7. SY97/6) 内:灰 (N4)	径1mm以下の砂粒を少し含む。	良好 外表面にヘラ状工具による縦割れあり	1900429	
500	G-6	SH1000	1層	土器部	杯			[3. 00]	外:褐紫色 (SY96/6) 内:褐紫色 (SY96/6)	径2mm以下の石英を含む。	良好	1900425	
502	G-6	SK1350	1層	土器部	壺	(18. 9)		[26. 7]	内:にじみ黄褐色 (SY97/4) 外:にじみ黄褐色 (7. SY97/4)	径2mm以下の石英、長石を含み。赤色粒子を多く含む。	良好	1900681	
503	G-6	SK1350	1層	土器部	壺	(16. 0)		[25. 2]	内:外二重焼 (7. SY97/4) 外:2. SY96/6	径1~2mm程の石英、長石を含み。赤色粒子を含む。	良好	1900682	
504	G-6	SK1350	1層	土器部	壺	(16. 0)		[12. 0]	内:裏面 (7. SY97/1) 外:にじみ黄褐色 (SY97/4)	径1mmの長石、石英、赤色粒子を含む。	良好	1900679	
505	G-6	SK1350	1層	土器部	壺	(14. 65)		[6. 0]	内:外:褐紫色 (SY96/6)	径1~3mmの長石、石英を含み。赤色粒子を多く含む。赤色粒子を多く含む。赤色粒子を多く含む。	良好	1900678	
506	G-6	SK1350	1層	土器部	杯	(16. 0)		[5. 0]	内:褐紫色 (SY97/6) 外:褐紫色 (SY97/6)	赤色粒子を多く含む。赤色粒子を少し含む。	良好	1900680	
508	G-2	SK195	1層	土器部	壺			[4. 70]	外:明褐色 (SY95/6) 内:褐紫色 (2. SY95/6)	径1~2mm程の石英、長石を多く含み。径1mm程の角閃石を少し含む。	良好	1900485	
509	G-2	SK195	1層	土器部	壺			[4. 10]	外:明褐色 (SY95/6) 内:褐紫色 (2. SY95/6)	径1~2mm程の石英、長石を含む。赤色粒子を含む。径1.5~2mm程の赤色粒子を含む。	良好	1900484	
510	E-5	SK606	1層	土器部	高杯	17. 30		[1. 40]	外:褐紫色 (SY97/6) 内:褐紫色 (SY97/6)	径1mm以下の石英、長石、金雲母、赤色粒子を含む。赤色粒子を多く含む。赤色粒子を多く含む。	良好 外表面に黒斑あり	1900488	
511	E-6	SK607	1層	土器部	壺	(18. 90)		[8. 20]	外:にじみ黄褐色 (SY97/4) 内:深褐色 (SY98/4)	径5~10mm程の石英を含む。赤色粒子を含む。径0.5~1.5mm程の長石を含む。径0.5~1.5mm程の赤色粒子を含む。	良好	1900533	

表 19 遺物観察表（土器器）

件番号	グリッド	出土場所	出土層位	種類	基盤	直徑 (cm)	底面形	底径 (cm)	口径 (cm)	色調		施土	焼成	備考	遺物登録番号
										内	外				
512	E-6	S01087	一層	土器器	壺				(6.15)	外：褐色 (5M6/6) 内：にじみ褐色 (7.5M7/4)	底0.5~1mmの石英を多く含む。長石を少し含む。0.5~1mmの閃石を含む。	良好		19000534	
513	0-8	S01090	一層	土器器	壺				(6.00)	[底面 (12.00)] 外：褐色 (5M2/6) 内：褐色 (10M5/1)	底1~3mmの石英を含む。長石を少し含む。	良好		19000593	
514	F-7	S0370	一層	遺物器	軒蓋	(13.30)			4.80	外：褐色 (5M2/6) 内：褐色 (10M5/1)	底1~3mmの石英を含む。長石を少し含む。	良好		19000333	
515	E-6	S0370	一層	遺物器	軒身	(11.40)			4.16	外：にじみ褐色 (10M6/4) 内：褐色 (5M6/6)	底1~3mmの石英を含む。長石を少し含む。	不良		19000619	
516	E・F-7	S0370	一層	遺物器	軒身				(3.80)	外：褐色 (5M6/6) 内：褐色 (5M6/6)	底1m以下の長石を少し含む。	良好		19000317	
517	E-6	S0370	一層	遺物器	軒蓋	(11.40)			(4.40)	外：灰褐色 (3M4/4) 内：灰褐色 (3M4/6)	底1~3mmの石英、長石を少し含む。	良好	外縁天井部にヘラ記号あり	19000616	
518	F-7	S0370	一層	遺物器	軒身	(10.20)			4.30	外：暗褐色 (3M7/2) 内：灰褐色 (3M4/6)	底0.5~1.5mmの石英、長石を少し含む。	良好		19000334	
519	E-6	S0370	一層	遺物器	高杯	(11.00)			(4.20)	外：灰褐色 (5M7/1) 内：黄色 (2.5M6/1)	底1mmの石英、長石を少し含む。	良好	細部三方向透かし。	19000617	
520	F-7	S0370	一層	遺物器	高杯	(8.60)			(4.40)	外：灰褐色 (3M4/4) 内：灰褐色 (3M4/6)	底1mmの石英、長石を少し含む。	良好	細部三方向透かし。	19000622	
521	F-7	S0370	一層	遺物器	高杯				(4.45)	外：灰白色 (3M7/1) 内：灰白色 (3M7/2)	底1m以下の長石を少し含む。	良好		19000668	
522	E-6	S0370	一層	遺物器	壺	(21.20)			(6.00)	外：暗褐色 (3M7/1) 内：灰褐色 (3M7/3)	底1~2mmの石英、長石を少し含む。	良好		19000620	
523	F-7	S0370	一層	遺物器	ハソウ	(13.20)			(2.40)	外：灰褐色 (3M7/1) 内：暗褐色 (2.5M2/5)	砂粒を殆ど含まない。	良好		19000614	
524	F-6	S0370	一層	土器器	壺	(10.20)			(3.10)	外：褐色 (5M6/6) 内：にじみ褐色 (7.5M7/4)	底1~3mmの石英を多く含む。黒褐色を含む。	良好		19000621	
525	E-6	S0370	一層	土器器	壺	(10.00)			(3.70)	外：灰褐色 (7.5M6/2) 内：にじみ褐色 (10M7/3)	底1~3mmの石英、長石を含む。底1~2mmの角柱状、白色粒を含む。	良好		19000605	
526	E・F-7	S0370	一層	土器器	壺	(10.20)			(7.10)	外：褐色 (5M6/6) 内：淡褐色 (2.5M7/3)	底1~3mmの石英を含む。外：にじみ褐色 (2.5M7/3)	良好		19000607	
527	F-7	S0370	一層	土器器	壺	(14.10)			(7.40)	外：褐色 (7.5M7/6) 内：暗褐色 (7.5M7/6)	底1~2mm以下の石英を含む。底2mm以下の長石を含む。	良好		19000610	
528	F-7	S0370	一層	土器器	壺	(14.80)			(5.90)	外：暗褐色 (5M6/6) 内：褐色 (5M6/6)	底1~5mmの石英、長石を少し含む。	良好	内面に黒闇あり	19000616	
529	E・F-7	S0370	一層	土器器	壺	(16.00)			(5.80)	外：にじみ褐色 (10M7/4) 内：淡褐色 (10M7/2)	底5mm以下の石英を含む。底1mm以下の長石を含む。	良好	内面に黒闇あり	19000613	
530	F-7	S0370	一層	土器器	壺				(6.30)	外：褐色 (2.5M6/6) 内：明褐色 (2.5M5/5)	底1~4mmの石英、長石を多く含む。底1mm以下の長石を含む。	良好		19000623	
531	F-7	S0370	一層	土器器	杯	(12.40)			(3.80)	外：褐色 (3M7/6) 内：深褐色 (3.5M7/6)	底1mm以下の長石を少し含む。	良好		19000612	
532	F-7	S0370	一層	土器器	杯	(14.00)			(6.10)	外：褐色 (2.5M7/6) 内：深褐色 (2.5M7/6)	底1mm以下の石英、長石を少し含む。	良好	外縁に黒闇あり	19000606	
533	F-7	S0370	一層	土器器	高杯				(3.70)	外：褐色 (5M6/6) 内：褐色 (5M6/6)	底1mm以下の石英、長石を少し含む。	良好		19000609	
534	F-7	S0370	一層	土器器	鉢	(10.70)			(5.00)	外：褐色 (5M6/6) 内：明褐色 (2.5M5/5)	底2mm以下の石英を含む。底1mm以下の長石を含む。	良好		19000611	
535	D-4	S135	1層	遺物器	坪蓋	(14.2)			(5.15)	内：灰白色 (3M7/6) 外：褐色 (3.5M7/6)	底1mmの石英、長石を含む。	良好		19000647	
536	D-3	遺物器合集	1層	遺物器	坪身	(10.60)	半球形 (11.80)		(5.30)	内：灰白色 (3M7/6)	底1mmの石英を少し含む。底1mmの黑色粒子を含む。	良好		19000452	
537	D-3	S135	1層	遺物器	坪身	(11.9)	半球形 (14.0)		(5.1)	内：外：灰褐色 (3.5M7/6)	底2mmの石英、長石を含む。	良好		19000648	
538	D-4	S135	1層	遺物器	坪身	(14.0)			(3.2)	内：外：灰褐色 (2.5M6/1)	底1mmの石英、長石を含む。	良好		19000646	
539	D-4	検出品	1層	遺物器	蓋	(20.6)			(5.7)	内：灰褐色 (3M7/6) 外：褐色 (3M5/5)	底1mmの石英、長石を含む。	良好		19000658	
540	E-5	検出品	1層	遺物器	蓋	(17.2)			(4.5)	内：外：灰褐色 (3M7/6)	0.5mmの石英、長石を含む。	良好		19000661	
541	D-3	遺物器合集	1層	遺物器	ハソウ		半球形 (12.70)		(5.40)	外：暗褐色 (2.5M7/2) 内：褐色 (3M7/6)	底1mm以下の石英、赤色粒子を含む。	良好	翠丸、刻文あり	19000643	
542	E-6	検出品	1層	遺物器	高杯				(9.3)	内：灰褐色 (3M7/6) 外：褐色 (3M7/6)	0.5mm以下の石英、長石を含む。	良好		19000660	
543	D-4	S135	1層	土器器	壺	(17.6)			(6.7)	内：深褐色 (10M8/2) 外：褐色 (7.5M7/6)	底2mmの石英、長石、赤色粒子を含む。	良好		19000645	
544	F-7	検出品	1層	土器器	杯	(12.60)			(7.40)	外：褐色 (5M6/6) 内：褐色 (5M6/6)	底2mm以下の石英を少し含み。白色粒子を含む。	良好		19000642	
545	D-2	S01080	1層	土器器	杯	(8.60)			(6.80)	外：にじみ褐色 (7.5M6/4) 内：にじみ褐色 (7.5M6/4)	底0.5~1mmの石英、長石を少し含む。	良好		19000332	
546	遺物器合集	1層	遺物器	杯身		(7.00)			(2.15)	外：褐色 (5M6/6) 内：褐色 (5M6/6)	底1mm以下の石英を少し含む。	良好	貼り付け高台	19000298	
550	B-2	遺物器合集	1層	遺物器	軒身		高台形 (13.20)		(1.35)	外：灰褐色 (3M7/6) 内：褐色 (3M5/5)	キメ細かく、砂粒を少し含む	良好		19000449	
551	D-2	瓶	1層	白磁	瓶	(16.4)			(5.2)	胎土：パールホワイト (3M8.5) アーバイローホワイト (3M7.0/1.0)	キメ細かく、砂粒をほとんど含まない。	良好		19000663	
552	D-3	瓶	1層	白磁	瓶				(2.7)	胎土：オースター (5M7.5/1.0) オースター (3M7.5/1.0)	微細な白色粒、白色粒子を含む。	良好		19000662	
553	B-3	検出品	1層	陶器	鉢				(3.3)	胎土：陶土 (10M6/1) 内：深褐色 (2.5M6/3)	微細な白色粒子を僅かに含む。	良好	内面に擦痕波状文	19000665	
554	E・F-6	S0370	1層	土器器	鉢				(8.85)	胎土：にじみ褐色 (2.5M6/4) 内：深褐色 (2.5M6/4)	底1~2mmの石英、長石を少し含む。	良好		19000615	
555	D-2	瓶	1層	白磁	瓶				(3.4)	胎土：高台 (10M2/2)	0.5mm以下の石英、長石を含む。	良好		19000664	

III. 竹ノ下遺跡

表 20 遺物観察表（石器 1）

登録番号	グリップ	出土位置	出土層位	石器種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登録番号
5 E6	SK873	1層	石丸	安山岩	2.50	6.30	0.70	11.54		19000164	
6 H7	SD1311	1層	楔形石器	黒曜石	2.35	2.50	0.56	3.36	漆黒色	19000179	
24 D4	S56B(SB860)	1層	石包丁	凝灰岩	3.70	3.98	0.75	15.20	研磨痕わざかにあり。	19000121	
32 C2	S159(SB146)	1層	UF	安山岩	6.00	3.75	1.15	18.17		19000122	
47 C2-3	SH080	1層	紡錘車	鈍板岩	3.90	2.25	0.50	4.32		19000126	
48 C2	SH080	1層	砥石	砂岩	8.40	1.80	1.20	25.53	4面とも使用。下端面も3面を研磨して整形している。	19000127	
49 C2-3	SH080	1層	RF+UF	黒曜石	2.60	3.80	1.80	12.86	漆黒色、原礪面から角礫素材とみられる。	19000123	
50 C2-3	SH080	1層	UF	黒曜石	2.95	2.20	0.80	4.73	分析番号101、小底座。	19000124	
51 C2-3	SH080	1層	原石	黒曜石	3.50	4.20	2.70	49.00	分析番号133、漆底座。	19000125	
68 E7	SH375③	1層	RF	安山岩	7.11	8.75	1.90	87.42		19000136	
69 E7	SH375	1層	砥石	砂岩	17.80	10.05	3.40	785.00	左面が主要使用面。基面の一部は鐵器を研いた可能性がある。火熱を受けて墨色に変化している。	19000137	
70 E7	SH375④	1層	UF	黒曜石	3.20	4.85	1.20	9.82	漆黒色	19000135	
90 E7	SH380①	1層	石核	黒曜石	3.00	1.41	0.80	2.94	分析番号22、漆底座、先端・基部欠損	19000138	
91 E8-7	SH380	1層	Dr	黒曜石	1.90	1.20	0.32 (0.13)	0.59	墨色透明	19000139	
92 E7	SH380②	1層	RF+UF	黒曜石	3.20	4.05	1.90	21.25	分析番号60、漆底座。	19000140	
93 E7	SH380①	1層	UF	黒曜石	2.29	3.78	1.20	6.21	漆黒色	19000141	
94 E7	SH380①	1層	石核	黒曜石	2.52	3.85	2.50	21.26	分析番号124、漆底座。良質の角礫を素材とする石核。	19000143	
95 E7	SH380③	1層	石核	黒曜石	4.00	4.08	2.81	29.00	分析番号118、漆底座。大形側片または、分割縫を素材とする求心状剥離石核。スクレーパーへ転用の可能性あり。	19000144	
96 E8-7	SH380	1層	石核	安山岩	6.01	5.98	3.41	99.00		19000145	
97 E8-7	SH380	1層	砥石	砂岩	10.20	7.70	4.00	374.00	鐵器を研いだ可能性あり。	19000148	
98 E8-7	SH380	1層	紡錘車	砂岩	4.60	2.70	0.80	14.98		19000147	
99 E7	SH380⑤	1層	石劍	鈍板岩	4.70	4.35	0.75	21.23		19000146	
103 E7	SK781	1層	砥石	砂岩	10.80	5.80	3.40	327.00	砥石から台石に転用。	19000163	
104 E7	SK781	1層	石核	安山岩	8.20	8.70	3.30	247.00		19000162	
109 F-G-5-6	SH880	1層	UF	黒曜石	3.65	5.00	1.10	14.81	分析番号95、漆底座。	19000142	
113 I9	SH1050	1層	Sc	安山岩	5.70	6.25	1.30	35.68		19000150	
125 G8	SI379	1層	石錐未成品	黒曜石	2.90	1.65	0.40	1.77	漆黒色、SH12001に伴うピットから出土	19000151	
130 B-C4	SK010	埋土	石錐	黒曜石	3.35	1.75	0.30	1.83	分析番号14、小底座。	19000152	
154 C1-2	SK045	1層	敲石	玄武岩	8.40	3.90	7.65	307.00		19000153	
161 C3	SK100	1層	敲石	砂岩	4.70	4.10	3.50	80.42		19000156	
162 C3	SK100	1層	石錐	黒曜石	2.50	2.60	0.55	2.58	分析番号15、漆底座。	19000154	
163 C3	SK100	1層	RF+UF	黒曜石	4.40	3.20	1.73	24.35	分析番号59、漆底座。左面と右面でバテナが異なる。	19000155	
189 D2	SK287	1層	砥石	砂岩	8.35	5.90	3.60	201.00		19000157	
200 C2	SK358	1層	石錐未成品	黒曜石	2.40	1.75	0.50	1.57	分析番号28、漆底座。剥片巻	19000158	
205 E5	SK839	1層	石錐未成品	黒曜石	2.70	2.55	0.70	4.47	分析番号33、小底座。風化度が強い。	19000159	
206 E5	SK839	1層	Dr	黒曜石	2.65	2.45	0.35 (0.12)	1.81	分析番号35、小底座。	19000160	
207 E5	SK839	1層	RF+UF	黒曜石	3.80	4.55	1.12	18.19	分析番号58、漆底座。	19000161	
240 E5	SK878a.1~41	1層	RF+UF	安山岩	3.95	5.70	1.10	21.29		19000166	

表 21 遺物観察表（石器2）

登録番号	グリッド	出土位置	石器種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登録番号
241	E6	SK873	1層	RF-UF	安山岩	4.95	7.00	1.50	39.34	19000167
242	E6	SK873	1層	磨製石斧	砂岩	9.00	8.20	1.50	114.57	19000165
254	B9	SK1055	1層	So	黒曜石	2.40	4.60	0.85	7.32	墨灰色で角錐素材、黒化して永和層が発達している。
255	B9	SK1055	1層	台石	安山岩	19.60	24.50	8.80	5100.00	左面は剥離面に滑らかな研磨痕あり。
265	H7	SK1303	1層	So	安山岩	5.40	8.10	1.40	64.76	
282	D4	SD540	1層	石鎌	粘板岩	5.25	3.00	0.50	11.71	
288	F4	SD1035	1層	So	安山岩	5.15	5.10	2.05	48.39	玄武岩質
305	D2-3	SX120	1層	石鎌	安山岩	2.74	1.88	0.54	2.20	先端・両面部欠損
306	D2-3	SX120	1層	So	黒曜石	2.70	4.10	0.81	8.46	濃黒色、不純物がやや入る。
307	D2	SX120	1層	So	黒曜石	2.21	3.48	0.80	4.85	濃黒色
308	D2	SX120	1層	RF-UF	黒曜石	2.60	2.90	1.30	8.89	濃黒色
309	D2	SX120	1層	RF-UF	黒曜石	4.11	2.60	1.21	10.48	分析番号82、薄底。
310	D2	SX120	1層	UF	黒曜石	3.00	1.85	1.10	3.56	濃黒色、不純物がやや入る。
311	D2-3	SX120	1層	RF-UF	安山岩	3.80	5.20	1.20	18.38	
312	D2-3	SX120	1層	剝片	安山岩	3.15	4.90	0.70	12.70	一部に磨製部有
313	D2	SX120	1層	石核	黒曜石	2.89	4.50	2.25	25.57	分析番号122、便座産、旧石器時代の可能性あり。
314	D2-3	SX120	1層	石斧	頁岩	6.35	1.95	1.45	22.49	扁平片刃石斧の未製品か？裏面は研磨痕ではなく、剥離面である。
315	D3	SX170	1層	石鎌	黒曜石	1.70	1.55	0.40	0.81	濃黒色
316	D3	SX170	1層	石包丁	安山岩	5.70	5.15	0.50	18.00	裏面風化が激しく、研磨痕・擦痕等は確認できない。
317	E3	SX175	1層	石劍	粘板岩	5.55	3.35	0.35	11.86	
318	O4	SX328	1層	RF-UF	黒曜石	2.40	2.85	1.20	7.48	濃黒色の円錐。僅かに不純物が入る。
326	O-1B	SX1250	1層	UF	安山岩	8.75	8.10	1.85	85.90	
327	H7-8	SX1310	1層	石鎌未完成	黒曜石	1.95	1.85	0.45	1.10	濃黒色
328	H7-8	SX1310	1層	RF	安山岩	3.60	7.82	1.80	37.69	
338	D5	S432	1層	石包丁	安山岩	7.60	6.00	0.55	39.34	右側面に研磨痕。折れた後、再利用したためか。
339	D4	S352	1層	石包丁	堆積岩系	2.35	4.13	0.69	10.90	頁岩か粘板岩か。やや珪質。
340	E6	SD370	1層	石包丁	凝灰岩	3.28	4.20	0.60	9.76	折断面にわずかな研磨痕あり。
341	D4	S135	1層	石包丁	安山岩	4.60	2.28	0.49	7.13	
342	C2		搬出面	石包丁	凝灰岩	8.00	4.40	0.52	19.00	裏面風化が激しく、研磨痕・擦痕等は確認できない。
343	D3	S283	1層	石鎌	安山岩	7.80	3.90	0.60	25.24	
344	C5	S135	1層	石鎌	安山岩	6.00	2.80	0.50	13.46	
345	G8	S984	1層	扁平片刃石斧	砂岩	5.32	2.66	1.10	24.18	
346			搬出面	扁平片刃石斧	粘板岩	6.92	2.90	0.93	36.89	
347	C-D2	S115	1層	柱状片刃石斧	粘板岩	11.80	1.20	6.90	93.06	
348	D4	SH350①	1層	石斧	安山岩	6.00	2.80	2.30	57.46	礫質で緑灰色。こう打整形。小型ハマグリ刃石斧か。
349	F8	搬出面②	搬出面	磨製石斧	玄武岩	11.35	5.41	2.06	21.40	
350	B9	S1051	1層	磨製石斧	安山岩	18.25	8.75	5.20	1227.00	こう打整形の大形ハマグリ刃石斧
351	C3	カクラン		磨製石斧	玄武岩	12.53	6.31	3.40	429.00	風化が激しく磨痕は不明。
352	D4		搬出面	砾石	砂岩	3.25	2.05	0.25	2.85	砾石の剥離面であり、小口面にわずかに使用面が残る。

表 22 遺物観察表(石器3)

番号	グリッド	出土位置	石器種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登錄番号	
353	C5		被出面	砾石	砂岩	8.85	6.80	4.00	190.00	19000295	
354	C3		被出面	砾石	砂岩	3.90	1.59	0.90	8.06	19000296	
355	D4	S135	1層	砾石	砂岩	6.05	4.85	1.40	49.00	19000246	
356	C2	S135		砾石	砂岩	12.90	11.80	3.90	510.00	19000245	
357	B2	S001	理土	石器	黑曜石	2.20	1.15	0.40	0.58	漆黒色	19000197
358	E3	S321	1層	石器	黑曜石	1.85	1.20	0.40	0.69	漆黒色	19000203
359	D5		被出面	石器	黑曜石	2.40	1.81	0.38	0.90	墨色、やや水和層が発達している。	19000250
360	C2		被出面	石器	チャート	3.09	2.09	0.48	1.69	分析番号2、チャート。	19000248
361	E6		被出面	石器	黑曜石	1.89	1.50	0.33	0.89	墨灰色。やや水和層が発達している。	19000255
362	C5	表揮		石器	安山岩	1.57	1.41	0.38	0.57		19000258
363	F8	S886	1層	石器	黑曜石	2.10	1.70	0.33	1.10	漆黒色。やや水和層が発達している。	19000198
364	E5		被出面	石器	黑曜石	2.25	1.60	0.46	1.36	分析番号5、漆岳度。	19000251
365	D1		被出面	石器	黑曜石	2.10	1.95	0.55	1.74	墨色、微細な白色粒がやや入る。やや水和層が発達している。	19000253
366	D4		被出面	石器	黑曜石	1.80	1.60	0.35	0.71	墨灰色でやや透明感がある。僅かに微細な白色粒が入る。	19000252
367	C2	S071	1層	石器	黑曜石	2.08	1.74	0.38	1.26	墨色で不純物が入る。微細な白色粒も入る。	19000200
368	E6		被出面	石器	黑曜石	2.90	1.90	0.45	1.83	分析番号16、漆岳度。	19000254
369	E4	S313	1層	石器	黑曜石	2.58	1.90	0.51	1.72	漆黒色	19000202
370	E5		被出面	石器	黑曜石	4.80	2.88	0.95	7.85	分析番号1、小国度。	19000247
371	F8	S970	1層	石器	黑曜石	1.93	1.87	0.33	1.14	漆黒色だが全表面深い風化で覆われる。結構様を呈する。表面すりガラス状、被縫ソーグは脱ぐGLI。	19000199
372	G8		被出面	石器	安山岩	2.24	1.88	0.39	1.80	分析番号24、漆岳度。先端部欠損	19000257
373	G8		被出面	石器	黑曜石	2.08	1.18	0.26	0.59	漆黒色、研磨痕あり	19000256
374	F7		被出面	石器	黑曜石	2.40	2.18	0.45	1.90	分析番号3、漆岳度。	19000249
375	C2	S084	1層	石器	黑曜石	2.20	1.55	0.30	0.82	漆黒色	19000201
376	C2	S0160		石器未成品	黑曜石	2.65	1.85	0.40	1.59	分析番号27、漆岳度。剥片體	19000173
377	D4	SH350①	1層	石器	黑曜石	2.00	1.80	0.35	0.86	半透明、墨と反透明の模様様。やや水和層が発達している。	19000128
378	F7		被出面	石器未成品	黑曜石	3.05	2.95	1.00	7.89	分析番号30、漆岳度。全体的に風化、擦痕あり、ローリングあり。	19000260
379	G7		被出面	石器未成品	黑曜石	2.80	2.15	0.80	4.12	分析番号29、漆岳度。	19000259
380	D2	S342	1層	石器未成品	黑曜石	3.40	2.40	0.85	6.43	分析番号32、漆岳度。有茎で共生の可能性あり。	19000204
381	I9	S1051	1層	石器未成品	安山岩	3.88	3.45	0.95	10.65	分析番号34、多久度。大形石器。溶生的	19000205
382	D4	SH350①	1層	RIF	黑曜石	1.97	2.50	0.75	2.45	分析番号77、小国度。大形石器と思われる。	19000130
383	D4	SH350⑥	1層	RIF	黑曜石	1.79	2.81	0.75	2.81	分析番号78、漆岳度。スクレーパーの一様の可能性あり。	19000131
384	F8	S892	1層	Dr	黑曜石	2.25	1.70	0.40 (0.21)	1.07	分析番号37、漆岳度。	19000206
385	G8		被出面	Dr	黑曜石	2.20	2.05	0.75 (0.38)	2.75	漆黒色、やや不純物が入る。	19000281
386	C4	S135	1層	打削石斧	安山岩	4.42	5.15	1.10	34.62		19000210
387	I9		被出面	打削石斧	安山岩	9.40	4.90	2.40	8.76		19000291
388			表土	Sc	黑曜石	1.22	2.00	0.52	1.07	漆黒色、不純物が入る。	19000282
389	D5	S135	1層	Sc	黑曜石	2.00	2.70	0.60	2.19	墨色、僅かに不純物が入る。	19000208
390	D2		被出面	Sc	黑曜石	2.34	3.11	0.90	5.69	漆黒色、不純物がやや入る。やや水和層が発達している。	19000263
391	C5	S409	1層	Sc	黑曜石	2.20	3.90	0.90	5.89	漆黒色、やや不純物が入る。	19000209

表 23 遺物観察表(石器4)

登録番号	備考	重量(g)	厚さ(cm)	幅(cm)	長さ(cm)	石材	石器種類	出土層位	出土地名	グリッド
19000207	漆黒色	5.44	0.82	3.80	2.40	島曜石	So	I層	S135	D4
19000264		30.46	1.73	5.32	3.80	安山岩	So	I層		D4
19000211		12.82	0.82	3.85	3.71	安山岩	So	I層	S675	E8
19000223	分析番号103、小底座。	3.14	0.70	1.60	3.15	島曜石	UF	I層	S611	E7
19000279	やや不純物が入る。	5.25	0.91	2.00	3.30	島曜石	UF	I層		C4
19000218	漆黒色、第一次剥離と風化状況が異なり、二重バティナを呈する。	0.62	1.33	1.49	1.49	島曜石	RF	I層	S127	D3
19000273	若干水和層が発達している。やや不純物が入る。	9.09	0.88	2.26	4.00	島曜石	RF			C3
19000280		7.71	1.10	2.10	3.55	島曜石	UF			C2
19000217	漆黒色、角礫素材、やや不純物が入る。	1.84	0.58	2.38	1.55	島曜石	RF	I層	S048	C2
19000222	漆黒色、調節剥片か。	0.93	0.37	1.80	1.70	島曜石	UF	I層	S055	C1
19000282	やや水和層が発達している。	1.77	0.80	1.85	2.05	島曜石	UF			E8
19000278	僅かに不純物が入る。	8.51	1.50	1.90	4.65	島曜石	UF			G8
19000277	僅かに不純物が入る。やや水和層が発達している。	13.36	1.40	3.65	4.50	島曜石	UF			G8
19000215		7.83	1.25	2.75	2.40	島曜石	RF+UF	I層	S390	C2
19000272	僅かに不純物が入る。	7.29	0.87	2.31	4.45	島曜石	RF	表土		A6
19000281	分析番号102、椎葉川底。	4.23	1.00	2.67	2.00	島曜石	UF			H8
19000269	僅かに不純物が入る。	5.24	1.35	2.80	1.55	島曜石	RF+UF			E8
19000268	やや水和層が発達している。	8.18	0.95	3.60	2.15	島曜石	RF+UF			A9
19000213	やや水和層が入り、水和層が発達している。	11.48	1.45	4.02	1.80	島曜石	RF+UF	I層	S135	D3・4
19000265	一部被磨か。	12.10	1.40	3.57	2.70	島曜石	RF+UF			C4
19000170		23.28	0.90	6.05	4.45	安山岩	So	I層	S1060	G8
19000212	漆黒色。	22.93	1.50	4.25	3.95	島曜石	RF+UF	I層	S135	E4
19000214	漆黒色、微細な白色粒が入る。縞模様が入る。	14.62	1.90	3.30	3.10	島曜石	RF+UF	I層	S135	D4
19000221		29.63	1.20	6.25	3.85	安山岩	RF	I層	S135	D4
19000219	やや不純物が入る。	16.88	1.25	4.05	3.81	島曜石	RF	I層	S135	E5
19000216	漆黒色、角礫素材。	20.60	1.90	4.00	3.03	島曜石	RF+UF	I層	S425	D4
19000224		12.81	0.95	3.85	4.15	安山岩	UF	I層	S430	B5
19000270	漆黒色、角礫素材。	22.48	1.31	4.55	5.14	島曜石	RF+UF			G7
19000275		51.89	2.10	3.85	7.20	安山岩	RF			D3
19000274		56.10	1.61	6.95	5.30	安山岩	RF			H8
19000271	漆黒色、角礫素材、薄い平坦な原石の両面に調整あり。	20.96	1.28	4.88	3.28	島曜石	RF			C3
19000276		59.35	1.90	6.30	4.50	安山岩	RF			C2
19000220		93.79	2.17	6.35	6.95	安山岩	RF	I層	S135	D4
19000174		162.59	2.35	11.50	7.42	安山岩	RF+UF	I層	S0370	E6
19000266	やや透明感がある。	14.13	1.80	2.92	3.25	島曜石	RF+UF	表土		A26
19000267	漆黒色、角礫素材、やや不純物が入る。	19.87	1.70	3.85	2.44	島曜石	RF+UF	表土		G27
19000132	分析番号115、底座底、角礫を素材とする打削転移石块。打削転移をくり返し、残根はサイコロ状を呈している。極めて小部の削片を生成しており、(石織糸材より小さな削片であり)目的とする削材は何なのか、明かでない。	8.48	1.91	1.91	2.52	島曜石	石核	石核	SH350⑥	D4
19000287		18.87	1.79	3.29	3.50	島曜石	石核	表土		G7

III. 竹ノ下遺跡

表 24 遺物観察表（石器 5）

番号	グリッド	出土位置	出土層位	石器種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登録番号
430	D1	横出面	石核	黒曜石	4.81	5.59	1.81	59.51	スクレーパーに転用	19000283	
431	C2	横出面	石核	黒曜石	3.79	4.98	1.81	30.84	墨色、不純物が軽く入る。	19000284	
432	C4	横出面	石核	黒曜石	2.51	2.52	2.19	12.78	墨色、僅かに不純物が入る。被削のためか、複数の剥離面が見られたような面で打跡が溝らかになっている。	19000285	
433	D5	S135	1層	石核	黒曜石	2.95	4.01	2.90	37.93	分析番号112、原石底、打跡を複数石核、主に側面の二面で剥片剥離を行っている。	19000225
434	D4	S135	1層	石核	黒曜石	3.38	2.91	2.45	24.47	分析番号114、原石底、打跡に打撃痕が認められる。	19000226
435	C4	S135	1層	石核	黒曜石	4.31	4.45	2.45	37.32	分析番号116、原石底、僅かに不純物が入る。	19000228
436	D4	S135	1層	石核	黒曜石	2.65	3.21	2.42	18.04	墨色、僅かに不純物が入る。原表面は被削か。	19000227
437	D4	S135	1層	石核	黒曜石	2.10	3.52	2.20	15.76	分析番号121、墨底、半角鋸を素材とする石核。上面と側面に剥片剥離を行って打跡を複数石核。上面の打面に細かな調整痕が認められる。	19000230
438	F7	横出面	石核	黒曜石	3.80	4.65	2.89	43.78	墨色、角鋸素材。	19000286	
439	C4	S135	1層	石核	黒曜石	2.12	1.70	2.55	10.94	分析番号120、墨底川底、角鋸を素材とするサイコロ状の小形石核。打跡を複数面に渡りしている。	19000229
440	F7	横出面	原石	黒曜石	4.70	5.45	3.90	92.00	黒曜石原石。产地不明	19000288	
441	F5	S795	1層	原石	黒曜石	1.90	2.20	1.80	8.00	分析番号134、溶結ガラス。阿内標で腰曲・村浦幸田底とも異なる。	19000233
442	D3	横出面	原石	黒曜石	5.05	2.95	2.20	28.00	分析番号132、封尾鳥底。	19000289	
443	C2	S073	1層	石核	安山岩	2.65	4.00	3.55	35.00		19000231
444	C4	S356	1層	原石	安山岩	2.55	3.45	1.90	18.00	表面は気泡状。	19000236
445	D4	SH350④	1層	石核	安山岩	5.80	4.80	3.50	117.70		19000133
446	E5	S135	1層	石核	安山岩	7.40	8.70	5.20	285.00	石片を採取後、鉱石のように使用した痕跡がある。	19000232
447	D5	S135	1層	原石	安山岩	7.45	9.00	3.80	288.00	表面は気泡状。	19000234
448	D4	S135	1層	原石	安山岩	4.20	5.10	3.80	107.00	表面は気泡状。	19000235
449	D4	SH350	1層	原石	安山岩	18.15	12.95	10.40	2789.00	表面は気泡状。	19000134
450	E8	S0370	1層	敲石	石英	5.00	3.80	2.35	60.19		19000176
451	D4	S135	1層	支脚	砂岩	(12.25)	9.1	8.5	872.80		19000650
501	G8	SH1000②	1層	砾石	砂岩	7.85	5.50	3.00	129.00	中央に二本の溝状使用痕がある。	19000149
507	G8	SK1350	1層	台石	砂岩	18.00	25.40	5.30	2814.00	台石の使用面は右面であり、中央部に打痕がある。	19000172

表 25 遺物観察表（ガラス）

番号	出土地点	出土遺構	出土層位	種別	器種	法 量 (cm)			重 さ (g)	色 調	備考	遺物登録番号
						長 さ	幅 さ	厚 さ				
545	D-4	S135	No.4	ガラス製品	小玉	0.30	0.25	0.10	0.05	紺青(6PB2.5/9.5)		19000651
546	G-6	S1020	一括	ガラス製品	小玉	0.45	0.35	0.15	0.12	アイスグリーン(5BG7.5/5.0)		19000652
547	H-8	横出面	No.4	ガラス製品	小玉	0.45	0.30	0.20	0.08	水(SB7.0/0.5.0)		19000653

表 26 遺物観察表（その他）

番号	出土地点	出土遺構	出土層位	種別	器種	法 量 (cm)			重 さ (g)	色 調	備考	遺物登録番号
						長 さ	幅 さ	厚 さ				
108	F-G-5-6	SH80	一括	鉄製品	不明	5.85	3.10	1.25	(35.00)			19000684
336	E-6	横出面	一括	土製品	投弾	(3.40)	(2.70)	(1.80)	(16.00)	内外-灰焼(7.5YR5/2)	ナデ	19000656
337	D-E-6-7	横出面	一括	土製品	土弾	2.05	1.90	1.70	6.00	内外-純灰(10YR5/1.4/1)	ナデ	19000657
556		表土	0007	滑石製品	石鍋	-	-	(0.90)	24.00		内面加工底 外面加工底、煤付着	19000654
557	C-4	S138	一括	瓦	丸瓦	(13.55)	(10.45)	(2.50)	340.00	(内)オーリーブ墨(5Y3/1) 外: 淡青(5Y7/1)灰 (5Y4/1)	布目痕あり	19000659

IV. 梶原遺跡

1. 発掘調査の概要

(1) 調査の概要 (図 105・106)

調査地は武雄温泉駅の東方約 600 m、佐世保線と並行する新幹線計画路線建設部分にあたり、調査区は幅約 4 m、長さ約 25 m で東西に細長く、対象面積は 100 m² である。表土掘削、測量、遺構実測、高所作業車による写真撮影などは委託業務としたが、直接、作業員を雇用しての直営の発掘調査業務として実施した。本遺跡は平成 25 年 9 月に確認調査を実施したが、未周知地区において遺構が発見されたため、未周知地区を梶原遺跡の範囲拡大として取り扱い、周知化したものである。調査に至る経過は、第 I 章に、地理的環境、歴史的環境は第 II 章に記されているので参照されたい。

本遺跡は武雄盆地を流れる六角川の支流である武雄川の左岸に位置する。柏岳（標高 238.8 m）の南麓裾部で、微高地の縁辺部に立地する。現況は、JR 佐世保線と市道の間の平坦な造成地である。

本遺跡の南東約 200 m の標高 20 m の丘陵上には小楠遺跡が、さらに北東約 500 m の現況水田部には竹ノ下遺跡が立地する。小楠遺跡は弥生早期から前期の環濠集落の可能性があり、中期及び後期の集落及び墓地として継続しており、本遺跡は、武雄盆地における弥生時代の拠点集落である小楠遺跡から中期に派生した集落と考えられる。

本遺跡は、既調査履歴がある。武雄市富岡地区の 57.1ha を対象とした土地区画整理事業に伴い、小楠遺跡及び梶原遺跡の発掘調査を武雄市教育委員会が実施した。この事業の本遺跡の確認調査は昭和 62 年 10 月～11 月に実施した。本調査は 110 街区と 123 街区の 2 地点があり、昭和 62 年 12 月（110 街区 380 m²）と平成元年 9 月から平成 2 年 1 月（123 街区 1480 m²）に実施され、報告書が刊行されている。

110 街区の調査では掘立柱建物跡 1 棟、土壙 3 基、溝 3 条、小穴、不明遺構を検出し、小穴は中世の柱穴と考えられる。また、SK 401 土壙から鉄製鏃 1 点が出土した。

123 街区の調査では弥生時代の堅穴住居跡 5 軒、甕棺 4 基、土壙 7 基、小穴を検出した。堅穴住居跡は平面円形が 3 軒、長方形が 2 軒であり、甕棺は弥生時代中期の小児用である。本報告の調査地点は、123 街区の北東約 100 m にあたり、本遺跡としては第 3 次調査にあたる。

(2) 確認調査の概要

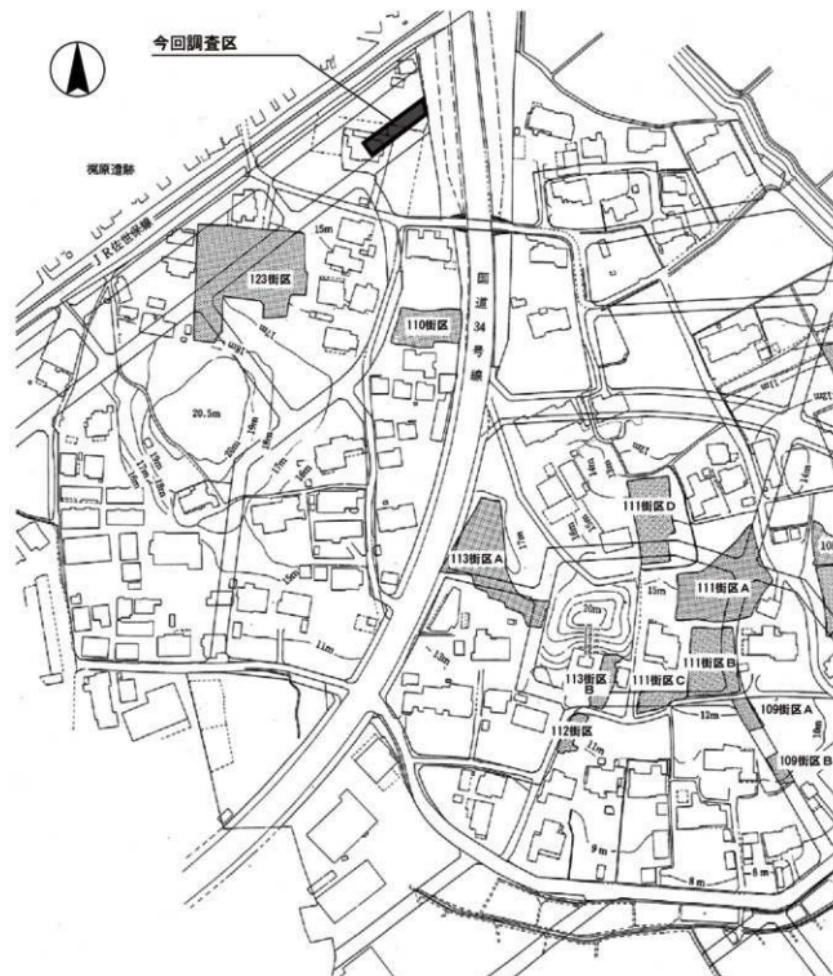
九州新幹線建設事業に伴う当該地区についての確認調査は、平成 25 年 9 月に実施され、No.1～11 の 11 カ所にトレーナーを設定した。このうち、1～5 Tr、8 Tr、10・11 Tr は梶原遺跡の周知内、6 Tr、7 Tr、9 Tr は未周知地区に位置する（図 106）。このうち遺構・遺物が確認されたのは、調査対象地区でも東端部にあたる 6 Tr・9 Tr であり、6 Tr では溝跡・小穴、9 Tr では土坑・小穴が検出された。また遺物としては、中世の土師器皿片（9 Tr）、近世の甕口縁部片（11 Tr）が出土しており、確認調査の段階では、武雄市教育委員会調査の 110 街区と同じく、中近世の遺跡である可能性が考えられた。なお、7 Tr 以西では黄褐色粘質土の地山が確認されたものの、遺構・遺物は検出されておらず、地形的に大きく削平されたことに起因するものと推測される。

これらの確認調査結果から、6 Tr・9 Tr 周辺のみに遺構が残存していることが想定され、当該箇所と 7 Tr の西端までの区間 100 m² を本発掘調査対象地とした。

(3) 調査区の基本土層

基本層序は、以下の 3 層からなる。1 層：表土：厚さ 5 cm～10 cm で礫が混入した造成土である。2 層

IV. 梶原遺跡



【梶原遺跡】

123街区
110街区

【小楠遺跡】

109街区A・B
111街区A・B・C・D
112街区
113街区A・B

0 (1/2,000) 100m
原団 武雄市教育委員会1991『小楠遺跡』
武雄市文化財調査報告書第26集

図105 梶原遺跡調査区位置図 1 (1/2,000)



IV. 梶原遺跡

茶褐色土：厚さ約30cmで遺物包含層である。3層：黄褐色粘質土であり地山である。

調査区の東端と西端の表土直下は地山であり、調査区中央部は幅約8mにわたって表土の下に厚さ約30cmの2層が堆積し、その下が地山であった。表土が造成土であることから、調査区の東端と西端は、地山まで削平されたことが伺え、調査区中央部は幅約8mの窪地状の地形が予想される。これらのことから、旧地形は西側が高い丘陵の裾部縁辺にあたり、若干の起伏のある地形であったと思われる。

本調査の結果、土壤4基と小穴約30基を検出した。遺構は調査区東端に多くみられ、平面逆L字形の溝跡の埋土は青灰色で擾乱の可能性が高い。また調査区中央の溝は、埋土が茶褐色土と青灰色の混合土であり、擾乱と思われる。

【参考文献】

武雄市教育委員会 1991「小楠遺跡」武雄市文化財調査報告書第26集

2 遺構（図107）

（1）土坑

4基を検出したが、以下の3基を個別に報告する。SK03は調査区の北東隅に位置し、長径0.54m、短径0.45mの平面橢円形の土坑である。坑底は段状であり、遺構の深さは最深部で0.19mである。埋土中から弥生土器小片4、サヌカイト碎片1ほかが出土した。

SK01土坑（図108）

調査区の北東部北壁よりに位置し、北方約0.3mにはSK03が、南方約2mにはSK02がある。長径1.07m、短径0.68mの平面不整な長楕円形である。坑底は平坦気味であり、周壁は緩やかにたちあがる。遺構の深さは最深部で0.15mである。埋土中から弥生土器の器台片及び弥生土器の小片が約10点出土した。

SK02土坑（図108）

調査区の北東部南壁沿いに位置し、北方約2mにはSK01がある。遺構の東側半分は調査区外にのびるため、平面形は不明である。調査した南北軸は0.93m、東西軸は0.7mである。坑底は平坦気味であり、周壁は緩やかにたちあがる。遺構の深さは最深部で0.04mである。埋土中から土師器杯片及び土師器細片2点が出土した。

遺構番号	遺構名	グリッド	規 模(m)			主軸方位	出土遺物	時期	備考
			長さ(長軸)	幅(短軸)	高さ(深さ)				
SK01	土坑	—	1.07	0.68	0.15	N-62°-W	弥生土器(器台他小片)	弥生中期	
SK02	土坑	—	(0.93)	(0.70)	0.04	—	土師器(杯片他)		
SK03	土坑	—	0.54	0.45	0.19	—	弥生土器小片。サヌカイト片		
SK04	土坑	—	0.82	0.68	0.09	—	弥生土器(高杯・壺他)	弥生中期	
P5	小穴	—	0.25	—	0.25	—	土師器(杯底部・体部)		
P7	小穴	—	0.34	—	0.37	—	移動式壺(焚口片)		
P8	小穴	—	0.27	—	0.19	—	青磁(長胴壺体部)		
P12	小穴	—	0.23	—	0.20	—	土師質土器(鉢)		
P13	小穴	—	0.23	—	0.19	—	青磁(碗〔籠泉窯系〕)		
P14	小穴	—	0.27	0.23	0.23	—	土師器(杯体部)		

表27 梶原遺跡遺構一覧表

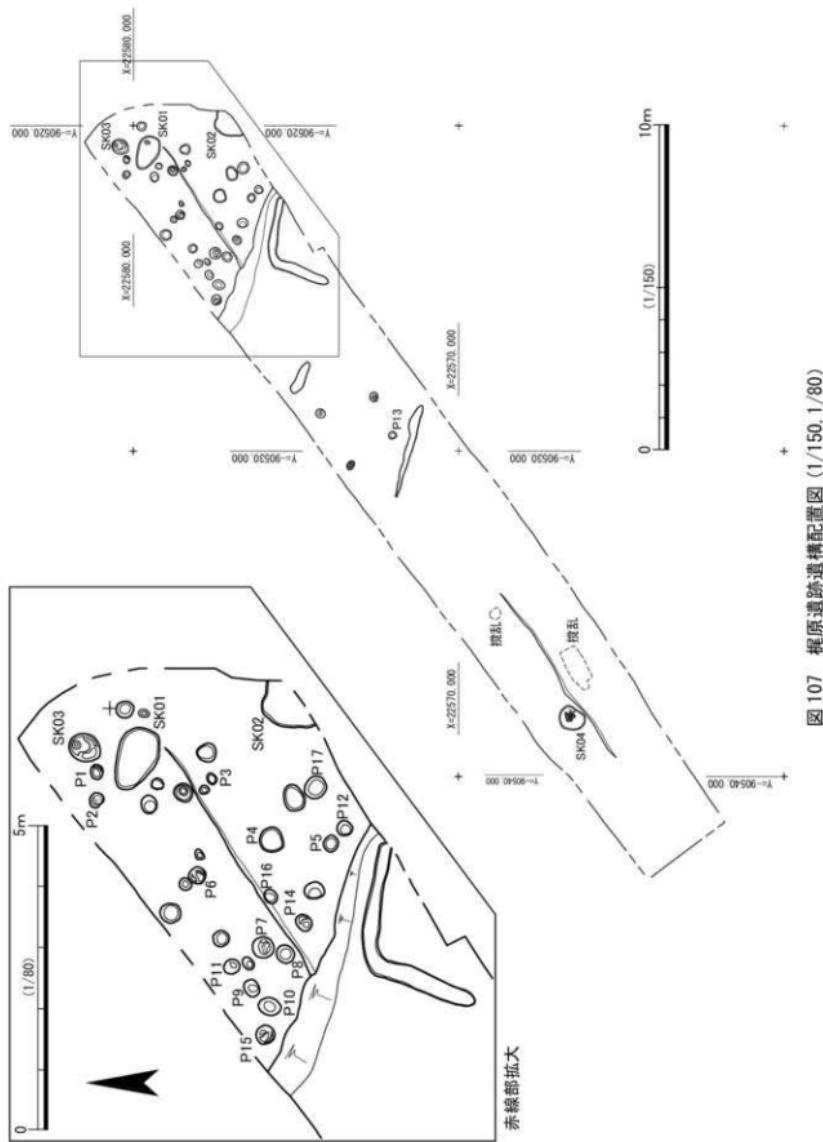
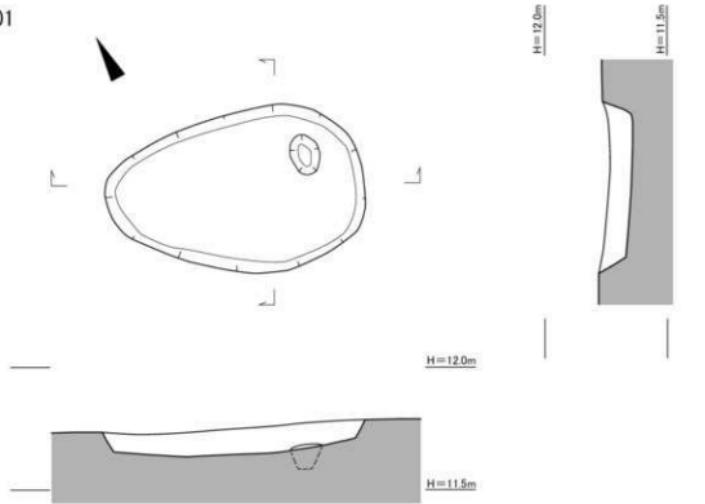


図 107 梶原遺跡遺構配置図 (1/150, 1/80)

IV. 梶原遺跡

SK01



SK02

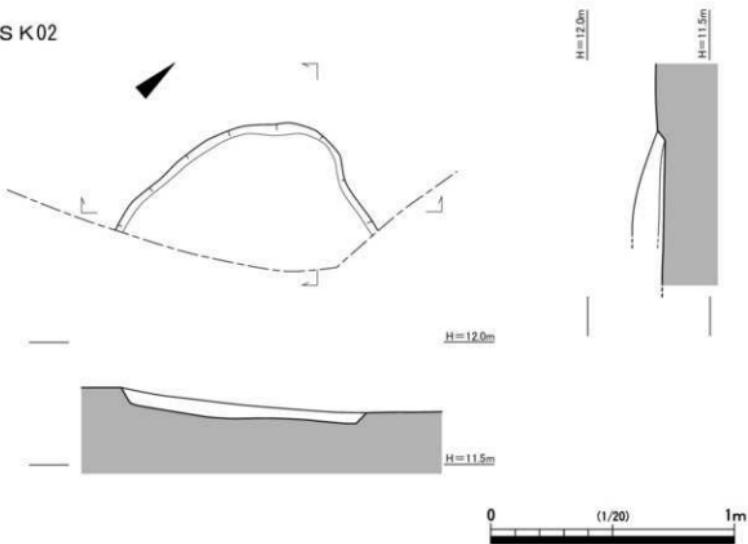


図 108 SK01・02 土坑 (1/20)

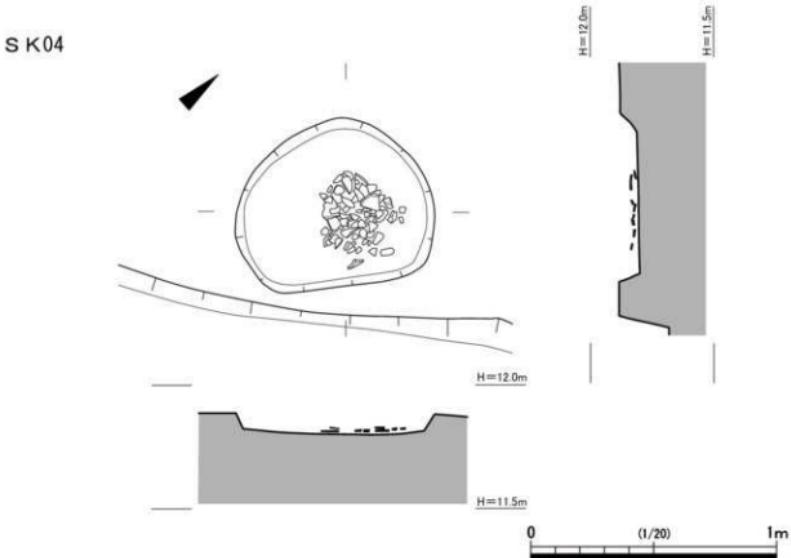


図 109 SK04土坑 (1/20)

SK04土坑 (図 109)

調査区の南西部に位置する。削平のためか周辺からは遺構が検出できなかった。長径 0.82 m、短径 0.68 m の平面不整円形である。坑底は平坦であり、周壁は緩やかにたちあがる。遺構の深さは最深部で 0.09 m である。埋土中から弥生土器高杯口縁部片、壺胴部片のほか、弥生土器片がビニール袋 1 袋分出土した。

(2) 小穴 (図 107)

調査区北東部に小穴 30 基が密集する。遺構番号を付した小穴から土師器、須恵器、中・近世陶磁器の細片が、それぞれ数点出土しており、主なものを図 110 に掲載する。小穴の埋土はすべて茶褐色土であり、P 10 は柱痕がみられた。そのため、掘立柱建物跡の検討をしたが、特定できなかった。小穴出土土器は中・近世の所産であり、小穴は当該期の集落に係る遺構と思われる。

(3) その他の遺構

調査区の北東から中央にかけて 2 条の溝跡を検出した。平面逆 L 字形の溝跡の埋土は青灰色で擾乱の可能性が高い。また調査区中央の溝は、埋土が茶褐色土と青灰色の混合土であり、擾乱と思われる。

IV. 梶原遺跡

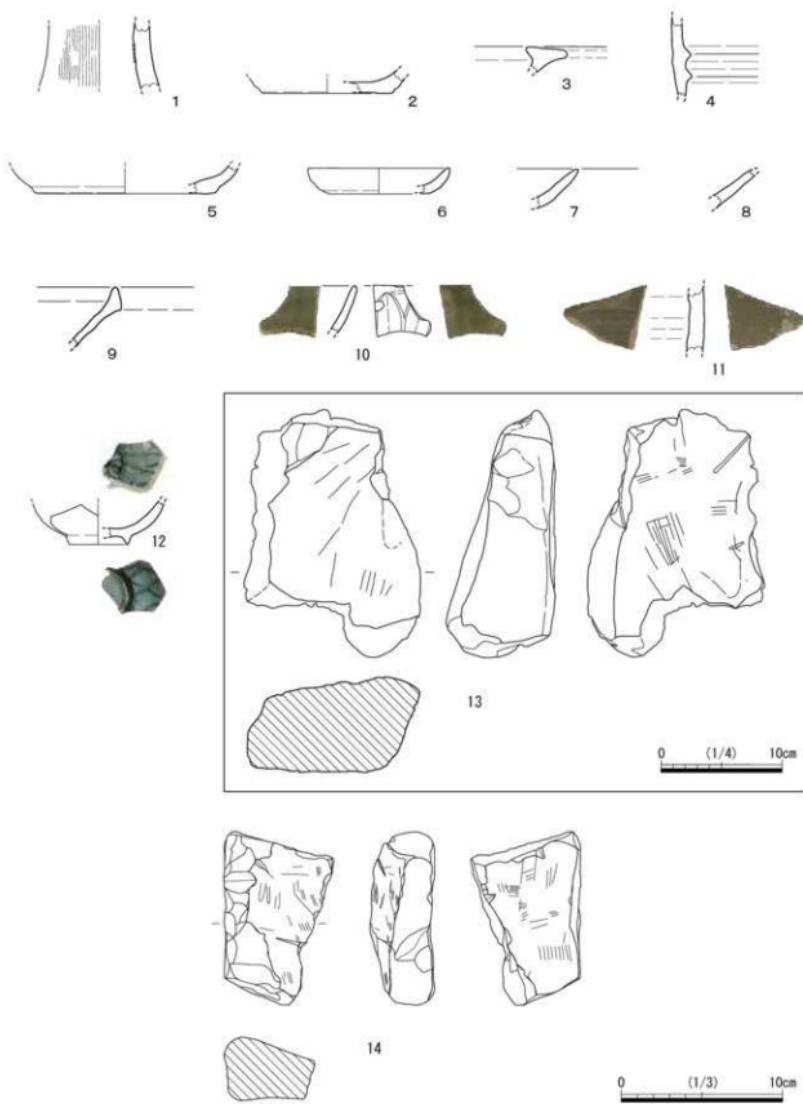


図 110 出土遺物 (1/3, 1/4)

3 遺物

(1) 土器

図 110-1～4 は土坑出土である。1 は SK01 出土。弥生土器、器台、胴部片である。外面縦ハケ、白色砂粒を多く含む。2 は SK02 出土。土師器、杯、底部片である。破面及び内外面は摩耗する。3 は SK04 出土。弥生土器、高杯、口縁部片である。鋤先口縁で、頸部がわずかに内湾することから高杯と判断した。砂粒を多く含む。4 は SK04 出土。弥生土器、広口壺、胴部片である。胴部に二条の断面三角突帯を有する。

図 110-5～11 は小穴出土である。

5 は P 5 出土。土師器、杯、底部片である。体部は内湾気味にたちあがる。底面に糸切り痕がみられる。6 は P 5 出土。土師器、杯、体部片である。体部は内湾気味にたちあがる。7 は P 14 出土。土師器、杯、体部片である。体部中位でわずかに屈曲する。8 は P 14 出土。土師器、杯、体部片である。口縁端部をわずかに欠損する。9 は P 12 出土。土師質土器、鉢、口縁部片である。口縁部は断面三角形に肥厚し、形態的には東播系の鉢に類似する。瓦質土器に類似するが、胎土は軟質で、内外面灰褐色である。10 は P 13 出土。中国龍泉窯系の青磁碗の口縁部片である。体部外面に鍋連弁文を施す。11 は P 8 出土。青磁、長胴壺の体部片である。内外面施釉、胎土は灰色である。中国産か。

図 110-12 は包含層出土。染付の磁器碗の底部片である。高台外面に二条の圓線文、体部外面に網目文、見込みに花弁文を施す。内外面施釉、胎土は白色である。

(2) 土製品

図 110-13 は P 7 出土。移動式竈の焚口部片である。小穴内から直立して出土した。図化したもの以外に、小片が数点出土しているのみである。内面は被熱のためか赤褐色である。胎土に小礫を混入する。

(3) 石器

図 110-14 は包含層出土。砂岩の砥石片である。側面の一部は遺存し、両面を砥面として使用する。

IV. 梶原遺跡

4 遺物観察表

【遺物観察表凡例】

- (1) 図番号は挿図番号、P番号は写真図版番号を示す(例: 15P46 = 写真46の15)。
- (2) 法量について、()は、口径・底径の場合は復元値、器高の場合は残存値を示し、計測不能なものは空白とした。
- (3) 色調については、『新版 標準土色帖』及び『日本色研事業 標準色カード230』を参考に表示している。

表 28 出土遺物観察表 土器・陶磁器・土製品

図番号 P番号	出土地点	種別	法量(cm)			色調	残存状況	調整等特記事項	遺物登録 番号
			口径	口内径	底径				
図110 -1	SK01	弥生 土器	器台	胸径 (7.0)		(4.15) (外面) 浅黄色(2.5V7/3) (内面) 黄い黄褐色(10YR7/3)	胴部片	(外面) 綠ハケ (内面) ナデ	15000442
図110 -2	SK02	土師器	杯		(8.2) (1.45)	(外面) 暗褐色(7.5VR3/29) (内面) 暗褐色(7.5VR3/29)	底部片	(外面) ナデ (内面) ナデ	15000448
図110 -3	SK04	弥生 土器	高杯		(1.65)	(外面) 黄い黄褐色(10YR8/10) (内面) 暗褐色(7.5VR7/4)	口縁部片	(外面) ナデ (内面) ナデ	15000443
図110 -4	SK04	弥生 土器	広口 壺		(5.05)	(外面) 黄い黄褐色(7.5VR7/4) (内面) 黄い黄褐色(10YR8/4)	胴部片	(外面) ナデ (内面) 摩耗のため不明	15000444
図110 -5	P5	土師器	杯		(11.2) (1.8)	(外面) 暗褐色(7.5VIG/6) (外面) 浅黄色(10YR8/4)	底部片	(外面) ナデ (内面) ナデ	15000450
図110 -6	P5	土師器	杯	(8.8)		1.6 (外面) 黄い褐色(5YR8/4)	体部片	(外面) ナデ (内面) ナデ	15000449
図110 -7	P14	土師器	杯		(2.4) (内外面)	褐色(7.5VIG/6) (内外面) 暗褐色(7.5VR7/6)	体部片	(外面) ナデ (内面) ナデ	15000446
図110 -8	P14	土師器	杯		(2.4)	(内外面) 暗褐色(7.5VR7/6)	体部片	(外面) ナデ (内面) ナデ	15000447
図110 -9	P12	土師質 土器	鉢		(3.75)	(内外面) 灰褐色(10YR4/1)	口縁部片	(外面) ナデ (内面) ナデ	15000445
図110 -10	P13	磁器 青磁	碗		(2.95)	(内外面) オリーブ灰色 (10YR8/2)	口縁部片	(外面) 施釉 (内面) 施釉	15000451
図110 -11	P8	磁器 青磁	壺		(4.95)	(内外面) 灰白色(7.5VR7/1)	胴部片	(外面) 施釉 (内面) 施釉	15000452
図110 -12	包含層	磁器 染付	碗		(2.7)	(内外面) 明オリーブ灰褐色 (5VG7/1)	底部片	(外面) 施釉 (内面) 施釉	15000453
図110 -13	P7	土製 品	移動 式電		(20.4)	(内外面) 灰白色(5V7/1)	焚口部片	—	15000454

表 29 出土遺物観察表 石器

図番号 P番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)			重量 (g)	岩石種	残存状況	調整等特記事項	遺物登録 番号
				長さ	幅	厚さ					
図110 -14	包含層	石器	砥石	(10.7)	(6.8)	(3.9)	(303.9)	砂岩	部分片	両面砥石	15000455

V. 自然科学分析について

1. 竹ノ下遺跡における炭化物の年代測定について

(株) 加速器分析研究所

1 测定対象試料

竹ノ下遺跡は、佐賀県武雄市武雄町大字富岡地内に所在し、赤穂山系の蓬莱山から延びる丘陵の先端に立地する。弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡で、弥生時代の遺構からは中期後半の土器が多く出土する。測定対象試料は、弥生時代の住居跡 SH375 から出土した炭化木材 3 点である（表 30）。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸 - アルカリ - 酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 30 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表 30）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 30 に、補正していない値を参考値として表 31 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 衍を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{13}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 30 に、補正し

V. 自然科学分析について

ていない値を参考値として表 31 に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 衍を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、0xCalv4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 31 に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表 30、31 に示す。

試料の ^{14}C 年代は No. 1 が $2020 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 2 が $2010 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 3 が $2340 \pm 20\text{yrBP}$ である。历年較正年代 (1σ) は、No. 1 が 49cal BC ~ 5cal AD の範囲、No. 2 が 41cal BC ~ 18cal AD の範囲、No. 3 が 409 ~ 392cal BC の範囲でそれぞれ示される。試料 No. 1、2 が弥生時代中期後半頃、試料 No. 3 が弥生時代前期後半から末頃に相当する (藤尾 2009)。試料が出土した住居跡は弥生時代とされ、測定された年代値はこの所見に一致する。ただし、同一遺構内から出土した試料 No. 1、2 と試料 No. 3 には年代差が見られることから、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す (古木効果)。今回測定された 3 点の試料は樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性があり、特に No. 3 が他の 2 点より古い値となったのはこのことによる可能性がある。試料の炭素含有率は、試料 No. 1 が 67%、No. 2、3 が 69% の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337–360
藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54
Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869–1887
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355–363

表30 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-190174	No.1	TST E-7 S375①	サンプル No.2	炭化木材	AAA -24.65 ± 0.25	2,020 ± 20	77.73 ± 0.24
IAAA-190175	No.2	TST E-7 S375④	サンプル No.4	炭化木材	AAA -28.08 ± 0.26	2,010 ± 20	77.87 ± 0.24
IAAA-190176	No.3	TST E-7 S375①	サンプル No.5	炭化木材	AAA -24.33 ± 0.25	2,340 ± 20	74.70 ± 0.23

[IAA 登録番号: #9619]

表31 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190174	2,020 ± 20	77.79 ± 0.24	2,023 ± 24	49calBC - 5calAD (68.2%) 37calAD - 51calAD (3.5%)	93calBC - 31calAD (91.9%) 37calAD - 51calAD (3.5%)
IAAA-190175	2,060 ± 20	77.38 ± 0.23	2,009 ± 24	41calBC - 18calAD (68.2%)	54calBC - 57calAD (95.4%)
IAAA-190176	2,330 ± 20	74.81 ± 0.22	2,342 ± 24	409calBC - 392calBC (68.2%)	478calBC - 440calBC (5.4%) 433calBC - 376calBC (90.0%)

[参考値]

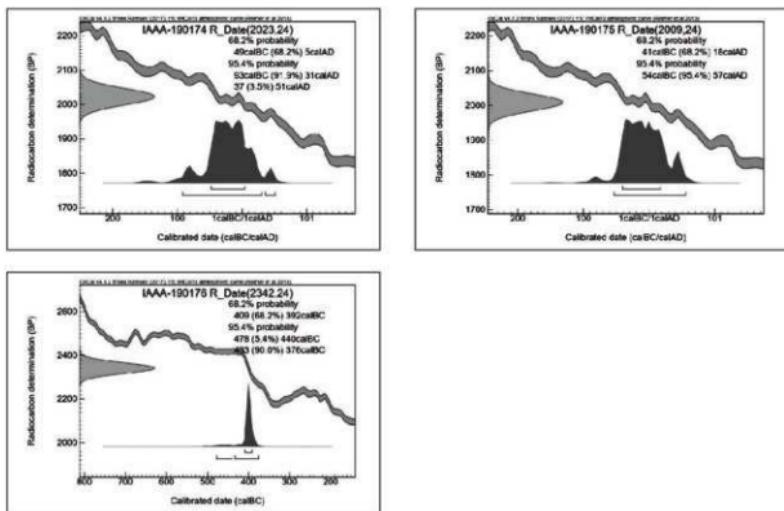


図1 暦年較正年代グラフ（参考）

2. 竹ノ下遺跡における石材産地同定について

佐賀大学教育学部 角縁 進

本遺跡出土の黒曜石様岩石 39 点、サヌカイト 3 点について、波長分散型蛍光 X 線分析装置を用いて産地同定を行なった。分析は佐賀大学教育学部の波長分散型蛍光 X 線分析装置 (RIGAKU: ZX Primus II) を用いて、Rh 管球で管電流と管電圧は 50kV-60mA、サンブルスピン off の条件で、測定試料は ø 10mm の Y 型マスクでサンプルホルダーになるべく平坦な面で固定し、照射する X 線ビーム径を 10mm に絞り、真空中で測定を行なった。

エネルギー分散型の蛍光 X 線分析装置を用いた石器の非破壊分析では、絶対値の測定が不可能なため、測定結果はある元素との強度比（例えば Fe/K など）で表されることが多かったが、今回使用した波長分散型蛍光 X 線分析装置ではファンダメンタルパラメーター法 (FP 法) を用いて、化学組成の絶対量（主成分元素は重量%、微量元素は ppm）を求めることができる。FP 法とは蛍光 X 線発生の原理に基づき測定条件とファンダメンタルパラメーター（物理定数）を用いて、蛍光 X 線強度を理論的に計算し、この理論強度と測定した X 線強度から化学組成の絶対量を求める方法である。より正確な値を求めるためには、元素感度係数をもとめてから未知試料の定量分析を行う必要がある。今回、標準試料としては、正確な化学組成を測定済みの腰岳の黒曜石と。多久のサヌカイトを使用し、FP 法のマッチングライブライアリーレジスト登録した。測定前には、これらの標準試料で FP 法により求めた化学組成と、真の化学組成とが一致することを確認している。

表 32～35 に分析結果を示す。分析番号 2 は SiO₂=96% と高い値を有し、実体顕微鏡で表面を詳しく観察しても結晶が認められず、チャートであると思われる。また測定番号 134 は、断面に溶結凝灰岩のユータキシティック組織の火山ガラス特有の溶結縞が認められることから、火碎流の下部の強溶結部に特徴的な、軽石が圧密により溶け火山ガラスになった部分のものと断定できるが、分析結果で得られた値は Aso-4 火碎流堆積物および Aso-3 火碎流堆積物の溶結火山ガラス（象ヶ鼻）や、今市火碎流堆積物の溶結火山ガラスとも異なる組成であり、いまのところ、どの火碎流かは判別出来なかった。

その他の黒曜石は 4 つのグループに分けることができる。図 112 に Rb-Sr-Zr 図を示す。この図は (Rb 含有量 + Sr 含有量 + Zr 含有量) = 100% となるように再計算し、三角図にプロットしたものである。この図から、今回測定した多くの黒曜石が Rb 含有量に富んだ腰岳系の黒曜石であることが明らかとなつた。その次に多いのが小国産（山甲川流紋岩）の黒曜石である。この黒曜石は腰岳に似た黒色であるが、数 mm 大の小さな白色の球果を含むことから肉眼でも区別される。その他、分析番号 102 と 120 は灰白色で、化学組成では嬉野市の椎原川産と同定された。分析番号 132 は針尾島産の黒曜石の組成に最も近いので針尾島産とした。

サヌカイトは 3 点ほど分析した。サヌカイトの化学組成による同定は色々な元素を用いて総合的に行なわないと区分しにくいが、今回は CaO-(Na₂O+K₂O) 図（図 113）で明瞭に区分できた。その結果、分析番号 34 と SK100 ③の試料は多久産、分析番号 24 は多久産のサヌカイトより Na₂O+K₂O が乏しく、竹ノ下遺跡北西にある柏岳のサヌカイトの組成と一致した。測定試料の大きさに制限がある（約 5cm 以下）ため、今回は多くのサヌカイトが分析できなかつたが、柏岳のサヌカイトは原産地が近いため多く用いられている可能性がある。

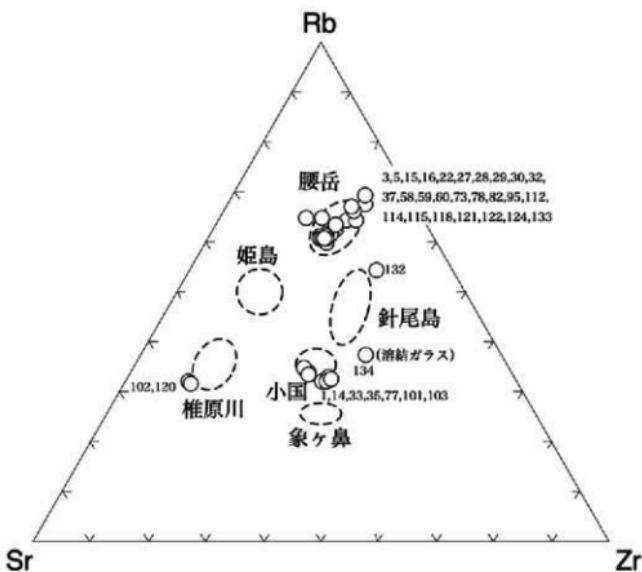
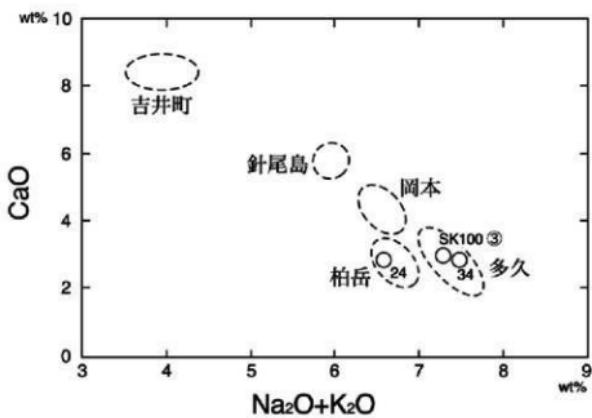


図112 黒曜石のRb-Sr-Zr図

図113 サヌカイトのCaO-(Na₂O+K₂O)図

V. 自然科学分析について

表32 竹ノ下遺跡出土石器の化学分析結果 1

番号	1	3	5	14	15	16	22	27	28	29	30
岩石種	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石
SiO ₂ (wt.%)	73.8	75.2	76.2	74.8	76.8	77.1	76.3	76.9	76.9	76.1	77.0
TiO ₂	0.20	0.08	0.12	0.08	0.04	0.03	0.04	0.03	0.03	0.11	0.06
Al ₂ O ₃	14.2	14.1	12.9	14.5	12.9	12.9	13.1	12.9	13.1	13.4	13.1
ΣFe ₂ O ₃	1.59	1.26	1.11	1.62	0.96	1.01	1.09	0.96	1.05	1.20	1.09
MnO	0.05	0.05	0.05	0.05	0.04	0.04	0.05	0.04	0.05	0.05	0.05
MgO	0.57	0.22	0.42	0.12	0.01	0.05	0.15	0.10	0.04	0.12	0.05
CaO	1.08	0.68	0.64	0.85	0.60	0.61	0.62	0.58	0.59	0.66	0.57
Na ₂ O	3.88	3.66	3.91	3.99	4.06	3.65	3.86	3.99	3.84	3.64	3.66
K ₂ O	4.29	4.61	4.50	3.93	4.42	4.54	4.58	4.39	4.40	4.61	4.35
P ₂ O ₅	0.04	0.05	0.04	0.06	0.01	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.03
Total	99.70	99.90	99.89	100.01	99.83	99.96	99.81	99.91	100.01	99.92	99.96
Na ₂ O+K ₂ O	8.17	8.27	8.41	7.92	8.48	8.19	8.44	8.38	8.24	8.25	8.01
Ba (ppm)	627	60	156	57	340	66	320	231	82	86	50
Rb	141	177	183	123	178	163	179	157	170	190	179
Sr	145	53	24	128	57	18	38	51	56	36	48
Zr	127	57	64	129	58	53	61	49	54	70	48
Zn	88	36	25	21	15	30	34	33	35	35	19
Nb	14	12	13	11	14	11	13	11	9	14	8
Pb	19	42	-	-	-	48	28	26	26	30	36
Rb%	34.1	61.7	67.6	32.4	60.7	69.7	64.4	61.2	60.7	64.4	65.0
Sr%	35.2	18.4	8.7	33.8	19.5	7.8	13.6	19.8	20.0	12.0	17.6
Zr%	30.7	19.9	23.7	33.9	19.8	22.5	22.0	19.0	19.3	23.6	17.4
同定産地	小国	腰岳	腰岳	小国	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳

-: 検出されず

表33 竹ノ下遺跡出土石器の化学分析結果 2

番号	32	33	35	37	58	59	60	73	77	78	82
岩石種	黒曜石										
SiO ₂ (wt.%)	76.9	74.3	72.5	76.7	76.6	77.3	76.1	76.1	73.4	77.3	76.3
TiO ₂	0.03	0.12	0.21	0.04	0.03	0.04	0.05	0.08	0.10	0.03	0.03
Al ₂ O ₃	12.9	14.9	14.8	13.2	13.0	12.9	13.1	13.3	14.7	13.0	13.3
ΣFe ₂ O ₃	0.99	1.62	1.69	1.21	1.04	0.92	1.07	1.20	1.60	1.00	1.02
MnO	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.04	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05
MgO	0.05	0.20	0.42	0.16	0.04	0.05	0.08	0.07	0.17	0.04	0.05
CaO	0.61	0.90	1.80	0.60	0.61	0.56	0.62	0.63	0.91	0.59	0.58
Na ₂ O	3.94	3.49	3.91	3.46	4.13	3.83	4.20	3.42	4.48	3.54	4.12
K ₂ O	4.36	4.20	4.34	4.50	4.33	4.20	4.50	4.94	4.36	4.39	4.37
P ₂ O ₅	0.02	0.07	0.09	0.03	0.01	0.01	0.02	0.03	0.07	0.01	0.02
Total	99.84	99.85	99.81	99.94	99.85	99.85	99.78	99.82	99.85	99.95	99.84
Na ₂ O+K ₂ O	8.30	7.69	8.25	7.96	8.46	8.03	8.70	8.36	8.84	7.93	8.49
Ba (ppm)	132	56	469	110	345	385	473	414	520	82	315
Rb	178	129	143	176	174	166	186	204	131	171	173
Sr	30	125	147	45	54	53	59	62	127	48	53
Zr	60	136	152	60	39	54	60	69	140	57	57
Zn	49	37	49	21	30	28	33	36	45	25	30
Nb	12	9	16	12	12	12	14	15	12	11	13
Pb	27	-	29	49	19	-	23	26	51	-	-
Rb%	66.3	33.2	32.4	62.7	65.2	60.9	60.8	60.9	32.9	61.8	61.2
Sr%	11.2	32.1	33.1	16.1	20.1	19.3	19.4	18.6	31.9	17.5	18.6
Zr%	22.5	34.8	34.4	21.2	14.7	19.8	19.8	20.5	35.2	20.7	20.2
同定産地	腰岳	小国	小国	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	小国	腰岳	腰岳

-: 検出されず

表34 竹ノ下遺跡出土石器の化学分析結果3

番号	95	101	102	103	112	114	115	118	120	121	122
岩石種	黒曜石										
SiO ₂ (wt.%)	76.6	75.5	72.7	74.3	76.4	76.5	76.4	76.5	74.6	76.5	76.4
TiO ₂	0.03	0.13	0.16	0.14	0.03	0.03	0.05	0.03	0.11	0.03	0.03
Al ₂ O ₃	13.0	13.4	15.8	14.4	13.2	13.2	13.2	13.0	14.6	13.1	13.1
ΣFe ₂ O ₃	1.02	1.66	1.78	1.66	1.02	1.07	1.10	1.07	1.36	1.07	1.09
MnO	0.05	0.05	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.07	0.05	0.05
MgO	0.03	0.21	0.26	0.26	0.05	0.07	0.11	0.05	0.20	0.04	0.05
CaO	0.58	0.86	1.49	0.93	0.59	0.58	0.57	0.59	1.12	0.59	0.60
Na ₂ O	4.14	4.05	3.68	3.66	4.09	3.88	3.93	4.19	3.52	4.08	4.05
K ₂ O	4.36	4.01	3.91	4.33	4.40	4.47	4.46	4.39	4.30	4.40	4.48
P ₂ O ₅	0.01	0.00	0.00	0.13	0.02	0.03	0.03	0.02	0.06	0.02	0.02
Total	99.82	99.87	99.85	99.86	99.85	99.88	99.90	99.88	99.93	99.87	99.86
Na ₂ O+K ₂ O	8.50	8.06	7.59	7.99	8.49	8.35	8.39	8.58	7.82	8.48	8.53
Ba (ppm)	331	362	465	361	342	386	161	384	233	333	375
Rb	175	136	136	132	181	179	173	177	143	178	182
Sr	53	139	240	138	55	57	43	55	254	55	57
Zr	58	114	45	121	60	63	56	58	51	59	60
Zn	33	50	32	75	31	30	50	30	45	33	31
Nb	13	10	7	14	13	14	9	12	9	13	14
Pb	19	-	-	-	22	21	43	21	-	22	19
Rb%	61.3	35.0	32.3	33.8	61.2	59.9	63.5	61.0	32.0	61.0	60.8
Sr%	18.5	35.7	56.9	35.3	18.6	19.1	15.8	18.9	56.7	18.8	19.0
Zr%	20.3	29.2	10.8	30.9	20.2	21.0	20.7	20.0	11.4	20.2	20.1
同定産地	腰岳	小国	椎葉川	小国	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	椎葉川	腰岳	腰岳

-: 検出されず

表35 竹ノ下遺跡出土石器の化学分析結果4

番号	124	132	133	134	24	34	SK100	③	2
岩石種	黒曜石	黒曜石	黒曜石	溶結ガラス	サスカイト	サスカイト	サスカイト	チヤート	
SiO ₂ (wt.%)	76.8	72.0	74.0	72.0	69.4	68.4	67.3	96.0	
TiO ₂	0.02	0.34	0.15	0.29	0.81	0.65	0.58	0.10	
Al ₂ O ₃	12.9	16.8	14.1	14.6	15.5	16.1	17.6	1.79	
ΣFe ₂ O ₃	1.08	2.06	1.35	2.56	3.93	3.58	3.31	0.90	
MnO	0.05	0.07	0.06	0.05	0.05	0.05	0.08	0.07	
MgO	0.06	0.41	0.16	0.58	0.62	0.57	0.30	0.21	
CaO	0.59	1.14	1.67	1.63	2.84	2.85	3.01	0.16	
Na ₂ O	4.09	2.34	3.42	2.81	2.69	3.81	4.41	0.18	
K ₂ O	4.35	4.41	4.78	5.11	3.88	3.67	2.88	0.57	
P ₂ O ₅	0.01	0.10	0.11	0.18	0.13	0.12	0.13	0.02	
Total	99.94	99.66	99.80	99.80	99.85	99.81	99.60	99.99	
Na ₂ O+K ₂ O	8.44	6.75	8.20	7.92	6.57	7.48	7.29	0.76	
Ba (ppm)	147	623	445	595	341	445	776	323	
Rb	167	208	235	207	135	133	75	41	
Sr	56	51	39	126	296	242	550	43	
Zr	56	122	75	212	112	96	206	13	
Zn	10	73	62	65	52	54	66	13	
Nb	11	17	16	5	25	26	18	-	
Pb	-	20	28	-	-	-	-	-	
Rb%	59.8	54.6	67.4	38.0	24.8	28.2	9.0	41.9	
Sr%	20.0	13.3	11.1	23.1	54.6	51.5	66.2	44.4	
Zr%	20.2	32.1	21.5	38.9	20.6	20.3	24.8	13.7	
同定産地	腰岳	針尾島	腰岳	不明	柏岳	多久	多久	不明	

-: 検出されず

VI. 総括

1. 竹ノ下遺跡

(1) 弥生時代から古墳時代の集落変遷について

第III章の冒頭でも述べた通り、発掘調査の結果、約1500基にも及ぶ遺構が確認された。それらのうち、弥生時代中期を中心とした遺構が、掘立柱建物7棟、竪穴建物7軒、土坑59基、溝状遺構27条、甕棺2基、井戸1基、柵列2条、不明遺構18基、ピット1276基であった。

また、古墳時代中期～後期を中心とした遺構が竪穴建物3軒、土坑4基、溝状遺構1条、古墳の周溝1条、不明遺構2基、ピット50基であった。

各遺構から出土した弥生土器の中から時期区分の指標となるものを、図114・115に挙げた。

土器の分類を行うにあたり、北部九州や佐賀平野東部等で行われている編年を参考にしているが、それらの分類基準に素直に当てはまるものが多く、また全体像が分かる完形品や甕以外の器種の少なさから分類には困難を極めた。そのため、中期を前葉と後葉のみに分けることにした。

中期前葉の土器は図114の通りで、全体的にも甕以外の器種が少ない。甕も完形品が無く、辛うじて277と278が同一個体で図面上完形に近いものとなっている。甕の口縁部形態は大きく3つに分類することができる。すなわち、図114の左の列は口縁部上面が内側に傾くもの、中央の列は口縁部上面が平坦になるもの、右側の列の上段(193・157・190)は口唇部が窄まるもの、右側の列の下段(214・224・219・223)は上面が丸みを帯び、外側が垂れるものである。いずれのタイプも口唇部の外への張り出しが短い物から徐々に長いものへと変化し、前葉の特徴である「逆L字」形に近い形態になる。底部は非常に厚く、中央が上げ底になっているものがほとんどである。壺は素口縁広口壺と鋤先状口縁壺があり、口径が小さいものと大きいものがある。鋤先形態は内外への突出が小さく、ずんぐりとしたものである。いずれも須久I式の範疇と考えられる。

中期後葉の土器は図115の通りで、こちらも全体的に甕の割合が多い。甕の口縁部は内面への突出が見られるようになり、断面逆L字形から断面T字形へ変化する中間的な形態が多い。前葉との大きな違いは外側への突出が細長く伸びることと、底部が薄く平底になることである。また素口縁広口壺の口径が大きくなり、端部が面を持ち、凸帶が頭部から胴部へと貼り付け位置が変化している。

中期末～後期初頭の土器は図115の右下の通りで、数的には少ない。袋状口縁壺の破片と口縁部が「く」の字状を呈する甕が見られる。

以上のように各時期の土器を提示してみたが、次にこれらの土器を基準として各遺構を区分していくものが、表36である。遺構の残存状況の悪さや他遺構からの混ざり込みなどにより、時期が絞り込めない遺構もあるが、大まかな傾向はこの表から見える。すなわち、中期前葉を主体とする竪穴建物と土坑、中期後葉を主体とした溝やその他の遺構に分かれる傾向が見られた。ただ、SH380とSH375については残念ながら複数の土器型式がみられ、時期を絞り込むことができなかった。そのため、SH375から採取した炭化物の年代測定を行った。その結果、時期的には中期後半と考えられ、現場でのSH380をSH375が切っているという判断も加味すると、SH380は中期後半以前の中期前半の所産と考えられ、その後SH380は短期間で廃絶され、その上にSH375が形成されたと考えられる。

主な遺構を時代別に表したのが図116である。弥生時代中期の遺構については、上述したように細分可能ではあるが、ここでは、弥生時代中期と古墳時代中期を中心に集落の変遷について見てみたい。

図116上段の弥生時代の遺構配置図を見てみると、竪穴建物が調査区の長軸に沿う形で展開していることが分かる。そしてそれらの間に土坑や掘立柱建物が配置されている。このように、弥生時代中期に

弥生中期前葉

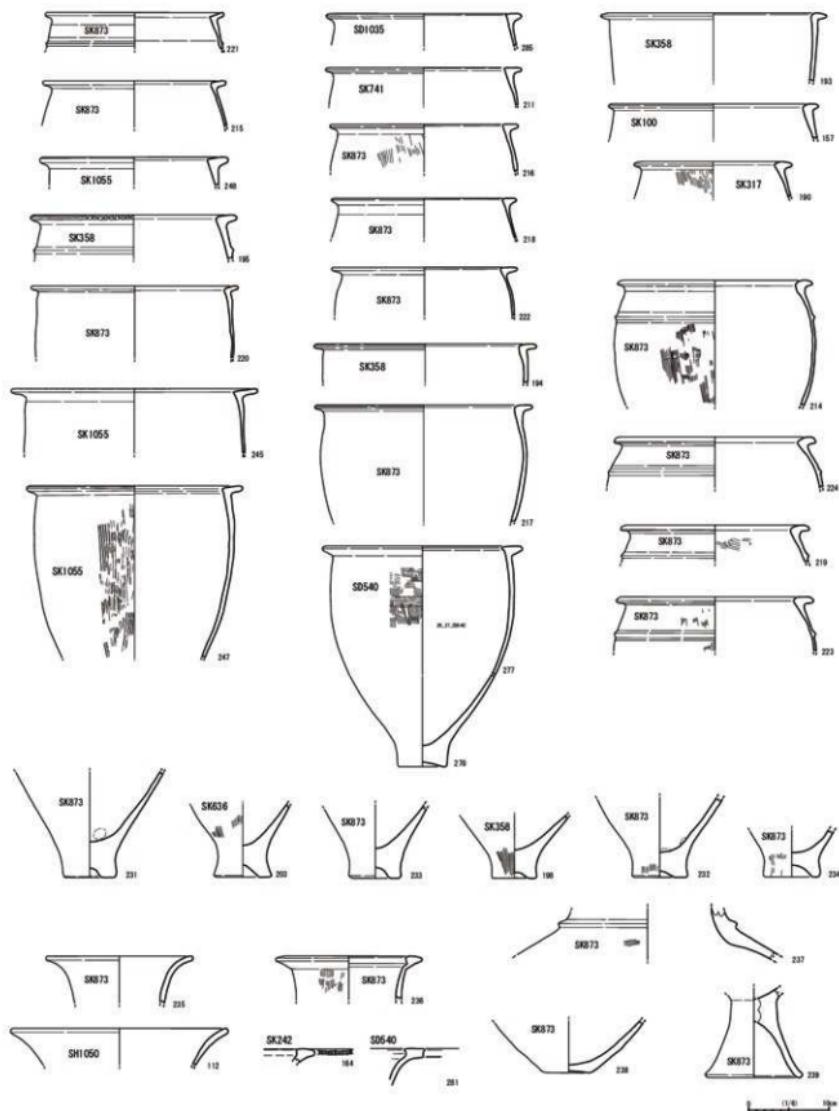
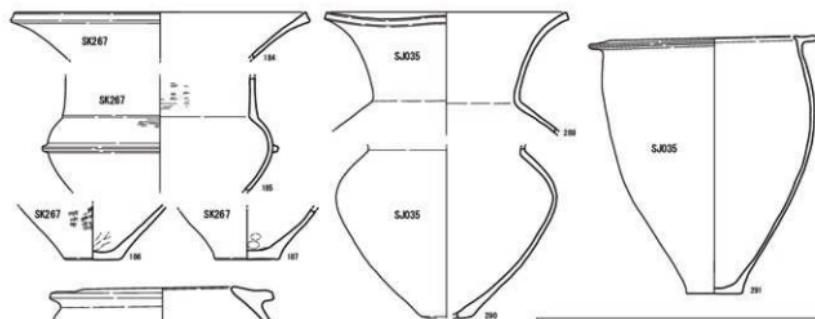
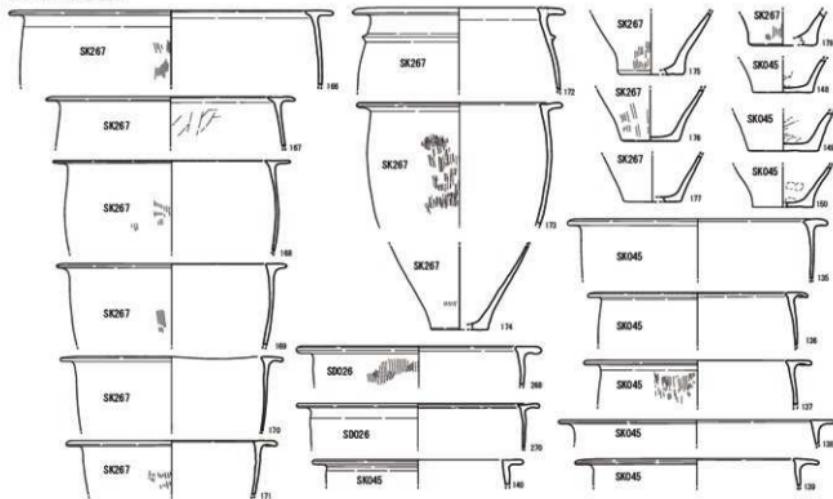


図 114 竹ノ下遺跡出土弥生土器の編年図 1

弥生中期後葉



弥生中期末～後期初頭

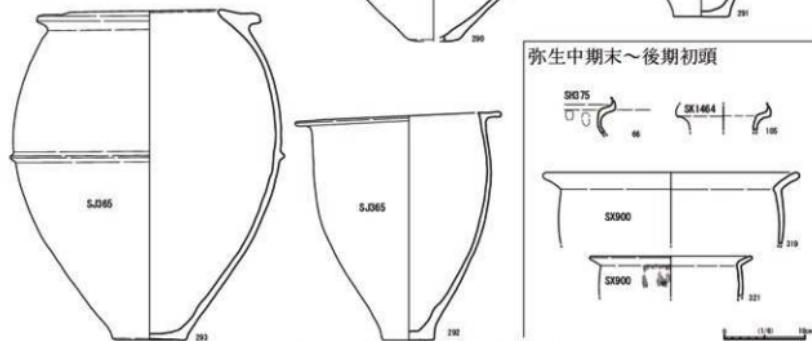
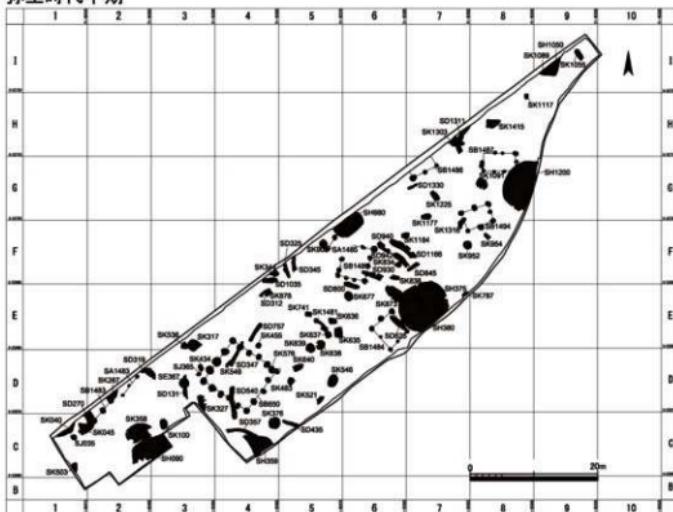


図 115 竹ノ下遺跡出土弥生土器の編年図 2

表 36 各遺構の時期別表

時代・時期区分	広域型式	瀬原編年	小松編年	獨立柱建物	竪穴建物	土坑	溝+その他
弥生早賀	倭白 I 式						
弥生前頭切頭	倭白 II a式						
弥生前頭前半	倭白 II b式						
弥生前頭後半	板付 I 式						
弥生前頭末	板付 II 式						
弥生中期初頭	板付 / 韶式						
弥生中期前葉	須久 I 式古墳後						
弥生中期中葉	須久 I 式新後						
弥生中期後葉	須久 II 式古墳後						
弥生中期末葉	須久 II 式新後						
弥生後頭切頭	村徳永 1 式						
弥生後頭後半	高三瀬古墳後						
弥生後頭末葉	村徳永 2 式						
弥生後頭前半	高三瀬新後						
弥生後頭中葉	千住 1 式						
弥生後頭後半	下大園式	千住 2 式					
弥生終末	惣座 0 式	惣座 1 式					
	西林 (近江・滋)		惣座 2 式				
古墳前期 (4 c 前)	布留 0 式	夕ヶ里式					
	布留 1 式	土師本村 1 式					
古墳中期 (4 c 中)	布留 2 式	土師本村 2 式					
古墳前頭末 (4 c 後)	布留 3 式	土師本村 3 式	後手水式				
古墳中期前頭 (5 c 前)	TK73		梅白 I 式				
古墳中期 (5 c 中)	TK216		梅白 II 式				
古墳中期 (5 c 後)	TK208～TK47		牛原前田式				
古墳後期 (6 c 前)	MT15～TK10						
古墳後期 (6 c 後)	TK43～TK209						
古代 (7 c 初半)							
古代 (7 c 後半)							
古代 (8 c 初半)							
古代 (8 c 後半)							

弥生時代中期



古墳時代中期～後期

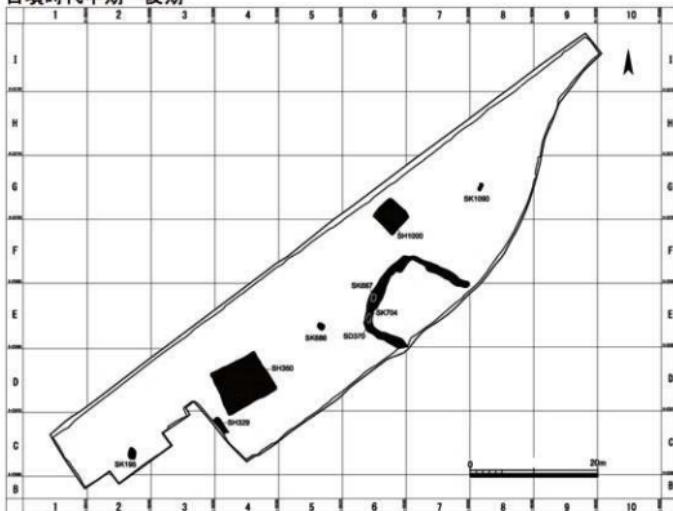


図 116 時代別遺構配置図

は遺構が非常に多く見られることから、集落形成の最盛期と考えられる。しかしその後は、弥生時代後期になると大幅に遺構が減少し、そして、古墳時代前期には一旦集落が途絶える。

古墳時代中期になると若干の集落が形成されるようになる。堅穴建物が3軒しか見られないが、SH350についてでは一辺の長さが7mを超える大形の堅穴建物であり、集落の中心は調査区外にあったと思われるが、重要な施設であった可能性は高い。また、SD370は古墳の周溝と思われることから、集落に非常に近い古墳の存在が注目される。しかし、上部が削平されて消失しており、また周溝の形態が方形を成していることから非常に難しい問題を投げかける遺構である。

(2) 竹ノ下遺跡における石器生産について

弥生時代の石器と言えば、図78の石包丁や柱状片刃石斧等の大陸系磨製石器が注目され、その他の縄文時代から続く、石鏃やその他剥片石器についてはあまり論じられない。それでも、北部九州の一部では石器製作技術や石材について若干論じられている。吉留秀敏氏は、北部九州弥生時代中期の剥片石器に注目し、旧石器研究の視点を用い、剥片石器の終焉の様相を述べている（吉留2002）。そこでは、中期中葉で剥片石器の急激な減少から後葉には消滅することや、石材が腰岳産黒曜石にほぼ单一化すること、石器製作技術については前期の打面転位を意識した形態だけでなく、周囲からランダムに剥離する円盤状の形態が現れるなど石器製作の技術的後退が著しいことなどを指摘している。また、児玉洋志氏は縄文時代晚期～弥生時代中期初頭までの石材比率の推移を提示している（児玉2005）。そのなかで、本遺跡が所在する武雄盆地周辺地域という地域が設定されており、弥生時代前期～中期初頭の主要器種の石材が概ね黒曜石3：安山岩1の割合になることを論じている。

さて、竹ノ下遺跡から出土した石器は総数5239点であり、弥生時代中期の遺跡において、この出土数は他に例がない。その内訳は表37の通りで、これを見ても分かる通り、圧倒的に剥片・碎片が多く、石器製作を盛んに行っていたことが分かる。また、黒曜石や安山岩の原石も確認されていることは注目に値する。石鏃についても25点とこの時期の一遺跡からの出土量としては多く、未製品も確認されていることから、石鏃の製作も行っていたことが窺われる。

遺構から出土した石器は僅かであり、大半は包含層や遺構検出時のものであり、グリッド単位での取上をしていたため、グリッド別の出土量を図化してみた。まず全体の出土傾向をグリッド単位で示したのが図117である。D-4グリッドで一番多く出土しており、次に多いのがC-3グリッドと隣接した所となっている。出土量からみると中心は調査区の南西側であることが分かる。また、中央のグリッドでやや少なく、北東のE-7やG-8グリッドで増加傾向にあり、その周辺も比較的多く出土していることから、調査区北東側でも石器製作を行っていたと思われる区域が想定できる。

図118は、黒曜石と安山岩のグリッド別出土点数を図化したものである。石材による違いが現れるかと思ったが、ほぼ同じ傾向となった。

図119～121に代表的な石器を器種毎に示した。図119の上段は石鏃を形態毎に示した。357・358・359・360は抉りが深くはっきりしている凹基無茎鏃で、両側縁が直線的ないしやや湾曲するタイプである。362・363・364は抉りが浅い凹基無茎鏃で、両側縁が直線的～やや湾曲するタイプ、367・162・368も抉りが浅い凹基無茎鏃であるが、やや大きいタイプ、372・373・130は抉りが無い平基無茎鏃で両側縁は直線的で継長の二等辺三角形に近いタイプ、374・375・376は凹基無茎鏃であるが側縁に抉りが見られるいわゆる「アメリカ鏃」と言われるタイプである。それから、370のような大形のものや、90や380の基部が尖る有茎式のものも見られる。以上のように概ね6つのタイプに分けることができ、多様な石鏃形態が存在していたと思われる。また、381・378・205・380は未製品で二次加工が及んでい

表 37 石器器種と石材別組成表

器種	全体数	黒曜石	安山岩	その他
石鎚	25	22	3	0
石鎚未成品	9	8	1	0
Dr	4	4	0	0
Sc	14	9	5	0
楔形石器	1	1	0	0
打製石斧	2	0	2	0
敲石	3	0	0	3
RF	15	9	6	0
UF	16	14	2	0
RF+UF	22	18	4	0
剥片・碎片	5065	3369	1434	282
石核	20	15	5	0
原石	8	4	4	0
石包丁	7	0	0	7
石鎌	3	0	0	3
石剣	2	0	0	2
磨製石斧	4	0	0	4
柱状片刃石斧	1	0	0	1
扁平片刃石斧	2	0	0	2
紡錘車	2	0	0	2
砥石	11	0	0	11
台石	2	0	0	2
支脚	1	0	0	1
合計	5239	3473	1466	300

ない部分をみると原礫面や縦長の剥離面が観察されるところから、原石状態から剥離された剥片や縦長剥片を素材として石鎚が製作されていたことが分かる。

次に石錐（ドリル）であるが、図 119 の中段左側に 3 点示した。いずれも石鎚製作時と同じ技術を用いて三角形状に整形し、その一端を錐の先端として細く仕上げている。

図 119 の中段右側の 2 点は楔形石器である。6 は縄文時代の遺物として報告したが、判断の難しいところである。楔形石器は弥生時代にも存在するとされているが、出土事例が極めて少なく、縄文時代の構造や包含層からの混ざり込みの可能性もある。6 は正方形に近い形態をしており正面に原礫面を残している。309 は長方形の形態を呈し、こちらも原礫面を一部残している。いずれも主剥離面のリングから縦長剥片を素材としていると思われる。

図 119 の下段は黒曜石製のスクレイバー類である。不定形な剥片や石核からの転用など規格的な形態はない。連続的な二次加工を施し刃部を形成するものと、剥片剥離時の鋭い縁辺をそのまま刃部とするものがあり、同じ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	全体
I								3	30		
H							68	136	3		
G						48	153	266			
F				18	53	89	150	107			
E			78	65	114	179	248				
D	18	290	268	737	154	21					
C	45	352	463	108	85						
B		40	10								

図 117 グリッド別出土数量（全体）

VI. 総括

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	黒曜石
I								1	9		
H							46	91	1		
G						25	119	194			
F				7	36	59	96	79			
E			50	33	80	88	161				
D	18	199	169	457	98	17					
C	35	266	308	81	51						
B		35	6								

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	安山岩
I								2	12		
H							18	35	2		
G						14	30	64			
F				9	13	17	44	19			
E			25	23	29	78	68				
D	0	77	82		50	1					
C	7	70	129	22	32						
B		4	3								

図 118 グリッド別出土数量(黒曜石・安山岩)

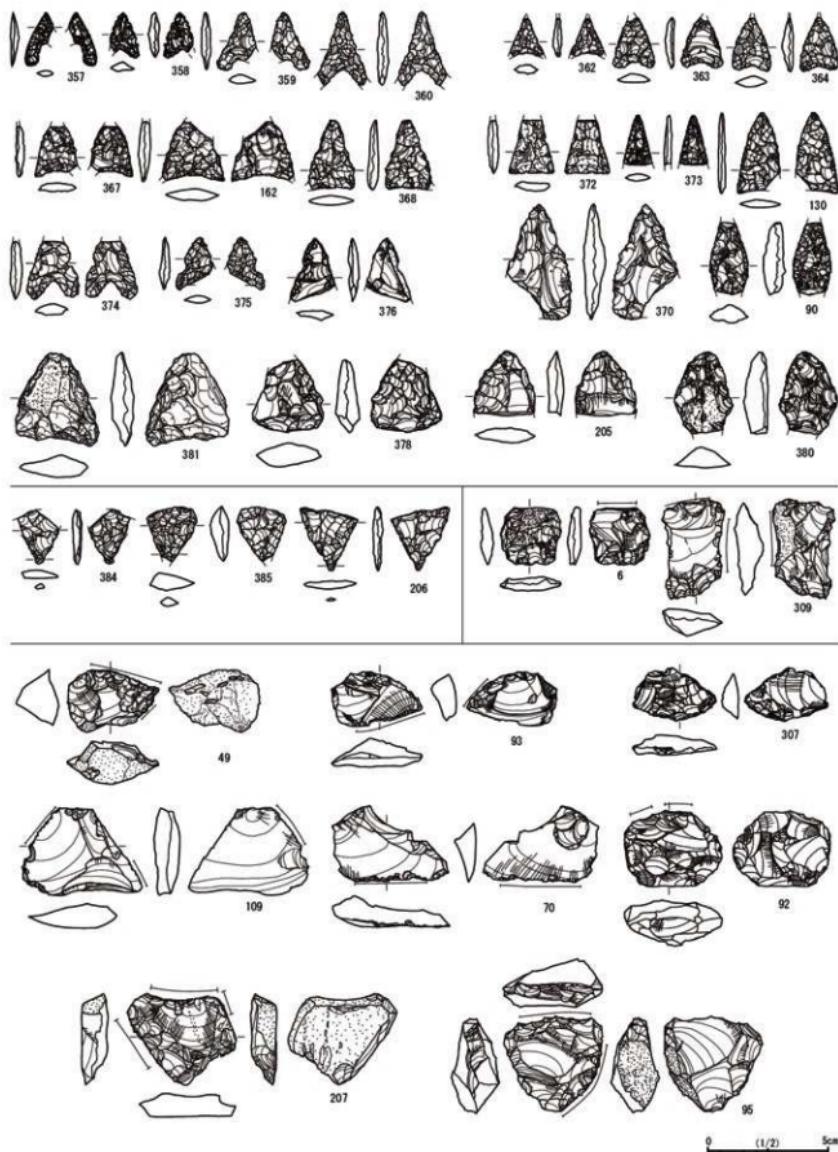


図 119 弥生時代中期の剥片石器類 1

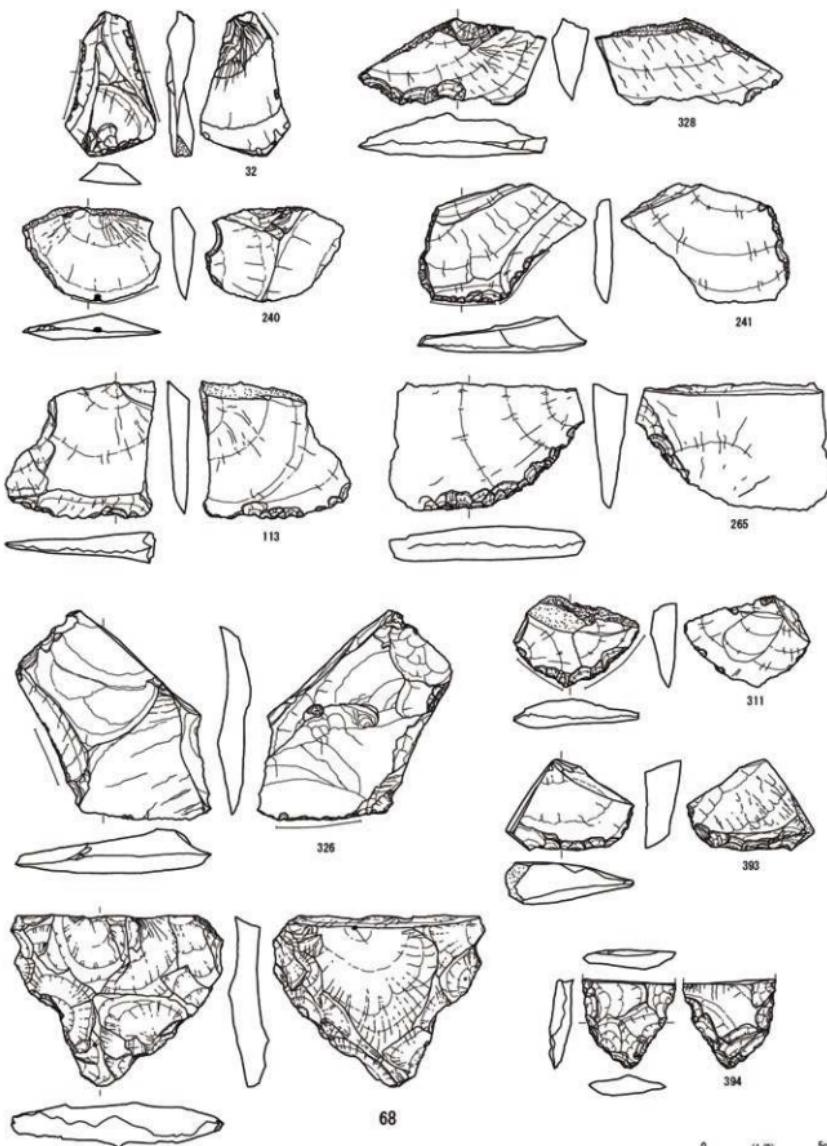


図 120 弥生時代中期の剥片石器類 2

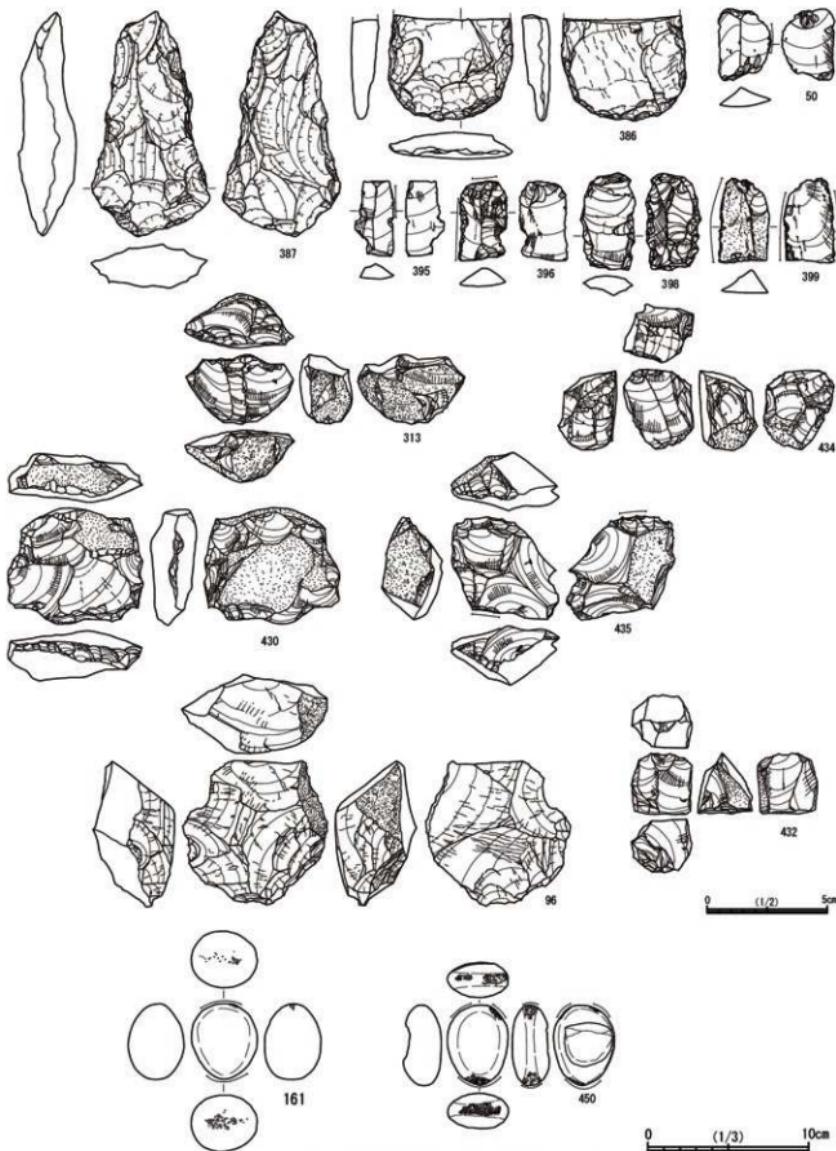


図 121 弥生時代中期の剥片石器類 3

VI. 総括

加工工具の中でも機能が分かれていたと考えられる。

図 120 は安山岩製のスクレイパー類である。大振りの板状の剥片を素材とし、縁辺に連続する細かな二次加工を施したものが多い。形態的な特徴は見いだせない。68 は石核からの転用と考えられ、求心状の剥片剥離が行われた後、正面左側縁に微細な調整が施されている。

図 121 の 387・386 は安山岩製の打製石斧である。やや厚みのある楔形のもの (387) と上半部が欠損しており詳細は不明であるが、扁平で恐らく短冊形のもの (386) と思われる。

図 121 の 50-395・396・398-399 は小形の縦長剥片である。連続して縦長剥片を剥離した痕跡も見られる。これらの剥片の側縁には微細な剥離痕が見られ、使用された痕跡が窺える。

図 121 の 313・434・430・435・96・432 は石核である。96 は安山岩でそれ以外は黒曜石である。313・434・432 は縦長剥片を意識して剥離している石核で、それ以外は求心状の剥片剥離を行っている石核である。これ以外にも、図示できなかつた石核にはランダムな剥片剥離を行っている石核があり、規格的な形態の剥片は剥離されていない。

図 121 の 161・450 は敲石である。161 は砂岩製、450 は石英製である。どちらも 5 cm 程度の梢円形をしたもので上下に敲打痕が見られる。

以上、各器種の特徴を述べてきたが、大きな特徴としては石器の形態が多様なことと、スクレイパー類には規格的な形態がないということである。また、縦長剥片剥離技術と求心状に剥片を剥離する技術が存在することも大きな特徴である。しかし、これ以外にもランダムに不定形な剥片を剥離している石核もあることから一概に安定した石器生産技術を有していたとは断言できない。とはいっても、黒曜石や安山岩の原石や敲石が確認されていること等から、竹ノ下遺跡は原産地と深く結び付いた石器生産遺跡であることは確かである。

最後に、これらの石器についての問題点を挙げておきたい。それは縄文時代の石器との区別である。調査区内からは僅かに縄文土器や縄文時代の石器である石器が出土しており、6 の楔形石器も判断に悩むものである。また、386・387 の打製石斧や小形の縦長剥片とそれに関連する石核も、縄文時代の遺跡から出土する事例が多い。そのため、すべてが弥生時代中期に帰属する石器群と認定することはできない。今後類例の増加を待って検討していくなければならないと考える。

本稿の執筆にあたっては、多くの方々にご教示、ご助力頂いた。特に佐賀大学の角嶽進先生には、石材産地同定の分析をしていただき、新たな発見があり大きな成果を上げることができました。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

赤塚次郎編 2002『考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代 土器II』小学館

石田智子 2008「佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器様相」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第177集

石田智子 2011「寒水川・切通川流域における弥生時代中期の土器様相」『西寒水四本柳遺跡2-5区・6区』みやき町文化財調査報告書第5・6集

石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 1991『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣

大川清・鈴木公雄・工業普通編『日本土器事典』雄山閣

大野城市教育委員会 2008『牛頭塚跡群一総括報告書I-』大野城市文化財調査報告書第77集

金間惣・佐原眞編 1986『弥生文化の研究 3 弥生土器I』雄山閣

龜田修一編 2003『考古資料大観 第3巻 弥生・古墳時代 土器III』小学館

蒲原宏行 2019『弥生・古墳時代論叢』六一書房

- 児玉洋志 2005「附編 種作導入期における打製石器の石材の選択－佐賀県内について－」『弥生石器研究会佐賀大会』
 発表資料集
- 小林達雄編 2008『絶観 繩文土器』株式会社アム・プロモーション
- 小松 謙 2002「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』
 第5回九州前方後円墳研究会
- 小松 謙 2003「梅白遺跡出土土師器群の編年的位置づけ－梅白式の提唱－」『梅白遺跡』佐賀県文化財調査報告書第154集
 佐賀県教育委員会 1988『久保泉丸山遺跡』佐賀県文化財調査報告書第84集
- 佐賀県教育委員会 1994『東福寺遺跡』佐賀県文化財調査報告書第121集
- 佐賀県教育委員会 2003『梅白遺跡』佐賀県文化財調査報告書第154集
- 佐賀県教育委員会 2008『吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区の弥生時代中期の石器－』佐賀県文化財調査報告書第177集
- 佐賀県教育委員会 2015『吉野ヶ里遺跡－弥生時代の集落跡－』佐賀県文化財調査報告書第207集
- 佐賀県教育委員会 2016『吉野ヶ里遺跡－弥生時代の墓地－（遺跡北部1）』佐賀県文化財調査報告書第214集
- 重藤 駿行 2009「古墳時代中期・後期の筑前・築後地域の土師器」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集
- 鈴木 道之助 1991『図録・石器入門事典（繩文）』柏書房
- 武雄市教育委員会 1980『みやこ遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集
- 武末純一・石川日出志編 2003『考古資料大観 第1巻 弥生・古墳時代 土器Ⅰ』小学館
- 橋昌信 1987「繩文時代晩期および弥生時代の剥片石器－宇木浜田貝塚を中心に－」『東アジアの考古と歴史』中』
 岡崎敬先生追官記念論集 同朋舎出版
- 平井 勝 1991『弥生時代の石器』考古学ライブリー64 ニュー・サイエンス社
- 北條芳隆・齋宜田佳男編 2002『考古資料大観 第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館
- 町田勝則 2002「『刀器』研究に向けて」『環瀬戸内の考古学』
- 山崎頼人 2013「弥生時代北部九州の剥片石器石材の流通」『月刊考古学ジャーナル』No.638 ニュー・サイエンス社
- 吉留秀敏 2002「北部九州弥生時代中期の剥片石器」『究一班』II埋蔵文化財研究会25周年記念論文集
- 吉留秀敏 2003「弥生時代開始期の石器技術－石礫について－」『立命館大学考古学論集III』
- 吉留秀敏 2004「繩文時代後・晩期の剥片石器生産について－石器・石材供給システムの様相－」『考古論集』
- 河瀬正利先生追官記念論文集

2. 梶原遺跡

本調査は梶原遺跡の第3次調査にあたり、昭和62年及び平成元年～2年に実施した2次調査、3次調査結果も合わせると、7,000 m²～8,000 m²の広がりを持つ遺跡であり、その時期は、弥生時代中期から後期の集落と墓地、中世の集落であることが判った。国道34号線を隔てて東側の丘陵上には小楠遺跡が立地しており、両遺跡は同一遺跡と捉えてもいいのかもしれない。小楠遺跡は、武雄盆地における弥生時代早期～前期の集落遺跡であり、中期には梶原遺跡や竹ノ下遺跡に見られるように、微高地の縁辺部に分村化が始まったと思われる。また、中世の遺物としては中国産の磁器片や東播系の鉢の類似品の出土が注目される。

写 真 図 版



① 竹ノ下遺跡・梶原遺跡全景(平成29年2月撮影：北東より)



② 竹ノ下遺跡・梶原遺跡全景(平成29年2月撮影：東より)

写真1 竹ノ下遺跡・梶原遺跡 調査対象地区全景 1

竹ノ下遺跡



① 竹ノ下遺跡全景(平成29年2月撮影：南東より)



② 竹ノ下遺跡全景(平成29年2月撮影：南より)

写真2 竹ノ下遺跡 調査対象地区全景2



① 竹ノ下遺跡全景(平成29年2月撮影：南々西より)



② 竹ノ下遺跡全景(平成29年2月撮影：南西より)

写真3 竹ノ下遺跡・梶原遺跡 調査対象地区全景3

竹ノ下遺跡



① B-3区付近（南西より）



② C-2、D-2区付近（北東より）



③ C-2、D-2区付近（南西より）



④ C-4区付近（北より）



⑤ H-8・9区付近（北東より）



⑥ C-4区付近（南西より）



⑦ H-9区付近（南東より）



⑧ I-9区付近（北東より）

写真4 調査着手前状況



① 平成28年度調査区 全景(北東より)



② 平成28年度調査区 全景(右上が北)

写真5 平成28年度調査区全景



① C-3区 遺構集中箇所 全景（右上が北）



② SK003土層断面南壁（南より）



③ SK003完掘状況（南より）



④ SK011完掘状況（北より）



⑤ SD026土層断面南壁（南より）

写真6 C-3区 遺構集中箇所全景、SK003・011、SD026



① 調査区西側（C-2・3区）完掘状況全景(北東より)



② 平成28・29年度調査区オルソ画像合成（右上が北）

写真7 調査区西側完掘状況1



① 調査区西側（C-4、D-4区）完掘状況（北東より）



② 調査区西側（C-2、D-2区）完掘状況（南東より）

写真8 調査区西側 完掘状況



① 調査区東半部 完掘状況（南西より）



② 調査区東半部 完掘状況（北東より）

写真9 調査区東半部 完掘状況



① I-9・Bグリッド調査区北壁土層（南より）



② S B650・S H350完掘状況（南より）



③ S B650全景（北東より）



④ S B650・S H350完掘状況（北東より）

写真10 調査区壁面土層、S B650、S H350



① S B650・S H350全景 オルソ画像（右上が北）

【S B650柱穴個別写真】



② S218土層断面（西より）



④ S225土層断面（南東より）



⑥ S368土層断面（南東より）



③ S218完掘状況（西より）



⑤ S225完掘状況（南より）



⑦ S368完掘状況（南より）

写真11 S B650・S H350全景、S B650柱穴

竹ノ下遺跡

【SB650柱穴個別写真】



① SB650柱穴断面（北西より）



③ SB650柱穴断面（南東より）



⑤ SB650柱穴断面（北より）



② SB650完掘状況（南より）



④ SB650完掘状況（南東より）



⑥ SB650完掘状況（北より）



⑦ SB650柱穴断面（南より）



⑨ SB650柱穴断面（北より）



⑪ SB650柱穴断面（南西より）



⑧ SB650完掘状況（南より）



⑩ SB650完掘状況（南より）



⑫ SB650完掘状況（南より）



⑬ SB650柱穴断面（南より）



⑭ SB650完掘状況（南より）



⑮ SB650柱穴断面（南より）

写真12 SB650柱穴

【S B650柱穴個別写真】



① S 531土層断面（南西より）



③ S 550土層断面（北東より）



⑤ S 568土層断面（北東より）



② S 531完掘状況（南西より）



④ S 550完掘状況（北東より）



⑥ S 568完掘状況（北東より）



⑦ S 572土層断面（北東より）



⑨ S 583土層断面（北より）



⑪ S 608土層断面（北西より）



⑧ S 572完掘状況（北東より）



⑩ S 583完掘状況（北より）



⑫ S 608完掘状況（北西より）



⑬ S B1482完掘状況 オルソ画像（右上が北）

写真13 S B650柱穴、S B1482

竹ノ下遺跡



写真14 SB1480・1484・1487



SK259 (SH090内土坑)
検出状況 (南西より)



SK260 (SH090中央土坑)
検出状況 (南東より)

SH090床面検出状況 (南東より)



SH090南北ベルト東壁土層 (南西より) ※土器集中範囲はSK260



SK260 (SH090中央土坑) 検出状況 (南西より)



SH090床面検出状況 (南西より)



SH090完掘状況 (南西より)

写真15 SB1486、SH090、SK260



① S H375、S H380検出状況（北西より）



② S H375炭化材検出状況（北西より）



③ S H375完掘状況（北西より）



④ S H375炭化材検出状況（北東より）



⑤ S H375南壁付近遺物検出状況（北西より）



⑥ S H375、S H380切り合い状況
オルソ画像（右上が北）

写真16 S H375



② S H380完掘状況（南西より）



③ S H380調査状況（北より）



④ S H380床面状況（北西より）



⑤ S H380完掘状況（北西より）



⑥ S K380床面溝跡検出状況（南東より）



⑦ S H380壁際遺物出土状況（南東より）

写真17 S H380

竹ノ下遺跡



① S H880完掘状況（南東より）



② S H1050完掘状況（北西より）



③ S H1050埋土土層（調査区北壁、南東より）



④ S K045埋土中遺物出土状況（南より）



⑤ S K045完掘状況（南より）



⑥ S K054土層断面（南より）



⑦ S K054完掘状況（東より）

写真18 S H880・1050、S K045・054



① SH1200完掘状況
オルソ画像（右上が北）



② SH1200完掘状況（北西より）



③ SK073完掘状況（南より）



④ SK100完掘状況（南東より）



⑤ SK242土層断面（南西より）



⑥ SK267土層断面（南東より）



⑦ SK267遺物出土状況（南東より）



⑧ SK267完掘状況（南より）

写真19 SH1200、SK073・100・242・267

竹ノ下遺跡

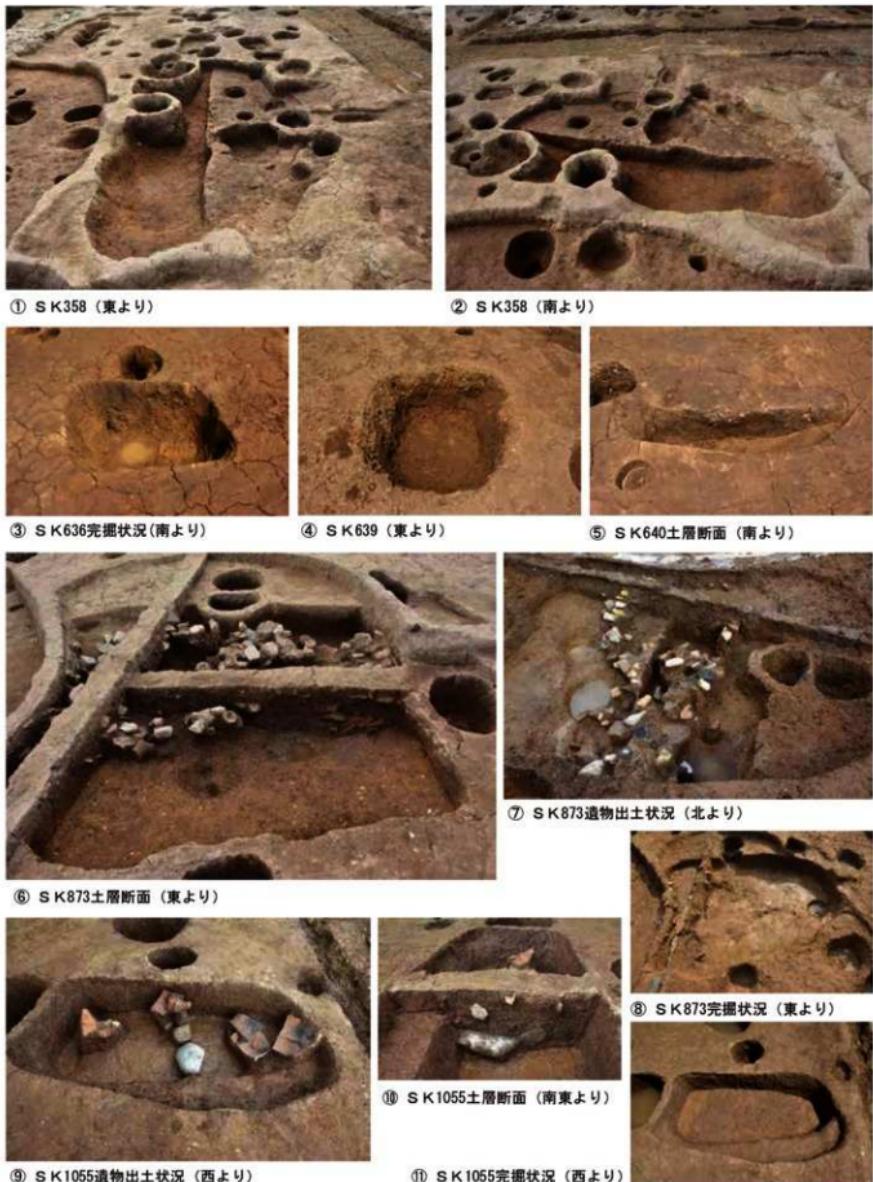


写真20 SK358・636・639・640・873・1055



写真21 SK1303、SD270・540・800・1303、SE367、S1063

竹ノ下遺跡



① S J 035検出状況（南より）



② S J 035遺存状況（南より）



③ S J 035遺存状況（南より）



④ S J 035棺体下部（南より）



⑤ S J 365遺存状況（南より）



⑥ S J 365遺存状況（北西より）



⑦ S J 365遺存状況（南東より）



⑧ S J 365棺体下部（南東より）

写真22 S J 035・365



① S A 1485完掘状況
オルソ画像（右上が北）



② S X 120完掘状況 オルソ画像（右上が北）



③ S X 120完掘状況（南東より）



④ S X 120完掘状況土（北東より）



⑤ S X 120土層断面（東より）



⑥ S X 900土層断面（西より）



⑦ S X 900完掘状況（南より）

写真23 S A 1485、S X 120・900

竹ノ下遺跡



① SH329完掘状況 オルソ画像（左上が北）



② SH350遺構プラン検出状況（北東より）



③ SH350床面検出状況（北東より）



④ SH350床面検出状況（南東より）



⑤ SH350完掘状況
オルソ画像（左下が北）



⑥ SH350南北ベルト南側西壁土層断面（東より）



⑦ SH350東西ベルト東側北壁土層断面（東より）



⑧ SH350南北ベルト南側
須恵器大甕検出状況（西より）

写真24 SH329・350



① S H350床面検出状況 北半部（東より）



② S H350床面検出状況 東半部（北より）



③ S H350検出状況 西半部（北より）



④ S H350床面検出状況 南半部（西より）



⑤ S H350床面 南西隅（東より）



⑥ S H350床面 北西隅（東より）



⑦ S H350床面 北東隅（北より）



⑧ S H350床面 S 425（北より）



⑨(上)・⑩(下) 西壁遺物出土状況
(東より)



⑪(上)・⑫(下) 南壁遺物出土状況
(⑪ 西より、⑫ 東より)

写真25 S H350

竹ノ下遺跡



① SH1000床面検出状況（南西より）



② SH1000床面検出状況（南東より）



③ SH1000土層断面（北西より）

④ SH1000全景 オルソ画像(右上が北)



⑤ SK1350(SH1000床面土坑)(西より)



⑥ SK1350(SH1000床面土坑)(南西より)



⑦ SK1350完掘状況(南東より)



⑧ SK686土層断面(南より)



⑨ SK686完掘状況(東より)



⑩ SK687遺物出土状況(南東より)

写真26 SH1000、SK686・687・1350



① S D370全景 [S H380掘り下げ前] (北西より)



② S D370東側溝 (北西より)



③ S D東側溝 (南東より)



④ S D北側溝 (北東より)



⑤ S D370全景 オルソ画像(右上が北)



⑥ 土層断面(図93 A-A')



⑦ 土層断面(図93 B-B')



⑧ 土層断面(図93 C-C')

写真27 S D370

竹ノ下遺跡



① SD 370北側溝（西より）



② SD 370西側溝（北西より）



③ SD 370西側溝（南東より）



④ 土層断面（図93 E-E'）



⑤ 土層断面（図93 F-F'）



⑥ 土層断面（図93 G-G'）



⑦ 土層断面（図93 H-H'）



⑧ SD 160全景（南東より）



⑨ SD 160土層断面（南東より）

写真28 SD 370・160

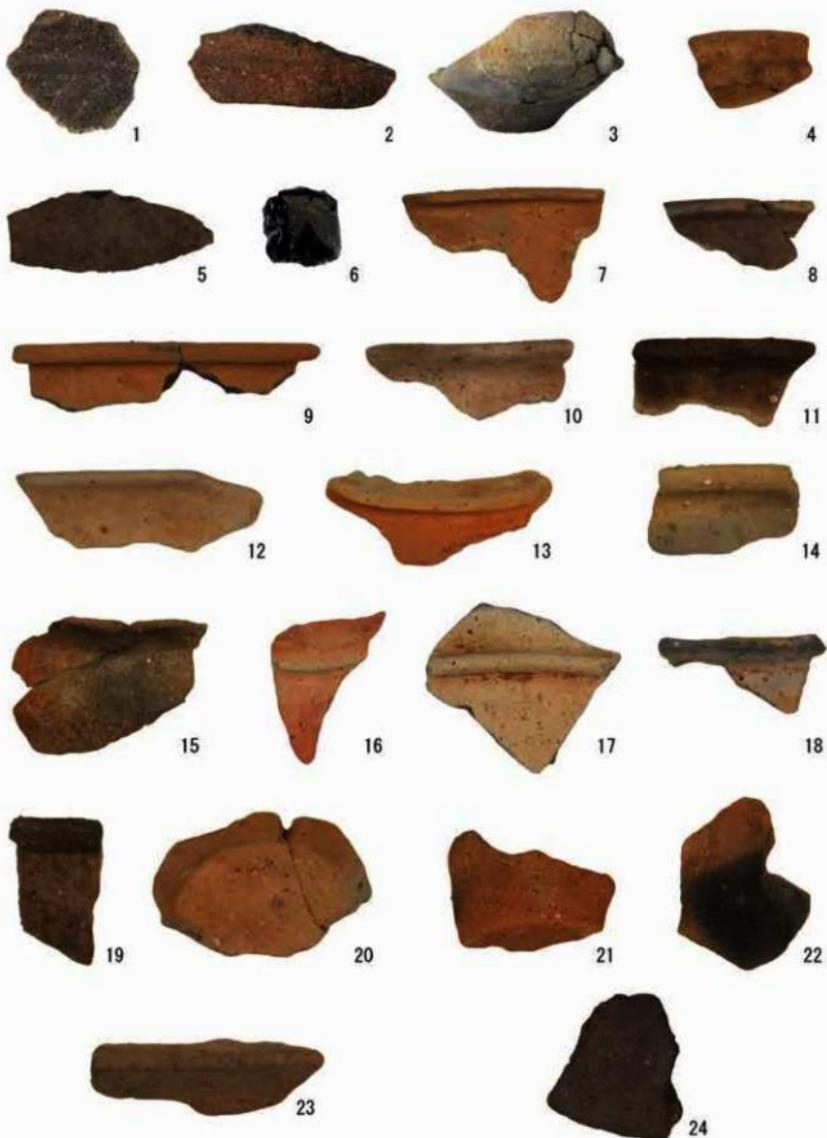


写真 29 繩文時代の遺物・SB650 出土遺物（弥生時代）

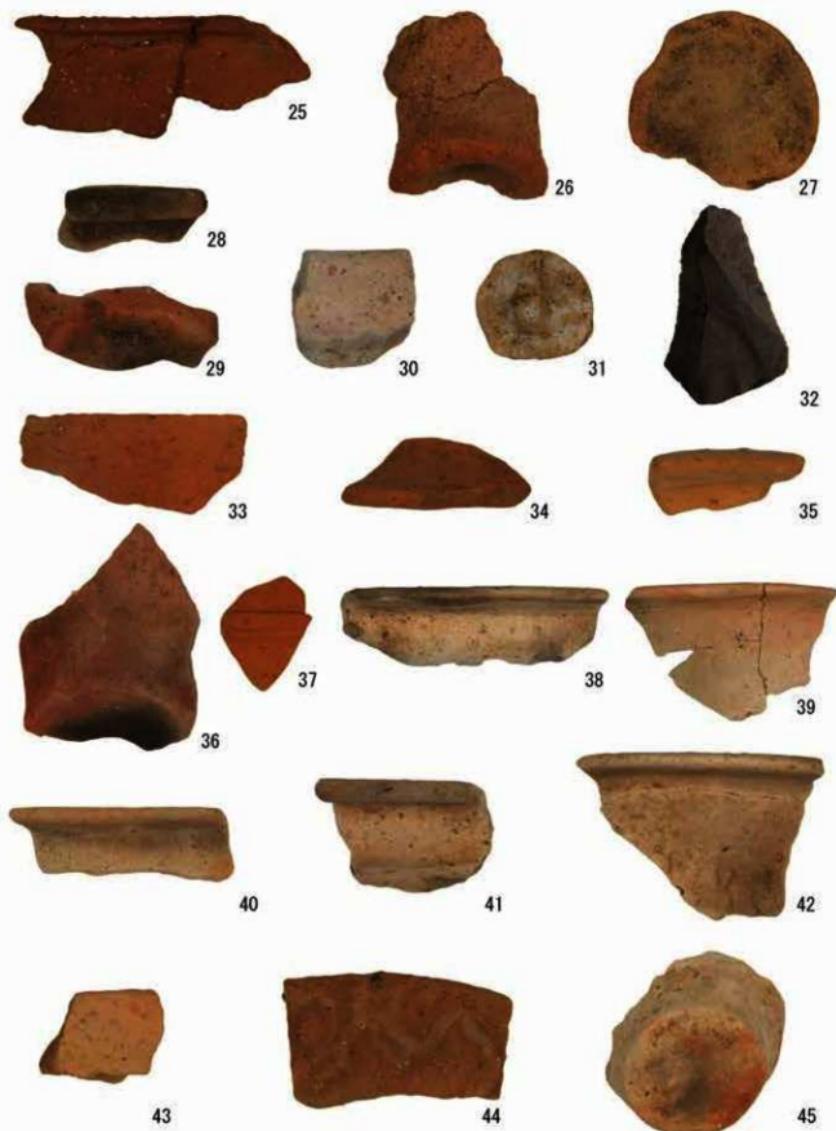


写真 30 SB1480・1482・1484・1486・1487・SH090 出土遺物

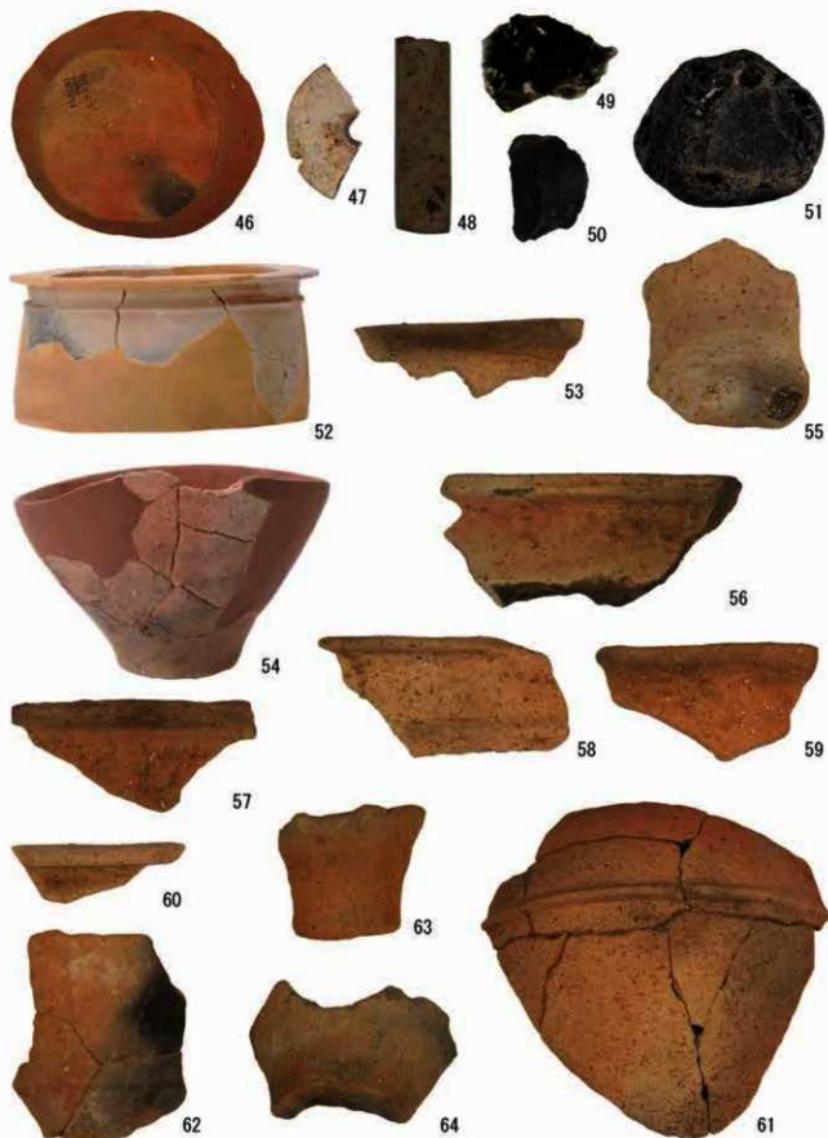


写真 31 SH090・SK260・SH375 出土遺物



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



78



81



79



80



82

写真 32 SH375 - SH380 出土遺物



写真 33 SH380・SK781・1464 出土遺物

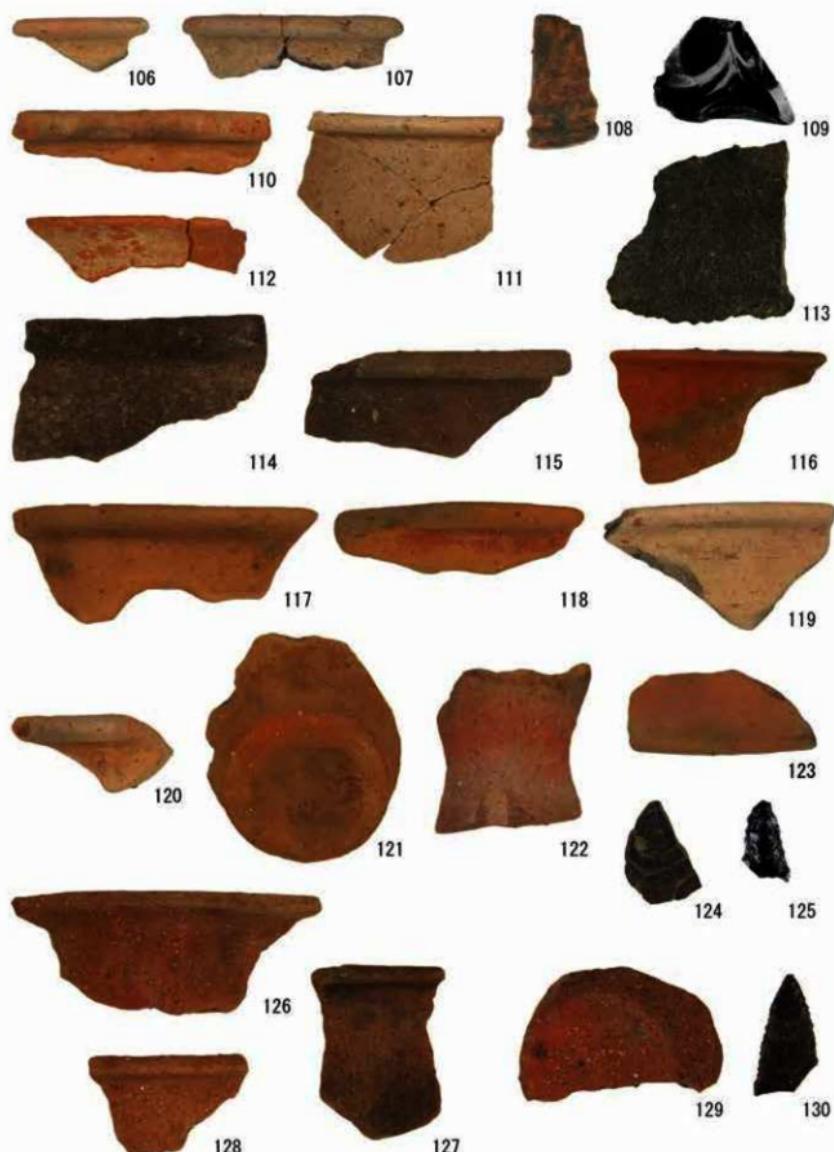


写真 34 SH880・1050・SK1089・SH1200・S1379・SK003・010 出土遺物

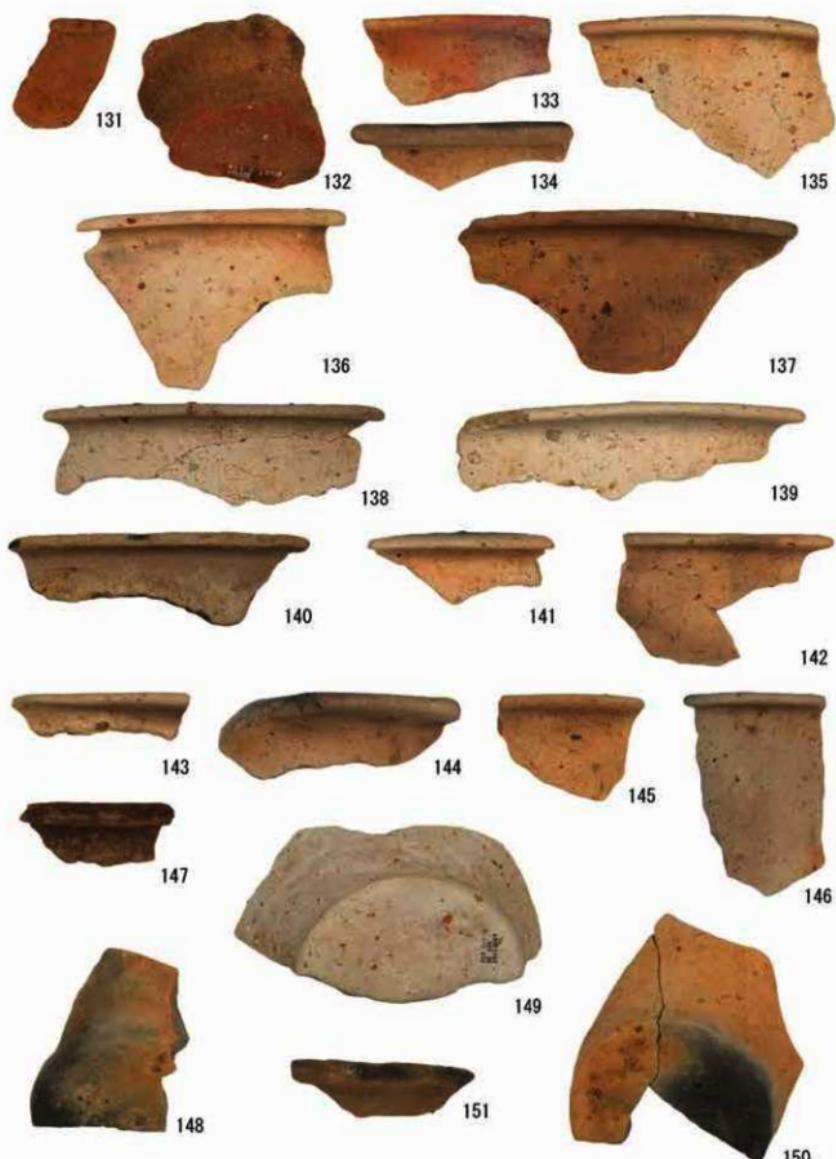


写真 35 SK011・028・045 出土遺物

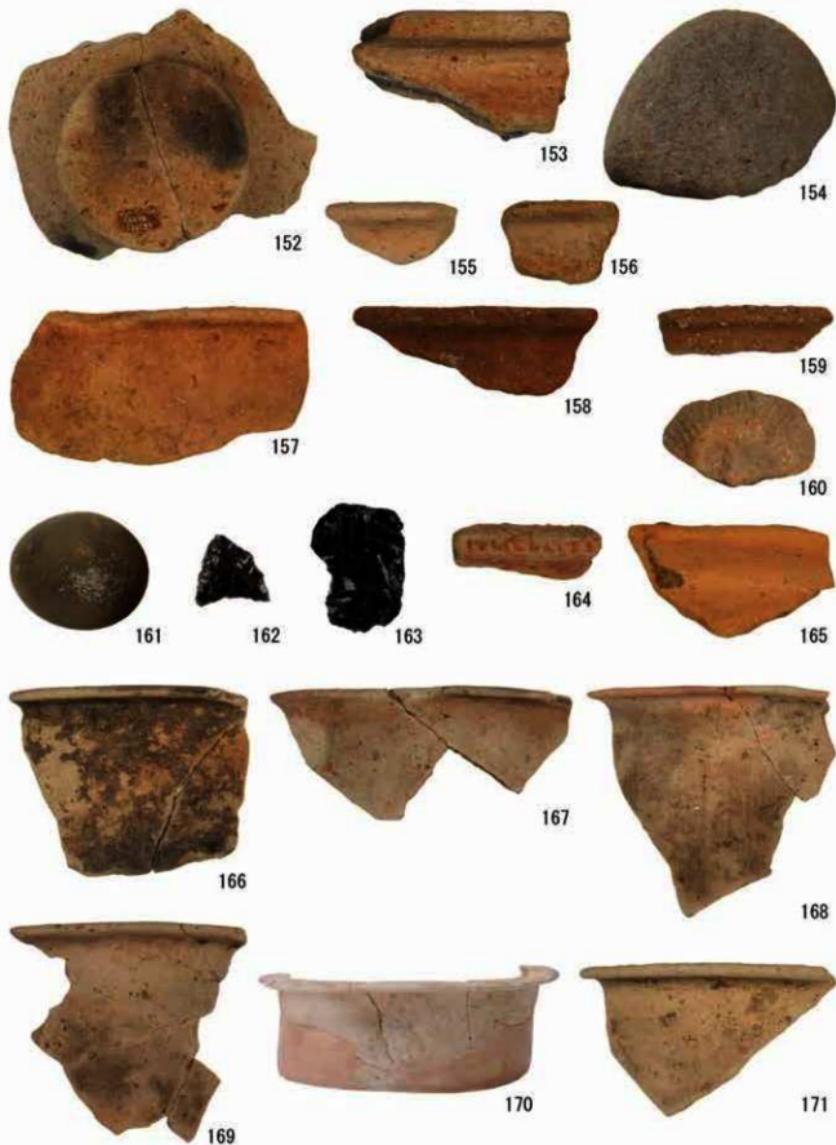


写真 36 SK045・054・073・100・242・259・267 出土遺物

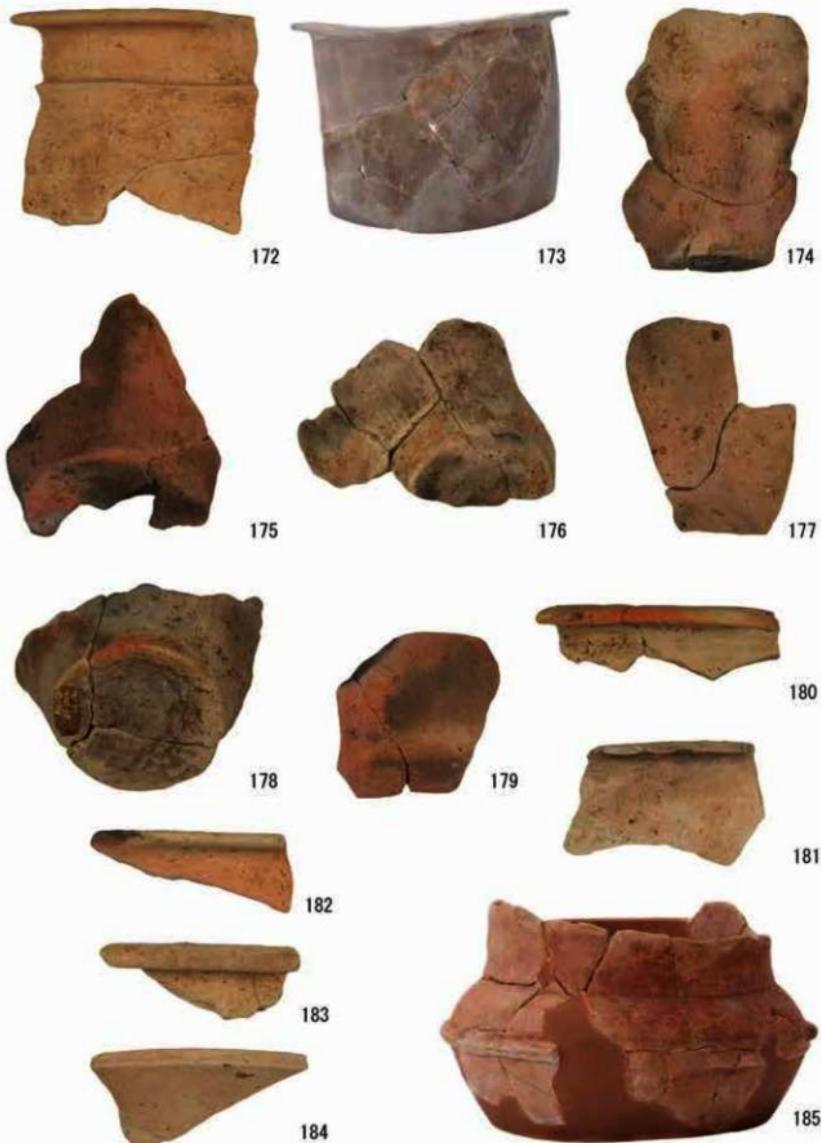


写真37 SK267 出土遺物

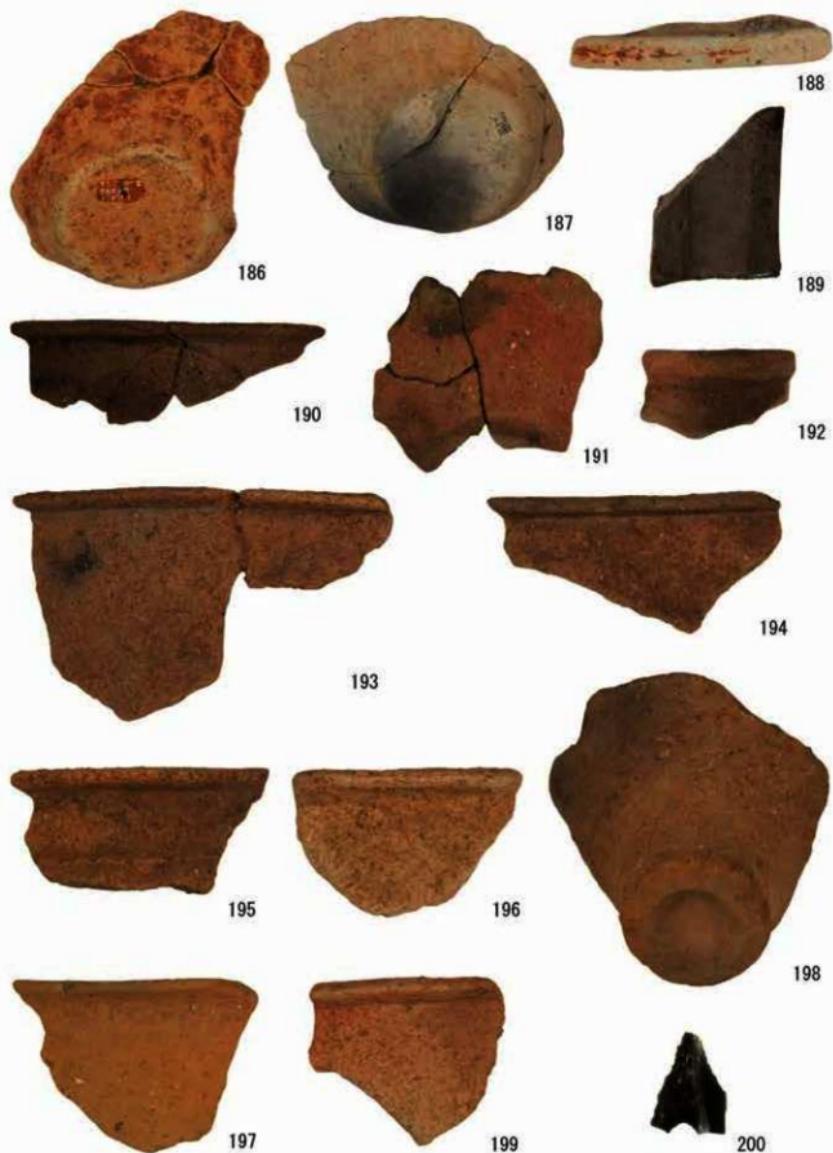


写真38 SK267・317・327・358出土遺物

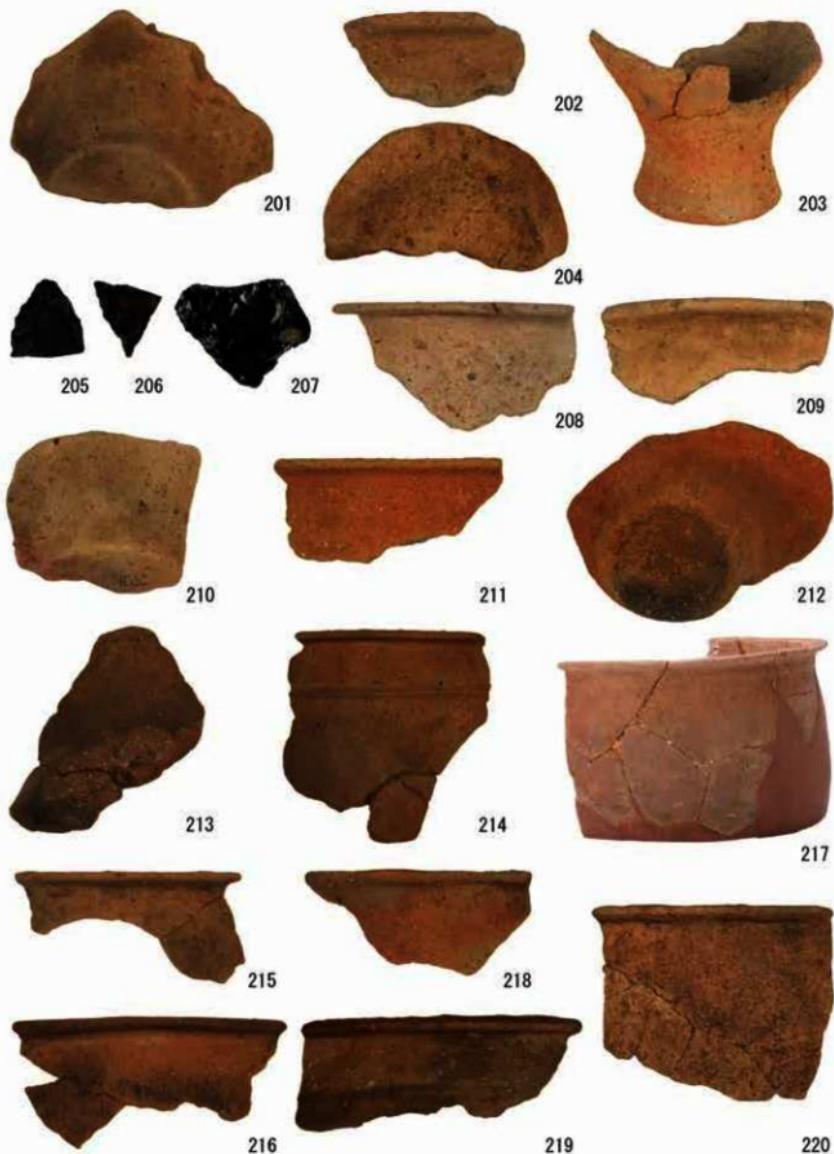


写真 39 SK455・636・639・640・741・838・873 出土遺物

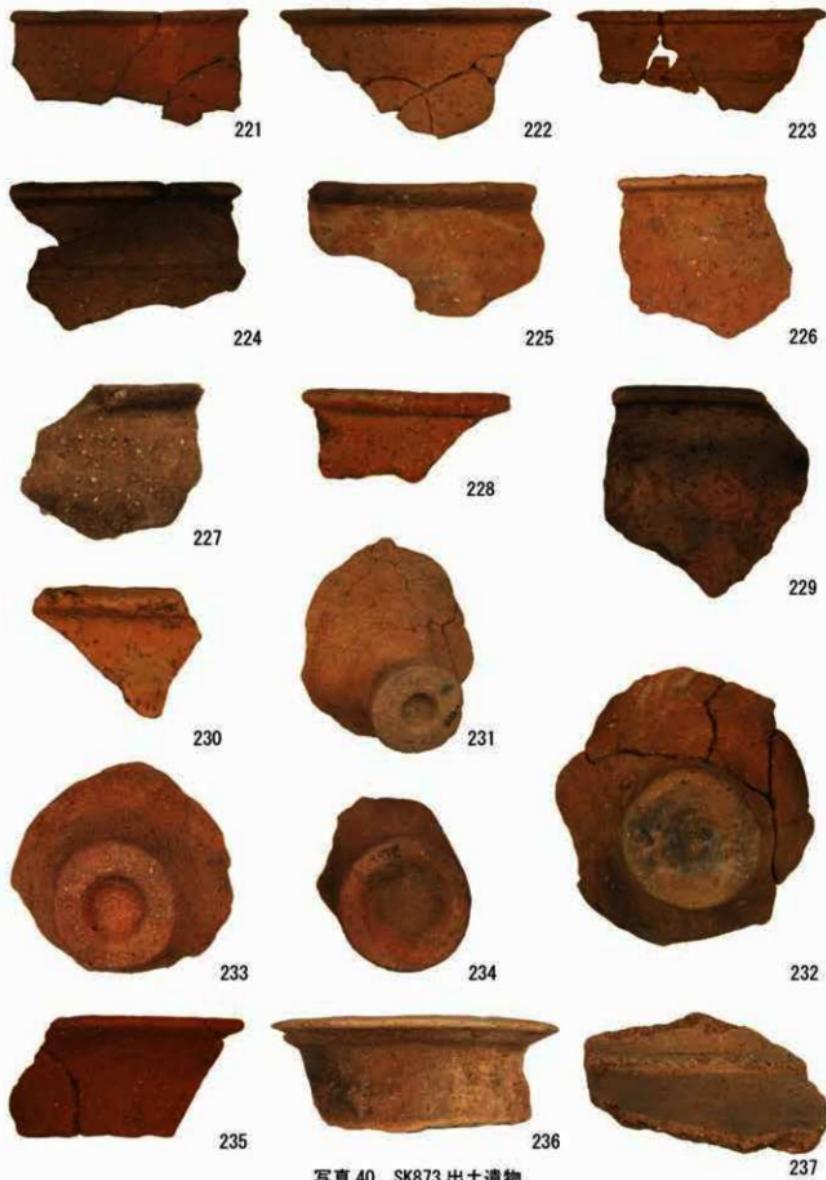


写真 40 SK873 出土遺物



写真 41 SK873・952・1055 出土遺物

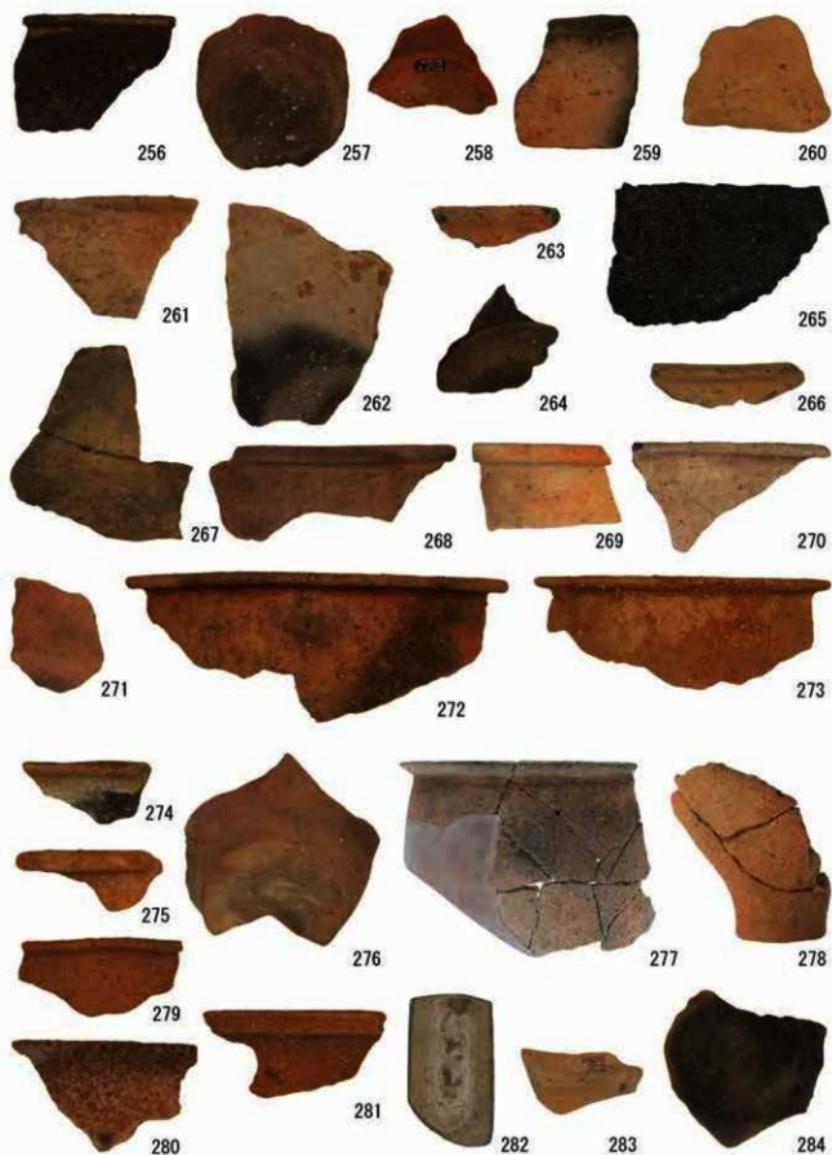


写真42 SK1091・1184・1303・1316・SD026・270・540・625・800出土遺物

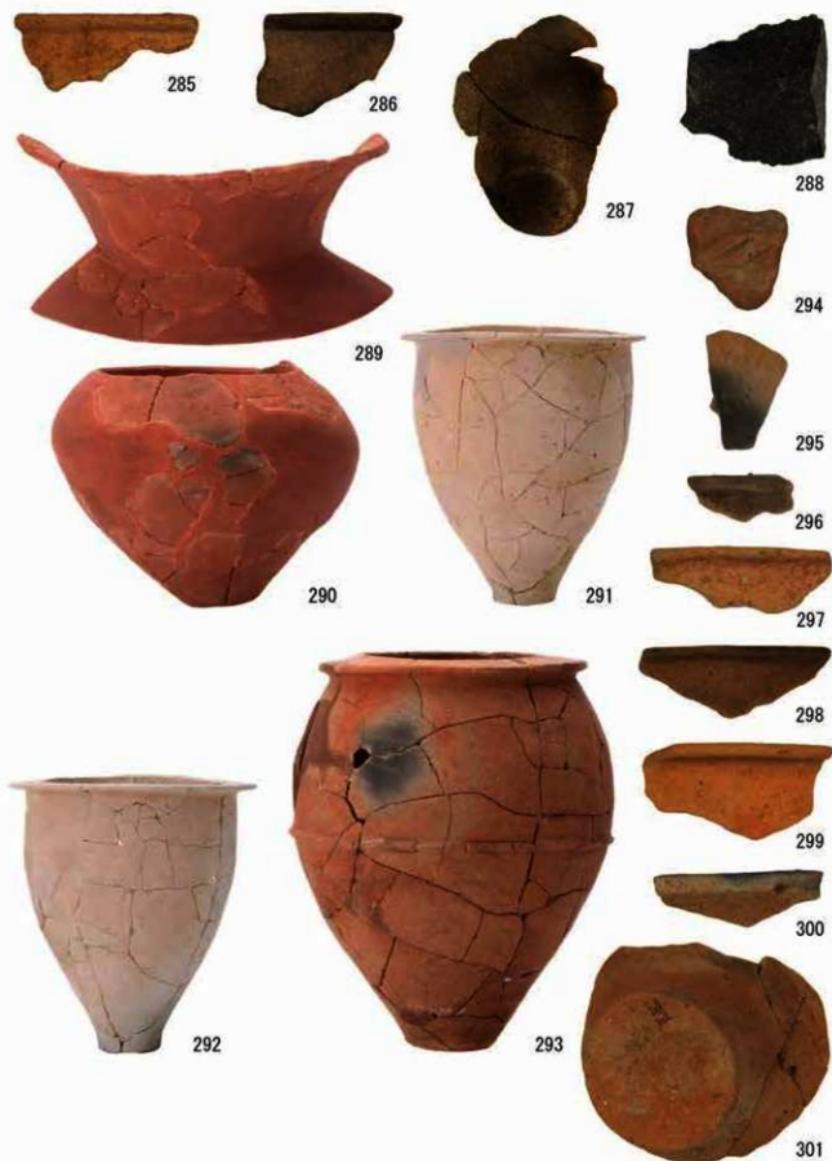


写真 43 SD1035・SJ035・365・SE367・SA1485・SX120 出土遺物



写真44 SX120・170・175・328・900・1250・1310 出土遺物



写真45 その他の出土遺物（1・2・3）

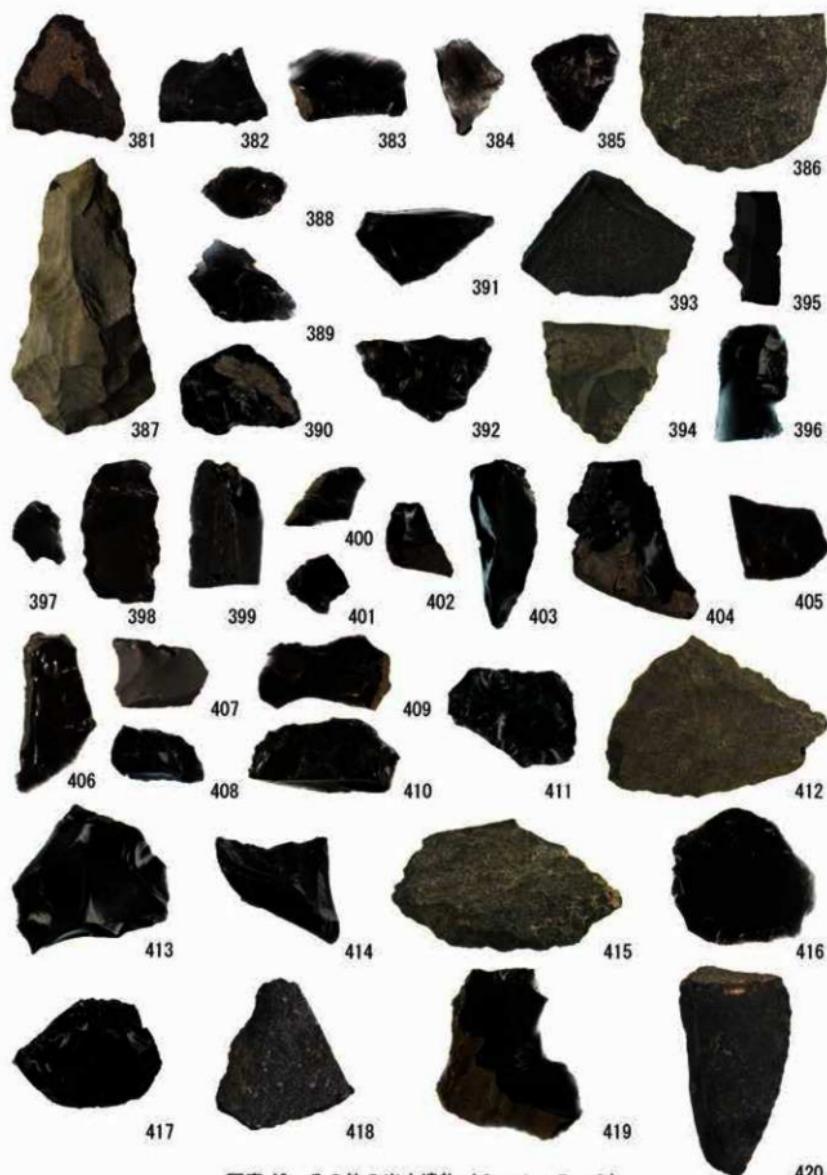


写真 46 その他の出土遺物 (3・4・5・6)

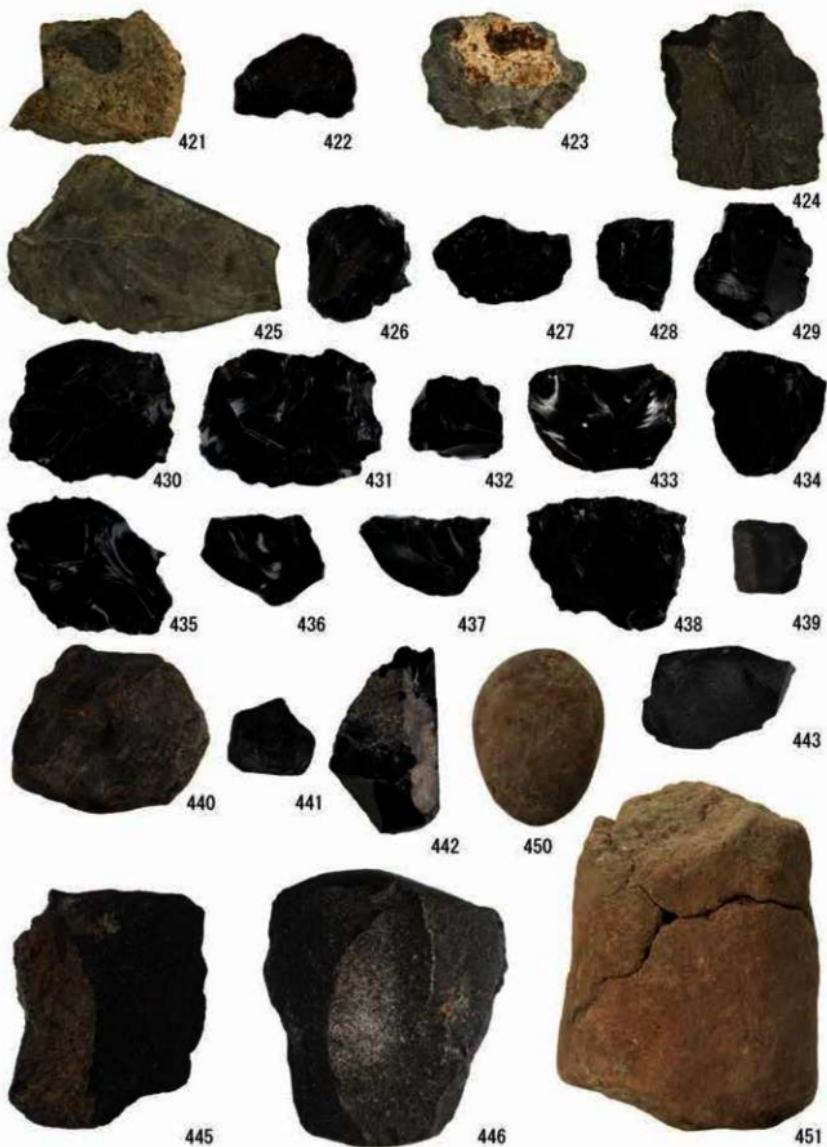


写真47 その他の出土遺物（6・7・8・9・11）



写真 48 その他の出土遺物（9・10）・石器集合写真



写真 49 SH329・350 出土遺物



469



470



471



472



473



475



476



477



478



479



480



481



482



483



484



485



486



487



488



489



490

写真 50 SH350 出土遺物



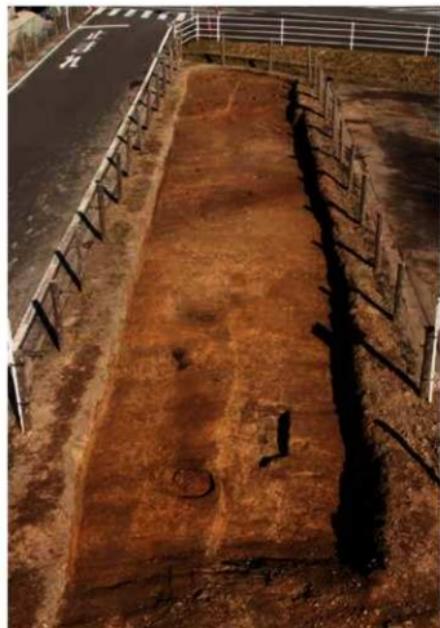
写真 51 SH1000 - SK1350 出土遺物



写真 52 SK195・686・687・1090・SD370 出土遺物



写真53 その他の出土遺物（古墳時代～）



① 調査区完掘状況(西より)



② 調査区完掘状況(東より)



③ 調査区東端部遺構検出状況(右が北)

写真54 梶原遺跡発掘調査状況 1



① 調査区東端部遺構完掘状況(南より)



② SK04土坑
遺物出土状況(東より)



② P07小穴
移動式竈片出土状況(東より)

写真55 梶原遺跡発掘調査状況2

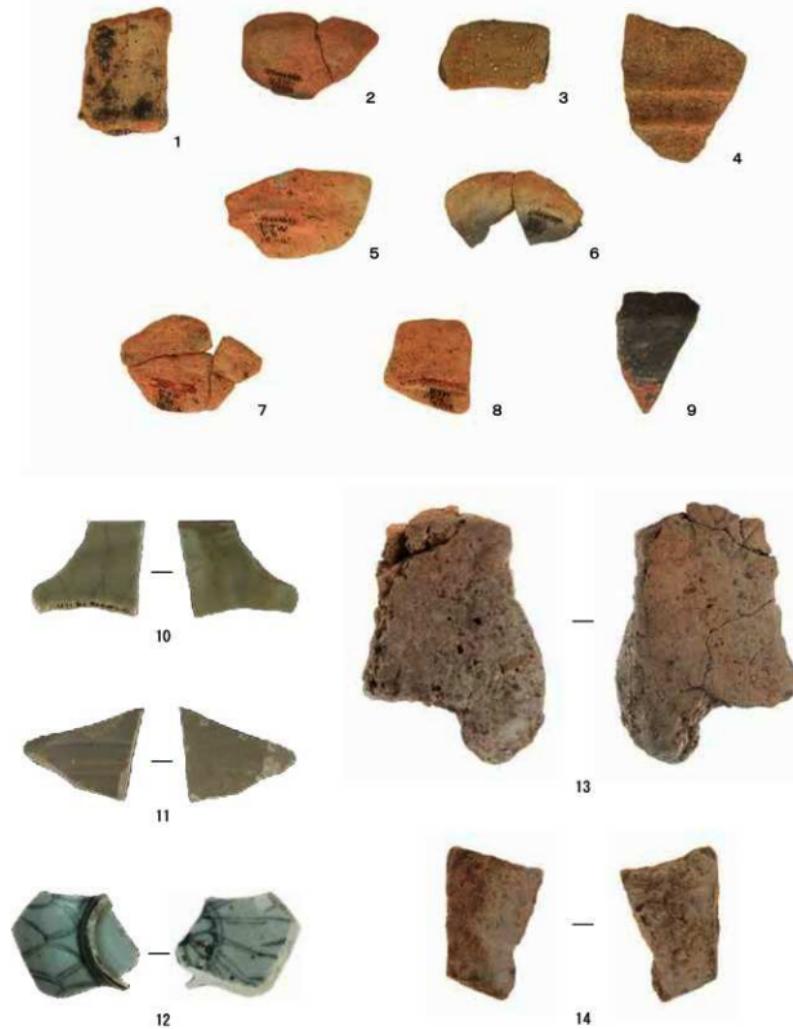


写真56 梶原遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たけのしたいせき・かじわらいせき							
書名	竹ノ下遺跡・梶原遺跡							
副書名	九州新幹線西九州ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(2)							
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第224集							
編著者名	越知 瞳・小松 謙・角縁 進・嘉村 俊也・市川 浩文							
編集機関	佐賀県文化・スポーツ交流局 文化課 文化財保護室							
所在地	〒840-8570 佐賀県佐賀市城内一丁目1番59号 Tel.0952(25)7233							
発行年月日	西暦2020年3月2日(令和2年3月2日)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たけのしたいせき 竹ノ下遺跡	佐賀県武雄市 武雄町大字 富岡	41206	0519 (註)	33度 12分 04秒	130度 01分 52秒	2014.9.16 ~ 2015.3.31	100 m ²	九州新幹線 西九州ルート建 設工事(武雄温泉駅)
かじわらいせき 梶原遺跡	佐賀県武雄市 武雄町大字 昭和		0288 (註)	33度 12分 00秒	130度 01分 43秒	2017.1.16 2017.2.17 2017.5.1 2017.9.15	180 m ² 1,920 m ² 2,100 m ²	

※(註)遺跡番号は『佐賀県遺跡地図』[武雄市] (佐賀県教育委員会 2010)による

竹ノ下遺跡

種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡 墳墓	弥生時代 古墳時代 中世	弥生時代・古墳時代の掘立柱建物・竪穴建物・溝・土坑、甕棺墓、井戸他	繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、白磁、陶器、石器、石製品、ガラス製品、鉄製品	
要約	竹ノ下遺跡は弥生時代中期及び古墳時代中期から後期を中心とした集落遺跡である。弥生時代中期の遺構としては、掘立柱建物7棟、竪穴建物7軒、土坑50基、溝状遺構27条、甕棺墓2基等が、また古墳時代中期から後期の遺構としては、竪穴建物3棟、土坑4基、古墳の周溝と推定される溝状遺構1条が確認され、武雄盆地における当該期の集落の様相を知る上で貴重な成果が得られた。			

梶原遺跡

種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	弥生時代 中世	土坑4基、小穴6基他	弥生土器、土師器、土師質土器、青磁、移動式甕、石製品	
要約	梶原遺跡は竹ノ下遺跡の南西側に隣接し、昭和62年及び平成元年から2年に実施した調査に続く第三次調査にあたり、弥生時代中期から後期及び中世の集落跡であることが判明した。			

佐賀県文化財調査報告書第224集
竹ノ下遺跡・梶原遺跡

—九州新幹線西九州ルート建設に係る埋蔵文化財調査報告書(2)—

令和2年(2020)3月2日

発行 佐賀県
〒840-8570 佐賀市城内1丁目1番59号
印刷 株式会社 三光
〒848-0022 佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1

